沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書　第29集

首　里　城　跡

－二階殿地区発掘調査報告書－

2005年（平成17）3月

沖縄県立埋蔵文化財センター

首里城跡
－二階殿地区発掘調査報告書－
二〇〇五年（平成十七）三月　沖縄県立埋蔵文化財センター

沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書　第29集

首 里 城 跡

－二階殿地区発掘調査報告書－

２００５年（平成１７）３月

沖縄県立埋蔵文化財センター

序

本報告書は、平成９年度に沖縄県教育員会が発掘調査を実施した首里城跡二階殿地区の調査成果を、平成16年度に沖縄県立埋蔵文化財センターが資料整理を行いまとめたものであります。

この二階殿は、国王の日常的居間・書院として、1765年に創建されたもので、文献記録の中では首里城で最も新しい建物です。発掘調査では、石造遺構である二階殿の出入り口の階段や、建物の礎石、石畳道などが良好な形で確認できました。さらに、この二階殿創建以前にも何らかの建物などの遺構が存在すること、石畳道の造成土の出土遺物によりその築成年代が15世紀前半に求めらることなども判明しました。

そして、今回の二階殿地区の最も重要な成果の一つは出土遺物です。特に、二階殿創建以前に形成された落ち込み遺構からは、13世紀末から15世紀中葉頃の陶磁器が廃棄された状態で大量に出土しました。これらの多くは火を受けており、1459年の火災に遭った倉庫跡と推定される京の内ＳＫ01と同じ頃である15世紀前半・中葉頃のものが主体となっています。

この落ち込み遺構の出土遺物は、中国・タイ・ベトナム・朝鮮半島・日本本土などの各地からの舶載陶磁器を中心に、玉製品・銭貨などがあります。これらの陶磁器の中には、青磁龍文盤や元青花蓮池水禽文盤、ベトナム青花魚藻文盤などの優品が、復元できる破片で出土しています。その他の特徴としては、13世紀末から14世紀前半の青磁が一定量出土したこと、14世紀後半から15世紀前半代のベトナム産陶磁器が、碗・皿・盤・瓶・壺といった一揃いのセットでこれまでの県内の出土量を凌駕して出土したことなども挙げられます。

本報告書が、首里城を復元するための基礎資料として、さらに沖縄の文化と歴史を理解する資料として広く活用されることを期待します。

末尾になりましたが、発掘調査および資料整理作業にあたり、御指導・御助言を賜りました諸先生・各文化財関係者方、ならびに事業の実施にあたり多大な御協力をいただきました関係各位に深く感謝申し上げます。

2005年（平成17）３月

沖縄県立埋蔵文化財センター
所　長　　安　里　　嗣　淳

首里城跡周辺航空写真

二階殿復元後

巻頭図版1

二階殿地区西側（北から）

SB4下層陶磁器出土状況

巻頭図版2

青花蓮池牡丹唐草文稜花盤
14世紀後半（元）
（落ち込み出土）

青花（魚）藻文盤
14世紀末～15世紀前半（ベトナム）
（落ち込み出土）

巻頭図版3

青磁龍文盤
14世紀前～中葉（元）
（落ち込み出土）

ベトナム産陶磁器（落ち込み出土）

巻頭図版4

元青花（落ち込み出土）

青磁（落ち込み出土）

巻頭図版5

景徳鎮産白磁（落ち込み出土）

天目茶碗・茶入（落ち込み出土）

巻頭図版6

土器細部

タイ産青磁・土器（落ち込み出土）

玉製品（落ち込み出土）

中国産色絵等（落ち込み出土）

研磨された石英（落ち込み出土）

巻頭図版7

落ち込み（SR11・12・24・32・33周辺）
出土陶磁器

ＳＢ４下層出土陶磁器

巻頭図版8

例　言

１．本報告書は、1997（平成９）年度に発掘調査、2004（平成16）年度に資料整理を実施した首里城跡二階殿地区の発掘調査成果をまとめたものである。

２．発掘調査は、国営沖縄記念公園首里城地区整備事業に伴うもので、発掘調査は沖縄県教育庁文化課が、資料整理は沖縄県立埋蔵文化財センターが主体となって実施した。

３．本書に掲載した地形図は、国土地理院発行１/25,000地形図、琉球大学地理学教室保管の米軍作成地図、沖縄県立図書館保管の首里古地図を使用している。

４．本書に掲載した遺構図の座標軸は国土座標軸（第ＸＶ座標系）を使用した。

５．出土遺物に関して、石質の同定は神谷厚昭（前真和志高等学校教諭）、陶磁器・銭貨等の同定・指導・助言には下記の諸氏に御協力いただいた（敬称略、所属五十音順）。記して感謝申し上げます。

金沢　陽（出光美術館）、渡久地政嗣（浦添市教育委員会）、片山まび（大阪市東洋陶磁博物館）、小野まさ子・外間みどり（沖縄県公文書館）、新田栄治（鹿児島大学）、馬淵和雄（鎌倉考古学研究所）、佐藤亜聖（元興寺文化財研究所）、弓場紀知（京都橘大学）、城間　肇（宜野湾市教育委員会）、森村健一・嶋谷和彦（堺市埋蔵文化財センター）、大橋康二（佐賀県立九州陶磁資料館）、亀井明徳（専修大学）、山村信榮（大宰府市教育委員会）、森本朝子（東洋陶磁学会）、水岡育子（富山市立佐藤美術館）、川口洋平（長崎県教育庁）、水澤幸一（中条町教育委員会）、金武正紀・宮城弘樹（今帰仁村教育委員会）、重久淳一（隼人町教育委員会）、田中克子（福岡市教育委員会）、矢島律子（町田市立博物館）、藤村　俊（美濃加茂市民ミュージアム）、吉岡康暢

以上の他に、沖縄県教育庁文化課および沖縄県立博物館、当埋蔵文化財センター等の各職員の協力を得た。

６．本書の編集は、伊集ゆきの・宮平真由美、玉城恵美利他の協力を得て瀬戸哲也が行った。各節の執筆者は目次に示した。

７．引用・参考文献は末尾に一括して記載した。

８．遺物の掲載番号は、種類ごとに連番を付けており、挿図番号と図版番号は共通したものである。

９．本書に掲載された出土遺物の撮影及び現像・焼付は光嶋　香・田村浩子が行った。

10．発掘調査で得られた遺物および実測図・写真・画像データ等の記録は、すべて沖縄県立埋蔵文化財センターに保管している。

報 告 書 抄 録

ふ り が な	しゅりじょうあと
書 名	首 里 城 跡
副 書 名	－二階殿地区発掘調査報告書－
巻 次	－
シ リ ー ズ 名	沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書
シ リ ー ズ 番 号	第29集
編 著 者 名	金城 透・瀬戸哲也・片桐千亜紀・知念隆博・金城 達・安座間 充・岸本竹美
発 行 機 関	沖縄県立埋蔵文化財センター
所 在 地	〒903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原193番地の7
発 行 年 月 日	2005年3月25日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
首里城跡（しゅりじょうあと）	沖縄県（おきなわけん） 那覇市（なはし） 首里当蔵町（しゅりとうのくらちょう）3丁目 1番	470218		26° 12′	127° 43′	1997. 8. 4 ～ 1998. 3. 31	1,300 ㎡	国営沖縄記念公園首里城地区整備事業

所収遺跡名	種類	時代	遺構	遺物	特記事項
首里城跡	城跡	14～20世紀	二階殿に伴う階段・石積・礎石	中国産陶磁器（青磁・白磁・青花・色絵・天目・茶入・褐釉）、タイ産陶磁器（褐釉・青磁・土器）、ベトナム産陶磁器（青磁・鉄絵・白磁・青花）、韓半島産陶磁器、本土産陶磁器（備前、瓦質土器）、銭貨、玉製品、骨製品。	二階殿創建以前と思われる落ち込みから、13世紀末～15世紀前半・中葉の陶磁器が一括で出土。石畳の造成土から15世紀前半の陶磁器が一括で出土。

目　次

序
巻頭図版
例言
報告書抄録

第１章　調査に至る経緯……（金城透・瀬戸）1
　第１節　調査に至る経緯……1
　第２節　調査体制……1
　第３節　調査経過……2
第２章　位置と環境……（瀬戸）3
　第１節　地理的環境……3
　第２節　歴史的環境……3
第３章　層序・遺構 ……（金城透・瀬戸）8
　第１節　層序 ……8
　第２節　遺構……8
第４章　遺物…… 23
　第１節　整理・集計の方法……（瀬戸）23
　第２節　落ち込み（ＳＲ11・12・24・32・33周辺）出土陶磁器……23
　　１.中国産陶磁器
　　Ａ.青磁……（瀬戸）23
　　Ｂ.白磁……（瀬戸）48
　　Ｃ.青花……（新垣）55
　　Ｄ.色絵・釉裏紅・瑠璃釉・他磁器……（瀬戸）64
　　Ｅ.褐釉陶器……（安座間）65
　　Ｆ.黒釉陶器（天目茶碗・茶入）……（金城達）69
　　Ｇ.その他陶器……（瀬戸）72
　　２.ベトナム産陶磁器……（瀬戸）74
　　３.タイ産陶磁器・土器……（安座間）83
　　４.韓半島産・本土産・産地不明陶磁器等 ……（瀬戸）87
　第３節　ＳＢ４下層出土陶磁器……（片桐）88
　第４節　銭貨……（知念）92
　第５節　玉製品・骨製品……（岸本）92
第５章　結語……（金城透・瀬戸・片桐・新垣・安座間）93

挿図目次

第１図　沖縄本島の位置…… 4
第２図　首里城跡の位置及び周辺の遺跡…… 5
第３図　旧首里城図…… 6
第４図　二階殿地区概念図……7
第５図　二階殿地区全体図……9
第６図　内郭城壁平面図……12
第７図　美福門周辺平面図、城壁立面図……13
第８図　二階殿東階段周辺平面図……14
第９図　二階殿東階段周辺立面図……15
第10図　ＳＢ４付近平面図、立面、断面図……16
第11図　ＳＲ11・12・24・32・33平面図……18
第12図　ＳＲ11・12・24・32・33立面、断面図……19
第13図　二階殿西側断面、立面図……20
第14図　二階殿西側平面図 ……21
第15図　青磁（１）…… 33
第16図　青磁（２）…… 34
第17図　青磁（３）…… 35
第18図　青磁（４）……36
第19図　青磁（５）…… 37
第20図　青磁（６）…… 38
第21図　青磁（７）…… 39
第22図　青磁（８）…… 40
第23図　青磁（９）…… 41
第24図　青磁(10) ……42
第25図　青磁(11) ……43
第26図　青磁(12) ……44

第27図　青磁(13)……45
第28図　青磁(14)……46
第29図　青磁(15)……47
第30図　白磁（１）……53
第31図　白磁（２）……54
第32図　青花（１）……57
第33図　青花（２）……58
第34図　青花（３）……59
第35図　青花（４）……60
第36図　青花（５）……61
第37図　色絵・釉裏紅・瑠璃釉・他磁器……64
第38図　褐釉陶器（１）……67
第39図　褐釉陶器（２）……68
第40図　天目……70
第41図　茶入……71
第42図　その他の陶器……73
第43図　ベトナム産陶磁器（１）……75
第44図　ベトナム産陶磁器（２）……76
第45図　ベトナム産陶磁器（３）……77
第46図　ベトナム産陶磁器（４）……78
第47図　ベトナム産陶磁器（５）……79
第48図　ベトナム産陶磁器（６）……80
第49図　タイ産褐釉陶器……85
第50図　タイ産青磁・土器……86
第51図　本土産・韓半島産他陶磁器……87
第52図　ＳＢ４下層出土陶磁器（１）……90
第53図　ＳＢ４下層出土陶磁器（２）……91
第54図　玉類・骨製品……92

図版目次

図版１　遺構検出状況１……101
図版２　遺構検出状況２……102
図版３　遺構検出状況３……103
図版４　遺構検出状況４……104
図版５　青磁（１）……105
図版６　青磁（２）……106
図版７　青磁（３）……107
図版８　青磁（４）……108
図版９　青磁（５）……109
図版10　青磁（６）……110
図版11　青磁（７）……111
図版12　青磁（８）……112
図版13　青磁（９）……113
図版14　青磁(10)……114
図版15　青磁(11)……115
図版16　青磁(12)……116
図版17　青磁(13)……117
図版18　青磁(14)……118
図版19　青磁(15)……119
図版20　青磁(16)……120
図版21　青磁(17)……121
図版22　青磁(18)・白磁（１）……122
図版23　白磁（２）……123
図版24　白磁（３）……123
図版25　白磁（４）……124
図版26　白磁（５）……125
図版27　青花（１）……126
図版28　青花（２）……127
図版29　青花（３）……128
図版30　青花（４）……129
図版31　釉裏紅・瑠璃釉……129
図版32　褐釉陶器（１）……130
図版33　褐釉陶器（２）……131
図版34　天目（１）……132
図版35　天目（２）……133
図版36　その他の磁器……134
図版37　色絵……134
図版38　天目（３）・茶入……134
図版39　その他の陶器……135
図版40　ベトナム産陶磁器（１）……136
図版41　ベトナム産陶磁器（２）……137
図版42　ベトナム産陶磁器（３）……138
図版43　ベトナム産陶磁器（４）……139
図版44　ベトナム産陶磁器（５）……140
図版45　タイ産褐釉陶器……141
図版46　タイ産褐釉陶器・青磁・土器……142
図版47　本土産・韓半島産他陶磁器……142
図版48　ＳＢ４下層出土陶磁器（１）……143
図版49　ＳＢ４下層出土陶磁器（２）……144
図版50　ＳＢ４下層出土陶磁器（３）……145
図版51　ＳＢ４下層出土陶磁器（４）……146
図版52　玉類・骨製品……92
図版53　銭貨……92
図版54　内面型押し文様細部……50
図版55　青花(5)……60
図版56　第42図12赤外線写真……72

表目次

第１表　青磁出土状況(碗)……24
第２表　青磁出土状況(皿)……25
第３表　青磁出土状況(その他)……26
第４表　青磁観察一覧……28
第５表　白磁出土状況……50
第６表　白磁観察一覧……51
第７表　青花出土状況……56
第８表　青花観察一覧……62
第９表　褐釉陶器出土状況……65
第10表　褐釉陶器観察一覧(1)……66
　　褐釉陶器観察一覧(2)……68
　　褐釉陶器観察一覧(3)……69
第11表　天目出土状況……71
第12表　天目・茶入観察一覧……71
第13表　ベトナム産陶磁器出土状況……74
第14表　ベトナム産陶磁器観察一覧……81
第15表　タイ産褐釉陶器出土状況……84
第16表　タイ産褐釉陶器観察一覧……84
第17表　タイ産土器観察一覧……86
第18表　ＳＢ４下層陶磁器出土状況……88
第19表　ＳＢ４下層出土陶磁器観察一覧……89
第20表　落ち込み出土陶磁器最低個体数……94

第１章　調査に至る経緯

第１節　調査に至る経緯

国指定史跡である首里城跡は、1988年から国営沖縄記念公園首里城地区整備事業に伴う事前の発掘調査が行われている。これまでに、正殿・南殿・北殿・奉神門・御庭・右掖門・継世門・木曳門・下之御庭・系図座・用物座・京の内・二階殿・東のアザナ・管理用道路地区・御内原・書院鎖之間・黄金御殿などの調査が終了し、調査報告書の刊行、復元整備が進められている。

今回は、1997年度に発掘調査を実施した二階殿地区の調査報告書である。

第２節　調査体制

1997年度（平成９）調査体制

事業主体　沖縄県教育委員会

安室　肇（教育長）

調査主体　沖縄県教育庁文化課

大城将保（課長）・日越国昭（課長補佐）

調査総括　上原　靜（史跡整備係長）

調査担当　金城　透（史跡整備係主任）

調査補助　矢沢秀雄・藤崎　京・城間　肇（文化財調査嘱託員）

発掘調査作業員

安次嶺マサ子・新垣キク・新垣直美・伊佐美幸・上間宏美・浦崎京子・大城輝子・大嶺愛子・垣花道明・金城さとみ・小波津ヨシ子・島仲恵子・島袋朝輝・瑞慶覧長裕・瑞慶覧繁美・勢理客智也桃原さおり・當間フミ・仲程喜美子・永吉弘子・比嘉清恵・比嘉剛・諸見里幸子・山本正昭

写真測量　株式会社　琉球サーベイ

2004年度（平成16）資料整理体制

事業主体　　沖縄県教育委員会

山内　彰（教育長）、名嘉政修（文化課課長）、金城　透（記念物係指導主事）

調査所管　　沖縄県立埋蔵文化財センター

安里嗣淳（所長）

調査事務　赤嶺正幸（副所長兼庶務課課長）、比嘉美佐子・西江幸枝（庶務課主査）、城間奈津子（同主事）

調査総括　盛本　勲（調査課課長）

整理担当　瀬戸哲也・片桐千亜紀・知念隆博（調査課専門員）、金城　達（臨時的任用専門員）

整理補助　安座間充・伊集ゆきの・宮平真由美・岸本竹美（文化財調査嘱託員）、新垣　力（左同・現県教育庁文化課専門員）

資料整理作業員

高良三千代・玉城恵美利・赤嶺雅子・石嶺敏子・比嘉洋子・高野ひろみ・伊波まさみ・譜久里昌代・砂川真弓・當山　実

資料整理協力者

又吉純子・比嘉優子・比嘉登美子・平良貴子・比嘉孝子・新垣利津代・池原直美・玉寄智恵子・瑞慶覧尚美・大村由美子・上原美穂子・崎原美智子・国場のりえ・譜久村泰子・久保田有美・荻堂さやか・喜屋武朋子・野村知子・阿部直子

第３節　調査経過

発掘調査は、平成９年度、1997年８月４日～1998年３月20日まで、1,300㎡の発掘調査を実施した。表土・盛土については、重機による掘削を行った後、９月８日から作業員による掘削・遺構精査に入った。調査は、仮設道路の撤去や、他地区との調査も併行したため、予想以上に長期間となった。

二階殿の遺構は、戦中の被害、戦後の造成により破壊されているが、大半の石積等の基礎は残存していた。さらに、様々な遺構が複雑に切り合いが生じている場所が多数あったため、検出作業はかなり困難であった。しかしながら、首里城跡の他地区に比べて、二階殿に伴う階段・石畳・礎石などが正確に把握できた。

また、戦前の二階殿自体の遺構は破壊されていたが故に、その下層の遺構が露出していた部分も計らず存在した。そのため、二階殿設立以前にも、何らかの建物遺構が存在していたことが判明したのは重要な成果であった。さらに、削平を受けていた石畳であるＳＢ４の造成土から、15世紀前半代の陶磁器が一括で出土したことにより、その造成年代を抑えることができた。さらに、二階殿建物に近い石列群であるＳＲ11・12・24・32・33周辺からは大量の陶磁器が出土し、年代的にも14～15世紀のものが多いということも調査中に感じられた。

基本的に調査は戦中・戦後に破壊される以前の二階殿の遺構、つまり戦前の遺構面まで調査を進めた。遺構検出作業と併行して、手書きによる遺構実測、写真撮影など記録作業も行った。遺構検出が終了した後は、スカイマスターによる写真撮影、写真測量を実施した。全ての調査が完了した後は、検出した遺構を保護し、復元整備に備えることとした。

資料整理は平成16年度に実施した。遺物コンテナ数は約300箱を数えたが、他の地区に比べ14～15世紀の遺物が割合的に多いため、全てのコンテナについて詳細整理することは時間の都合上、不可能と判断した。そのため、特に遺物が一括で出土しているＳＲ11・12・24・32・33（本報告では「落ち込み」と呼称）と、ＳＢ４下層の２遺構の遺物に集中して実施した。それでも、100コンテナに及ぶものであった。今回、報告できなかった残りの資料については、今後の機会を見て行うことで責任を果たしたい。

第２章　位置と環境

第１節　地理的環境

首里城は那覇市の当方、首里台地と称される標高100m前後の琉球石灰岩丘陵地に立地する。東側に那覇市の最高所（標高167.5m）である弁ヶ嶽がそびえ、多くの河川が首里城に取り巻くように配されるなど、すぐれた風水思想に基づいた王都にふさわしい環境が整えられている。

首里台地の下層には、新第三紀の砂岩・泥岩からなる島尻層群が不透水層として広がっており、琉球石灰岩との不整合部分からの湧水が多く見られる。首里城内及び周辺には、龍樋や金城大樋川などの湧水がある。

今回の調査区である二階殿地区は、琉球石灰岩の丘陵の縁辺部に当たり、一部石灰岩の風化土である明褐色土のマージが露出している。

第２節　歴史的環境

首里城は、東西410m、南北273m、面積46,167㎡を誇る県下最大規模のグスクである。築城年代はこれまでの発掘調査の成果から14世紀中頃と考えられるが、未だに不明な点が多い。今回の二階殿地区では、首里城跡ではあまり出土しない13世紀末～14世紀前半の青磁が、大量とまではいえないが一定量出土しており、今後の研究に寄与するものと思われる。一方、史書からは14世紀後半に王位にあった察度により築かれたとされ、1392年建造の高楼が首里城に相当するとの意見もある。しかしながら、確実な例としては、「安国山樹華木之記碑」があり、それによると尚巴志王代（1422年～1439年）には王城としての基本的な構造が確立していたことが窺える。そして、尚真・尚清王代（1477年～1555年）には外郭の拡張や周辺の整備が進み、現在見るような姿に近づいていったと推定される。

今回の調査区である二階殿は、正殿の南奥にあり、国王の日常的居間・書院として使われており、御住居所御殿とも呼ばれていた。その構造は、地形に合わせて北側では二階建てだが南側では平屋となっている。屋根は黄金御殿と同じ寄棟造・本瓦葺で、正殿等の行政施設が入母屋造と比べ、より簡略的と言える。

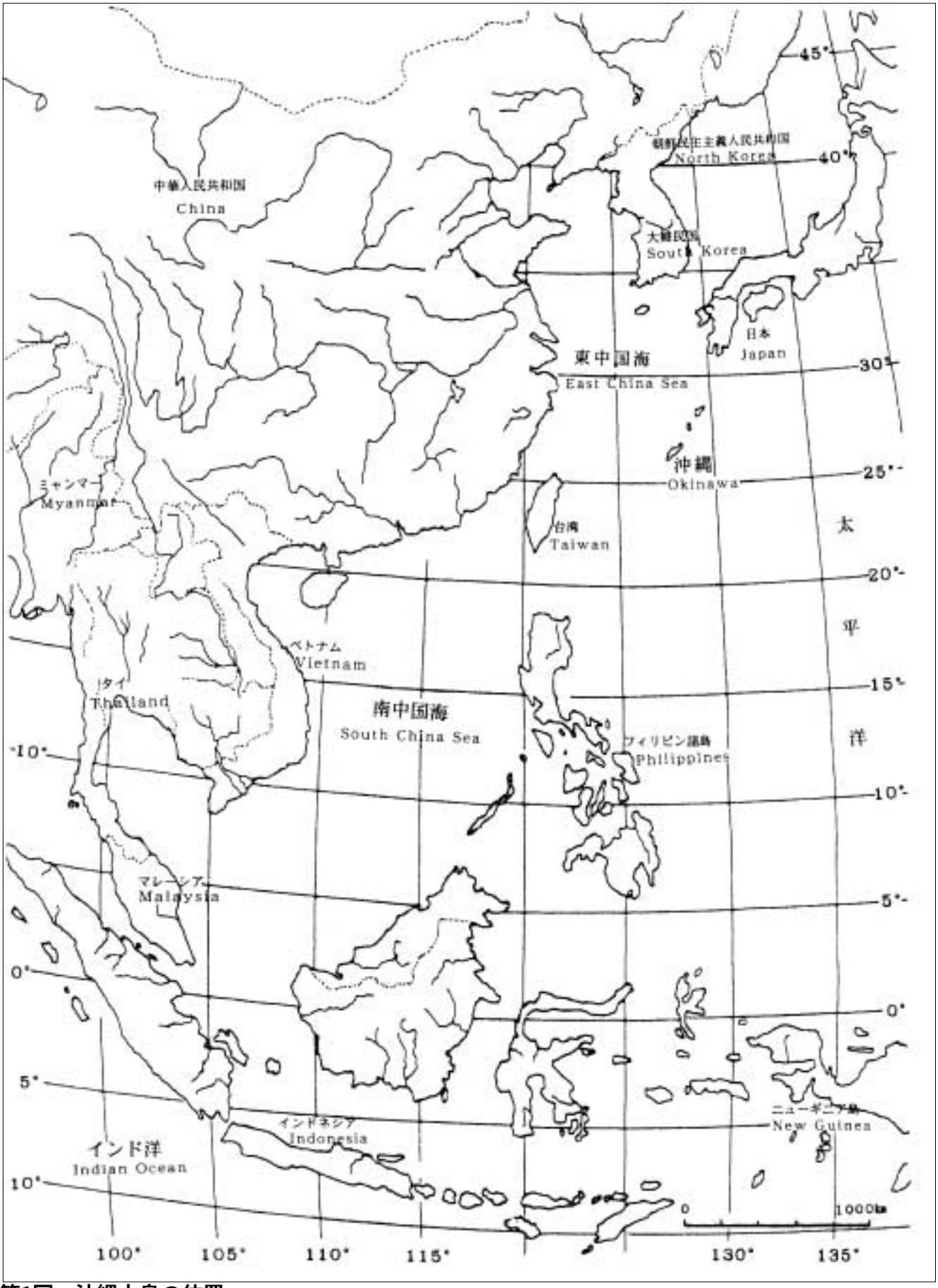
創建年代は1765年といわれ、文献記録の中では最も新しく建設されたものである。今回の調査では、二階殿の遺構以前と思われる階段や石積遺構などが確認された。また、ＳＢ４とした石敷の造成土からは15世紀前半代の陶磁器が一括で出土した。これらを考える参考のために、二階殿周辺の建物の創建・修復の年代を挙げておくと、1709年正殿、南殿、北殿焼失と、1712年北殿、南殿再建、1729年正殿重修、1753年に寝廟殿、世添御殿が創建、1768年に地震があった正殿の重修などがある。

一方、二階殿に近い外部へ至る門として美福門がある。この門は、1544年から２年間かけて建築された継世門ができる前までは、首里城の東門であった。城壁に直接木造の櫓を載せた構造で入母屋造の本瓦葺である。門前には一対の石獅子が置かれていた。門の外は赤田という地名に面していたので、「赤田御門」と言われていたが、継世門が設立後はこちらがこの名前を引き継ぎ、美福門は「シーサー御門」と呼ばれていたようである。今回は、美福門自体の城壁は破壊されており、確認されなかったが、この門へ続く城壁は一部確認できた。

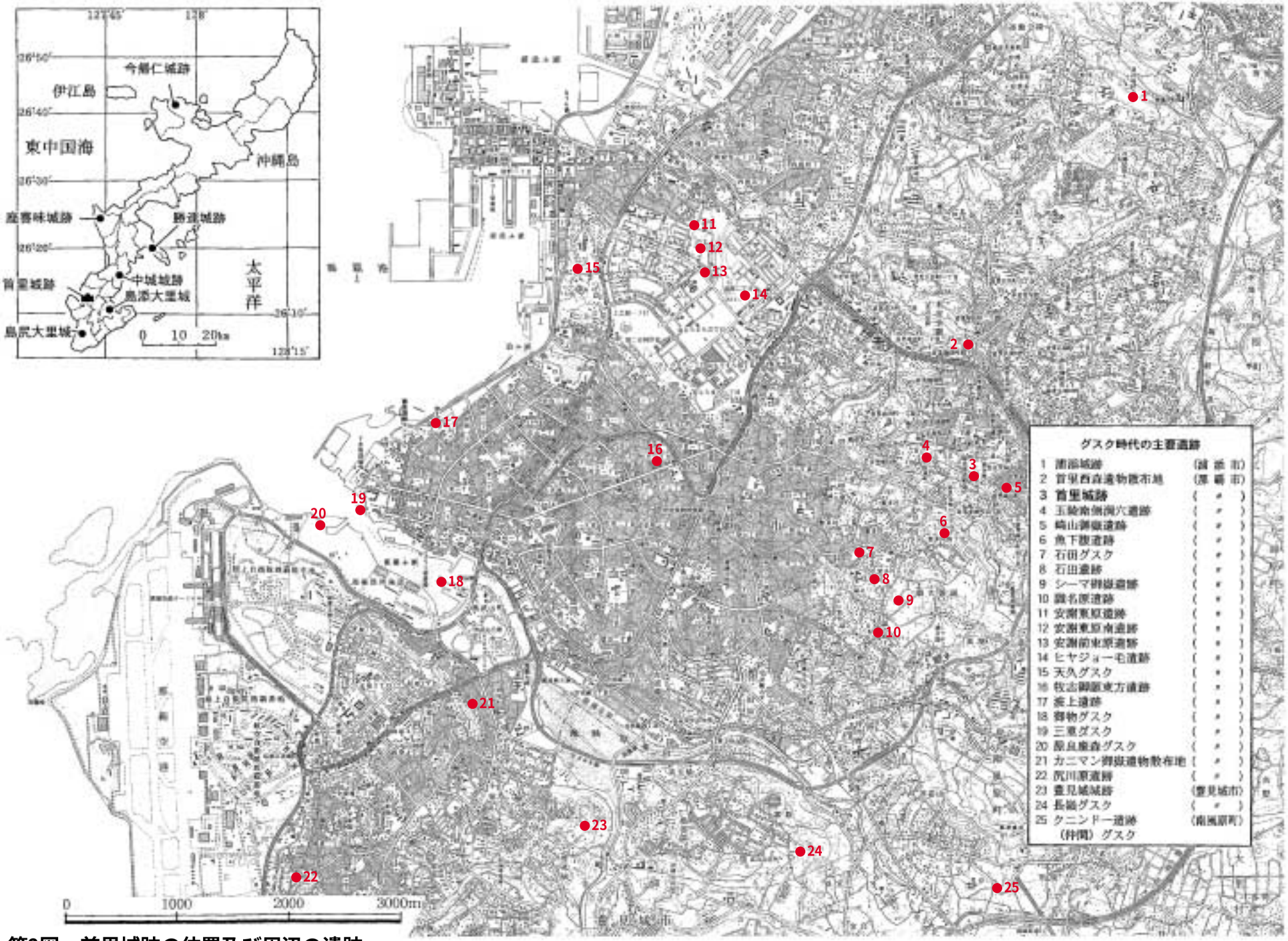
その後、1879（明治12）年の琉球処分後、熊本鎮台沖縄分遣隊の駐屯（1879年～1896年）や、首里第一小学校（1896年～1945年）などにより、施設の改変が各所で行われた。二階殿の建物や美福門自体は著しい改変はなかったようである。

戦後、廃墟と化した首里城の跡地には、琉球大学が建設されたため、建物や城壁の基礎も多くは破壊され、一部は造成土により覆われた。二階殿、美福門も同様の状況であるが、逆にその遺構が破壊されたため、先に触れたように二階殿創建以前の遺構が確認できたと言える。

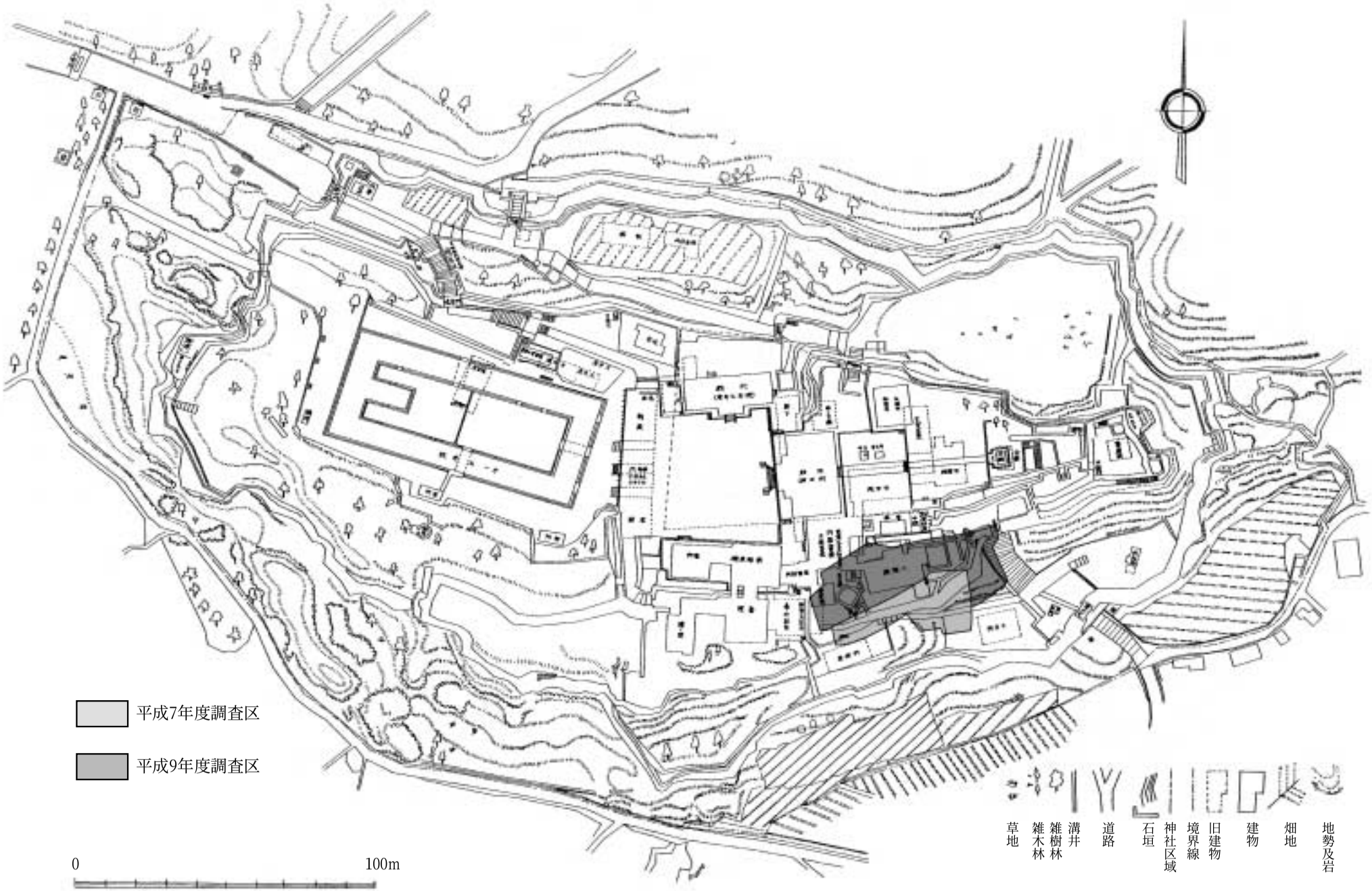
1972（昭和47）年の沖縄本土復帰を機に、周辺文化財の復元整備が次々と実施され、1984（昭和59）年に琉球大学の移転が完了すると共に、「首里城公園基本計画」に基づき、首里城及び周辺の歴史的環境の本格的な復元整備が始動した。その後、周辺地域の整備も着手され、往時の首里城の姿に少しずつ復元されつつある。


中華人民共和国
China
朝鮮民主主義人民共和国
North Korea
大韓民国
South Korea
日本
Japan
東中国海
East China Sea
沖縄
Okinawa
台湾
Taiwan
ミャンマー
Myanmar
ベトナム
Vietnam
タイ
Thailand
南中国海
South China Sea
フィリピン諸島
Philippines
マレーシア
Malaysia
インドネシア
Indonesia
ニューギニア島
New Guinea
インド洋
Indian Ocean
太
平
洋
45°
40°
30°
25°
20°
15°
10°
5°
0°
5°
10°
100°
105°
110°
115°
130°
135°
0
1000km

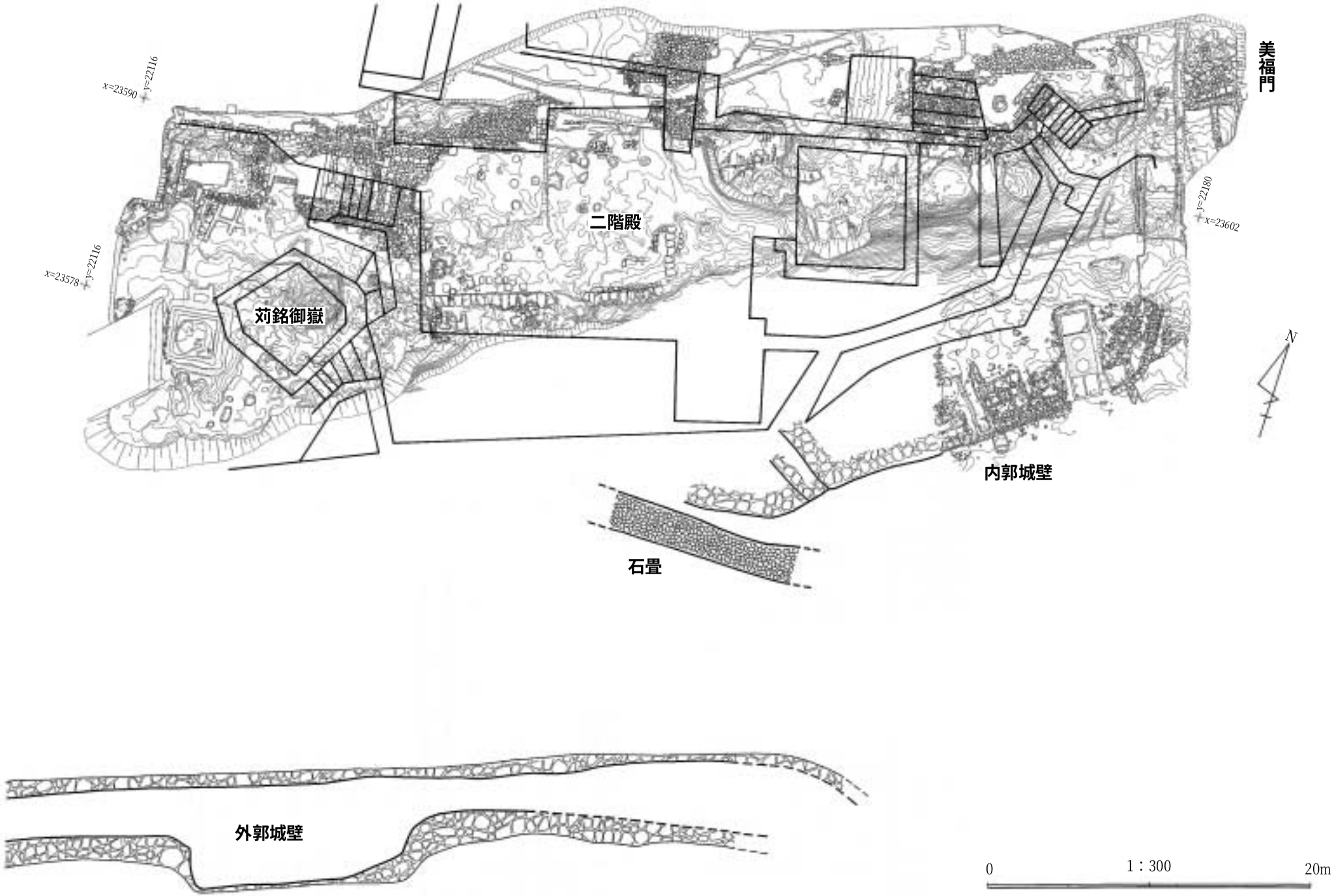
第1図　沖縄本島の位置



第2図　首里城跡の位置及び周辺の遺跡



第3図　旧首里城図（昭和6年頃　坂谷良之進原図　沖縄県立博物館蔵）



第4図　二階殿地区概念図

第３章　層序・遺構

第１節　層序

二階殿地区では、石敷・城壁・階段・礎石・基壇等の主に石で構築された遺構が検出された。
これらの遺構は、琉球大学の校舎建設等を含む戦後の造成土を除去すると確認されたものである。これらは、後に詳述するが古図や戦前の写真からも、基本的には1765年に創建されたとされる二階殿の遺構と考えられる。

一方、戦時・戦後の破壊により、古図等にはなく、二階殿創建以前と思われる遺構が一部露出している部分があった。この部分のひとつである二階殿西側階段の破壊された地点では、二階殿創建以前の土層が西ＳＴＷ１・２下層断面（第13図）で確認できる。この地点の土層から次のような基本層序が設定できる。

Ⅰ層…戦後の造成土
琉球大学建設時の盛土、瓦、戦前・戦後の陶磁器等の遺物を大量に含む。またグスク時代・近世の陶磁器を中心とした遺物も大量に出土する。

Ⅱ層…二階殿創建時の遺構及びそれに伴う造成土
二階殿の遺構と考えられる西ＳＴＷ１・２と、その下層である厚さ0.1～0.4mの混礫土及び石灰岩礫が互層となっており、厚さ約0.8～1.0mに及んでいる。

Ⅲ層…二階殿創建以前の遺構及びそれに伴う造成土
Ⅱ層の下層は瓦や塼を並べた遺構とそれに伴う厚さ0.2mの混礫土。また、次節で後述する内郭城壁の下層にも堆積層が見られ、出土遺物はなかったが、この地点の土層よりも古い可能性がある。

Ⅳ層…マージ
岩盤の風化土である明褐色土。ここではⅢ層の下に一部見られ、他の地点でも一部露出しているところがある。

Ⅴ層…岩盤
琉球石灰岩。この二階殿地区ではかなり広い範囲で岩盤の露出が見られる。

第２節　遺構

二階殿地区の遺構は、建物の基礎および階段、それに至る石敷や城壁といった主に石積遺構として認識されるものである。そこで、発掘時には石列・石積（ＳＲ)、石敷（ＳＢ)、階段（ＳＴW)、石積土坑（ＳW)、石組溝（ＳＤ）といった名称を付している。

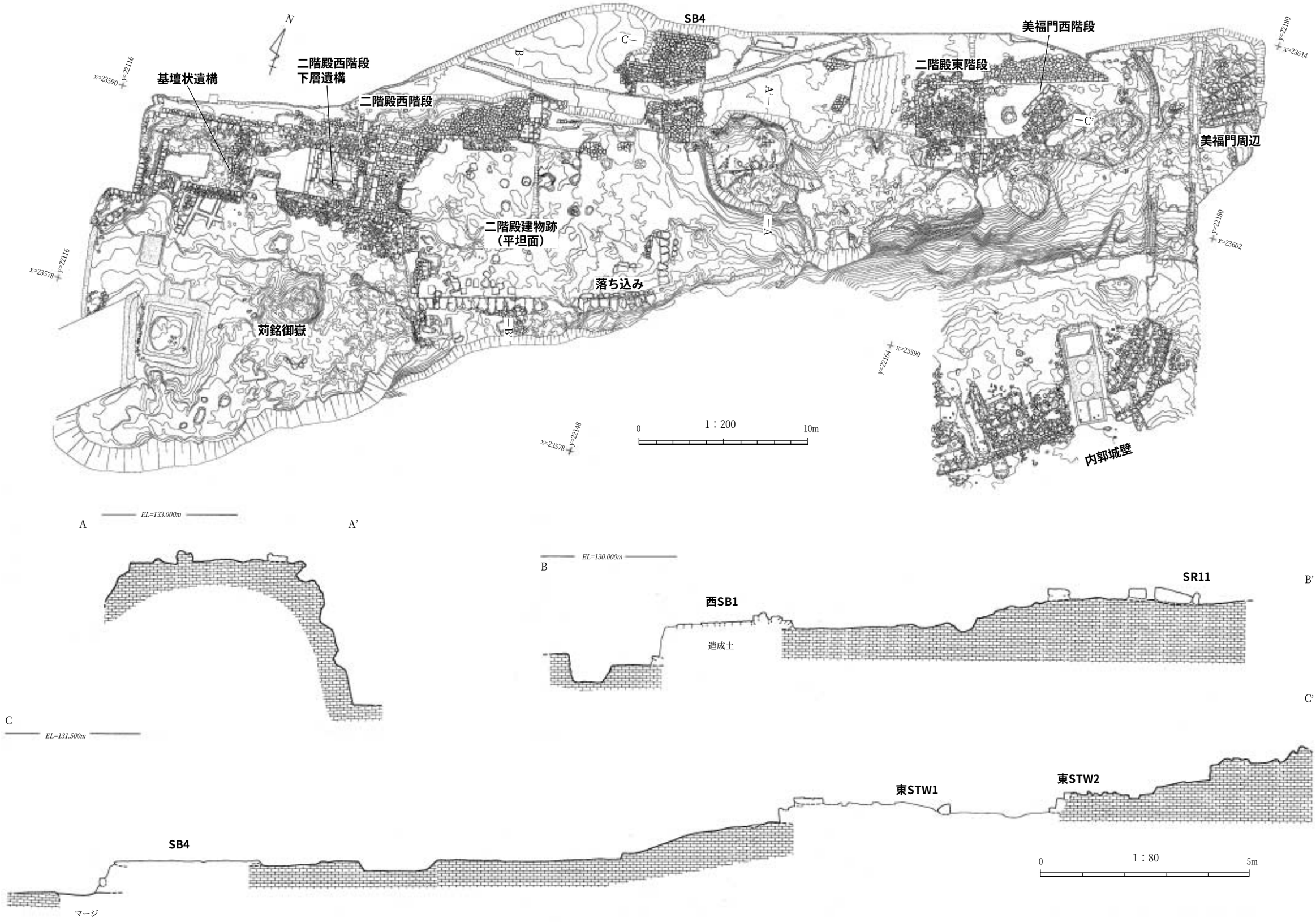
本報告に際しての資料整理作業を行う中で、これらの遺構が一連のものと捉えられるものがあるため、そのまとまりごとに報告することにした。

以下、位置及び層位関係により大きく８つのブロックに分けて説明する。

１．内郭城壁（ＳＲ３・６）

ＳＲ３・６は内郭城壁と考えられる石積である（第６・７図)。この城壁は、中間にテラスを有した二段構造となっている。下段がＳＲ６で４、５段程度、高さ1.2mの石積で、その上面は１m程の平坦面となっている。その上段であるＳＲ３は４段程度、高さ1.0mの石積となる。この石材は、約0.2～0.3m程度の大きさで、あまりきれいに加工されたものではない。平坦面は現状では岩盤もしくはマージが露出している。

なお、ＳＲ６の石積に接して、１ヶ所試掘トレンチを設定した。その結果、この下端には約30cmの暗褐色土が堆積しており、その下層には地山であるマージを確認した。この地山面で、３基の径20cmのピットを検出した。この堆積層からは明確な遺物が確認できなかったが、城壁の下層となっているので、城壁造成以前の土層と思われる。先述したが、この土層はⅢ層とした土層に含めることができようが、二階殿西階段で見られた土層よりもさらに古い可能性が考えられよう。



第5図　二階殿地区全体図

２．美福門周辺（ＳＲ１・東ＳＴＷ２）

美福門に相当する場所周辺では、この門の西側の城壁と思われる石積であるＳＲ１を確認した（第７図）。このことは、東のアザナ地区で継世門から美福門へ続く石敷道の位置と方向から推察できる。ただ、この石積自体の残存状況からすると、門の西面をなす部分は削平されていたものと思われる。石列の規模は、現状の高さが1.0mで３段程度残存しており、石材は長さ約0.5～0.7m程度で、比較的丁寧に長方形状に加工されたものを使用する。内郭城壁の石積よりも丁寧なつくりである。

また、ＳＲ１の西側には美福門西側へ取り付く階段である東ＳＴＷ２を検出した（第８・９図）。この階段は、現状では高さ0.4m、２段残存しており、幅は2.1mである。石材は長さ0.5～0.7m程度で、長方形に加工されたものである。この階段は岩盤を利用して、裏込めは0.2m程度の礫を使用して造成されている。

３．石敷（ＳＢ）

本地区で検出した石敷は、基本的に約0.2m前後の小さな平石を１段のみ平坦に敷き詰めるものである。これらは美福門から二階殿に至り、書院・正殿・南殿へつながって行くものである。

東ＳＢ１（第８図）は、二階殿の東階段へ至る石敷である。幅は残存で1.5mであるが、削平されている。

西ＳＢ１（第14図）は、二階殿西階段へ至る石敷である。幅は残存で2.3m。

ＳＢ２（第10図）は、後述するＳＢ４から南へ派生する石敷で、南側に向かって傾斜したスロープ状の石敷である。幅は1.8mと狭い。

ＳＢ３（第14図）は、あまり残存していないが、二階殿と南殿および奥書院を結ぶ回廊の一部と思われる。

ＳＢ４（第10図）は、調査区中央部北側で検出されるもので、二階殿東側階段（東ＳＴＷ１）に突き当たるものと思われる。この石敷は、本地区の他のものと異なり、南北端が幅0.2m、深さ0.1mの側溝（ＳＤ５・６）で区画されており、その幅は2.2mである。

なお、このＳＢ４の石敷の下層で、造成土と考えられる礫混じりの土層から15世紀前半代の青磁碗・皿を中心に77個体の陶磁器が出土した。これらには、天目、青磁皿などといった同器種ごとに重ねられていた状況で出土したものがあった。この状態は、おそらく石敷および岩盤が染み込んできた石灰岩により、固まったものと考えられる。

しかしながら、これらの多く、特に青磁は火を受け変形し、個体同士が溶着したものもあるので、意識的に埋納したとは断定できない。むしろ、別の場所で重ねられた状況の時に火を受けて、その後、造成時に廃棄した可能性も考えられる。ただ、６個が重ねられた天目はそれほど火を受けていないようにも見える。いずれにせよ、この石敷造成がおおよそ15世紀前半代と捉えることは出来るのではないか。

４．二階殿階段（東ＳＴＷ１、西ＳＴＷ１・２）

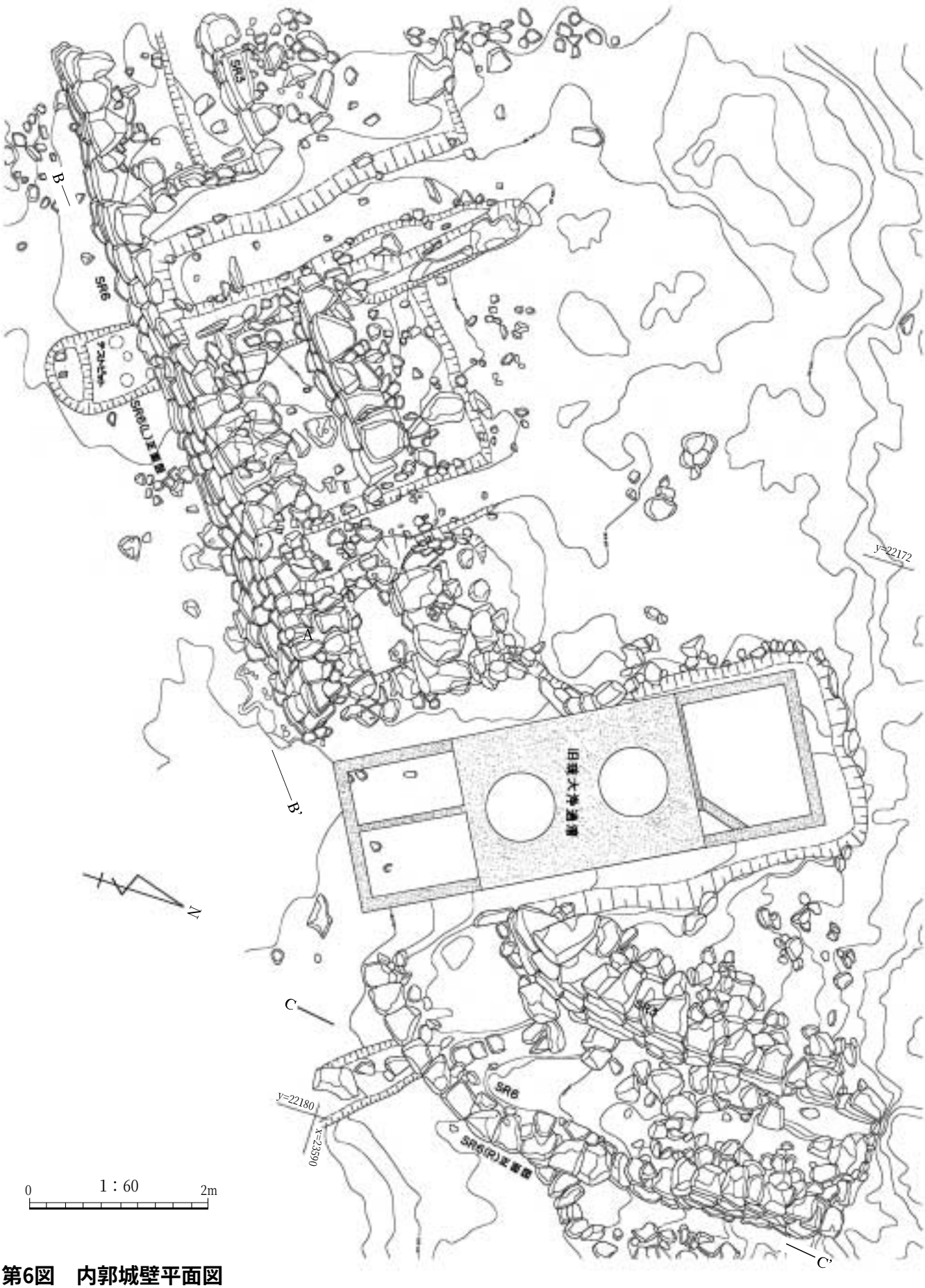
二階殿に至る階段としては、２基検出でき、東西の出入り口に各々見られる。また、ＳＴＷ３・４は、西ＳＴＷ１・２の下層にあるため、後述する。

東階段（東ＳＴＷ１）は、東ＳＢ１に接するもので、削平により段数は不明だが、両側壁が残存しているので、幅は4.2mを測ることが出来る（第８・９図）。側壁を見ると、最下段は0.4m前後の大きめの石材を使っているのに対し、それより上段は0.2m前後の小さめのものである。

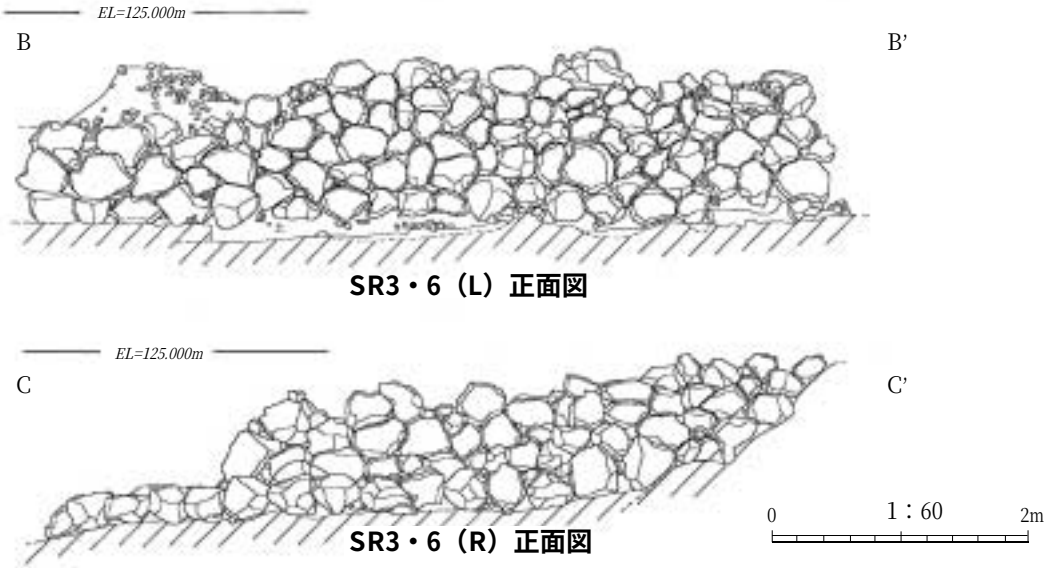
西階段（西ＳＴＷ１・２）は、二階殿から黄金御殿へ至る階段である（第13・14図）。現状では、西ＳＴＷ１は幅2.4m、奥行き0.8m、１段の高さ0.2mで北側から南へ向かって昇る３段のステップがあり、踊り場に至るものである。この階段の東側にはＳＤ４と幅0.2mの石造りの側溝が走る。

西ＳＴＷ２は西ＳＴＷ１の踊り場から方向を90度変える階段で、幅はやや狭くなり2.1mだが、奥行き0.8m、１段の高さ0.2mと西ＳＴＷ１と同様である。この階段は西へ向かって昇る２段のステップがあるが、その先は後世の攪乱が及んでいるので残存していないが、古図からもう数段西へ伸びて踊り場に至るものと推定される。この階段の南側には先と同様な側溝であるＳＤ３が幅0.3mで走る。

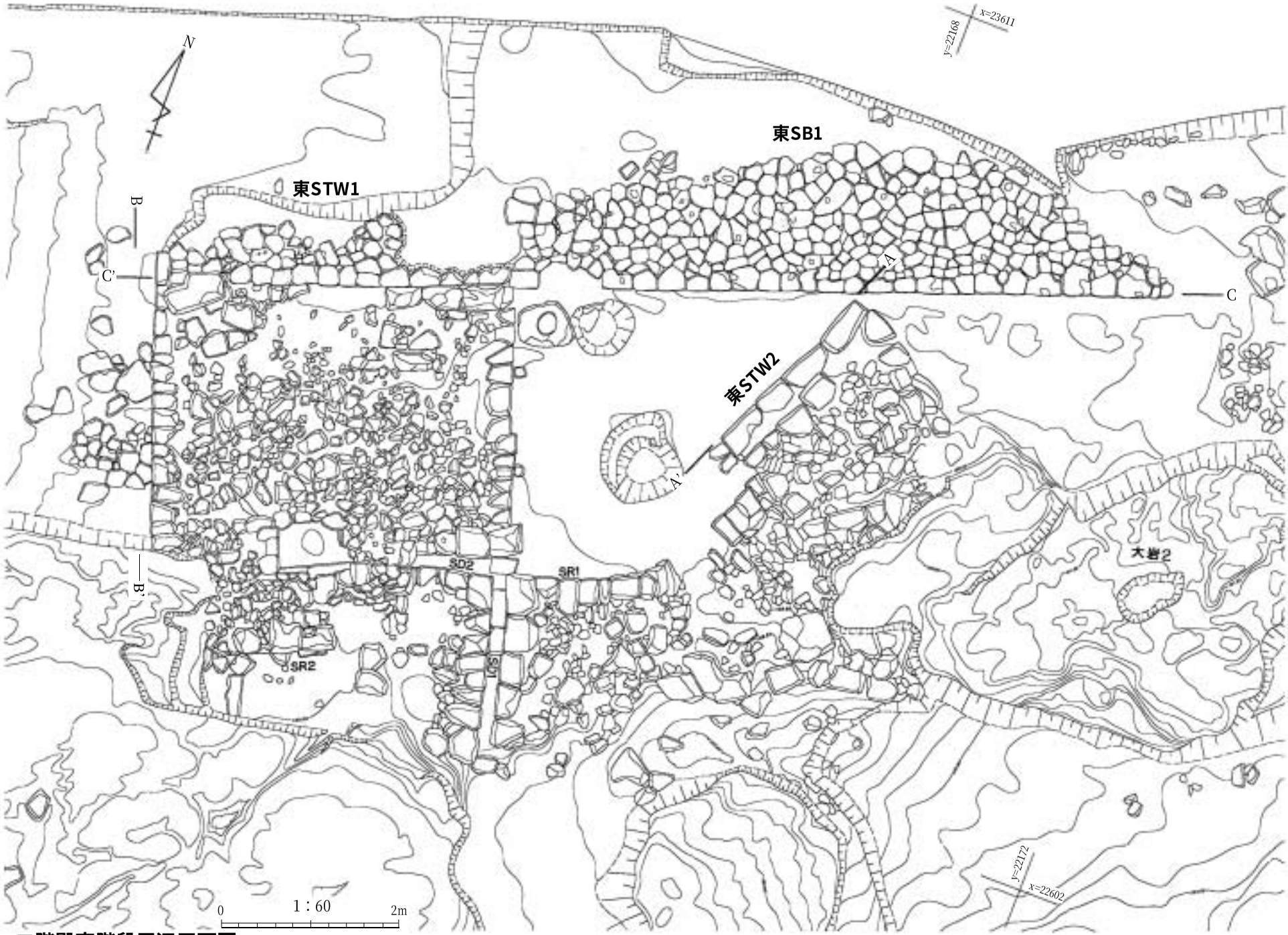
これらの階段の石材はステップ前側が幅0.3m、長さ0.3～0.6mと細長いもので、その奥は0.2m前後の平たい石を使用している。西ＳＴＷ２の方が石の大きさが揃っている。また、削平によりこの下層であるＳＴＷ３などの遺構が露出している。



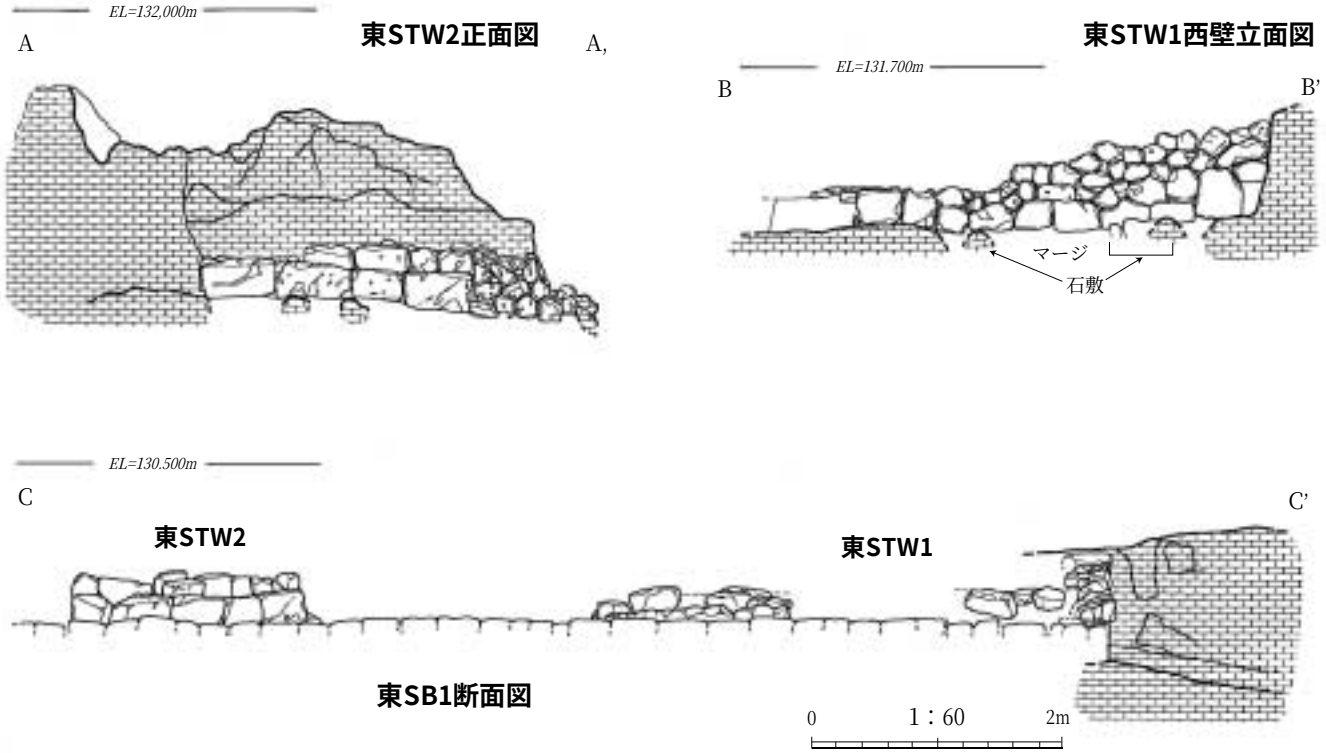
第6図　内郭城壁平面図



第7図　美福門周辺平面図、城壁（SR1・SR3・6）立面図



第8図　二階殿東階段周辺平面図



第9図　二階殿東階段周辺立面図

５．二階殿建物跡（平坦面、ＳＲ11・12・24・32・33、ＳＷ２、ＳＷ４）

平坦面は、岩盤をはつった部分で、現状では東西17m×南北10mを測る（第５図）。ここには、幾つかの礎石が見られるが、その位置から６基の礎石はほぼ原位置の可能性がある。これらの礎石には、岩盤のほぼ直上に見られるものと、岩盤を掘り込んだ部分に礎石を据えているものの２種が見られた。また、３基の径１m前後、深さ0.1～0.2mの岩盤を掘り込んだ部分があり、礎石が据えられた可能性がある。これらの礎石・岩盤の掘り込みは全てが残存していないので、古図に見られる建物に当てはめるのは困難だが、ここに二階殿があったのは確実であろう。ただ、古図からすると庭園も合わせた二階殿建物の大きさから考えると、本来の平坦面は南側に約５m程長かったものと推定される。

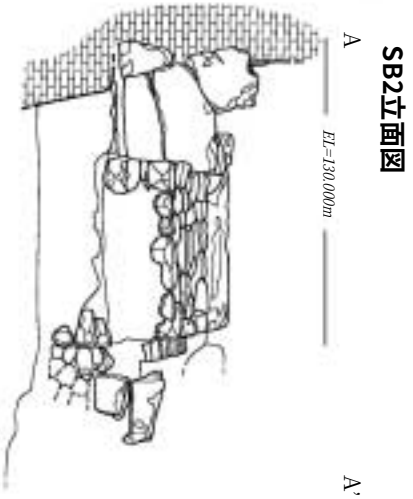
この平坦面の南側には、ＳＲ11・12・24・32・33の石列が位置する。ＳＲ11は長さ0.5～0.7m前後の長方形に加工した丁寧な石材を使用しており、二階殿を画する南側の城壁の可能性がある。ただ、先述したが、古図の城壁の位置からすると、南に５m程度ずれるため、やや不安が残る。その他の石列は、古図には全く記されておらず、この一連の石列は二階殿建物の基礎や創建以前の遺構の可能性もあるのではないか。後述するようにこの石列群の周辺から大量の陶磁器が出土している。

平坦面西側に、岩盤を掘り込み、土坑状にしたＳＷ２・ＳＷ４がある。特にＳＷ２は、深さ0.4m、規模1.1m×0.6mの長方形状のもので、周囲は石列で囲っており、手が込んでいると言える（第14図）。古図ではこの付近にトイレが描かれているので、その可能性がある。また、ここから戦前の陶磁器が多く出土している。

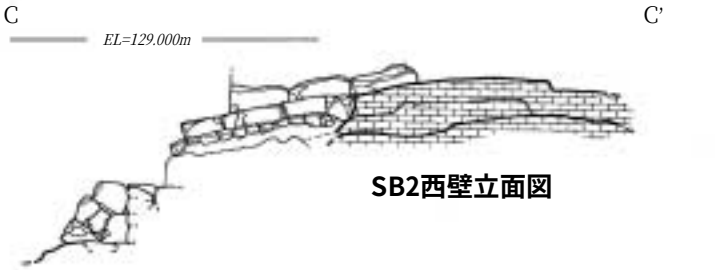
６．落ち込み（ＳＲ11・12・24・32・33周辺）

落ち込みとした遺構は、先述したＳＲ11東側およびＳＲ12・24・32・33周辺の岩盤が0.2～0.6m前後低くなっている範囲を指す（第11・12図）。この落ち込みには、大量の陶磁器が出土した暗黒色土が堆積していた。この暗黒色土は、これらの石列を造成する時もしくはそれ以前に、この落ち込みに堆積したと考えられる。また、陶磁器の多くは火を受けていること、13世紀末～15世紀前半・中葉のものが圧倒的なことから、二階殿創建以前に廃棄されていた可能性が高いと思われる。17・18世紀の陶磁器も見られるが量的に１コンテナ程度であるので、調査以前にクバの木があったための混入と思われる。

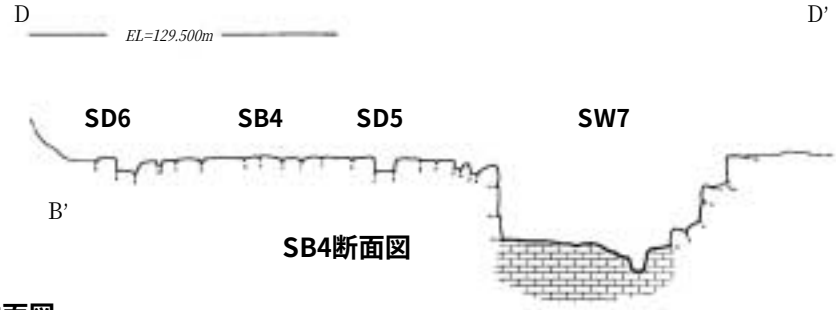
これらの石列であるが、二階殿創建時にこの落ち込みを平坦にするために築かれた可能性が高いと思われる。落ち込みであるが、その底面や壁面の岩盤が平坦であるため、意識的に作り出されたのかもしれない。いずれに



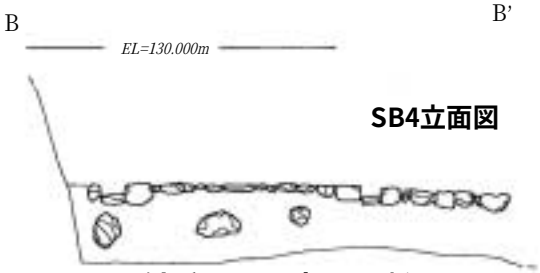
SB2立面図



SB2西壁立面図



SB4断面図



SB4立面図

0　1：60　2m

第10図　SB4付近平面、立面、断面図

せよ、落ち込み自体は二階殿創建以前と思われる。

７．基壇状遺構（ＳＲ14･15・27～29）

二階殿西側には石積で基壇状にした遺構があり、現状では２段の石列で平面形としては東西5.4m、南北3.6mの方形をなしている（第13・14図）。下段の石列（ＳＲ27）は、１段もしくは２段で高さ0.3～0.5mを測る。その西側には幅約１mの石敷で構成された平坦面があり、側溝であるＳＤ７を挟んで、上段であるＳＲ28が続く。このＳＲ27は現状では１段で高さ0.3m程度だが、この西側の最上面のレベルから考えると本来は２、３段あり、高さ0.6mはあったものと思われる。この最上面は地山であるマージを起源とした明褐色土で平坦面を造成している。この各平坦面は東西方向には水平だが、南に向かって３段の階段となっており、0.3～0.5m程高くなっている。

８．苅銘御嶽周辺（ＳＲ36）

苅銘御嶽自体は、調査の段階ではその石積の一部であるＳＲ36が残存したのみであった（第５図）。この周辺からは近世～近代の陶磁器が多く得られている。

古図では存在している階段であるが、遺構としては正確には把握できなかった。ＳＴＷ４は位置的にはこの苅銘御嶽へ至る階段に近い。しかし、後述するようにこの階段は、二階殿設立以前の遺構である可能性が高い。

９．二階殿下層遺構（ＳＴＷ３、ＳＴＷ４、ＳＲ34）

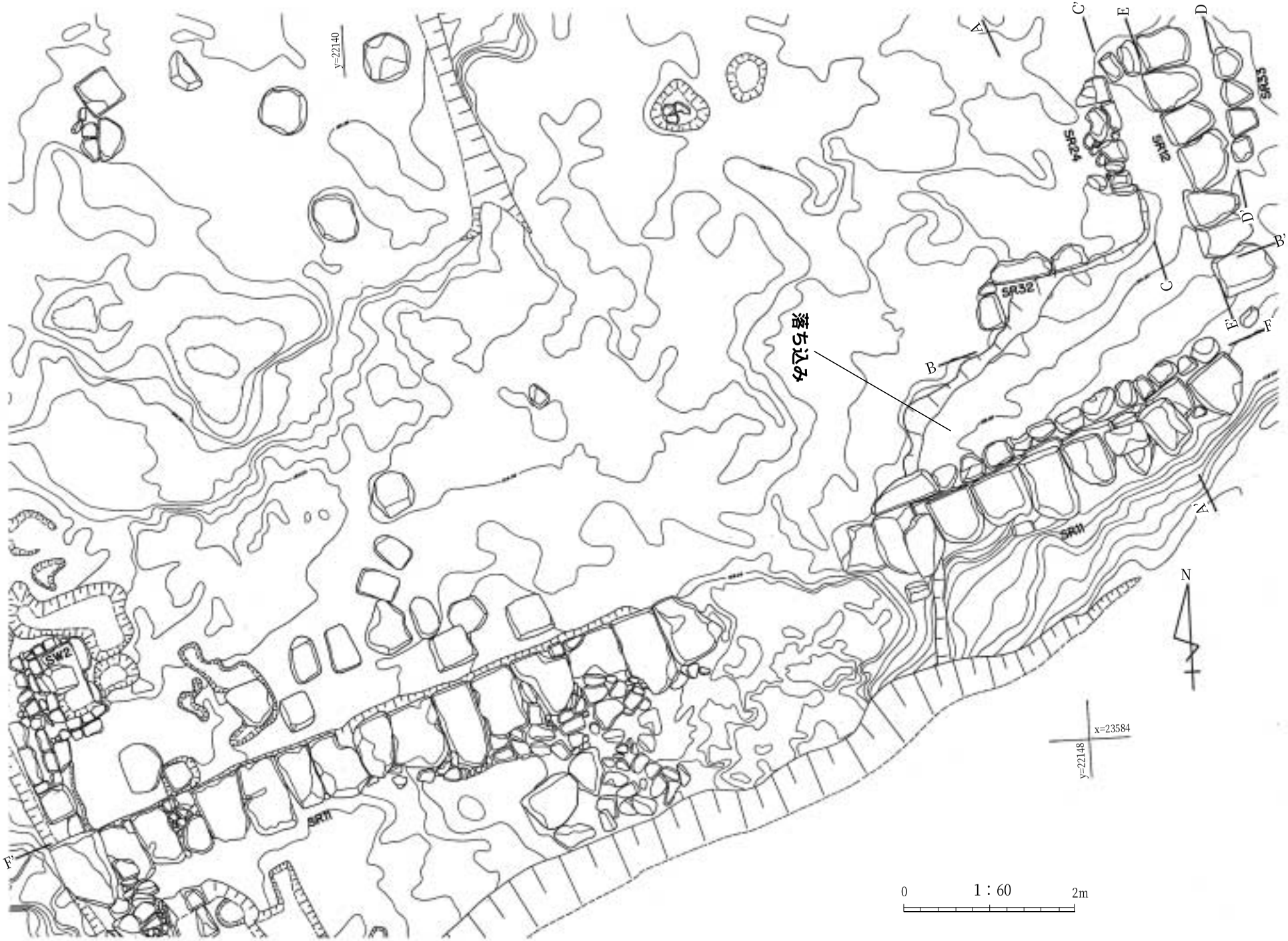
先述した西階段が後世による削平された部分で、下層遺構が露出したものである（第13・14図）。この下層遺構は、西ＳＴＷ２の現状での最上面から約1.5m下がったところに、検出された。この上層の階段から下層遺構までは、石灰岩の巨礫が入った厚い層と、薄いコーラル層およびマージ起源の土層による互層で造成されている。

この遺構は、ＳＴＷ３とした階段基礎と、回廊かと思われるような幅0.2m、長さ2.0mの細長い部材とその両端に礎石と思われる１辺0.4mの方形の平たい切石が置かれた遺構がある。このような礎石を細長い部材でつないだような遺構は、首里城跡では現在確認されていない。しかしながら、周辺の円覚寺跡や御茶屋御殿跡では、同様の遺構を検出している。

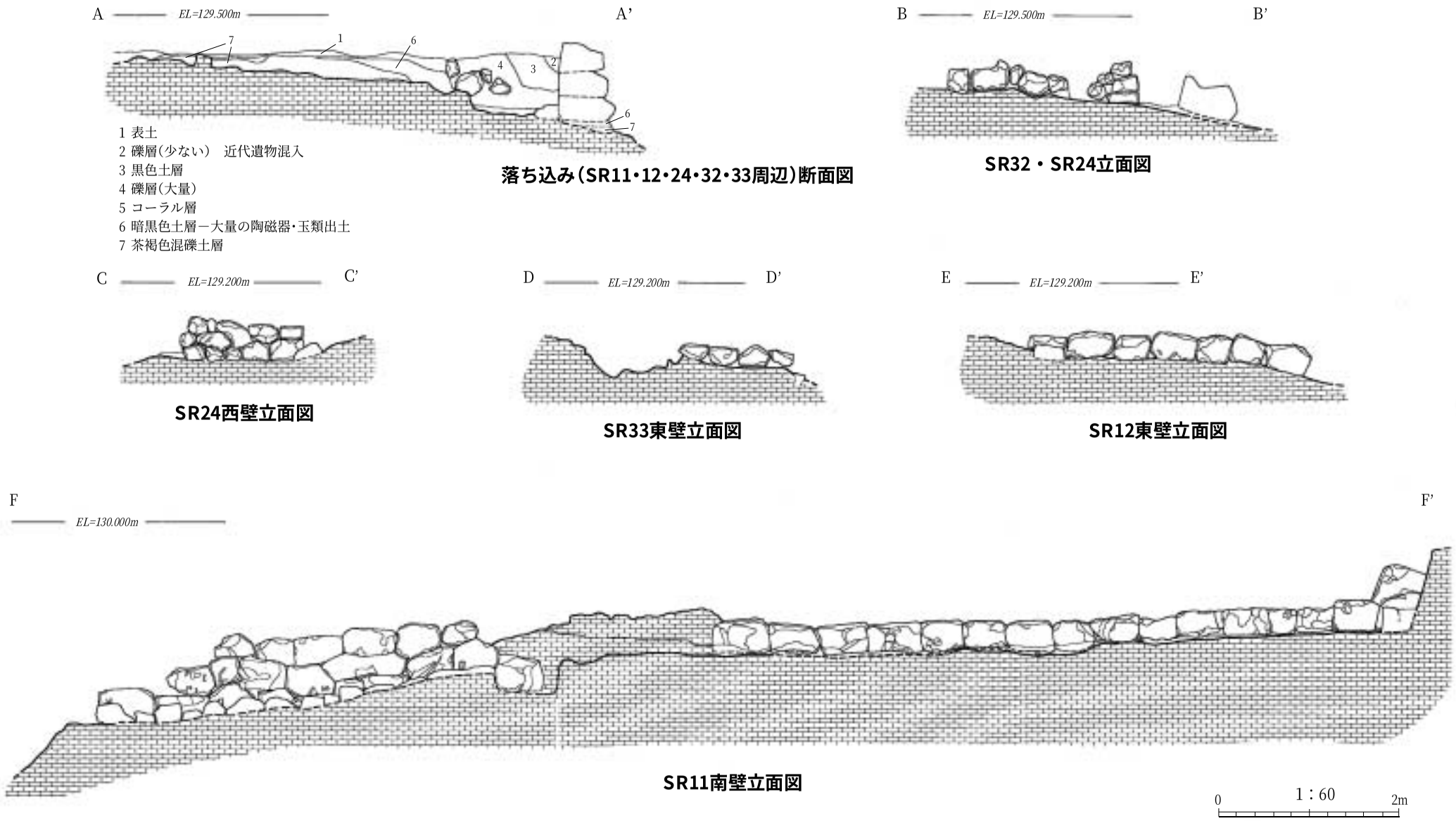
また、同一面に現状で平瓦を縦に数枚並べて囲い状にした遺構が見られる。この瓦は明朝系灰色瓦と赤瓦であることから、この下層遺構も大まかに近世（17世紀）以降だと推定される。この瓦囲い遺構の性格は不明だが、この内部には造成土が充填しているため、何らかの基礎や暗渠等の一部と考えられる。いずれにせよ、二階殿設立以前に何らかの建物および関連遺構があったことが窺える。

ＳＴＷ４は、ＳＴＷ３の約５m西側に位置する現状で２段の階段である。この階段は、先の西階段の下層遺構である西ＳＴＷ３と129.00～20m前後とほぼ同一のレベルで検出されている。これも古図には記されておらず、時期的に古いものと考えられよう。

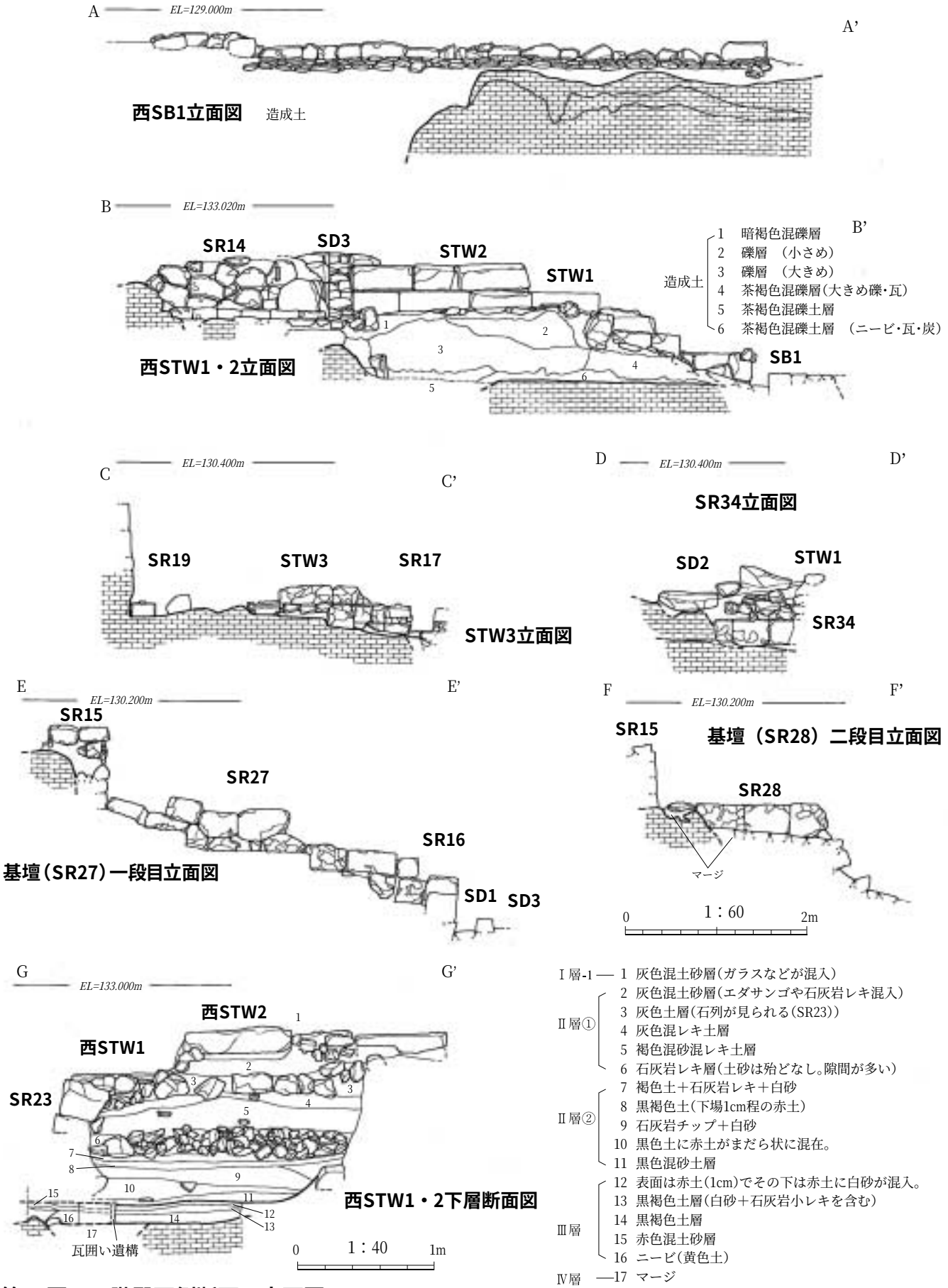
また、ＳＲ34は西ＳＴＷ２東側の削平された部分で下層の造成土中、岩盤に接して積まれた石列である。この石列は本来、東西に走っていたものと思われる。



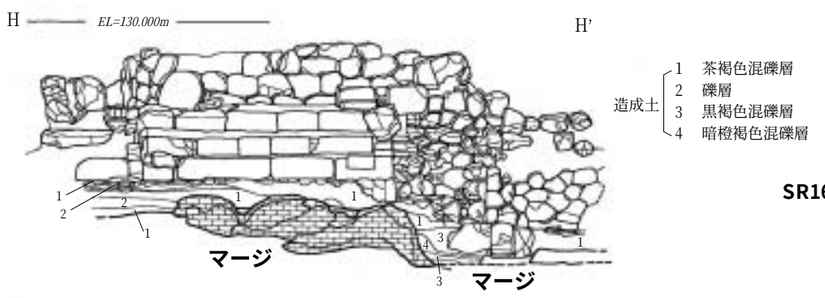
第11図　SR11・12・24・32・33平面図



第12図　SR11・12・24・32・33立面、断面図



第13図　二階殿西側断面、立面図



第14図　二階殿西側平面図

第４章　遺物

第１節　整理・集計の方法

首里城跡二階殿地区では、大量の陶磁器を中心とした種々の遺物が出土している。その膨大な量のため、全ての遺物を整理することは困難であったので、良好な資料である落ち込み（ＳＲ11・12・24・32・33周辺）およびＳＢ４下層出土の陶磁器を中心に報告する。銭貨や玉については、特徴的な資料について記述する。

落ち込みからは、14世紀～15世紀代の火を受けた大量の陶磁器を中心に、玉、銭貨、金属製品が出土した。これらは、非常に膨大な量であったため、その資料の重要・稀少度から、ベトナム陶磁器、中国産青花・青磁大型品（壺・盤等）を優先的に接合作業を行った。ちなみに、青磁・白磁の碗・皿や中国産・タイ産褐釉陶器の接合作業は時間の都合によりやや不十分である。一方、ＳＢ４下層は石畳下の造成土から、青磁・天目が一括で廃棄されたものと思われ、時期的に14世紀後半～15世紀前半に収まるものである。

各器種の量的な割合は次のような基準で破片数と最低個体数の集計作業を行うことで試みた。破片数は、全ての破片を数えるのは量的に困難であるため、口縁・底部を中心に集計した。量的に多くない一群である色絵・紅釉・瑠璃釉・茶入・韓半島磁器・本土産陶器・ベトナム産陶磁器・タイ産青磁については、全ての部位の破片数を集計した。これら以外は原則として、３cm以上の口縁部と1/4以上の 底部を集計した。最低個体数は、数が多いものでは底部数、稀少なものでは明らかに別個体と思えるものを個別に集計した数の両者を合わせた数である。

このように、全てのものに共通する基準ではなく、便宜的な集計であるが、一定の量的な割合は把握できるものと考えている。なお、この集計は接合した後に行っている。

第２節　落ち込み（ＳＲ11･12･24･32･33周辺）出土陶磁器

落ち込み出土陶磁器の多くは二次的に火を受けており、時期的に13世紀末～15世紀中葉に収まるものである。さらに、量は多くはないが、これらより古い14世紀前半・中葉の青磁も出土している。これらの他、近世の陶磁器１コンテナ、瓦５コンテナ、骨・貝１コンテナも出土したが、これらは全く火を受けたものではなく、大きなクバの木があったための混入と思われるので、図版・集計等の報告は省略することにした。

１．中国産陶磁器

A．青磁（第15～29図）

青磁の器形には、碗・皿・盤・鉢・壺・瓶・香炉・高足杯・小型品などがある。

14世紀後半～15世紀中葉のものが大半であるが、それより古い13世紀末～14世紀中葉に遡るものも一定量出土した。以下、器形ごとに分類および特徴を記述していく。個々の詳細は観察表にまとめた。出土点数は、先述の方法により集計作業を行い、第１～３表に示した。分類・時期は、金武分類（金武1989・1990・1997）を元に、大宰府分類（森田・横田1977、横田・森本・山本1989、山本2000）・上田分類（上田1983）・亀井分類（亀井1982・2002）を参考にした。

碗（第15～17図　１～63・第23図　143）

碗は口縁・底部破片数で1412点、最低個体数は469点を数える。金武分類を元に、器形の違いにより大きく４つに分類した。まず、大宰府Ⅲ（Ⅲ゛）類に相当もしくは類似するものをⅠ類とした。県内で多く出土する14世紀後半～15世紀中葉とされる無鎬蓮弁文碗、雷文帯碗、無文碗、佐敷タイプ碗については、口縁形態により直口をⅡ類、玉縁をⅢ類、外反をⅣ類と分けた。

Ⅰ類（１～５）

底部中央は尖り、高台が細長く三角形に近い形で、文様は鎬蓮弁が多いが、５のように無文もある。釉は厚く砧青磁系とされる青緑色に近いもので、畳付のみ釉剥ぎされるのが特徴である。これらは、大宰府分類Ⅲ類もし

くは、やや底部端が幅広いⅢ’類に類似するものと思われる。県内では今帰仁城跡第Ⅸ・Ⅶ層に多く見られる（今帰仁村教委1991、金武2004）。

Ⅰ’類（６～９）

Ⅰ類そのものではないが、６～８のように鎬蓮弁をもつものや、９のように高台は太いが内側が内傾するものなど、Ⅱ～Ⅳ類よりもⅠ類に近いものを便宜的にまとめた。釉色はⅠ類よりもやや鈍い青緑色で、高台や鎬蓮弁などの作りは粗雑であり、時期的にも後出するものと思われる。集計は口縁をⅠ類、底部は不明の該当箇所に含めた。

Ⅱ類（10～26）

Ⅰ類以外の口縁が肥厚しない直口碗をまとめた。これらは従来の文様による呼称では、無鎬蓮弁文碗、細蓮弁文碗、雷文帯碗、無文碗などに対応するものである。以下、直口碗の中で文様ごとにその特徴を見ていく。

無鎬蓮弁文碗は10・12・16である。10・12は蓮弁が太い輪郭で描かれ明確なもので、器形も腰が張らない。高台は幅が太く畳付も水平に近いことなどは、上田Ｂ－Ⅰ類・大宰府Ⅳ類の特徴に近いので、時期的にもやや古手と思われる。大半は16のように腰が張る器形で、蓮弁の輪郭が細線で描かれる。Ⅱ類では140点と最も多い。

細蓮弁文碗は13・15・17～20である。これらは、蓮弁の境は共有しているがその弁先は独立しているもので、上田Ｂ－３類、金武剣先蓮弁文碗に相当し、15世紀前半・中葉頃とされる。内面には13・18の草花文、19・20の雷文などが描かれるものは、17のような無文のものよりは古相の要素であろうか。集計では無鎬蓮弁文に含めた。

無文碗は21・22である。器形は腰が張るものが多いと思われる。Ⅱ類中では133点と２番目に多い。

第1表　青磁出土状況（碗）

分類		細分類	部位	点数	合計
碗	Ⅰ	鎬蓮弁文	口縁	27	34
		畳付釉剥ぎ	底部	7	
	Ⅱ	無鎬蓮弁文	口縁	139	462
			全形	1	
		雷文帯（線刻）	口縁	129	
		雷文帯（型押し）	口縁	16	
			全形	1	
		ラマ式蓮弁文	口縁	9	
		外面有文（その他）	口縁	34	
		外面無文	口縁	133	
	Ⅲ	無鎬蓮弁文	口縁	3	62
		内面有文	口縁	17	
			底部	1	
		両面無文	口縁	41	
	Ⅳ	無鎬蓮弁文	口縁	39	395
			全形	1	
		ラマ式蓮弁文	口縁	49	
		外面有文（その他）	口縁	10	
		外面無文	口縁	277	
		稜花	口縁	19	
	束口碗		口縁	1	1
	不明	外無釉	底部	134	458
		外無釉・内蛇の目		4	
		外無釉・内釉剥ぎ		10	
		総釉・内無文		72	
		総釉・内有文		41	
		外蛇の目・内有文		103	
		外蛇の目・内無文		89	
		両面蛇の目		5	
総計					1412
最低個体（底部・全形）数					469

雷文帯碗は11・23～26である。11は、雷文が施されるが、腰が張らないもので先述の10・12の器形に近いため、やや古手と思われる。23～25は線刻、26はスタンプによるものだが、腰が張る器形である。特に、スタンプのものは内面にも型押しによる人物？文が施されることなど、16世紀にも見られるいわゆる人形手碗に近い特徴をもつ（亀井編2002）。雷文帯碗の年代は、亀井明徳による14世紀中葉～15世紀前半とされるが、水澤幸一は主に東北の資料により15世紀中葉以降と考えている（水澤2004）。線刻の雷文帯碗はⅡ類では129点と多い部類である。一方、型押しの雷文帯碗は17点と少ない。

また、14は外面上半に細い２条の圏線が廻り、さらにラマ式蓮弁もしくは草花文が描かれ、雷文にはなっていないが類似するものと言える。

Ⅲ類（29～33・61）

口縁端部がやや平たく肥厚するもので、金武が佐敷タイプ碗としたいわゆる玉縁口縁碗である。この玉縁口縁だが、29・30のように見られる内面のわずかな稜が、他の外反碗と区別する特徴と考える。29のように蓮弁が描かれても先述した内面の稜が見られるものはこの分類に含めた。内面の文様は29・30のように無文が量的にはやや多いが、有文のものは31～33のように胴部に印刻されるのが特徴である。33は内外面ともにラマ式蓮弁と思われる文様がある。61は底部で、見込みが釉剥ぎされた上に印刻される。

Ⅳ類（34～50）

口縁端部が外反するものをまとめた。従来、金武が無鎬蓮弁文碗・無文外反碗・型造り蓮弁文碗、金城がラマ式蓮弁文碗（沖縄県教委1998、金城2000）としたものが相当する。

蓮弁文碗は34・38～40である。口径が12～14cm前後の小振りのものが多い。34は細線で蓮弁文を描き、かなり退化したものであろう。38～40は、外面の上端に数条の圏線がありその下は蓮弁文が描かれるもので、蓮弁の間隔は１～２cmと狭い。今帰仁城跡志慶真門郭（今帰仁村教委1983）などで多く見られ、京の内跡ではあまり見られないものである。

いわゆるラマ式蓮弁文碗は41～43である。京の内跡で一定量出土したもので、本地区では外反碗の中では49点と一番多い文様となっている。口径が17～21cmと比較的大振りである。

無文碗は、小振り（35・36）、大振り（44・45・46）のものがある。46は内面に草花文か。このⅣ類無文碗は277点と全ての種類の中で最も多い。

47はあまり見ないもので、口縁端部が明らかに稜をつけて折れ曲がるものである。文様は外面が不均等な間隔の狭い蓮弁文、内面が草花文であろうか。48～50は金武が型造り蓮弁文碗としたものであるが、口縁は外反である。内外面の蓮弁文は、凹みで表現される。口縁端部にはわずかな刻みが廻る。金武が14世紀前半とした慶田崎遺跡などの例と比べると、全体的に文様は簡略化されており、それよりも後出するものであろう。

27・28は内面に龍文が描かれるもので、首里城跡下之御庭地区などでは、皿に数点見られるのみである（沖縄埋文2001　第7図42）。

51～63は底部である。55・56などは水色の釉が掛けられ、高台が直立する角高台であり、大宰府Ⅳ類などに近い。57・59などは大碗の底部であろう。

143は口縁が「くの字状」に曲がるいわゆる束口碗である。後述するＳＢ４下層出土のもの（第52図14）より、細線で描かれる蓮弁文、丸く収める口縁部などは、新しい傾向である。碗Ⅱ～Ⅳ類と同様の時期のものであろう。

第2表　青磁出土状況（皿）

分類		細分類	部位	点数	合計
皿	Ⅰ	鎬蓮弁文	口縁	53	78
		無文		3	
		畳付のみ釉剥ぎ	底・全	22	
	Ⅱa	蓮弁文・内有文	口縁	21	316
			全形	3	
		蓮弁文・内無文	口縁	258	
			全形	5	
		外無文・内有文	口縁	1	
		外無文・内無文		28	
	Ⅱb	蓮弁文・内有文	口縁	10	86
			全形	1	
		蓮弁文・内無文	口縁	75	
	Ⅲ	無文	口縁	54	228
			全形	10	
		有文	口縁	163	
			全形	1	
	Ⅳ	有文	口縁	31	1023
			全形	3	
		無文	口縁	873	
			全形	1	
		稜花	口縁	83	
			全形	3	
		八角	口縁	8	
			全形	1	
		腰折れ	底部	20	
	Ⅴ	有文	口縁	58	104
			全形	3	
		無文	口縁	42	
			全形	1	
	不明	外蛇の目・内有文	底部	118	651
		外蛇の目・内無文		81	
		外無釉・内無文		117	
		外無釉・内有文		101	
		外無釉・内釉剥ぎ無文		123	
		外無釉・内釉剥ぎ有文		12	
		外無釉・内蛇の目		33	
		総釉・内有文		29	
		総釉・内無文		37	
総計					2486
最低個体（底部・全形）数					719

皿（第18・19図　64～110）

碗と同様に、大宰府Ⅲ（Ⅲ’）類に相当もしくは近いものをⅠ類、県内で多く出土する14世紀後半～15世紀中葉のものを、器形によりⅡ～Ⅴ類に細分した。

Ⅰ類（64～66・68～71）

口縁が明確な稜をつけて外方に折れ曲がるもので、高台は細長く、畳付のみ釉剥ぎされる。高台は端面をもつものが多い。釉は青緑色。底部見込みには貼り付けの双魚文のものが多く、外面は無文もあるが鎬蓮弁文が多い。金武分類口折皿Ⅰ、大宰府Ⅲ類及びⅢ’類に該当するため、碗Ⅰ類とほぼ同時期である。

64は口縁端部が上方に摘み上げられるもので、内面は蓮弁で外面が無文である。大宰府Ⅲ－３ｂ類。

65は口縁内面が水平で、両面無文で、故意に５㎜の穴が空けられる。

66・69～71は畳付端が２mmとやや広いので、大宰府Ⅲ’類に当たる。

Ⅰ’類（67）

67は、口縁は緩やかな外反で、高台はⅠ類よりやや短く、厳密な意味では大宰府Ⅲ類には該当しない。しかしながら、釉調が水色に近くまさに砧青磁とされるもので、時期的には同様のものであろう。内面見込みに稜が見られることは、口縁は直口だが大宰府Ⅲ－５類に類似する。集計ではⅠ類に含めている。

Ⅱａ類（72～78・83～88）

口縁がⅠ類に比べると、ゆるく折れ曲がり、高台は太めで短く、底部は外底無釉か蛇の目釉剥ぎである。釉は淡～濃緑色である。外面の蓮弁文は、鎬があるもの（72）より、個々の境界は明瞭である無鎬が多い。見込みは無文のものか、印刻による双魚文（73・87・88）や、花弁（74・84～86）、83のように「天」などの字がある。また、77・78のように口縁内面に雷文、胴部内面に草花文が描かれるものもある。多くは金武口折皿Ⅱ類に相当、

大宰府Ⅳ類に近いものもあるので、14世紀中葉・後半～15世紀前半と考えられる。

Ⅱｂ類（79～82）

Ⅱａ類よりも、口縁端部のみが短く外反し、胴部が内湾し器形が浅めであることなどから分類した。また、器厚もⅡａ類に比べるとやや厚い。文様は外面の蓮弁文はａ類とほとんど同じだが、81のように内面は凹みで蓮弁文が表現しているものもある。見込みは79のような印花文はあるが、おそらく双魚文は見られない。これは京の内跡ではあまり出土しておらず、北殿跡で一定量見られる（沖縄県教委1995）。

Ⅲ類（89～92）

腰から胴部を経て口縁部まで内傾させて立ち上げる器形で、底部は口径に比して広めで、高台は直立する。口縁端部が外側に肥厚するものが多い。文様は両面とも無文が多いが、91のように龍文が描かれるものもある。金武が玉縁口縁皿としたものに相当する。

Ⅳ類（93～103）

腰部から大きく外反するものを総称しており、稜花や八角になるものも含めている。高台はやや「ハ字状」に張るものが多い。今回は図化したものは少ないが、量的には1,023点と圧倒的に多く、その中でも無文のものが874点と多い。京の内跡でも比較的多く、時期的には15世紀前半・中葉と思われる。

93～100は口縁が通常のものである。93・94のように、外反が緩くまた高台も直立するなどⅢ類に近いものもある。文様は外面がラマ式蓮弁（97）が多く、内面が草花文である。100のように、内外面ともに蓮弁が表現され、口縁端部に刻みを入れるものもある。101・103は稜花である。102は八角皿である。

Ⅴ類（104～108）

内湾した胴部から口縁が直立する直口皿である。口径は８～11cmのものである。文様は外面蓮弁文が多く、105・106のように蓮弁の輪郭が別個に表現されるものや、104のように弁先を表現しないものなど様々ある。108は、内外面凹みによる蓮弁の表現、口縁に刻みがあるなど、碗Ⅳ類48・49などに文様構成が類似する。

第3表　青磁出土状況（その他）

分類		細分類	部位	小計	合計
盤	Ⅰ	大宰府Ⅲ類	口等	3	3
	Ⅱ	口折	口縁	26	36
		畳付釉剥ぎ	底部	7	
			全形	3	
	Ⅲ	摘み上げ	口縁	107	110
			全形	3	
	Ⅳ	平坦	口縁	9	13
		稜花		4	
	Ⅴ	直口	口縁	7	9
			全形	2	
	不明		底部	25	25
鉢			口縁	50	55
			全形	1	
			底部	4	
盤・鉢	外蛇の目		底部	26	102
	総釉			6	
	不明			70	
盤・鉢総計					353
盤・鉢最低個体（底部・全形）数					147
壺			口縁	71	139
			底部	61	
			全形	7	
壺蓋			口縁	69	72
			全形	3	
小壺			口縁		23
瓶・水注			口縁	40	135
			注口	12	
			耳	34	
			脚	12	
			底部	37	
香炉			口縁	51	77
			底部	11	
			脚	15	
小碗			全形	3	45
			口縁	11	
			底部	31	
器台			口縁	11	19
			底部	8	
小形器台			口等		3
高足杯			脚部		10
蓋			口等		20
不明			底部		6

盤（第20～22図　111～137）

盤は胴部が狭まる器形で、口縁には鍔縁や直口のものがある。皿に似た器形であっても、口径が20cm以上のものは盤に含めた。これらの中で、Ⅰ類は碗・皿のように大宰府Ⅲ類に近いものとし、他は口縁や高台の形態によりⅡ～Ⅴ類に分けた。

Ⅰ類（117・121・123）

このⅠ類は純粋に器形でくくれる物はないが、大宰府Ⅲ（Ⅲ’類）に近い高台や釉色、貼付文を持っていることから設定した。また基本的に他の盤よりも小振りである。117は口径23.2cmであるので盤に含めたが、明瞭な口折であり、鎬蓮弁文が施され、釉も青緑色であることは、皿Ⅰ類と同様の特徴である。具体的には、13世紀後半・末とされる鎌倉市今小路西遺跡などの鎬蓮弁文に近いものである。（馬淵2001）。一方、121・123は高台が細長く直立すること、青緑色の釉であることなどから、このタイプに含めた。しかし、121は貼付双魚文が無釉であること、123は畳付幅が３mmと広いことなどから、117よりも新しい傾向であろう。

Ⅱ類（111～116・118・119）

稜線が明瞭な鍔縁口縁のもので、高台は胴部との境が明瞭ではなく内側に向く臥足形で、畳付のみ釉剥ぎする。釉は、発色が明るく青緑色のものが多いが、それよりやや黄色がかるものがある。文様は、外面胴部が鎬蓮弁文

か、外枠が二重線になる輪郭が明瞭な無鎬蓮弁文で、内面胴部には劃花文が施される。底部の見込みは、全形が窺える111・112・115・118・119では貼付龍文である。112は鍔縁が水平で、釉も青緑色で厚いこと、他より底部が広いことなどは、やや古手の傾向であろうか。その他は、口縁の鍔縁はやや凹むものが多い。114は無釉の貼付双魚文が見込み際にある胴部片で、釉調などはこのタイプに近いので含めた。

京の内跡ではこのタイプは報告されていない。新安沈船資料（国立中央博物館1977、写真114・115）やトプカプ宮殿博物館収蔵品TKS15/210 231 260 261 270（Ayers1986　P255・256）に幾つか類似したものがある。これらの年代観から14世紀前半・中葉であろうか。

Ⅲ類（125～130・132）

鍔縁口縁でその端部を上方に摘み上げるものである。端部の摘み上げは、長いもの（129）や、三角形に近いもの（128）などがある。外面は無文で、内面は凹状の蓮弁文（125・126・129・130）か、無文（128・132）がある。また見込みは印刻か線描きがある。底部は臥足形が多く、外底は蛇の目釉剥ぎされるものが多い。

Ⅳ類（131・135～137）

鍔縁口縁で、Ⅱ類よりも稜線が緩やかで短く平坦である。131・136は稜花である。全形が窺えるものがないが、Ⅲ類に類似した底部と思われる。

Ⅴ類（122・124・133・134）

直口口縁で、端部のみ肥厚するもので、器形は浅い。高台は直立し、外底は輪状に釉剥ぎされている。文様は外面にはなく、内面には133・134のように蓮弁文が放射状に施されるものがある、124は皿Ⅳ類に口縁・器形が類似しているが、口径が19.6cmであるため、盤とした。122は見込みには双魚文が印刻されるもので、高台から124のような器形と思われる。

鉢（第22・23・28図　138～142・144～151・199・200・202）

盤との区別は破片では難しいが、深く胴部が張る器形のものを鉢とした。口縁も様々な形態があり、直口（144・145）、垂下（146・147）、鍔縁（148・149・151）がある。底部外面は基本的に輪状に釉剥ぎされている。直口のものは、碗と同様の器形と思われる。雷文（145）など横位の文様帯が廻るものが見られる。

151は全形が窺え、胴部は緩く内湾し、高台は平坦な底面際につく。文様は外面下半に輪郭が広い蓮弁文、鍔縁には簡略化した唐草文、内面胴部は草花文である。138・139・150の底部は高台の位置がこの151に類似するため、鍔縁口縁の可能性がある。148・149は胴部上半に３・４条の圏線が描かれ、148ではそれに縦斜線が刻まれ、雷文帯の前身であるとされるものである（亀井編2002）。これらの類例はあまりないが、今帰仁城跡主郭で折縁盤としたものが近いか（今帰仁村教委1991）。

142は口縁端部を上方に摘み上げ、その下端は刻み目になっている。丸みのある胴部は146に類似する。140は鎬蓮弁文碗、Ⅰ類碗であるが口径が22.6cmであるので、鉢とした。141は大きく外反するもので、内面は劃花文が施される。199・200・202は小形であるが、内湾する浅めの器形であるので、鉢とした。円形の貼付文が見られる。いわゆる水盤とも言われようか。

壺（第24～26図　152～167）

いわゆる酒会壺とされる短頸壺で、首里城跡京の内地区で多く検出されている。ただ、長胴短頸壺ともいうべき153～157や、13世紀後半にも遡る可能性がある152などもある。

152は稜線のきつい鎬蓮弁文壺である。１例だけであるが、碗・皿・盤Ⅰ類のよりもさらに青緑色の砧系の釉が掛けられる。同一の器形ではないが、鎌倉市今小路西遺跡の鎬文壺が類例と思われ、13世紀後半に遡るものと思われる（馬淵2001）。

153～157は長胴短頸壺で、今まで全形が窺える資料は少なかった。これらは基本的な形態・文様構成は類似しており、個々の要素は通常の短頸壺と同様である。口縁は端部がやや肥厚し、肩部は張り、獣足形と見える把手がおそらく４つ付く。底部は短頸壺と同じく、別に皿状のものを作り充て込むものだが、高台内側が横方向に伸びるものが多く特徴的である（153・154・155・157）。文様構成は、肩部が横位方向に連続で施される花弁（ラマ式蓮弁？）、胴部上半は牡丹（157）などの花弁を中心とした草花文、中央には横位の唐草文、下半には鎬蓮弁文である。胴部中央で明瞭な接合痕が見られるので、上半と下半は別に作ったものであろう。この復元は全ての破片を接合したわけでなく、個々に図化してそれを繋げたものであるので、今後さらに良好な資料で検討の必要が

ある。また、153・156は高台と底面の貼付方法がやや異なるため、大瓶などの器形である可能性もあろう。

158～167はいわゆる酒会壺、短頸壺である。文様は鎬が緩いもしくは無鎬蓮弁文を基調とする壺で、上下を区画し、草花文などの文様を施すものが多い。161・162・166・167のように下半が蓮弁文、上半が牡丹などの花芯文のパターンが多い。163は口径が他のものより小さく、また口縁は長いため、長胴壺の可能性もある。165は底部だが、その傾きからすると瓶などの可能性もあろうか。

壺蓋（第26・27図　168～181）

先の短頸壺の蓋が多い。168は内面にも陽刻の印花文がある珍しい資料である。175・176は頂部に細長い鎬蓮弁文が施される。177は貼付の無釉の獅子かと思われる撮みがつく。178はおたまじゃくしの撮みで、内面は凹凸が激しい調整となる。180は頂部が平坦で、凹凸のない蓮弁文がかかれる少ない資料である。171は頂部に龍文が描かれる。181は鍔・受け部が短いあまりみない資料で短頸壺の蓋ではない可能性がある。178・179は、内面中央にユビオサエ状の凹みが多く見られる。

瓶・水注（第28図　182～197）

破片であるため全形が窺える資料は少ないが、京の内跡などの類例から推察できるものもあり、特徴的なもののみ触れる（沖縄県教委1998・亀井編2002）。182はいわゆる玉壺春瓶と言われる長頸瓶か。183・184は京の内跡（第52図３）のような頸部に取り付く把手をもつ長頸の水注と思われる。185は京の内跡（第53図１）の例から有環の双耳瓶か。188は小型の双耳瓶か。191・192は角瓶の口頸部だが、同様の蕉葉文が描かれるので、同形か。189・190はそれ程頸部が長くない水注と思われる。

186は輪花状の鍔がある口縁で、頸部に小穴がある。193は把手が付く球形の胴部である。195は小さな球形の胴部で口縁が大きく開くか。196・197は同一ではないが、大きく外に開く高台で、円柱状の胴部をもつ、例えば仏花瓶みたいなものか。

香炉・小杯・小壺・器台・擂鉢・蓋他（第28・29図　198・201・203～222）

香炉は、袴腰形（198）、小形の腰折れ杯形（201）、獣脚三足のもの（203）、吊手を有するもの（204）などがある。小杯は205～208である。様々な器形があるが、高台が付くもの（206）、碁笥底のもの（207・208）がある。

210は小形の短頸壺である。211～213は小瓶などを載せる小形器台で、ラマ式蓮弁状の輪郭をもった窓部、三足のものである。214は不明である。220～222はいわゆる花盆台とされる大瓶・短頸壺を載せる器台である。215は高足杯である。216・217・219は蓋である。218は擂鉢である。

第4表　青磁観察一覧

単位：cm

図・図版番号			器形	分類	口径	器高	底径	特徴
第15図	図版5	1	碗	Ⅰ	－	－	－	鎬蓮弁文、弁先は独立している。釉は厚く1mmあり、青緑色。
		2			15.4	－	－	鎬蓮弁文、弁先は独立している。釉は厚く1mmあり、青緑色でガラス質。
	7	3			－	－	4.2	鎬蓮弁文。畳付釉剥ぎ、高台端面幅2mm。やや丸底。釉は厚く1mmあり、青緑色でガラス質。
		4			－	－	4.6	鎬蓮弁文。畳付釉剥ぎ、高台端面幅2mm。丸底。釉は厚く1.5mmあり、青緑色でガラス質。
		5			－	－	6.0	無文。畳付釉剥ぎ、高台端面幅3mm。丸底。釉は厚く1.5mmあり、青緑色でガラス質。
		6		Ⅰ’	－	－	6.2	鎬蓮弁文。外底無釉、被熱のためか赤変。内面見込みに段。釉は濃青緑色。
		7			－	－	6.0	鎬蓮弁文。外底蛇の目釉剥ぎ。内底見込み太い線による草花文。釉は1mmと厚く、鈍い青緑色。
	8	8			12.4	－	－	輪郭を掘り込んで強調した鎬蓮弁文。素地は灰色。釉は薄く、鈍い青色。
	7	9			－	－	3.8	二重線による蓮弁文。外底無釉、中央が凸状、高台端部は太めだが台形状。
	8	10		Ⅱ	15.9	7.7	6.6	幅広い輪郭をもった無鎬蓮弁文。釉は濃緑色。見込みに圏線あり。高台は太めの角高台。
	5	11			15.8	－	－	胴部が緩やかな直線的で、通常の雷文帯碗よりは古手か。下半はあまり見ない細い無鎬蓮弁文。
		12			14.6	－	－	輪郭幅広い無鎬蓮弁文。内面は草花文か？蓮弁は10に近い。
	6	13			19.4	－	－	細蓮弁文だが弁先は明瞭。内面は有文。釉はオリーブ色でガラス質。素地はやや軟質で灰白色。
	5	14			17.6	－	－	外面上端2条圏線に草花？文か。内面は草花文。釉は濃緑色で厚くガラス質。
		15			10.8	－	－	外面上半に2条の圏線の下に弁先が明確には閉じない細蓮弁文。
	6	16			12.8	－	－	無鎬蓮弁文で、弁先は閉じない、蓮弁下半は接する。内面は草花文か？
	5	17			15.8	－	－	1条の圏線に弁先が接する細蓮弁文。
	6	18			15.0	－	－	細蓮弁文でその境界は細い線で台形状に表現される。釉はオリーブ色。
		19			－	－	－	1条の圏線に接する尖った弁先が明瞭な細蓮弁文。内面は線刻雷文帯。
		20			－	－	－	1条の圏線に接する弁先が波状となった細蓮弁文。内面は線刻雷文帯。
	5	21			19.0	－	－	口縁端部は丸くおさめる。
	6	22			12.0	－	－	22と比べると胴部は直線的。口縁端部外面はわずかに平坦面を有する。
第16図		23			13.0	－	－	線刻雷文帯。内面は草花文。小振りで器壁薄手。
		24			15.8	－	－	線刻雷文帯。外面は文様の下の条線が目立つ。内面は草花文。大振り。釉は1.5mmと厚い。

（　）は推定

第4表　青磁観察一覧

単位：cm

図・図版番号			器形	分類	口径	器高	底径	特徴
第16図	図版6	25	碗	Ⅱ	19.0	－	－	線刻雷文帯、下半はラマ式蓮弁文。内面は草花文。大振り。釉は1.5mmと厚い。
	8	26			16.6	8.6	6.8	型押し雷文帯。内面は型押しの草花文。素地は精良だが、軟質。釉は黄緑色で貫入目立つ。
	5	27		不明	－	－	－	内面に龍文、鱗の部分が描かれる。素地は黒色微粒多い。
		28			－	－	－	内面に龍文、爪先が描かれる。素地は黒色微粒多い。
		29		Ⅲ	13.6	－	－	無鎬蓮弁文で輪郭は太めだが、弁先は閉じない。玉縁口縁で内面に稜がありこのタイプにした。
		30			14.2	－	－	釉は暗緑色。素地は青灰色。内面上半に稜がある。
		31			14.4	－	－	釉は暗緑色。素地は青灰色。内面は細かい線表現による文様。
	8	32			－	－	－	内面は型押しによる花弁文様でラマ式蓮弁か。釉は暗緑色。素地は青灰色。
	7	33			－	－	5.8	底部は無釉で、高台は短く直立。内面はラマ式蓮弁、外面は文様？釉は暗緑色。素地は青灰色。
	22	34		Ⅳ	12.6	5.9	6.0	細線による無鎬蓮弁文。見込みは印花文。外底蛇の目釉剥ぎ、露胎部は橙色。
	6	35			13.8	－	－	無文。釉は口縁部も比較的均質。
		36			14.6	－	－	外面胴部に稜がある。釉は薄く灰緑色。素地は青灰色。
		37			14.2	－	－	外面下半に2条の圏線。内面は草花文か。釉は口縁外反部がやや厚い。
	5	38			－	－	－	外面上半に2条の圏線の下に無鎬蓮弁文。内面は有文。施文は深い。
	9	39			13.8	－	－	外面上半に1条の圏線に接する細蓮弁文。口縁端部のみ褐色。
	5	40			17.6	－	－	外面上半に3条の圏線に無鎬蓮弁文。内面は草花文。釉は比較的均質。
	6	41			17.0	－	－	外面ラマ式蓮弁文。内面は有文。釉は下方が厚くなる。
		42			21.4	－	－	外面ラマ式蓮弁文。内面は有文。被熱のためか釉は透明感がない。
		43			16.8	－	－	外面ラマ式蓮弁文。内面は有文。釉は口縁端部が薄い。
		44			18.6	－	－	釉は下方に行くほど厚い。
		45			17.6	－	－	釉は外反部がやや厚い。
第17図		46			19.4	－	－	外面無文。内面有文。釉は1.5mmと厚い。
	8	47			20.0	－	－	外面不揃いで弁先が丸く、独立した細蓮弁文。内面は有文。釉は1.5mmと厚い。
		48			17.2	－	－	口縁端部刻み目、内外面二段構成の凹状の蓮弁文。素地気泡多い。釉は1.5mmと厚い。
	6	49			12.0	－	－	口縁端部 刻み目、内面凹状の蓮弁文。被熱のためか砂等が溶着。
	8	50			－	－	7.0	底部。内外面とも凹状の蓮弁文。見込みは印花文。素地気泡多い、48に似る。
		51		底部	－	－	6.4	外面蓮弁文。高台はやや細長く直立する。外底は無釉。見込みに稜線あり。素地灰色、精良。
	7	52			－	－	5.6	外面蓮弁文。高台はやや細め。見込み花弁文。外底は中央無釉。素地気泡、黒色微粒、砂礫多い。
	8	53			－	－	7.0	外面下半はラマ式蓮弁文。高台はやや短い。外底蛇の目釉剥ぎ、無釉部橙色。見込みは印花文。
	7	54			－	－	5.6	外面下半はラマ式蓮弁文。高台は太め。内面有文。外底おそらく蛇の目釉剥ぎ、灰色。
		55			－	－	6.6	高台は角形、短く直立し畳付水平。外底蛇の目釉剥ぎ。見込みは印花文。素地精良、釉水色。
		56			－	－	5.2	外面蓮弁文。高台は太めの角形。畳付幅5mm。底部厚く、外底無釉・中央突出。見込みは印花文。
	8	57			－	－	8.8	外面無文。外底蛇の目釉剥ぎ、無釉部橙色。見込みは圏線と文様。大形碗。素地気泡多い。
		58			－	－	5.8	外面草花？文。高台はややハ字状。蛇の目釉剥ぎ。内面無文。内底やや平坦。
		59			－	－	8.2	外面草花？文。高台は細長い。蛇の目釉剥ぎ。見込み圏線、印花文。焼成甘く、素地気泡多い。
	7	60			－	－	5.4	高台はややハ字状。外底無釉、褐色。見込みは印花文。
		61		Ⅲ	－	－	5.0	外面蓮弁文。高台内側は斜行。外底無釉。内底釉剥ぎで印花文。
		62		底部	－	－	7.2	外面は草花文。外底中央凸状、蛇の目釉剥ぎ。見込み花弁文。被熱のため変色。
		63			－	－	4.8	外底中央凸状。内・外底蛇の目釉剥ぎ。高台外側面取り。素地灰色。白色微粒多い。釉は不透明。
第18図	9	64	皿	Ⅰ	－	－	－	口縁端部上方摘み上げ。口折の稜明瞭。釉はガラス質の濃青緑色で厚いところは2mm。
		65			－	－	－	口折の稜明瞭。口折部に径5mmの小穴を穿孔する。外面はおそらく鎬蓮弁文か。釉は濃青緑色。
	8	66			13.2	4.1	6.0	鎬蓮弁文。見込み双魚貼付文。畳付釉剥ぎ。釉は鈍い青緑色で貫入多い。素地は気泡多い。
		67		Ⅰ´	13.8	4.4	6.6	畳付釉剥ぎ、幅は2mm。大きい鎬蓮弁文。釉やや不透明の水色。胴部は緩く内湾し、口縁は端反。
		68		Ⅰ	－	－	7.2	鎬蓮弁文。内底は内湾。畳付釉剥ぎ、幅2mm。釉は鈍い青緑色。被熱のためか高台歪む。
	11	69			－	－	4.8	見込み双魚貼付文だが、一部欠損。畳付釉剥ぎ。素地はやや灰色で気泡多い。釉は鈍い青緑色。
		70			－	－	5.9	見込み双魚貼付文。畳付釉剥ぎ、幅2mm。凹状の蓮弁文。素地は灰色。釉は鈍い青緑色。
		71			－	－	5.9	見込みは欠損しているが双魚貼付文。畳付釉剥ぎ、端部やや丸い。凹状の蓮弁文。釉鈍い青緑色。
	9	72		Ⅱa	12.8	－	－	口折部肥厚。輪郭を二重線の鎬蓮弁文。素地は灰色、気泡多い。
	8	73			12.4	4.2	5.6	見込み型押しによる双魚文。底部中央凹む。外底無釉、中央突出。釉は不透明の濃緑色で薄い。
	9	74			12.4	3.4	6.2	口折部は細い。高台は低い角形。外底蛇の目釉剥ぎ。見込み印花文。無鎬蓮弁文。釉は明緑色。
		75			11.7	3.7	5.6	高台は太い角形。境界を接する弁先を閉じない無鎬蓮弁文。釉は鈍い青緑色。よく被熱。

第4表　青磁観察一覧

単位：cm

図・図版番号			器形	分類	口径	器高	底径	特徴
第18図	図版9	76	皿	Ⅱa	11.6	3.3	5.7	外底蛇の目釉剥ぎ。弁先は細い無鎬蓮弁文。釉は濃青緑色。素地は精良。
		77			13.4	－	－	口折部には線刻雷文。内面胴部草花文。無鎬蓮弁文。釉はガラス質の濃緑色。
		78			13.0	－	－	口折部には線刻雷文。内面胴部草花文。弁先が細い無鎬蓮弁文。釉はガラス質の濃緑色。
		79		Ⅱb	12.2	3.5	4.6	見込み印花文。広い輪郭の無鎬蓮弁文。外底無釉、中央突出。畳付褐色。釉はガラス質の濃緑色。
		80			13.0	－	－	細線で弁先だけ描く無鎬蓮弁文。釉は鈍い水色で薄い。素地は灰白色。
		81			13.4	－	－	無鎬蓮弁文。内面凹状、外面弁先が細い蓮弁文。釉は濃緑色で1.5mmと厚い。
		82			12.4	－	－	輪郭を深く掘り込んだ弁先が尖った蓮弁文。釉は鈍い水色で薄い。素地灰色、気泡多い。よく被熱。
	11	83		Ⅱa底部	－	－	5.1	高台太目。見込み、明瞭な圏線、「天」の印刻。外底蛇の目釉剥ぎ、無釉部灰色。釉は濃緑色。
		84			－	－	6.0	高台ややハ字状。外底蛇の目釉剥ぎ。見込み印刻の大きな花弁文。釉は濃緑色。
		85			－	－	6.0	高台は短く太い。外底蛇の目釉剥ぎ、無釉部灰色、この点83に似る。見込み明瞭な圏線、印花文。
		86			－	－	5.7	高台は太い角形。外底蛇の目釉剥ぎ、無釉部灰色。見込み明瞭な圏線、印花文。釉は鈍い水色。
		87			－	－	7.3	外底蛇の目釉剥ぎ、中央突出。高台やや開く三角形に近い。見込み印刻の大きめの魚文。釉2mm。
		88			－	－	5.4	高台は太い角形。外底部分的に無釉、中央やや突出。見込み印刻による双魚文。釉は淡緑色。
第19図	10	89		Ⅲ	15.0	－	－	口縁端部平坦な肥厚。見込み圏線。素地は青灰色、釉は淡緑色で薄い。
		90			13.2	－	－	口縁端部は丸く肥厚。素地は黄灰色、釉は鈍い水色で、貫入多い。
		91			15.6	－	－	口縁端部は丸く肥厚。外面は線刻による龍文。釉は濃緑色。
	11	92			－	－	6.8	高台は角形。外底無釉、外端は釉を掻きとられていない。釉灰色で、素地青灰色、貫入多い。粗雑。
	9	93		Ⅳ	13.2	4.3	7.4	腰折れ弱め。内面草花文。口縁端部は丸く肥厚。高台細く直立。外底無釉、無釉部褐色。
		94			12.4	6.2	3.6	腰折れ弱め。内面草花文？口縁端部細く肥厚。高台直立。外底無釉。釉はオリーブ色。
	8	95			12.0	3.6	5.6	腰折れ強め。見込み印花文。外底蛇の目釉剥ぎ、無釉部橙色。釉は濃緑色、貫入多い。
	9	96			14.0	3.9	7.4	腰折れ弱め。見込み圏線。高台は太めで内側に斜行。外底おそらく蛇の目釉剥ぎ。釉は深緑色。
	10	97			13.0	－	－	腰折れ強め。外面ラマ式蓮弁文、内面草花文。釉はガラス質で濃緑色。
	11	98			－	－	5.4	腰折れ強め。内底釉剥ぎ。外底無釉、中央突出。内外底無釉部橙色。釉ガラス質で濃緑色、薄い。
		99			－	－	5.4	腰折れ強め。内外面草花文。高台は内側に斜行。外底蛇の目釉剥ぎ。釉は濃緑色でガラス質。
	10	100			11.4	－	－	腰折れ強め。口縁刻み目。内外面蓮弁状の凹み。釉は鈍い青緑色、素地は灰色。
		101			10.6	－	－	稜花形。腰折れ強め。内面胴部に復線文様。釉はガラス質で濃緑色。
		102			－	－	－	八角形。腰折れ弱め。内面口縁2条の平行線あり。釉は濃緑色。
		103			17.6	－	－	稜花形。腰折れ弱め。外面ラマ式蓮弁文、内面草花文？釉はガラス質で濃緑色、厚いところは2mm。
		104		Ⅴ	11.0	－	－	口縁端部やや肥厚。外面凹線のみ、内面凹みによる蓮弁文、弁先は別に表現。釉は濃緑色。
		105			10.8	－	－	弁先二重線による無鎬蓮弁文。内面凹線のみ。釉は淡緑色。
		106			8.4	2.8	4.5	無鎬蓮弁文。見込み稜あり。高台は短くややハ字状。外底一部無釉、無釉部橙色。
		107			10.6	3.6	5.4	内面凹みによる蓮弁文、見込み印花文。高台は細く直立。外底一部無釉、無釉部灰色。釉濃緑色。
	8	108			11.6	4.1	6.6	内外面見込み凹みによる蓮弁文。口縁上端刻み目。高台は細くややハ字状。外底蛇の目釉剥ぎ。
	11	109		底部	－	－	7.4	おそらくⅢ類。高台は直立。外底無釉、内底中央釉剥ぎ。素地灰色、砂礫混じる。釉オリーブ色。
		110			－	－	5.8	おそらくⅣ類。高台は内側に斜行。外底無釉。内底釉剥ぎ、印花文。素地青灰色、砂礫混じる。
第20図	12	111	盤	Ⅱ	34.6	6.5	12.4	高台畳付釉剥ぎ、無釉部橙色。外面輪郭二重線蓮弁文。見込貼付四爪の龍文。釉は淡緑色で薄い。
		112			39.8	(8.5)	18.0	高台畳付釉剥ぎで端面2mmと狭い。外面鎬蓮弁文。見込み貼付四爪の龍文。釉は青緑色で厚い。
第21図	13	113			38.8	－	－	外面輪郭二重線蓮弁文。内面劃花文。釉は淡緑色。素地は精良。
		114			－	－	－	底部。見込み際に5.2cmの無釉貼付双魚文。釉は淡緑色。素地はやや砂粒、気泡多い。
		115			34.0	(7.9)	13.2	高台畳付釉剥ぎ、幅3mm。外面輪郭二重線蓮弁文。見込み貼付刻龍文。釉は不透明の青緑色。
		116			27.4	－	－	外面蓮弁文外枠二重線。釉は淡緑色で薄い。
	9	117		Ⅰ	22.5	－	－	外面明瞭な鎬蓮弁文。釉は青緑色で1.5mmと厚い。素地気泡、黒色微粒多い。
	13	118		Ⅱ	－	－	14.2	高台畳付釉剥ぎ、端面7mm。外面輪郭二重線蓮弁文。見込み貼付龍文。釉不透明の青緑色。
		119			－	－	13.0	高台畳付釉剥ぎ、端面6mm。外面蓮弁文。見込み貼付龍文。釉は淡緑色。
	14	120		底部	－	－	8.8	外底中央のみ無釉。高台は台形。見込み印花文。釉はガラス質の濃緑色。
	10	121		Ⅰ	－	－	－	高台は細くおそらく畳付のみ釉剥ぎ。見込み無釉の貼付双魚文。釉は青緑色。素地は気泡多い。
		122		Ⅴ	－	－	8.6	外底蛇の目釉剥ぎ。底部中央やや盛り上がる。見込み双魚文型押し。釉は水色。外面線条痕残る。

（　）は推定

第4表　青磁観察一覧

単位：cm

図・図版番号			器形	分類	口径	器高	底径	特徴
第21図	図版10	123	盤	Ⅰ	－	－	11.4	高台細く畳付釉剥ぎ、端面2mm。見込み稜あり。釉は青緑色。
	9	124		Ⅴ	19.2	4.7	11.4	外底おそらく蛇の目釉剥ぎ。口縁端部丸く肥厚。釉は濃緑色で1.5mmと厚い。
第22図	14	125		Ⅲ	24.4	－	－	口縁端部上方に摘み上げ。内面凹みによる蓮弁文。釉は不透明な深緑色。
	13	126			26.1	－	－	口縁外面は緩やかなカーブ。内面凹みによる蓮弁文。釉は不透明な濃緑色。
	14	127			23.6	－	－	口縁端部内側に丸く肥厚。胴部外面に不明瞭な2条の圏線。釉はガラス質の濃緑釉。貫入多い。
		128			24.0	(6.0)	8.2	外底中央のみ無釉。見込み稜のみ。素地は橙色、白色微粒多い。釉はオリーブ色、貫入多い。
		129			－	－	－	口縁端部上方の摘み上げやや長め。内面凹みによる蓮弁文。釉は濃緑色。
		130			－	－	10.5	高台おそらく蛇の目釉剥ぎ。見込み印花文、内面凹みによる蓮弁文。釉は濃緑色。
	13	131		Ⅳ	－	－	－	稜花。内面幅広い凹みによる蓮弁文。口縁端部わずかに上方へ肥厚。釉はガラス質の濃緑色。
	14	132		Ⅲ	23.8	5.6	10.0	口縁端部上方に摘み上げ。碁笥底状。外底蛇の目釉剥ぎ。見込み印花文。釉は不透明な濃緑色。
		133		Ⅴ	28.0	－	－	胴部上半に稜を有する。口縁端部刻み目。内面細い凹みによる連弁文。釉はやや淡緑色。
		134			26.4	4.2	15.6	口縁端部丸く肥厚。外底蛇の目釉剥ぎ、無釉部橙色。内面細い凹みによる蓮弁文。釉は濃緑色。
	13	135		Ⅳ	26.6	－	－	鍔縁口縁で端部がわずかに上方へ肥厚。内面細い凹みによる蓮弁文。釉は深緑色で1.5mmと厚い。
		136			－	－	－	稜花。鍔縁平坦で広め、波線文。内面草花文。釉は深緑色で1.5mmと厚い。
		137			－	－	－	口縁端部わずかに上方摘み上げ。五弁花を貼付。釉は淡緑色で貫入多い。
		138	鉢		－	－	23.6	高台端面内傾する幅広の角形。おそらく外底蛇の目釉剥ぎ。見込み葉状菱形文。釉は濃緑色。
		139			－	－	－	高台端面内傾する角形胴部内面輪郭太線で弧状の細線で埋める鱗状文。釉は淡緑色。
第23図	5	140			22.6	－	－	外面境界を有するが、明瞭な鎬蓮弁文。碗Ⅰ類の大形。釉は青緑色、1.5mmと厚い。
		141			－	－	－	内面劃花文。口縁が緩やかに外反。釉はガラス質の青緑色、1.5mmと厚い。
	15	142			16.4	－	－	口縁端部上方摘み上げ、下端刻み目あり。内湾する器形。釉は淡緑色。
	20	143	束口碗		16.0	－	－	口縁内側に弧状に立ち上がり、端部は外反。外面下半蓮弁文。釉ガラス質濃緑色で2mmと厚い。
	15	144	鉢		37.1	－	－	外面上半、何らかの文様の横帯文。内面草花？文。釉は淡緑色で貫入多い。
		145			30.6	－	－	外面上半線刻による雷文帯。内面草花文。釉は淡緑色で貫入多い。
		146			24.6	－	－	口縁部垂下。外面圏線2条の下に輪郭が広い蓮弁文。内面細線充填した鱗状文。釉は濃緑色。
		147			－	－	－	口縁部垂下。146より大形。内面花弁文が単位をもって施文。被熱激しい。釉は淡緑色、貫入多い。
		148			31.6	－	－	鍔縁上面に唐草文か？外面3条の圏線、短い縦斜線あり。内面劃花文。釉はガラス質の淡緑色。
		149			34.2	－	－	鍔縁口縁、上面に唐草文か？外面5条の圏線、内面有文。釉はガラス質の淡緑色。
		150			－	－	25.0	外底蛇の目釉剥ぎ、無釉部橙色。高台端面内傾。見込み櫛描文、幅広線刻花弁文。釉は淡緑色。
		151			40.0	(8.7)	25.3	鍔縁上面に蔓唐草文。内面草花文。外面下半2条の圏線、輪郭幅広の蓮弁文。口縁端部上方に肥厚。釉は濃緑色。高台畳付外側明瞭な面取り。接合しない破片で復元。
第24図	18	152	長胴壺		－	－	－	頸部径13.2cm。稜が尖る鎬文壺。素地は気泡、黒色微粒多い。釉は不透明な青緑色で2mmと厚い。
	17	153			－	－	15.2	底部は下面近くまで円盤を充て込む。釉は黄緑色で、薄い。貫入多い。底部・下半が窄まるので、大瓶か？。下半は平坦な無鎬蓮弁文。
		154			20.4	(51.5)	20.0	底部は円盤を充て込むが下面からは浮く。上からラマ式蓮弁文、草花文、蔓唐草文、鎬蓮弁文。釉は淡緑色。破片同士の復元。獣足形の把手、おそらく4つ。
		155			20.6	(51.0)	18.4	底部・文様は154とほぼ同一。釉は淡緑色。被熱激しい。破片同士の復元。
		156			－	－	19.8	底部は下面近くまで円盤を充て込む。下半は細めの鎬蓮弁文。釉は淡緑色。底部・胴部から大瓶か？
第25図		157			20.6	(48.0)	(19.0)	底部・文様は154とほぼ同一。文様は他よりも明瞭。鎬蓮弁文も明瞭。釉は濃緑色。破片の復元。
	18	158	短頸壺		20.6	－	－	胴部は草花文を浮き上がらせ、その背景には細線で密に充填される。釉は濃緑色。
		159			19.6	－	－	口縁外面が全体的に丸みを帯びる。文様は不鮮明。釉は鈍い濃緑色。
		160			19.4	－	－	胴部上半は草花芯文。口縁端部の面取り、橙色呈す。釉はガラス質の淡緑色。貫入多い。
		161			20.6	(22.0)	20.2	文様不明瞭だが上半草花芯文、下半共有する蓮弁文。釉は1.5mmと厚い緑灰色、底・口端橙色。
		162			20.6	22.5	15.1	上半は草花芯文、背景細線充填、下半幅がまばらな蓮弁文。破片同士の復元。釉は濃緑色。
		163			15.6	－	－	口縁部が2.4cmと長く、端部橙色。口径も小さく、長胴壺か？文様が2mm浮き上がる。釉は淡緑色。
		164			19.0	－	－	口縁に蔓唐草文か。胴部上半は草花文。文様が2mm浮き上がる。釉は濃緑色。
		165			－	－	16.4	胴部下半に波涛文状の文様が施される。底部端橙色を呈す。釉は濃緑色。
第26図	16	166			18.8	22.5	17.2	胴部上半は草花芯文、背景が細線でやや粗く充填される。下半蓮弁文。釉は明緑色。畳付釉剥ぎ。
	18	167			22.8	22.5	15.4	胴部上半は草花芯文、下半輪郭接する蓮弁文。口縁1.5cmと短め。口・底端灰色。釉は濃緑色。
	16	168	壺蓋		13.0	(8.2)	－	鍔径29.2cm。ボタン状の撮み。外面は花弁・草文。内面は釉が青白色で陽刻の印花文。
	19	169			14.2	6.5	－	鍔径24.7cm。ボタン状の撮み。外面は浮き上がる文様。鍔には反りがある。釉はオリーブ色。
		170			15.6	6.1	－	鍔径25.0cm。撮みはおたまじゃくしなどか。外面は草花文。釉は濃緑色。

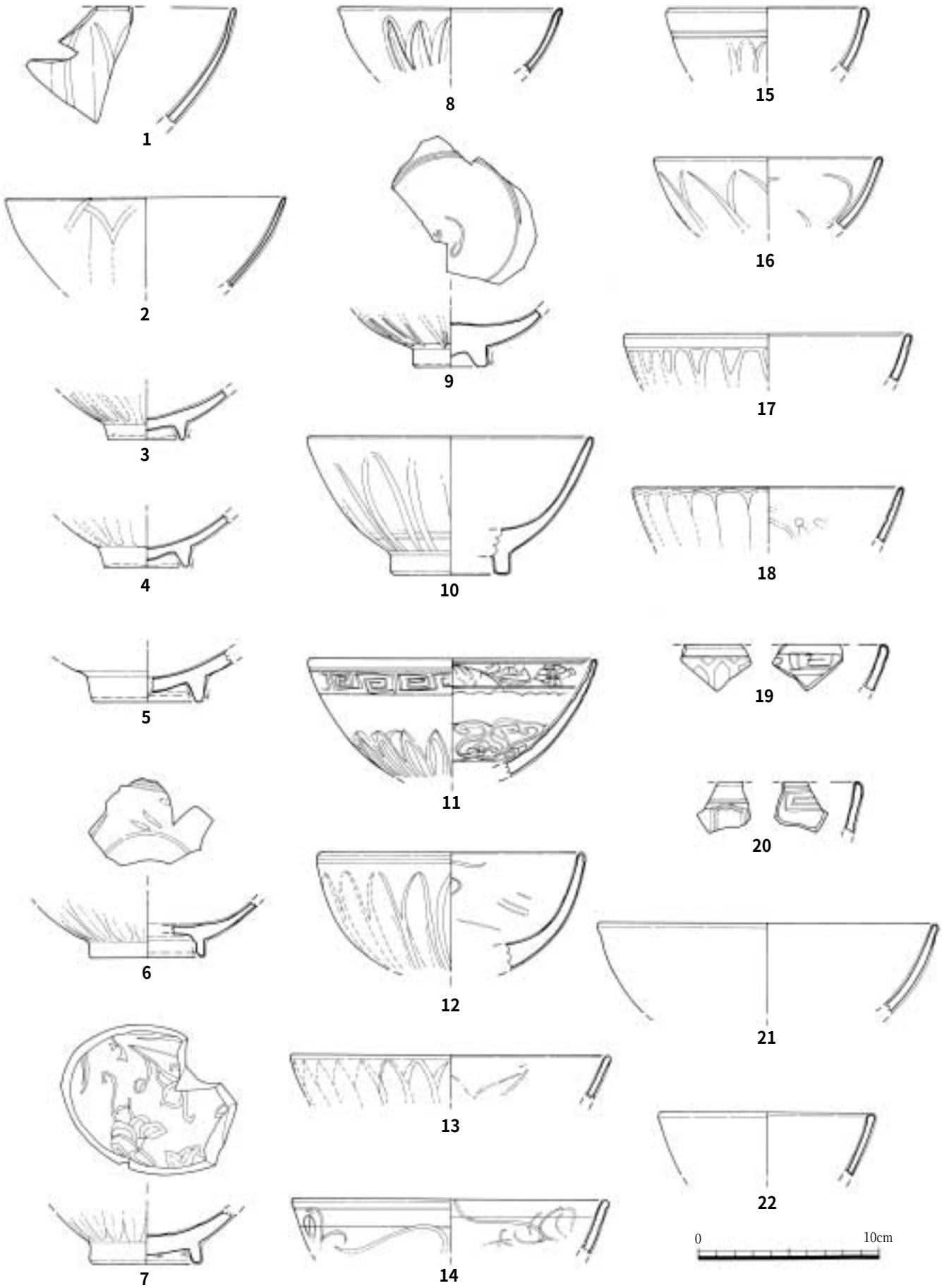
（　）は推定

第4表　青磁観察一覧

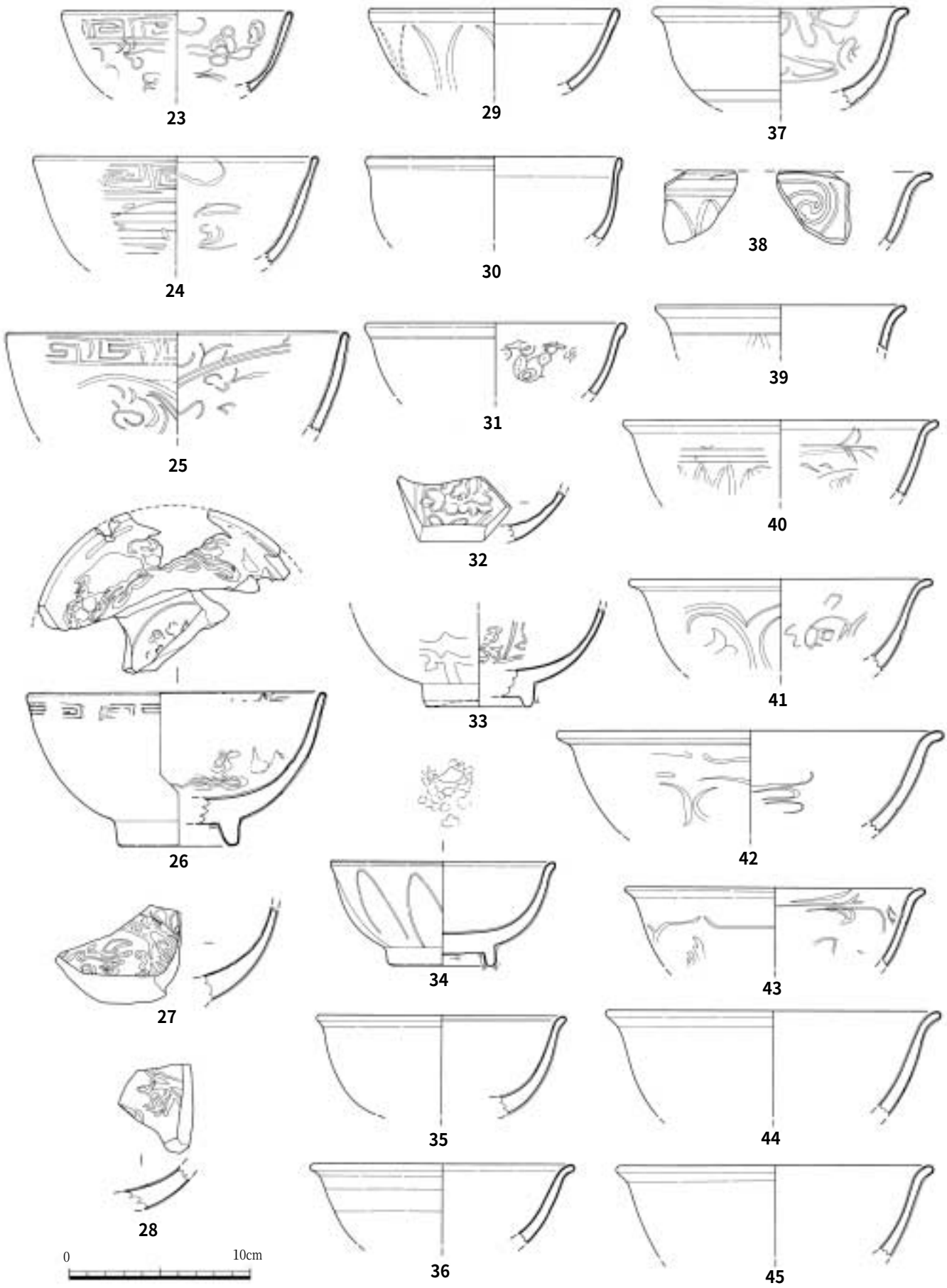
単位：cm

図・図版番号			器形	分類	口径	器高	底径	特徴
第27図	図版19	171	壺蓋		18.0	－	－	鍔径28.6cm。外面は龍文で三爪か。鍔反りあり。釉は濃緑色。
		172			－	－	－	鍔径26.2cm。外面草花文か。上面に明瞭な稜を有する。釉は濃緑色。内面全体無釉。
		173			16.0	－	－	鍔径26.2cm。外面草花文か。釉は濃緑色、1.5mmと厚い。
		174			16.0	－	－	鍔径24.2cm。外面端に2条の圏線、草花文。内面全体無釉。釉は濃緑色。
		175			－	－	－	鍔径24.5cm。外面中央に細い鎬蓮弁文。鍔反りあり。釉は淡緑色。内面の釉に褐色部分あり。
		176			18.0	－	－	鍔径(32.4cm)。外面上半に境界接する細蓮弁文。無釉部橙色。釉は濃緑色。
		177			－	－	－	無釉の獅子の下半と思われる撮みを貼付。外面は草花文。内面無釉で橙色呈す。釉は濃緑色。
		178			－	－	－	おたまじゃくしの撮み。内面中央ユビオサエ状の凹み、外側は圏線状に褐色を呈す。釉は濃緑色。
		179			－	－	－	宝珠状の撮み。内面は178よりも不明瞭だがユビオサエ状の凹み。釉は濃緑色。
		180			13.6	－	－	鍔径20.2cm。上面が平坦、平板な蓮弁文。鍔垂下する。釉は淡緑色で1.5mm厚い。
		181			15.0	－	－	鍔径17.8cm。鍔、受け部共に短い。草花文？釉は濃緑色で1.5mm厚い。
第28図	20	182	瓶		6.2	－	－	細頸瓶。細線による蓮弁文。被熱のためか器面ざらつく。釉は濃緑色、1.5mmと厚い。
		183			5.6	－	－	口縁端部を上方摘み上げ。長頸の水注？被熱のためか器面ざらつく。釉は濃緑色、1.5mmと厚い。
		184			6.2	－	－	長頸の水注か？口縁端部上方に摘み上げ。細線による蓮弁文。釉は濃緑色、1.5mmと厚い。
		185			10.4	－	－	大きく外方に開く口縁。双耳瓶か？被熱のため鈍い色調だが、本来釉は濃緑色か。
		186			3.8	－	－	輪花状の口縁。頸部に小穴あり。釉は濃緑色か。
		187			－	－	－	頸部径3.6cm。細頸瓶か。頸部に縦細線。被熱のためか器面ざらつく。釉は濃緑色、1.5mmと厚い。
		188			－	－	－	小型の双耳瓶か。釉は淡緑色で薄い。内面下方から無釉。
		189			－	－	－	把手を有する下膨れの胴部を持った短頸の水注か。釉は濃緑色、内面は薄い。
		190			－	－	6.7	水注。注口部あり。文様は不鮮明だが蓮弁文。釉は1.5mmと厚く不透明な濃緑色。畳付釉剥ぎ。
		191			7.4	－	－	角瓶の口縁。上端に線刻による雷文帯。その下には蕉葉文。釉は濃緑色。
		192			－	－	－	角瓶の頸部。魚形の把手。胴部には蕉葉文。釉は濃緑色。191と同形か。
		193			－	－	－	頸部径7.0cm。把手がつく。球状の胴部をもつ瓶か。あまり見ない器形。釉はガラス質の明緑色。
		194			－	－	8.3	瓶の底部。下半が三角状の蓮弁文、草花文。畳付釉剥ぎ、端面幅5mm。釉は濃緑色で内面は薄い。
		195			－	－	－	頸部径6.3cm。胴部に把手？がつく。球状の胴部で、口縁は大きく開くものか。釉は濃緑色。
		196			－	－	－	頸部径5.2cm。円柱状の197のような底・胴部がつくか。円形貼付文。釉は濃緑色で内面は薄い。
	21	197			－	－	8.9	196のような頸部の底・胴部か。大きく開く底部、逆三角状の蓮弁文。円柱状の胴部。釉は濃緑色。
		198	香炉		－	－	3.6	袴腰香炉の底部。三足か。内面は3個の目跡。釉はガラス質の濃緑色、内面薄い。
		199	鉢		16.0	－	－	口縁部内側に伸びる。中央部釉剥ぎか。釉は濃緑色。下半に円形貼付文。
		200			13.3	－	－	口縁部内側に伸びる。釉は濃緑色、1.5mmと厚い。上下に円形貼付文。
		201	香炉		－	－	5.0	腰折れ杯状の香炉。小さな脚部の他に高台が付く。内面無釉。釉は濃緑色、素地は灰白色。
		202	鉢		－	－	5.4	畳付釉剥ぎ。円形貼付文。釉は濃緑色で、1.5cmと厚い。
		203	香炉		－	－	－	三足香炉の脚部。獣足形。脚端部、内面無釉。
		204			9.4	－	－	胴部上半から上方にのびる長方形の吊手がつく。釉はガラス質の濃緑色。
	20	205	小杯		－	－	－	口縁端部がS字に屈曲。外面は1条の圏線下、蓮弁文。釉は濃緑色。
	21	206			7.0	4.0	3.8	外反する口縁をもつ腰高の小杯。外底無釉、中央突出。内底凸状。釉は薄い明緑色。
	20	207			7.4	3.6	3.5	碁笥底の杯。外底無釉、中央突出。外面にロクロ目の稜あり。釉は淡緑色で薄い。貫入多い。
		208			－	－	3.7	碁笥底の底部。外底無釉、橙色、中央突出。内底凸状。釉は濃緑色。
	21	209	香炉		－	－	3.0	外底、無釉糸きり。小さな三足がつく。内面無釉。被熱のため、銅片など付着。釉は明緑色。
第29図	20	210	小壺		6.0	－	－	短頸壺。胴部は不明瞭だが、蓮弁文か。口縁端部釉剥ぎ。釉は明緑色。被熱し一部赤変。
	21	211	小型器台		6.1	－	－	ラマ式蓮弁状の窓部。胴部上方にはおそらく2ヶ所、径5mmの小穴。釉は濃緑色。
		212			6.2	(6.2)	(4.8)	ラマ式蓮弁状の窓部。三足がつく。釉はオリーブ色。被熱のため、異物溶着、変色。
		213			－	－	6.4	211・212と同様の窓部。三足がつく。底部円形状に空く。脚端無釉。釉は濃緑色で2mmと厚い。
	20	214	不明		6.0	－	－	口縁と考えたが、何らかの底部か。釉はオリーブ色。
	21	215	高足杯		－	－	4.1	頸部径3.8cm。脚部3条の稜。底端釉剥ぎ。見込み不明の印花文。釉は濃緑色で薄い。
	20	216	蓋		5.6	(2.3)	－	鍔径11.4cm。瓶などの頸部が狭いものの蓋か。鍔が長い。釉は深緑色。外面被熱のためか赤変。
	19	217			12.2	－	－	大きな撮みもしくは、段がつく蓋か。外面は輪郭二重線の蓮弁文。内面無釉。釉は濃緑色。
	20	218	擂鉢		－	－	6.3	高台直立、畳付のみ釉剥ぎ。内面無釉、弧状の擂り目(6本/7mm)がある。釉は不透明な濃緑色。
		219	蓋		6.0	2.9	－	ボタン状の撮みがある瓶等の蓋。釉は濃緑色、外面1.5mmと厚いが、内面薄い。
	21	220	器台		(22.0)	－	－	窓部の外側には、凸線状の輪郭が有する。釉は不透明な濃緑色、1.5mmと厚い。
		221			31.2	－	－	口縁端部外方に折れる。釉は不透明な濃緑色、1.5mmと厚い。
		222			－	－	－	底部。外底は無釉。葉状の窓部か、外側には凸線状の輪郭を有する。釉は不透明な濃緑色。

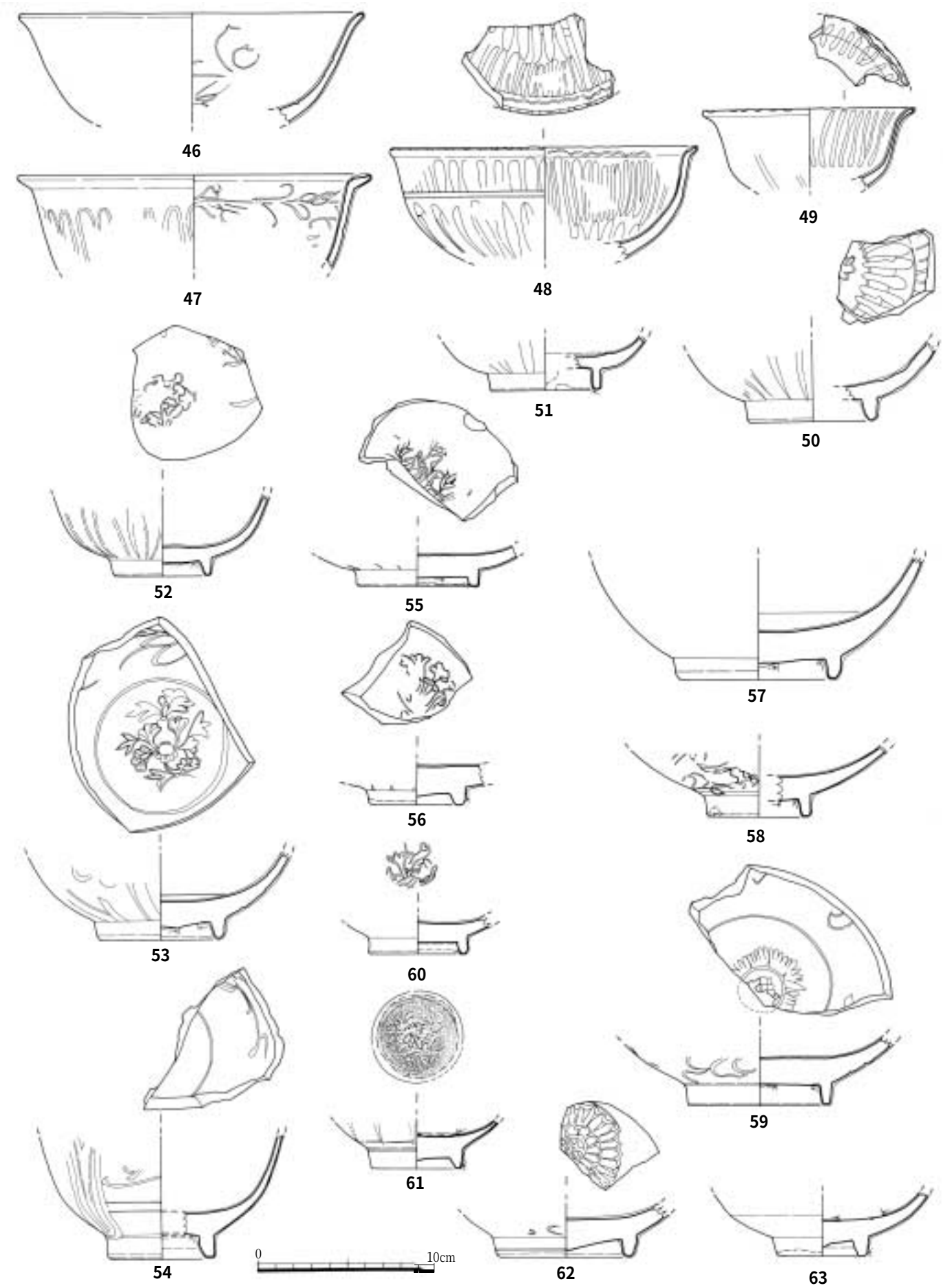
（　）は推定



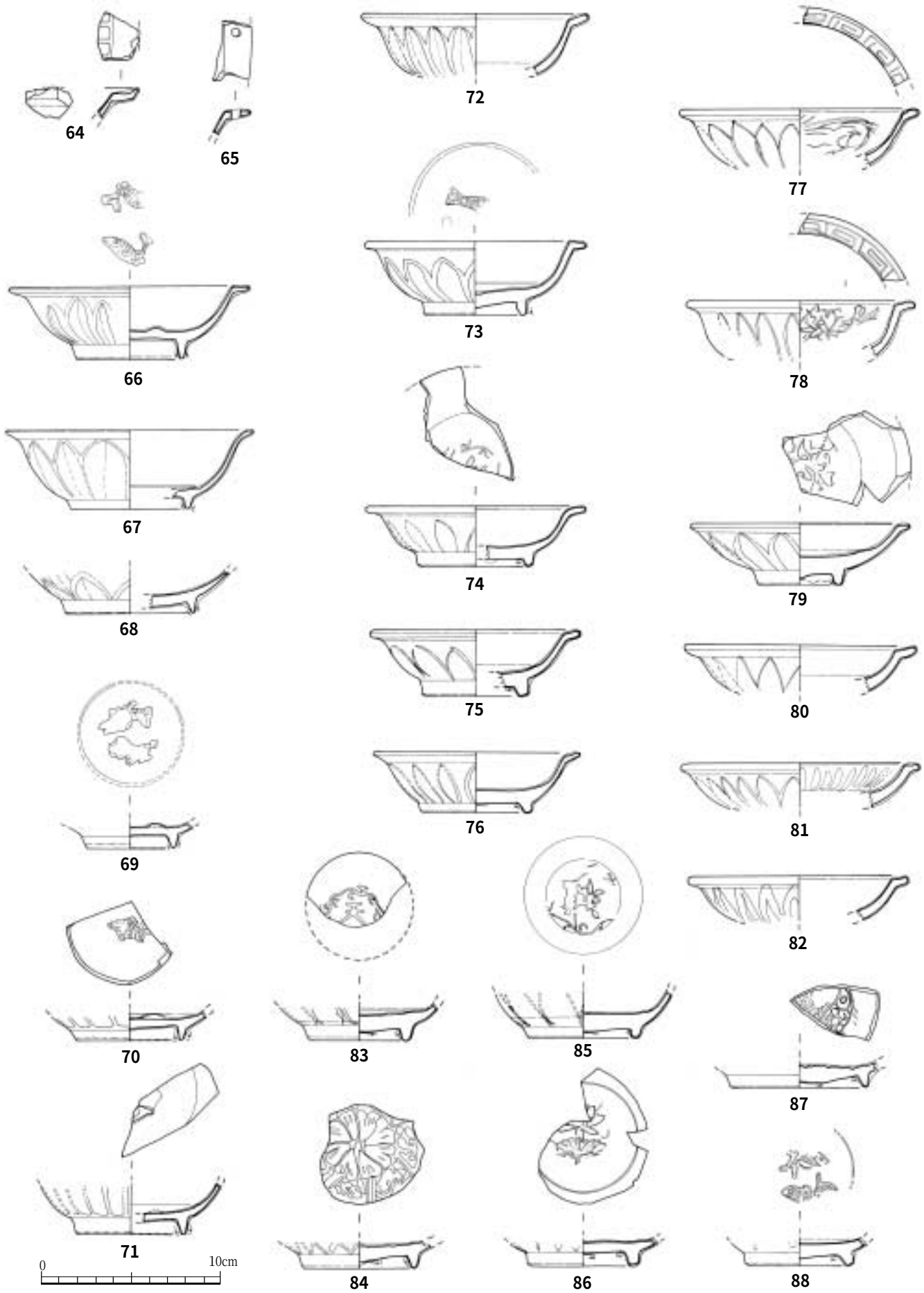
第15図　青磁（1）碗


23
29
37
24
30
38
25
31
39
40
32
41
33
26
42
34
43
27
35
44
28
36
45
0
10cm

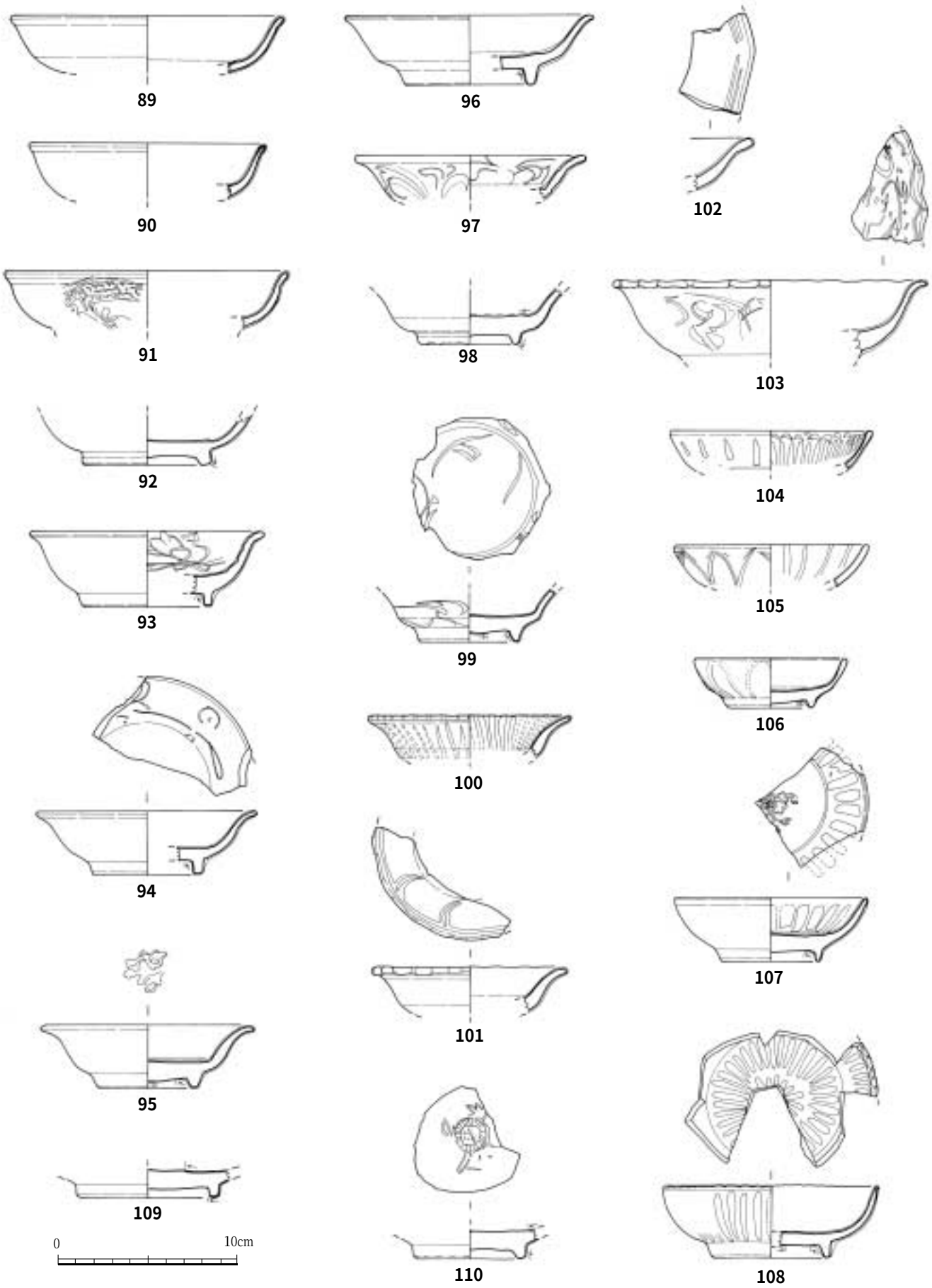
第16図　青磁（2）碗



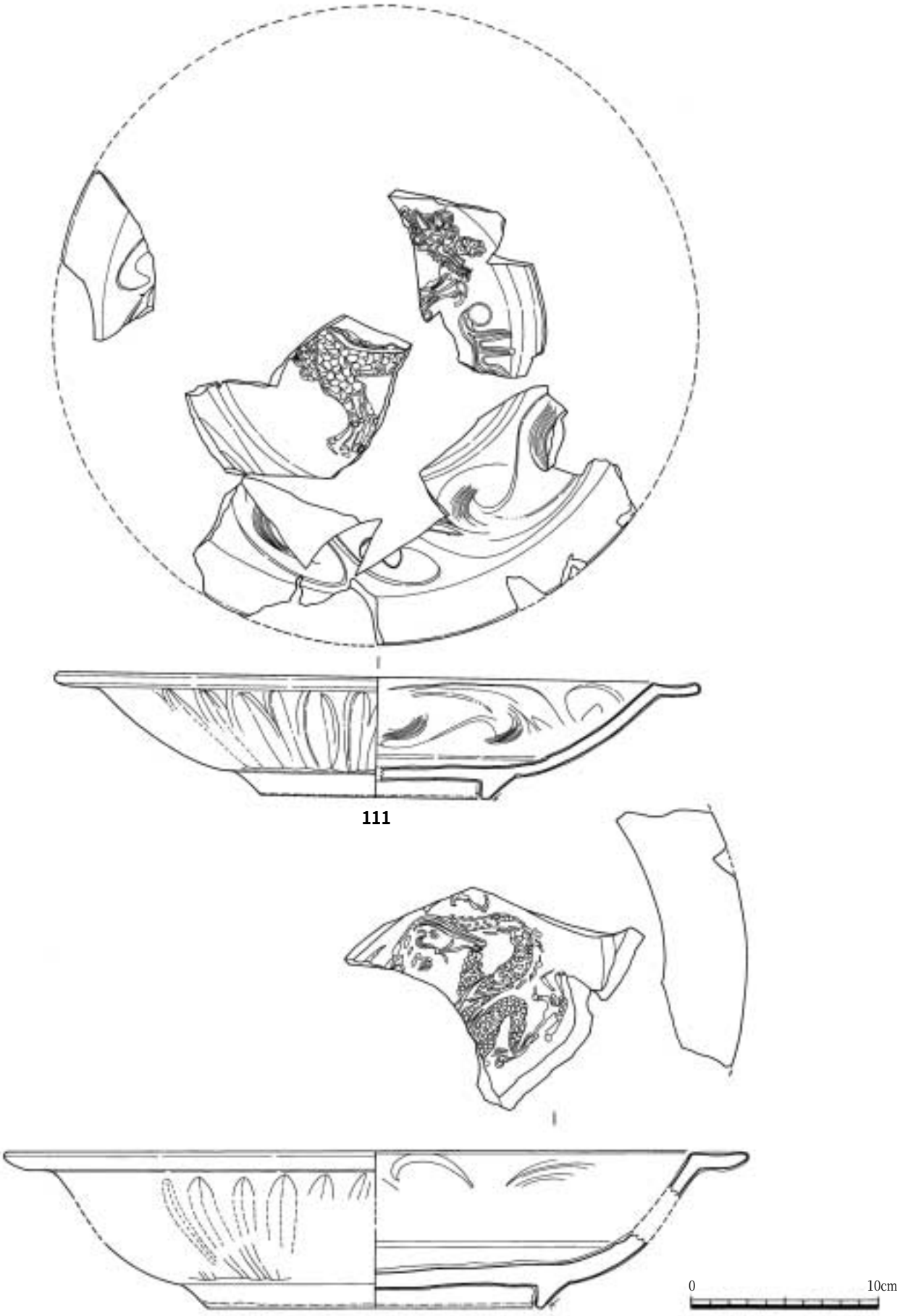
第17図　青磁（3）碗


64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
0
10cm

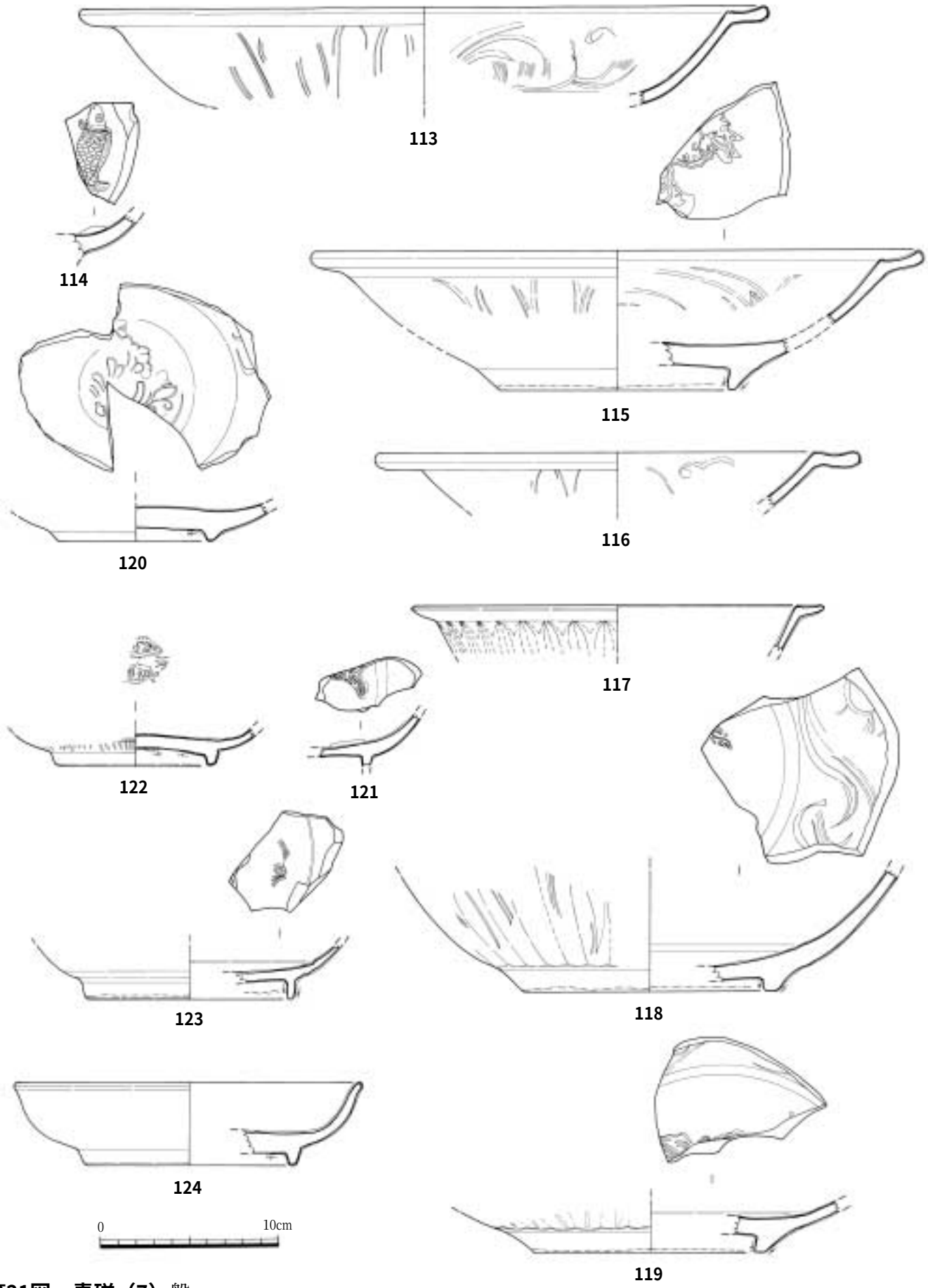
第18図　青磁（4）皿


89
90
91
92
93
94
95
109
0
10cm
96
97
98
99
100
101
110
102
103
104
105
106
107
108

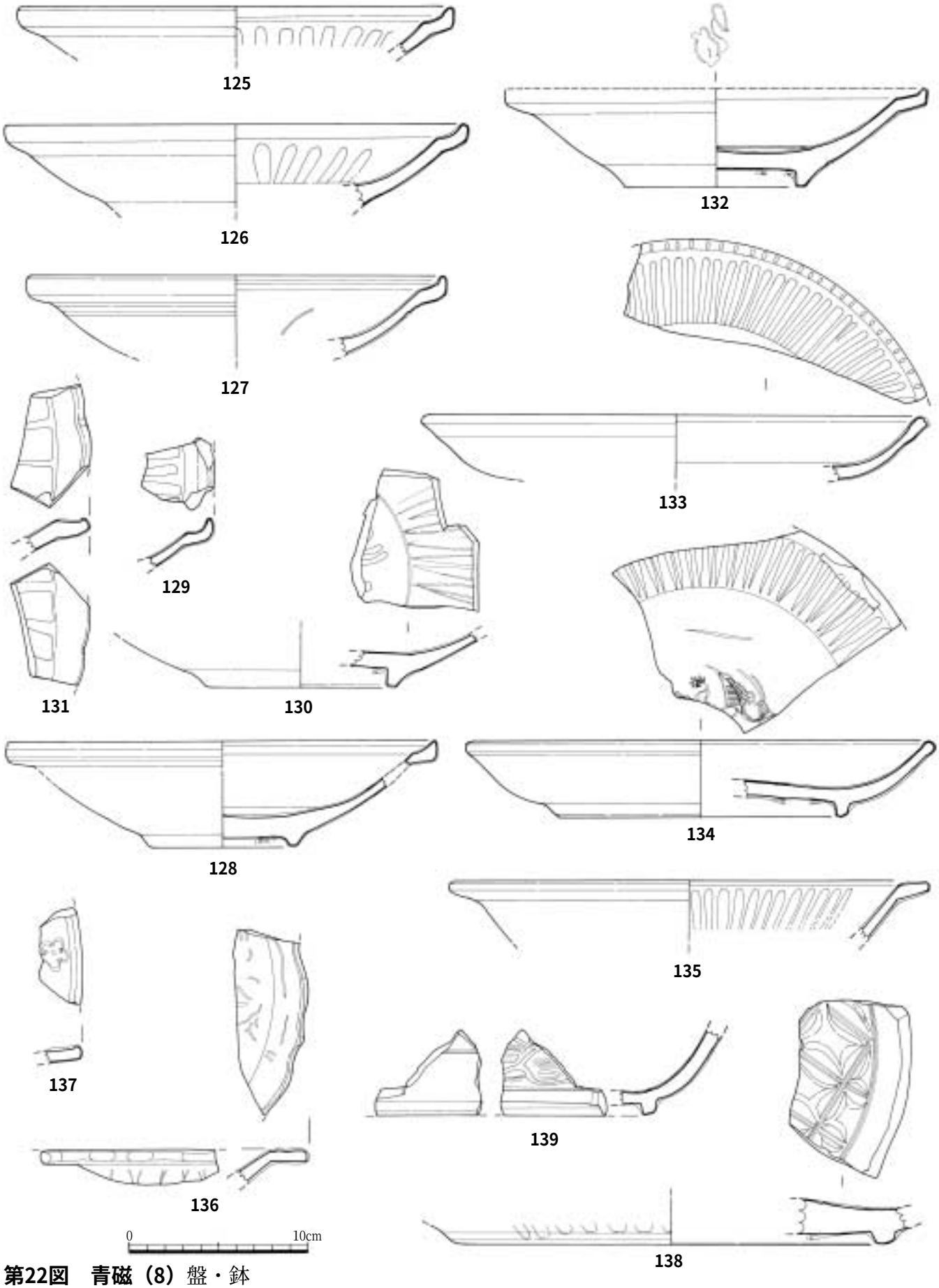
第19図　青磁（5）皿



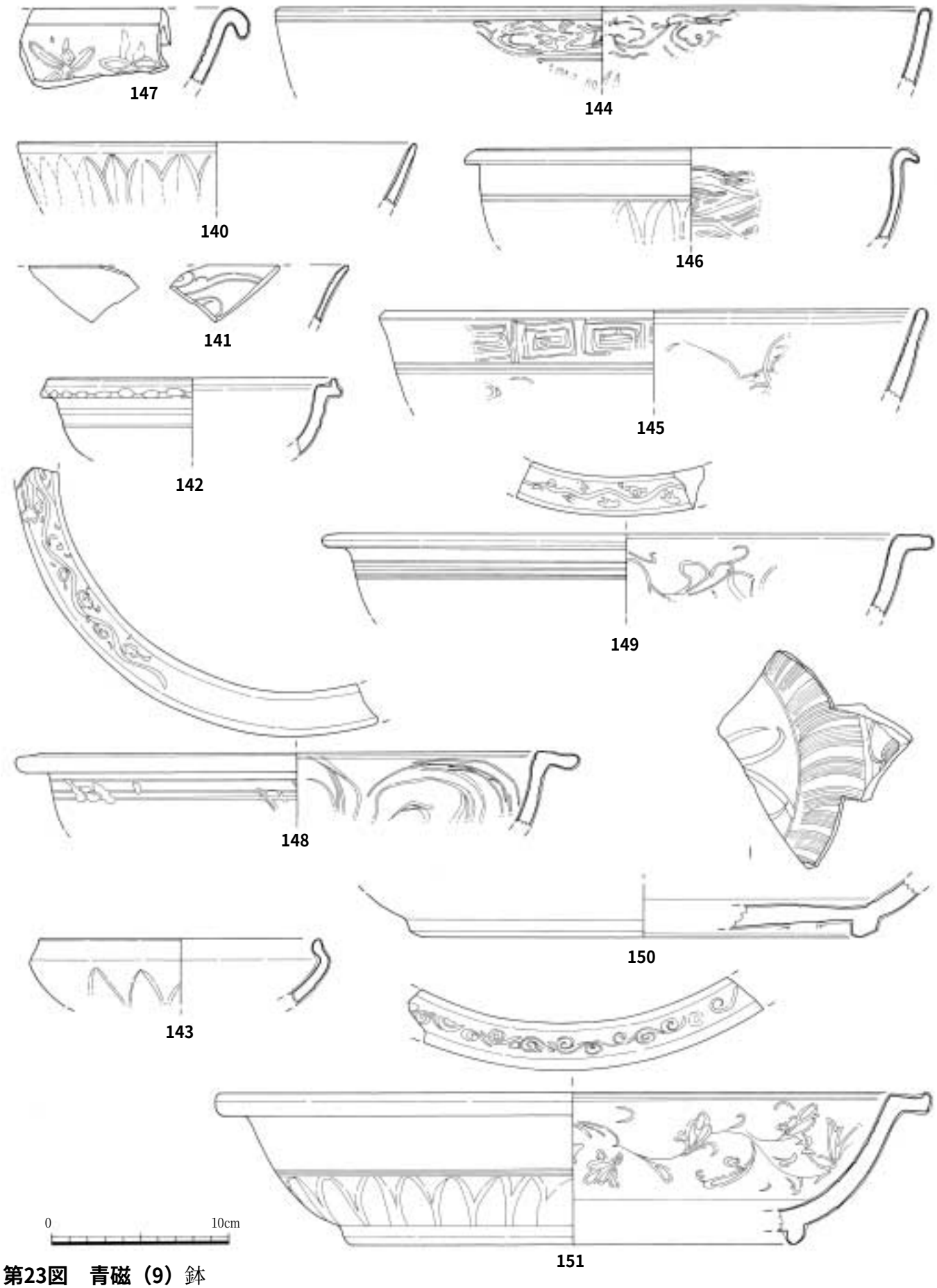
第20図　青磁（6）盤



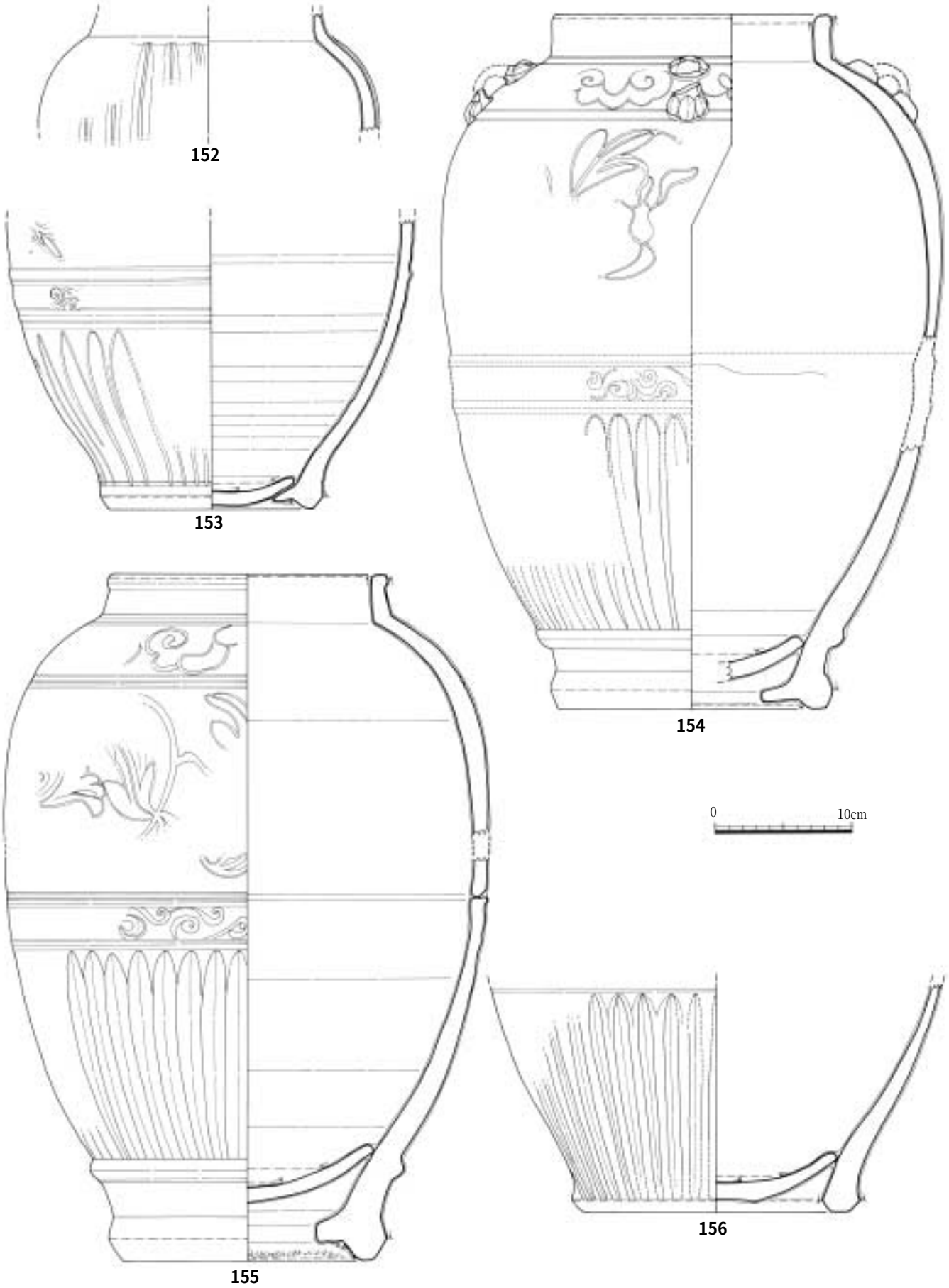
第21図　青磁（7）盤


125
126
127
132
133
129
131
130
128
134
135
137
136
139
138
0
10cm

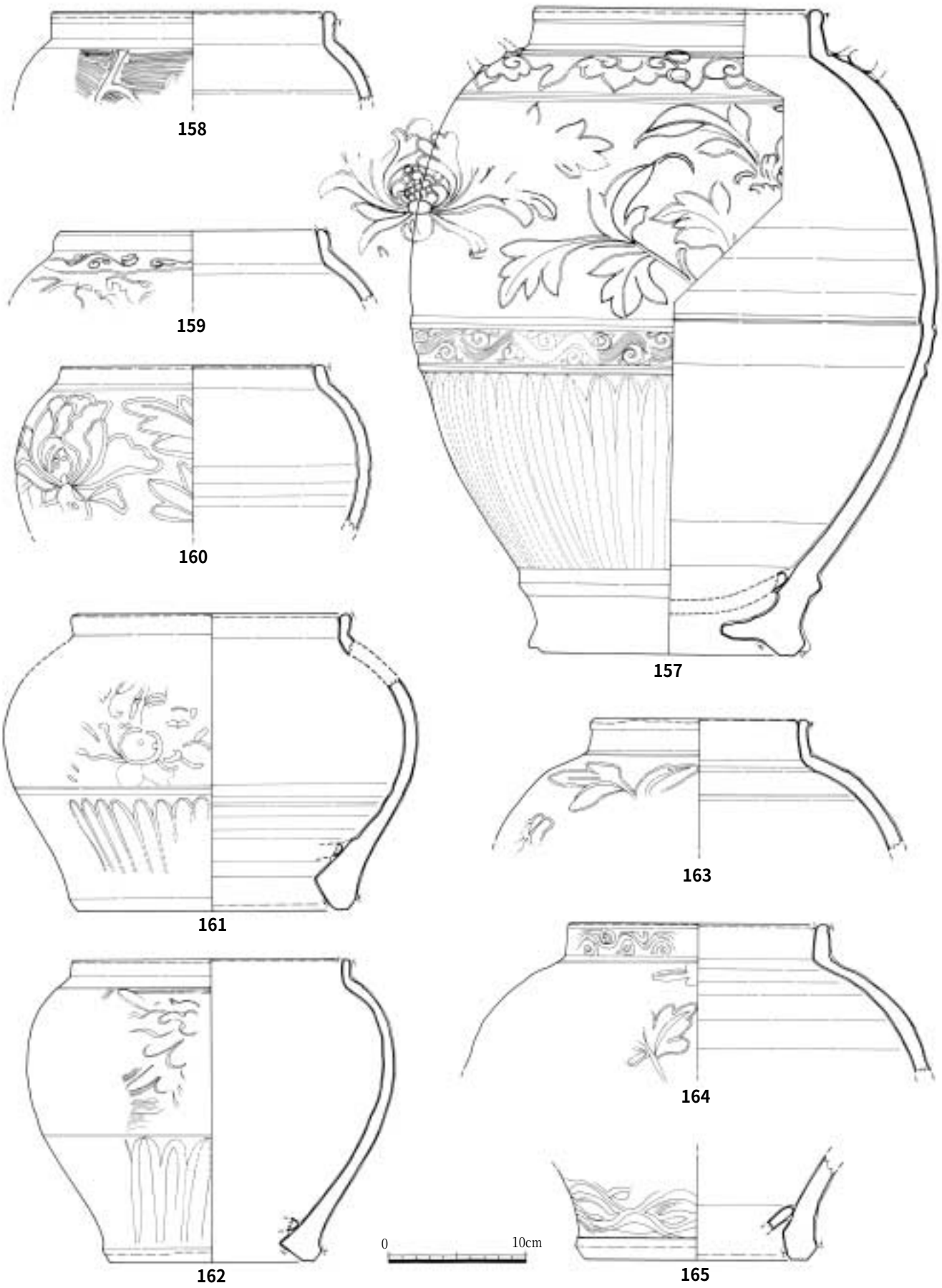
第22図　青磁（8）盤・鉢



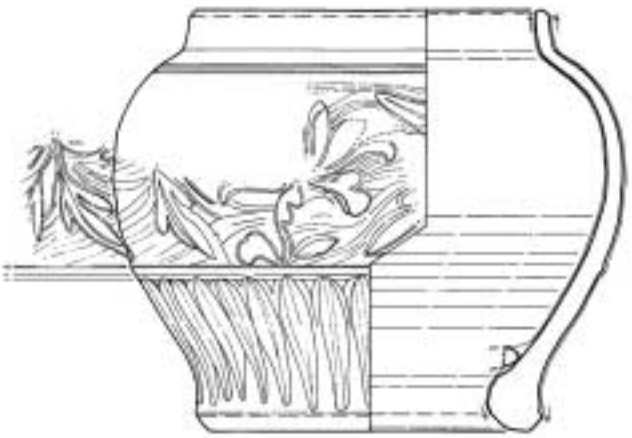
第23図　青磁（9）鉢



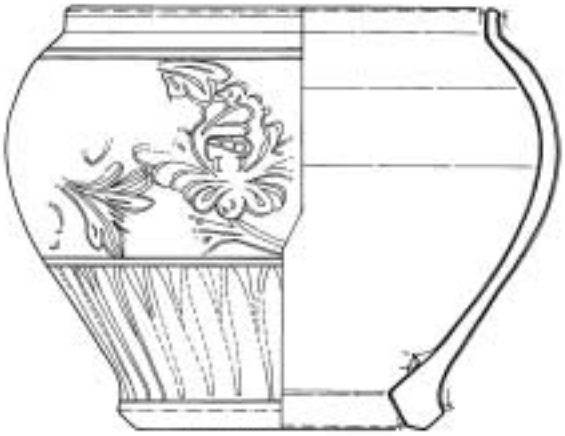
第24図　青磁（10）壺



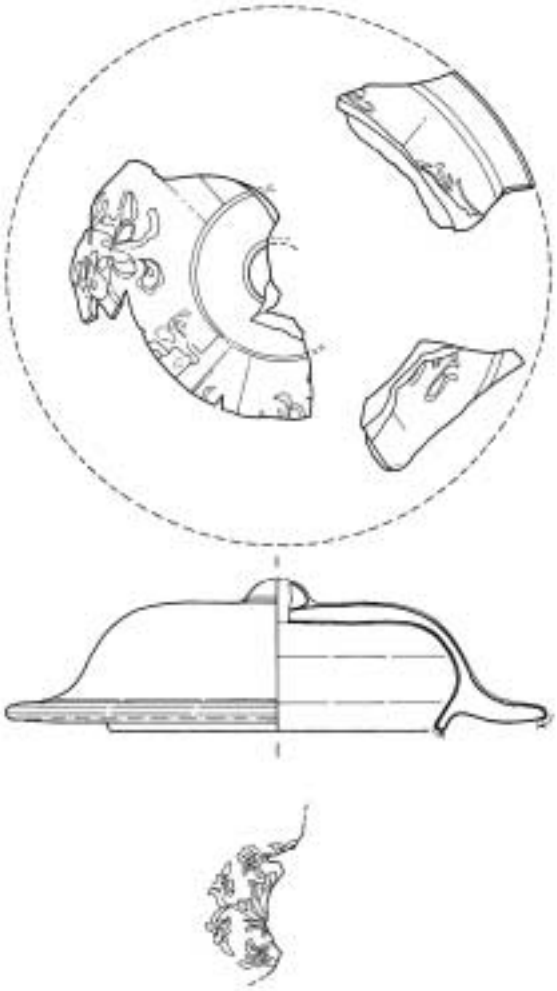
第25図　青磁（11）壺



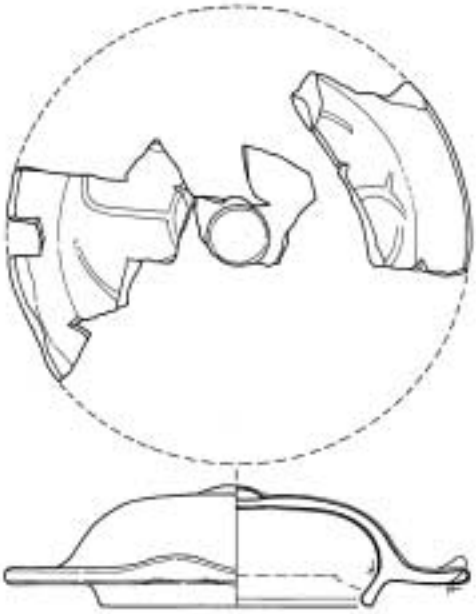
166



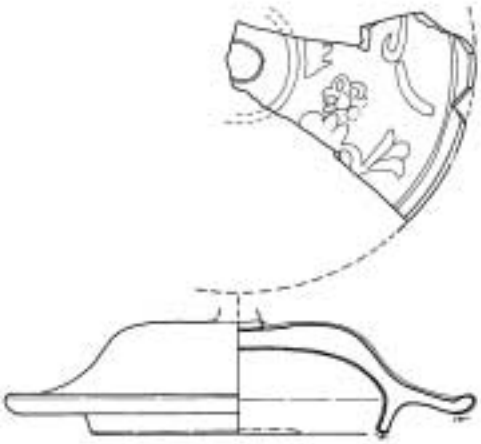
167



168



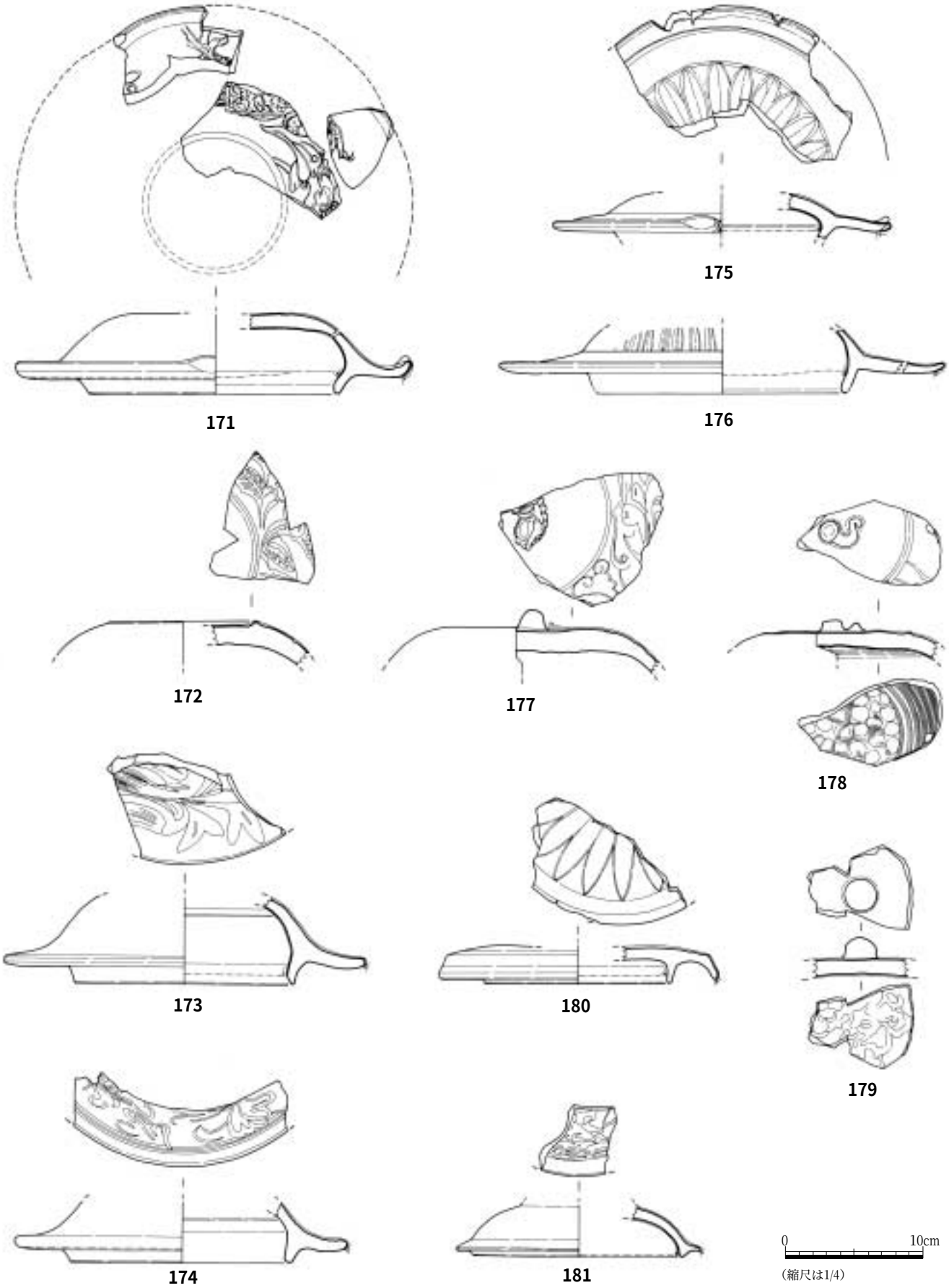
169



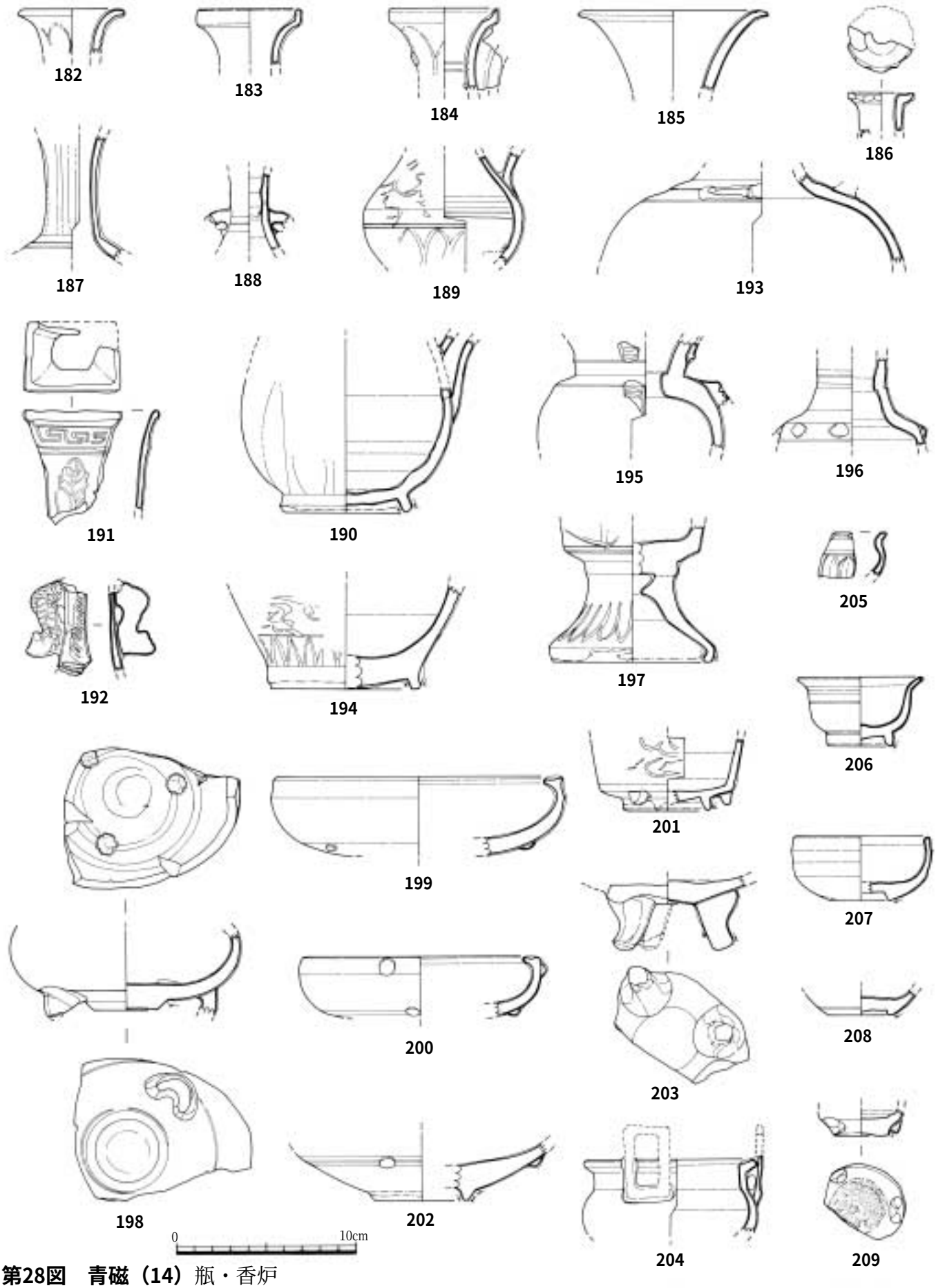
170

0　10cm

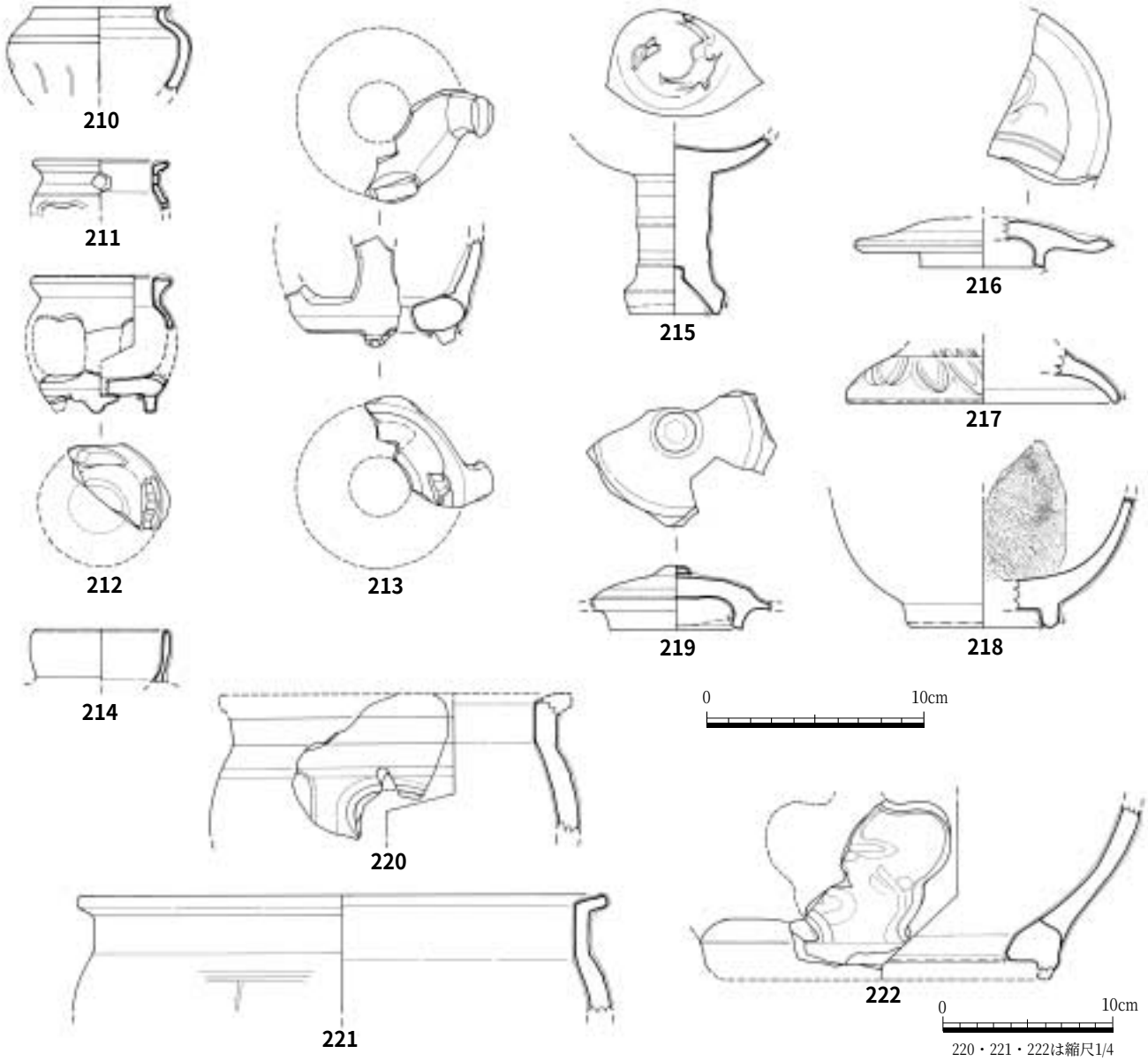
第26図　青磁（12）壺・壺蓋



第27図　青磁（13）壺蓋



第28図　青磁（14）瓶・香炉



第29図　青磁（15）器台・高足杯・蓋

B．白磁（第30・31図）

白磁は、碗・皿は口縁・底部のみ、他の器形は全て集計したところ、破片数530点、最低個体数213点を数える。この内、全形が窺えるものを中心に各タイプの量的な比率も考慮して、47点実測した。

今回出土した白磁は、14～15世紀代で捉えられるものであるが、特徴的な資料がまとまって出土している。その一つは、元青花もしくは色絵に共通する器形で、素地・釉が精良で文様も精巧な、いわゆる「枢府磁」・「枢府手」などと呼称されるものに近い景徳鎮産と考えられる一群である。一方、やや粗雑で小皿・杯を中心とした器形のものは、近年の研究でより明らかになりつつある閩江流域を中心とした福建産と思われる（田中2003）。

そこで、今回は景徳鎮産と福建産に分けて記述する。しかしながら、田中の研究でも明らかなようにこの時期は福建でもかなり景徳鎮に近い精良なものも作られている。そのため、この分類はあくまでも本資料においての位置付けであると断っておきたい。景徳鎮産としたものは、沖縄ではこれまであまり出土を見ずに、金武分類でも明確な位置付けがされていないものがある。そこで、森田分類（森田1982）や小野分類（小野1981）をもとに、最近の資料・研究も参考にして分類し、時期についても若干検討してみた。

景徳鎮産（１～29）

碗・皿・小杯・高足杯が出土している。素地は硬質・緻密で黒色微粒が多く見られ、釉はガラス質で青みが強い透明感のある白濁色のものが多い。また、底部に砂が付着するものが多い。

碗（１～９）

外反碗で比較的深めの器形をもつが、高台の違いでⅠ・Ⅱ類に細分した。

Ⅰ類（１～５）

全形が確実に分かる資料はないが、内側に斜行する幅広の削り出し高台を持ち、口縁は外反するタイプである。釉はやや青みがかった白濁色で高台外面まで掛けられ畳付外側は軽く面取りされる。畳付端は釉剥ぎされる。口縁と底部が接合するものはないが、釉調や体部下半がやや膨らむことから、１のような外反口縁と思われる。内面には２の鳳凰文のように、型押しによる文様が施されるものがある。３は見込み全体に何らかの文様、４はおそらく胴部に草花文などが陽刻で型押しされるが、どちらとも不明瞭である。見込み際には圏線状の明瞭な稜が施されるのも特徴である。底部は全体的に厚く、外底中央が明瞭に突出する。外底は露胎で、高台内側にそれほど多くないが砂が付着する。畳付は、３・５のように比較的に水平なものもあるが、全体的に調整が粗雑である。

こういった特徴は、いわゆる「枢府磁」である森田分類Ｂ群の内でも、より粗雑なＢ’群に近いものと思われる。景徳鎮湖田窯と推定される出光美術館蔵インドネシア・トゥバン海域の資料と比較すると、高台の作りは非常に似ているが、見込みの稜線が無い点では異なる（金沢2001）。時期的には14世紀中葉～後半ごろであろう。

Ⅱ類（６～９）

腰高の外反碗で、削り出し高台ではあるが外底がアーチ状に内湾しており、高台との境が不明瞭なものである。釉は碗Ⅰ類に比べると青みは弱いが透明感が強い白濁色で、高台外面まで掛けられる。外底は露胎で、高台内側端に砂が付着する。内面は７・８のように見込みに型押しの花弁文と思われるものが施される。

森田分類ではＢ・Ｂ’群に近い。しかしながら、高台が碗Ⅰ類のようにきっちりと台形には仕上げられておらず、腰も浅めであることなどが新しい傾向と見て、14世紀後半～15世紀前半の幅で考えたい。

６は高台と外底に境があること、外底中央の突出することなどⅠ類に類似した点もある。しかし、底部が薄く、高台が明初と思われる青花碗（第34図25）に近いので、Ⅱ類に含めた。見込みに「成」と印刻される。

皿（10～26・28）

基本的には口縁が外反するものであるが、器形・施釉範囲などから４つに分類した。

Ⅰ類（10～14）

口径が11～14cm、底径５cm前後の腰折皿で、底径／口径の比率が約40と口縁が大きく開くものである。口縁は薄手で端部が僅かに肥厚する。高台は内側にわずかな稜があり、断面がやや五角形である。釉は、透明で青白磁に近い色調のものが多い。外底は露胎で、全体に砂の付着が顕著に見られる。内面胴部には文様がなく、12のように見込みに不明の文様が型押しされるものは少ない。

田中が報告している景徳鎮瑶里窯の腰折皿に相似ではないが、大きく口縁が外反し、明瞭な腰折れであることは共通している（田中2004）。この瑶里窯の資料は博多遺跡群の出土例から14世紀末～15世紀初頭と考えられているため、本資料もおおよそこの時期に近いのではあるまいか。これまで沖縄ではあまり例がないが、首里城継世門地区で出土している（沖縄埋文2002　第10図８・９）。

Ⅱ類（15～24）

口径は12～14cm、底径７cm前後の胴部が内湾する端反皿で、底径／口径の比率が約60である。底径９cm、推定口径16cm台とやや大きめのサイズもある（23・24）。口縁は薄手で皿Ⅰ類ほど顕著ではないが、肥厚する。高台はしっかりと作られているがⅠ類よりやや細いものもあり、断面が台形もしくは三角形に近い。釉は白濁色で、皿Ⅰ類よりもやや鈍く透明感があるものは少ない。見込み際に明確な圏線状の稜が見られる。内面胴部に不明瞭な草花文等が陽刻で型押しされる。外底は露胎で、全体に砂の付着が顕著であることは皿Ⅰ類と同様である。

森田分類では相当するものはないが、15世紀中葉～後半とされる森田分類Ｅ－２群、小野分類Ｃ群の端反り皿よりは高台が太く外底露胎であることなどは、これらより古手の傾向であろう。見込みの稜は碗Ⅰ類と同様であり、高台は皿Ⅰ類とは差がないので、これらと同時期の14世紀後半～15世紀前半と広くみたい。これまであまり例がないが、首里城廣福門地区で同一のものが出土している（沖縄埋文2001　第25図24）。

Ⅲ類（25・26）

皿Ⅱ類と比べるとやや浅めの端反皿で、高台は細く、全面施釉したのちに高台下端が釉剥ぎされている。高台には砂の付着がない。素地は灰色で、釉はかなり厚く白色で、貫入も非常に多いことなどは通常あまり見ない特徴である。器形は、小野白磁皿Ｃ群、染付皿Ｂ１群、森田Ｅ－２群に相当する。すなわち、Ⅱ類よりも時期的にやや新しく、15世紀中葉であろうか。

Ⅳ類（28）

高台が薄くやや内傾しているもので、器壁も全体的に薄い。28は見込みに繊細な線表現による波涛？文などが施される。図化は１点のみだが、破片では５点見られた。全形は分からないが内湾する浅めの器形だろうか。沖縄ではあまり出土しないものだが、素地の特徴から景徳鎮系とした。

高足杯（27）

外面にはラマ式蓮弁、内面見込みには貼付け龍文があり、その特徴は碗Ⅰ類、「枢府磁」に近く釉も青味掛かっており、作りも丁寧である。

小杯（29）

皿Ⅳ類と似て、高台が細く、他の碗・皿などとはやや異なる。全容は不明だが、浮き上がる文様がある。高台端部のみ釉剥ぎされている。

福建産（30～47）

碗・皿・杯・高足杯・壺・蓋が出土している。素地はやや軟質で黒色微粒は少なく、釉は透明度が弱い黄みがかった白色である。高台は削りだしにより低く仕上げられており、小皿には抉り高台のものも多い。底部に砂が付着するものはない。多くは森田分類Ｄ群に相当し、近年の研究により邵武四都窯を中心とした福建省閩江上流域産と考えられているものである（田中2002）。沖縄でも、このタイプは多く出土している。

碗（30～32）

Ⅰ類（30）

30は口禿碗であるが、丸みのある器形、釉が青白色であることは、通例の13世紀～14世紀前半とされるものと異なり、新しい要素と思われる。ちなみに通例の口禿碗は、寧徳地区などの福建省北東部で生産されているようである（田中2003）。

Ⅱ類

いわゆる森田分類Ｃ群、金武分類無文外反碗（金武1990）もしくは今帰仁城跡主郭分類無文外反碗ａ類（金武他1991）のことである。口縁端部は短く外反する浅めの器形で、見込みに１mmに満たない細線の印花文を施し、高台は幅広のものである。14世紀後半～15世紀前半・中葉とされる。口縁部のみで４点出土したが、小片のため実測していない。

Ⅲ類（31）

高台は短く直立するものである。見込みに印花文を持つが、２mm幅の太め線で表現され、やや粗雑な感じがする。釉は高台外面まで掛けられ、外底露胎である。31が相当し、後述する皿Ⅰ類の40～42と同様の印花文が施される高台を持つ。あまり見ないものであるが、高台や釉調は森田Ｄ群に近いと思われる。

Ⅳ類（32）

32は、胴部下半が露胎する外反碗で、森田Ｄ群に相当する小碗であろう。今帰仁城跡主郭分類の無文外反碗ｃ類に相当し、首里城京の内地区でも出土している（金武他1991・沖縄県教委1998）。

皿・杯（33～44）

多く出土するものを大きく３つに分類した。小片で判別できないものは皿・杯としてまとめて数えた。

Ⅰ類（40～42）

先述の碗Ⅲ類と同様の特徴で、短く直立する高台を持ち、幅広の線で表現される印花文を施すものである。釉は高台外面まで掛けられ、外底は露胎である。40は胴部の立ち上がりから見ると、口縁は外反するものであろう。これも碗と同様、あまり例がないが、森田Ｄ群の高台や釉調に近いと思われる。

Ⅱ類（33～39）

高台はややハ字状に開くもので、釉は胴部下半が露胎するものが多く、森田Ｄ群に相当する。抉りの有無で、ａ・ｂ類に分けた。さらに、各分類の中でも器形により細分した。15世紀代であろう。

ａ…高台に抉りがないもので、33～37である。33～35が皿で、口縁が直口（33）、外反（35）するものがある。34は底部のみである。36・37は深めの器形で杯とした。36は胴部の面取りがなく、37は八角杯である。36のように、内底釉剥ぎのものも見られる。

ｂ…抉り高台の杯で、38・39が該当する。38は面取りがなく39は八角杯である。内底に目跡がつくのが特徴である。

Ⅲ類（43）

底部から緩く腰折れし、口縁がさらに外反する皿で、見込みは蛇の目釉剥ぎをする。今回はこの底部のみ図化したものを含めて、９点あった。この皿は、田中が博多遺跡群でも少量出土するものとし、15世紀代に位置付けている（田中・森本2004）。また、水澤幸一は新潟県江上館等の日本海側の北陸・東北地域でこの手のものが一定量見つかっていることを指摘している。水澤は、この皿を首里城京の内地区の資料を基準として、「首里タイプ」と呼称している（水澤2004）。

44は、１点のみの出土であまり例がない。型造りの白磁で、高台がほとんどないタイプの底部である。田中Ⅰ類に相当するものと思われ、閩南地区徳化・莆田窯が産地と考えられている（田中2003）。

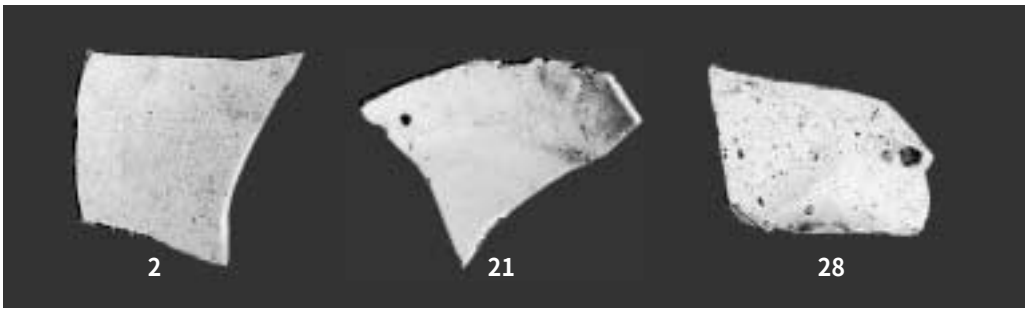
第5表　白磁出土状況

産地	器形	分類	部位	小計	合計	最低個体数
景徳鎮産	碗	Ⅰ・Ⅱ	口縁	15	41	26
		Ⅰ	底部	9		
		Ⅱ	底部	17		
	皿	Ⅰ	全形	3	223	93
			口縁	79		
			底部	26		
		Ⅱ	全形	3		
			口縁	43		
			底部	50		
		Ⅲ	全形	2		
			口縁	8		
			底部	4		
		Ⅳ	底部	5		
	小杯		口縁	1	2	1
			底部	1		
	高足杯		胴部	1	1	1
	小計				267	121
福建産	碗	Ⅰ	口縁	12	30	6
		Ⅱ	口縁	4		
		Ⅲ	底部	6		
		Ⅳ	口縁	8		
	皿・杯	Ⅰ	底部	6	183	74
		Ⅱ・直口	口縁	58		
		Ⅱ・外反	口縁	36		
		Ⅱ・面取り	口縁	15		
		Ⅱa	底部	34		
		Ⅱa・蛇の目	底部	4		
		Ⅱb	底部	20		
		Ⅲ	底部	9		
		その他	底部	1		
	壺・瓶		口縁	5	42	4
			耳	2		
			胴部	31		
			底部	4		
	高足杯		底部	1	1	1
	蓋		口縁	1	1	1
	不明		底部	1	6	6
			不明	5		
	小計				263	92
総計					530	213

蓋（45）　口が狭い壺や瓶の蓋と思われ、今帰仁城跡主郭で類例がある（今帰仁村教委1991第61図６）。

高足杯（46）　内部が空洞になっている脚部である。

壺（47）　いわゆる酒会壺とされる短頸壺の口縁と思われ、端部は玉縁である。



図版54　内面型押し文様細部

第6表　白磁観察一覧

単位：cm

図・図版番号			産地	器形	分類	口径	器高	底径	素地	釉	特徴
第30図	図版23	1	景徳鎮産	碗	Ⅰ	—	—	—	灰白色、黒色微粒僅か	青白濁色	口縁端部が短く外反する
	24	2				—	—	—	灰白色、黒色微粒中量、硬質	白濁色	内面に型押しによる鳳凰文。
	23	3				—	—	6.2	灰白色、黒色微粒中量、気泡僅か	やや透明な青白濁色、高台内露胎、畳付少量砂付着	見込みに圏線があり、内側に型押し文あり。畳付比較的水平。外底中央突出。
		4				—	—	6.1	灰白色、黒色微粒中量、気泡多い	青白濁色、高台内露胎、畳付少量砂付着	内面胴部に型押しによる草花？文、見込みには圏線あり。畳付は狭い。
		5				—	—	6.0	灰白色、黒色微粒多量	やや透明な青白濁色、高台内露胎、畳付少量砂付着。	高台はやや低く、外底中央が突出。見込み圏線あり。畳付比較的水平。
		6			Ⅱ	—	—	5.0	灰白色、黒色微粒僅か	青白濁色、高台内外露胎・砂付着なし	見込みに「成」の字。他と比べると高台が丁寧でⅠ類に近い。外底中央が突出。
		7				—	—	4.5	灰白色、黒色微粒中量	やや透明な白濁色、高台内露胎・砂付着なし	底部見込みに、不明文様あり。外底中央やや突出。
	22	8				11.8	6.3	4.5	灰白色、黒色微粒中量	やや透明な白濁色、高台内露胎、畳付少量砂付着	底部見込みに菊花？文あり。
	23	9				—	—	4.3	灰白色、黒色微粒僅か	透明な青白色、高台内露胎、畳付少量砂付着	底部見込みに緩い稜あり。畳付が他よりもやや広い。被熱によるか内面赤変。
	25	10		皿	Ⅰ	14.2	—	—	灰白色、黒色微粒多量	透明な白濁色	口縁端部外面が平たく肥厚する。
		11				11.5	3.9	5.0	灰白色、黒色微粒中量	青白濁色、高台内露胎・砂付着	口縁端部外面は幅広く肥厚。胴部外面下半に縦方向の線状痕が5㎜の間隔でうすくみられる。
	22	12				13.1	3.8	5.4	灰白色、黒色微粒中量	透明な白濁色、高台内露胎、畳付砂付着	口縁端部外面が平たく肥厚する。胴部外面下半に縦方向の線条痕あり。見込み圏線内に文様あり。
	25	13				—	—	5.4	灰白色、黒色微粒僅か	透明な白濁色、高台内露胎・砂付着	胴部外面下半に縦方向のうっすら線条痕あり。
		14				—	—	5.0	灰白色、黒色微粒中量	透明な青白色、高台内露胎・砂付着	胴部外面下半に縦方向のうっすら線条痕あり。
		15			Ⅱ	12.2	—	—	灰白色、黒色微粒多量、気泡僅か	青白濁色	他のⅡ類と比べると、滑らかな器面がやや異なる。口縁端部外面丸く肥厚。
		16				13.2	3.7	7.8	灰白色、黒色微粒中量	白濁色、高台内露胎・少量砂付着	胴部内面に型押しによる草花？文。底部見込みに圏線。口縁端部外面僅かに平たく肥厚。
	22	17				12.7	3.8	7.4	灰白色、黒色微粒多量	青白濁色、高台内露胎・砂付着	底部見込みに不明文様。見込み圏線明瞭ではない。
	25	18				13.9	3.6	8.2	灰白色、黒色微粒中量	白濁色、高台内露胎・砂付着	胴部内面に型押しによる草花？文。底部見込みに圏線。口縁端部外面僅かに平たく肥厚。
		19				(13.0)	(3.7)	7.4	灰白色、黒色微粒中量	白濁色、高台内露胎・砂付着	胴部内面に型押しによる草花？文。底部見込みに圏線。
		20				—	—	7.8	灰白色、黒色微粒中量	白濁色、高台内露胎・砂付着	底部見込みに圏線。内面被熱か赤変。
		21				—	—	7.5	灰白色、黒色微粒中量	白濁色、高台内露胎・砂少量付着	胴部内面に型押しによる草花？文。底部見込みの圏線が明瞭。
		22				—	—	7.3	灰白色、黒色微粒中量	青白濁色、高台内露胎・砂付着	胴部内面に型押しによる草花？文。底部見込みに圏線。被熱のため黒・赤変。
第31図		23			Ⅱ大	—	—	9.3	灰白色、黒色微粒多量、気泡多い	青白濁色、貫入やや多い、高台内露胎・砂付着	胴部内面に型押しによる草花？文。底部見込みに圏線。
	24	24				—	—	9.2	灰白色、黒色微粒少量	やや透明な青白濁色、高台内露胎・わずか砂付着	見込みに圏線あり。畳付外端丁寧に釉剥ぎされる。外底褐色。

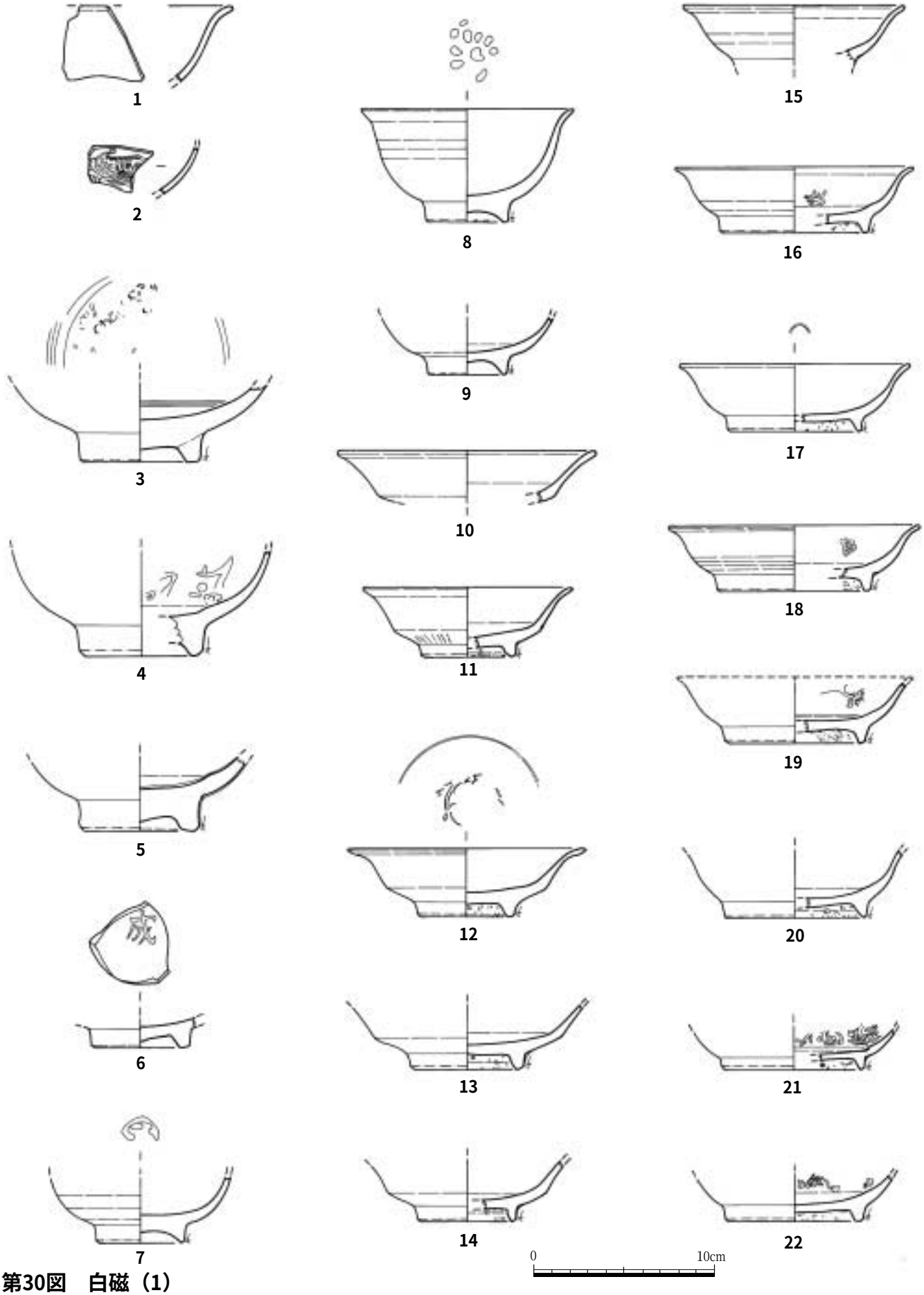
（　）は推定

第6表　白磁観察一覧

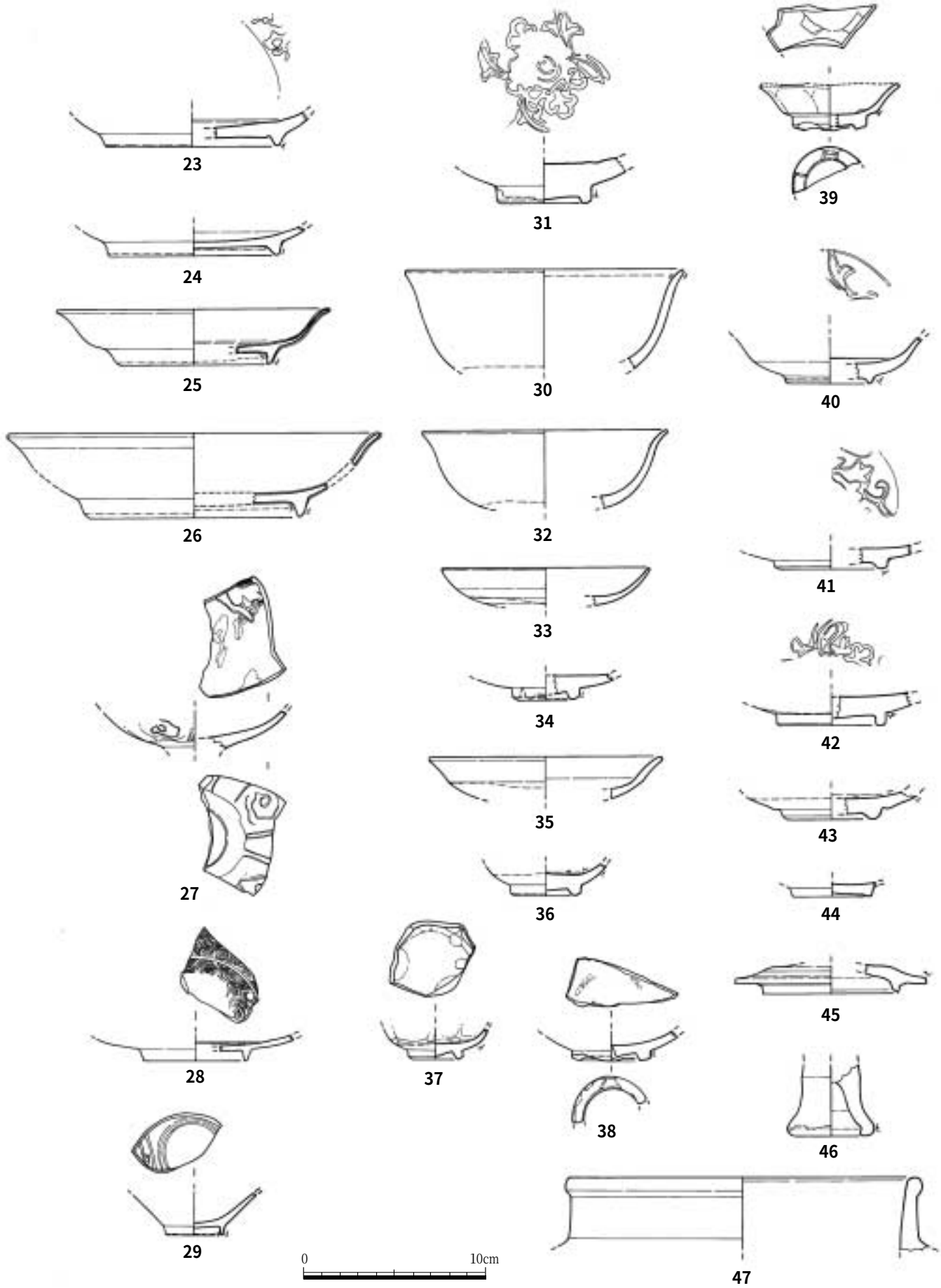
単位：cm

図・図版番号			産地	器形	分類	口径	器高	底径	素地	釉	特徴
第31図	図版24	25	景徳鎮産	皿	Ⅲ	15.3	2.9	8.0	灰色、黒色微粒少量	厚い鈍い白色、貫入多い、畳付のみ丁寧に釉剥ぎ	底部見込みに圏線状の稜あり。
		26				(20.6)	(4.0)	11.5	灰色、黒色微粒少量、気泡多い	厚い鈍い白色、貫入多い、畳付のみ丁寧に釉剥ぎ	器高、口径は破片による推定。
	25	27		高足杯	—	—	—	—	灰白色、黒色微粒僅か、非常に精良	青白濁色	外面、ラマ式蓮弁、見込みに龍文か？
		28		皿	Ⅳ	—	—	5.7	鈍い灰白色、黒色微粒僅か	やや透明な白濁色、畳付釉剥ぎしない	見込みに線刻による波涛文？あまり例がないが、緻密な素地、文様から景徳鎮産とした
	24	29		小杯	—	—	—	—	灰白色、黒色微粒僅か	不透明な白濁色、畳付釉剥ぎ	胴部内面に浮き彫りによる文様あり、胎土から景徳鎮系とした。
	26	30	福建産	碗	Ⅰ	15.2	—	—	灰白色、黒色微粒中量	不透明な青白色、口禿	丸みをもった器形は、通例の口禿碗よりも新しい要素である。また、碗Ⅳ・皿Ⅳとは窯が異なるか。
		31			Ⅲ	—	—	4.8	淡黄に近い灰白色、気泡僅か	青白濁色、貫入多い、高台内露胎	見込みに幅広の線表現の印花文。外底中央突出。
		32			Ⅳ	13.5	—	—	鈍い灰白色	やや透明な白濁色、貫入多い、胴部下半露胎	口縁端部は四角に仕上げられる。丸みのもった器形。
		33		皿	Ⅱa	11.4	—	—	鈍い灰白色、気泡僅か	やや透明な白濁色、貫入多い、胴部下半露胎	口縁端部はやや尖る。丸みのもった浅めの器形。
		34				—	—	3.0	鈍い灰白色、気泡僅か	やや透明な白濁色、貫入多い、高台内露胎	底部。内底は平坦。外底中央突出。
		35				12.8	—	—	鈍い灰白色、黒色微粒僅か、気泡僅か	白濁色、貫入多い、高台内露胎	やや腰折れの器形。
		36		杯	Ⅱa	—	—	3.4	淡黄に近い灰白色	淡黄色、貫入多い、胴部下半露胎	内底蛇の目釉剥ぎ。丸く深めの器形。
		37				—	—	4.6	灰白色	やや透明な白濁色、胴部下半露胎	胴部が丸い八角杯。外底中央突出目立つ。
		38			Ⅱb	—	—	4.3	淡黄色で粗い	淡黄色、貫入多い、高台内露胎	おそらく3ヶ所の抉り高台。内底にはおそらく3ヶ所の目跡がつく。外底中央突出。
		39				7.7	2.6	4.1	灰白色、黒色微粒多い	透明な白濁色、高台内露胎、胴部下半露胎	高台脇が水平に切られた八角杯。おそらく3ヶ所の抉り高台。内底にはおそらく3ヶ所の目跡がつく。
		40		皿	Ⅰ	—	—	4.5	淡黄に近い灰白色	青白濁色、貫入あり、高台内露胎	胴部下半にやや稜がつく。見込みに幅広の線表現の印花文。
		41				—	—	5.6	灰白色、黒色微粒僅か	透明な青白色、高台内露胎	見込みに細い線表現の印花文。
		42				—	—	5.8	淡黄に近い灰白色	やや透明な白濁色、貫入多い、胴部下半露胎	見込みに幅広の線表現の印花文。外底中央突出。
		43			Ⅲ	—	—	5.0	灰白色	透明な青白色、貫入多い、内底釉剥、胴部下半露胎	高台脇水平に切る。外反する皿か？外底比較的水平。
		44			—	—	—	4.3	灰白色、精良	白濁色、貫入多い、高台露胎	底部中央僅かに凹むベタ底。
		45		蓋	—	7.4	—	—	灰白色	やや透明な白濁色、内面露胎	口の狭い壺の蓋か。反りがある。
		46		高足杯	—	—	—	4.0	淡黄に近い灰白色	白濁色、貫入多い、底部露胎	脚部内面調整雑である。
		47		壺	—	(19.6)	—	—	灰色	やや透明な鈍い灰白色、貫入多い	短頸壺の口縁。

（　）は推定



第30図　白磁（1）


23
24
25
26
27
28
29
31
30
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
0
10cm

第31図　白磁（2）

C．青花（第32～36図）

青花は388点出土しており、その中から特徴的で残存状態の良好な資料を69点図化した。二階殿地区出土の青花は「元様式青花」と「明代青花」の２種類に大きく分類され、出土量は後者が多く、大形品の割合は前者が高い。産地は双方とも浙江省景徳鎮窯であるが、後者にはやや粗製の資料が含まれる。以上の特徴はこれまでの首里城跡出土資料と同様だが、本資料は一括性が高く、特に元様式青花の出土状況や新資料が確認されている点で注目される。よって今回は元様式青花を積極的に抽出し、また明代青花を含む大形品については、可能な限り類例を提示するように努めた。以下に元様式青花、明代青花の順に記述する。

元様式青花（第32、33図）

器形・施釉方法・呉須の色調等から元代に生産されたと考えられるもの、または元様式の文様意匠を踏襲していると判断されるものを総称して元様式青花とした。総数18点（最低個体数10点）で、器種は盤・器台・瓶・片口・蓋・碗・高足杯が確認されており、うち残存状態の良好な資料16点を図化した。ここでは各器種の分類概念を記し、個々の観察所見は第8表に提示する。

盤（第32図１、第33図12～16）

盤は鍔縁口縁を呈するもので、口唇部を稜花状に成形するもの（１、13）と、平口縁のもの（12）に大別される。１は内面に白抜きの牡丹唐草文を貼付する大振りの盤で、イラン・アルデビルシュラインコレクション（三杉・榊原1998）にほぼ類似する製品がある。12は鍔上面に四方襷文を廻らせ、外面に牡丹唐草文を描く。13は口唇端部を着色して口藍とし、鍔上面に唐草文を廻らせる。首里城跡城郭南側下地区（沖縄埋文2004）で同種の製品が出土している。14と15は盤の底部である。いずれも高台内刳りが浅く、内底は露胎となる。16は胴部で、内面に白抜きの花唐草文を描く。

器台（第33図２）

２は八角形に面取りされた小形の器台で、福井県・一乗谷遺跡出土資料（小野1983）を参考に図上復元を試みた。小形の梅瓶などとセットになると考えられるもので、外面に圏線などを描く。元様式青花の器台は前述の２例に東京都・葛西城跡出土資料（古泉1984）を加えた３例のみであり、世界的にも貴重な資料といえる。

瓶（第33図３～６）

瓶は玉壺春瓶（３～５）と梅瓶（６）が出土している。３は口縁部資料で、内面に波濤文を廻らせる。４は頸部資料で、外面に蕉葉文や雷文などを描く。中国・河北省保定市窖蔵出土資料（亀井2002）に文様が類似する。５は頸部以上を欠損するが全形のうかがえるもので、外面に龍文とラマ式蓮弁文を描く。６は梅瓶の胴部で、外面に蔓唐草文とラマ式蓮弁文を描く。主文様は異なるが、台湾・故宮博物院（長谷部1997）に類例がある。

片口（第33図７）

７は片口と考えられる平底の底部資料で、内底に蓮文を描く。片口は今帰仁城跡志慶真門郭（今帰仁村教委1983）や博多遺跡群（塩谷・池崎1983）などに類例があるが、本標品は和歌山県・根来寺跡出土資料（上田1983）の内底文様に最も近いと考えられる。

蓋（第33図８）

８は酒会壺の蓋である。蓋甲全面に曲線を描き、全体を荷葉状に仕上げている。今帰仁城跡（今帰仁村教委1983、1991）や中国・高安県博物館（中沢・長谷川1995）に類例がある。

碗（第33図９、10）

高台内刳りが浅く口縁部が外反する厚手の碗で、小野分類（小野1982）の碗Ａ群に相当する。いずれも底部資料で、内底に草花文などを描く。９は首里城跡京の内SK01（沖縄県教委1998）などで出土している色絵碗と同時期に位置付けられるもので、インドネシア・トロウラン博物館（小野1982）に類例がある。10はインドネシア・トゥバン沖引き揚げ資料（金沢2001）に類例がみられる。

高足杯（第33図11）

11は外反口縁を呈する杯で、底部を欠くが高足杯になると思われる。内面に型押しで文様を施し、外面に鳳凰文を描く。首里城内では京の内跡SK01（沖縄県教委1998）や下之御庭ほか（沖縄埋文2001）で高足杯が出土しているが、鳳凰文の資料は初例である。

明代青花（第34～36図）

明代青花と分類したものは370点（うち最低個体数71点）出土している。器種は碗・鉢・杯・皿・盤・蓋・瓶・

壺・袋物が確認されており、その中から特徴的な資料53点を図化した。以下にそれぞれの分類概念を述べ、詳細は第8表に記す。

第7表　青花出土状況

器種分類			残存部位	小計	合計	最低個体数
元様式	碗		底部	2	18	10
	盤		口縁部	2		
			底部	3		
			全形	1		
	瓶		口縁部	1		
			底部	1		
			胴部	3		
	器台		全形	1		
	高足杯		口縁部	1		
	片口？		底部	1		
	袋物		胴部	1		
	蓋		口縁部	1		
明代	碗	Ⅰ類	口縁部	41	85	31
			底部	9		
		Ⅱ類	口縁部	11		
			底部	3		
			全形	2		
		不明	底部	19		
	小碗・小杯		口縁部	7	15	8
			底部	8		
	皿		口縁部	11	14	2
			底部	2		
			全形	1		
	盤		底部	5	5	5
	鉢		胴部	7	13	6
			底部	6		
	壺・袋物		口縁部	3	130	3
			胴部	108		
			底部	3		
			蓋	16		
	瓶		口縁部	6	100	8
			胴部	86		
			底部	8		
	器種不明		不明	8	8	8
	合　計			388		81

碗（第34図）

Ⅰ類…腰部が張り端反口縁を呈する薄手の碗。小野分類（小野1982）の碗Ｂ群に相当するもので、外面にいわゆる「雲堂手」の文様や唐草文、折枝梅文などを描く（17～33）。

Ⅱ類…小野分類（小野1982）の碗Ｃ群に属する直口口縁の碗で、内底がわずかにくぼむが典型的な「蓮子碗」にならないもの。外面に浮草文や唐草文などを描く（34～38）。

鉢（第35図39、42、43、45～48）

鉢は口径の大きい直口鉢で、通常の平口縁のもの（39、42、47、48）と全体を八弁花状に成形する輪花鉢（43、45、46）がある。42は首里城跡下之御庭ほか（沖縄埋文2001ｂ）に類例がみられる。43はいわゆる「雲堂手」の文様を描くもので、新潟県・至徳寺遺跡（上越市史専門委員会考古部会2003）で同種の製品が出土している。

杯（第35図41）

杯は１点出土している。内底に折枝梅文？を描くもので、口縁部が外反する小杯の底部と想定される。

皿（第35図40、44）

40は逆「ハ」の字形に広がる薄手の皿で、外面に花唐草文、内面に雷文を廻らせる。44は器高の低い端反口縁の大形皿で、小野分類（小野1982）の皿Ｂ群に相当する。外面に花唐草文を描く。

盤（第35図49、50）

盤は２点図化した。いずれも鍔縁口縁と考えられる底部資料である。外面のラマ式蓮弁文や内底露胎など元様式青花と共通の特徴がみられるが、呉須の発色や高台内刳りの削り出し方法から明代青花として扱った。

瓶（第36図51、52、54、57、58、62～69）

51はラッパ状に大きく開く口縁部で、器種は大瓶と想定されるが判然としない。52、54、57は梅瓶と考えられる。52と57は大形の梅瓶の胴部で、いずれも外面に唐草文を描く。54は小形の梅瓶の底部で、外面に雲文を描く。58は花瓶の底部と思われるもので、外面に花弁文？を描く。62～69は玉壺春瓶で、通常の外面形態のもの（62～65、68、69）と八角形に面取りしたもの（66、67）がある。文様は外面に人物文や花唐草文などを描く。

蓋（第36図53、55）

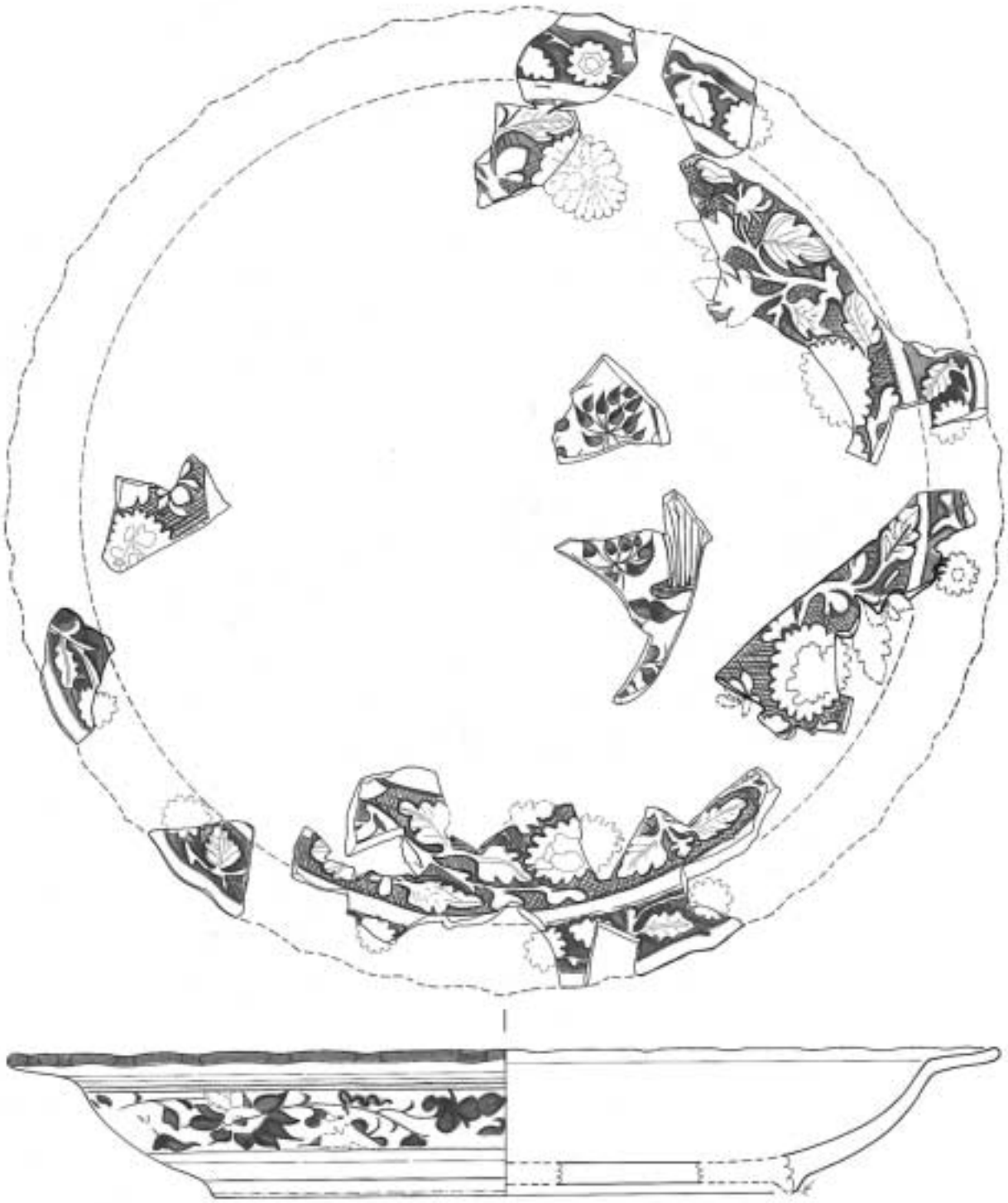
53は梅瓶の蓋で、外面に唐草文などを描く。55は撮基部が残る破片資料で、小形の酒会壺に対応するものと思われる。外面に花弁文を描く。

壺（第36図59～61）

壺はいわゆる酒会壺の範疇に含まれるものである。59は口縁部資料で、外面に雷文を廻らせる。60は小形の酒会壺で、外面に唐草文などを描く。首里城跡京の内跡SK01（沖縄県教委1998）に類例がある。61は底部で、円盤を貼り付けて成形している。小破片のため文様の詳細は不明。

袋物（第36図56）

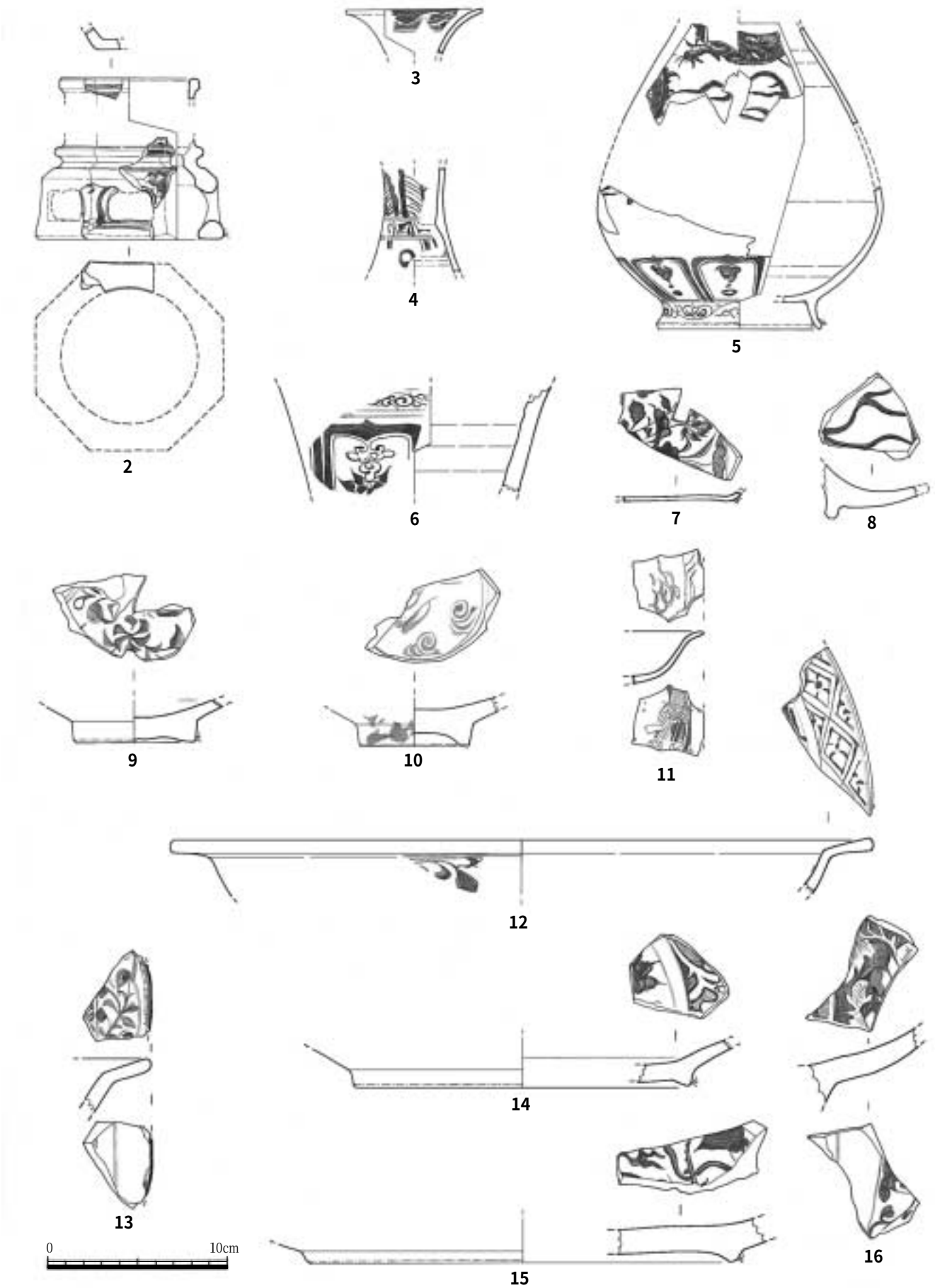
56は平底の底部からほぼ垂直に立ち上がるもので、器種を特定し難いため袋物とした。外面に蕉葉文を描く。



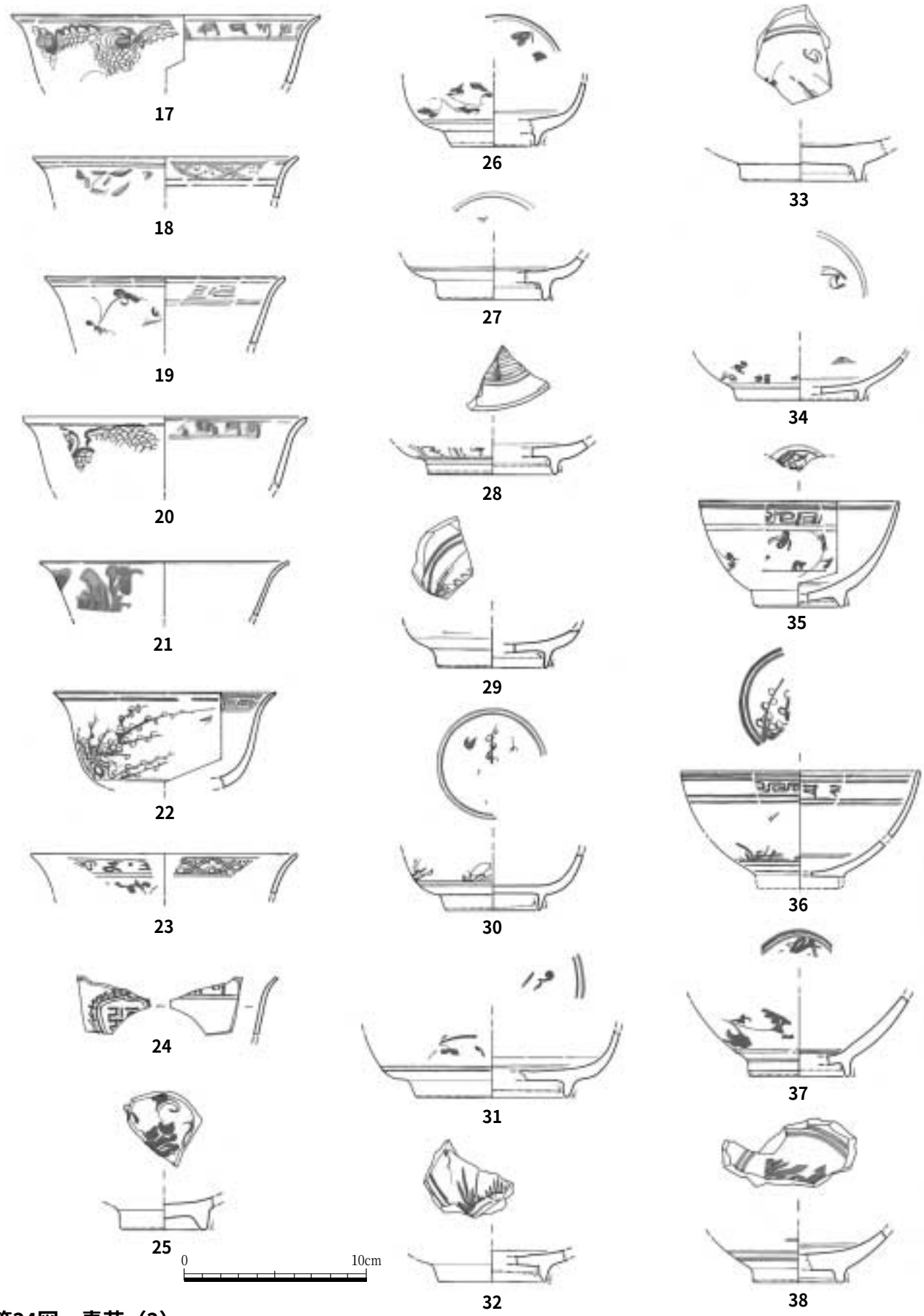
1

0　10cm

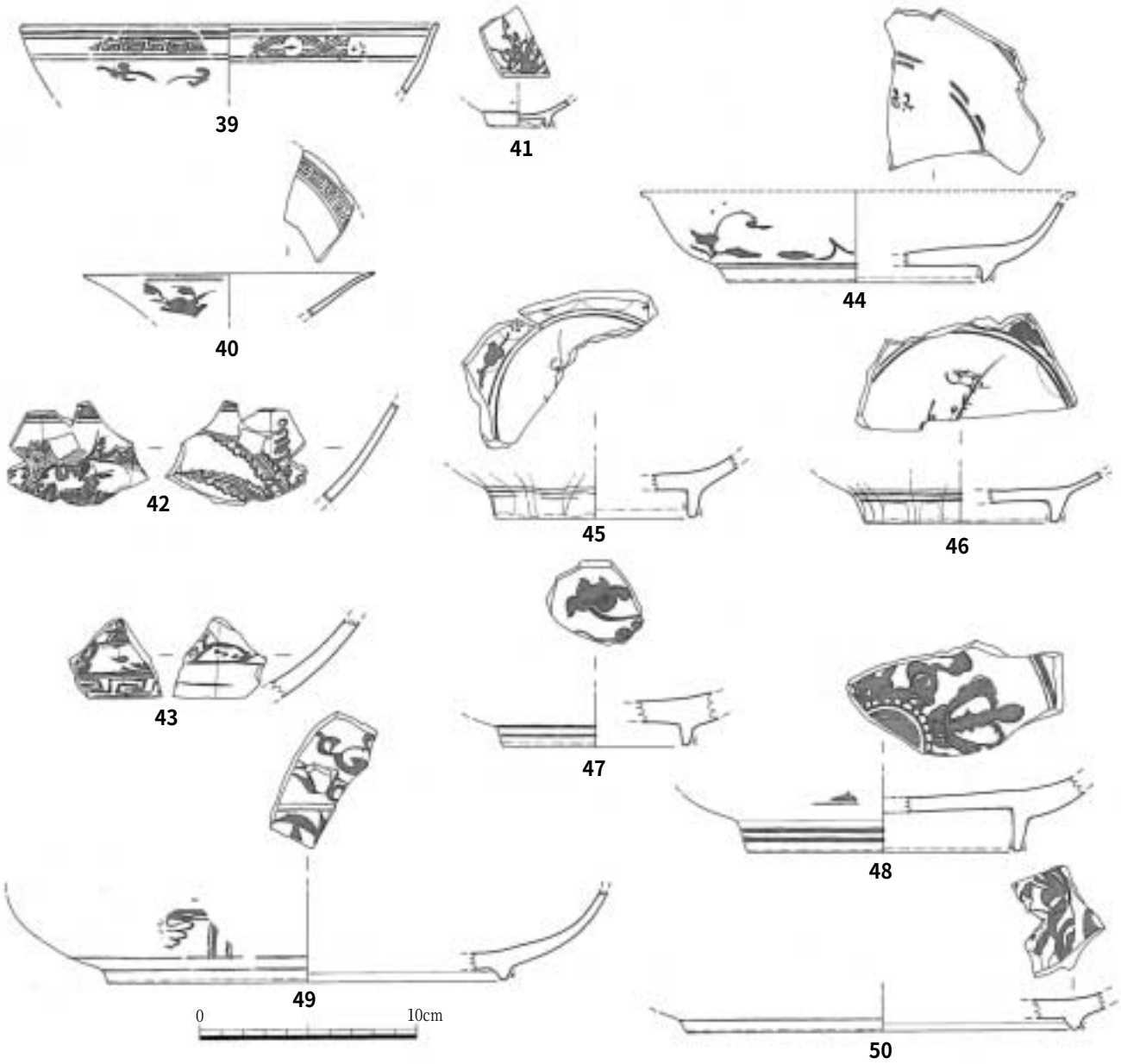
第32図　青花（1）盤



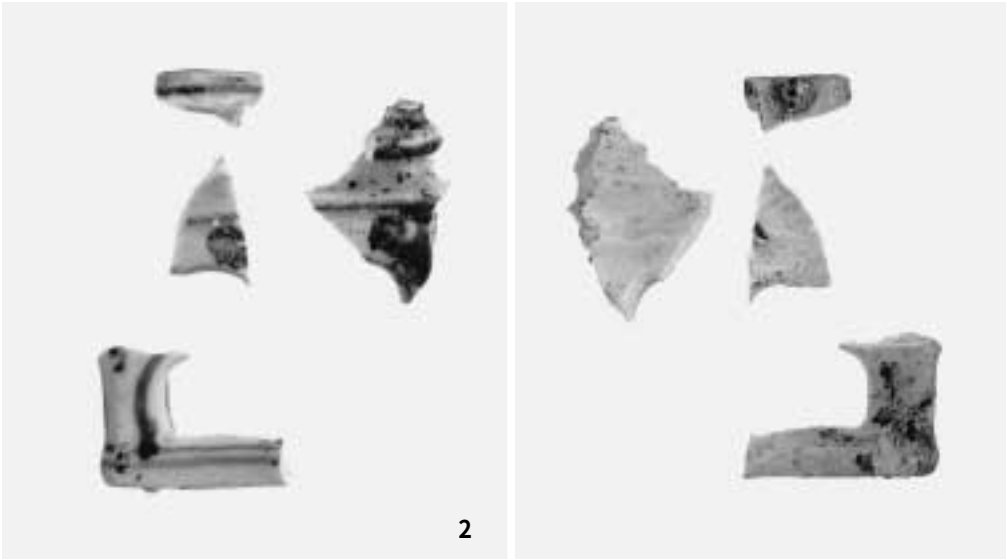
第33図　青花（2）



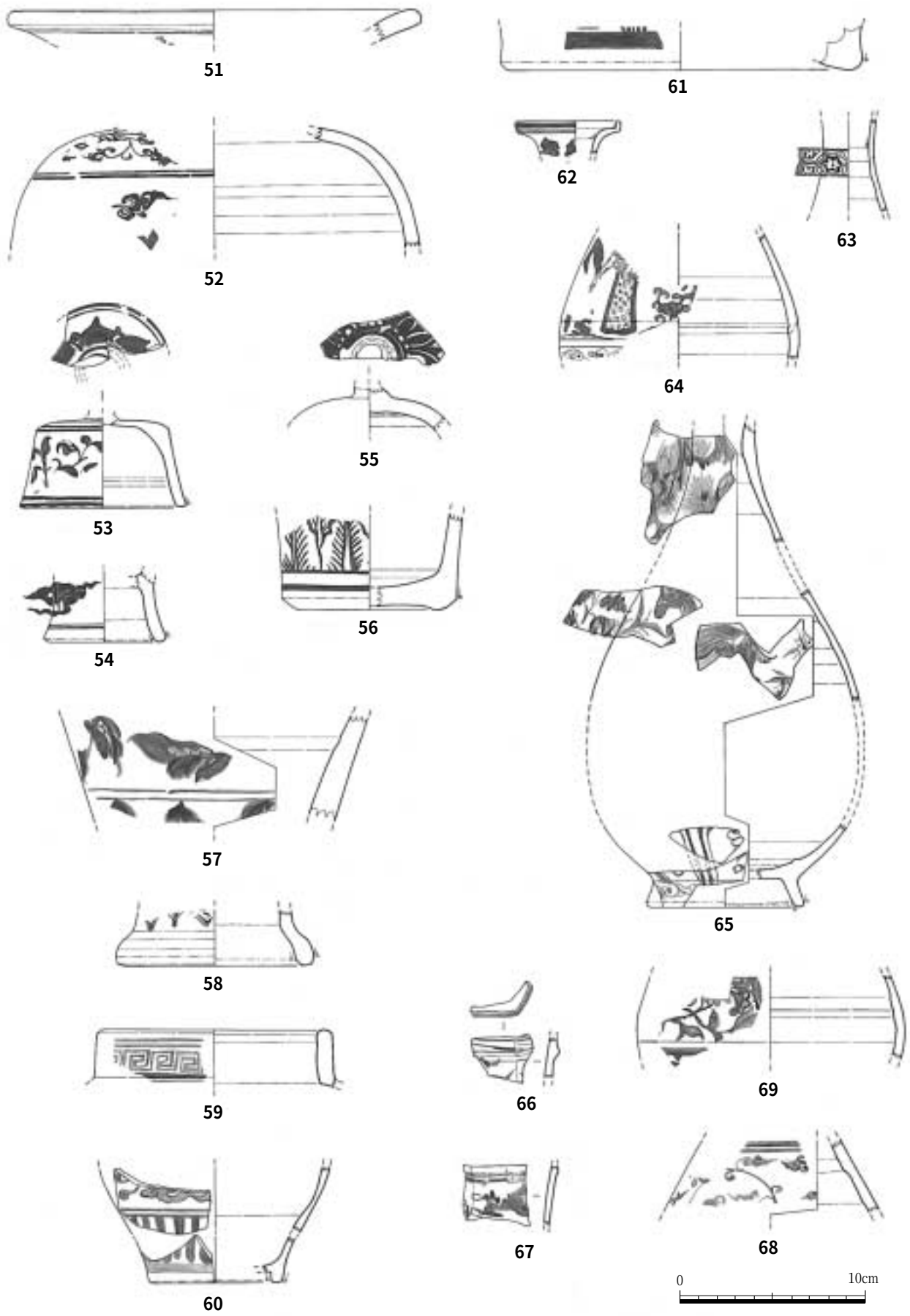
第34図　青花（3）



第35図　青花（4）



図版55　青花（5）左：外面　右：内面



第36図　青花（5）

第8表　青花観察一覧

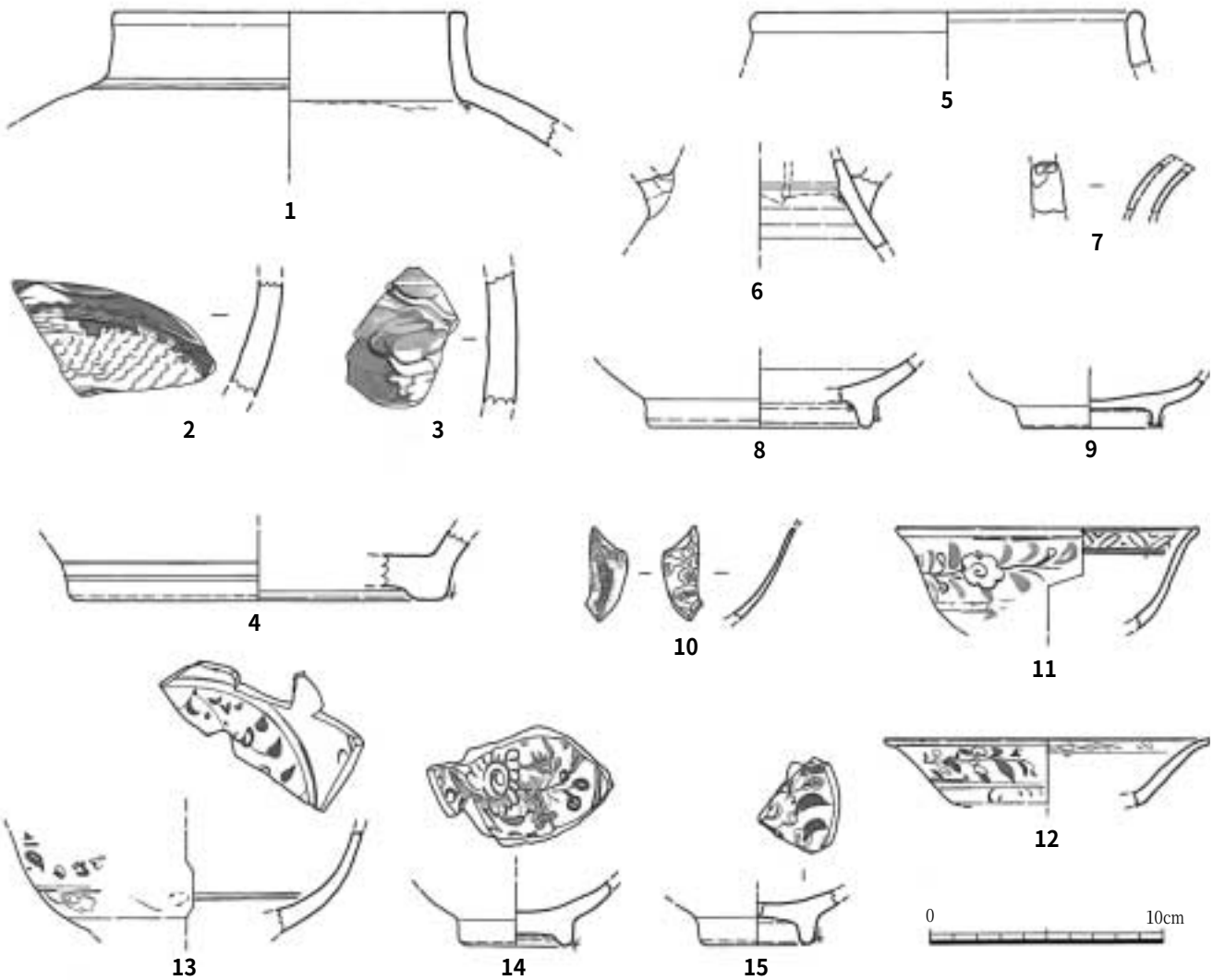
単位:cm

	図・図版番号			器種・分類	口径	器高	底径	観　察　所　見
元様式青花	第32図	図版27	1	盤	44.6	6.5	26.4	口藍。外面胴部は二重界線内に牡丹唐草文、鍔上面はダミ地に白抜きの牡丹唐草文を貼付、内面胴部は細かい斜格子の地に白抜きの牡丹唐草文を貼付、内底に蓮池文。内底から高台外面まで施釉。
	第33図	55	2	器台	7.8	(9.0)	10.5	外面に区画線、垂花文、二重界線。外底は露胎。若干被熱あり。
		27	3	瓶	7.6	—	—	口藍。内面口縁部に界線で挟んだ波濤文帯。全体に石灰が付着。
			4		—	—	—	外面に蕉葉文、雷文帯、下向きのラマ式蓮弁文。
			5		—	—	9.0	外面胴部に雲龍文とラマ式蓮弁文、高台外面に蔓唐草文。外面全体に施釉後、畳付の釉薬を掻き取る。
			6		—	—	—	外面に界線で挟んだ蔓唐草文、ラマ式蓮弁文(蓮弁内に下向きの牡丹文)。若干被熱か？
			7	片口	—	—	—	内底は圏線内に蓮華文(蓮束文？)。内底から外面腰部まで施釉し、外底は露胎。
			8	蓋	—	—	—	蓋甲全体に曲線(葉脈を表現)、庇端部を着色。裏面は露胎。若干被熱あり。
		28	9	碗	—	—	6.8	内底は二重圏線内に草花文(菊花文？)。内底から高台外面まで施釉し、外底は露胎。呉須の発色は不良。全体的に被熱。
		27	10		—	—	6.0	内底は二重圏線内に雲文と鳳凰文。内底から高台外面まで施釉し、畳付付近の釉薬を掻き取る。呉須の発色は不良。全体的に被熱。
			11	高足杯	—	—	—	外面に鳳凰文、内面口縁部に雷文帯、胴部に型押し文様(鳳凰文？)。全体的に被熱。
			12	盤	39.2	—	—	外面は二重界線内に花唐草文(牡丹か海石榴華？)、鍔上面は四方襷文、内面胴部に花唐草文。全体的に被熱。
			13		—	—	—	口藍。外面胴部に界線、鍔上面に鉄線唐草文、内面胴部に波濤文の地に文様(白抜きの牡丹唐草文？)。全体的に被熱。
			14		—	—	18.8	内面胴部は波濤文の地に白抜きの花唐草文(牡丹？)、内底は圏線内に葉文(牡丹の葉？)。内底から高台外面まで施釉。全体的に被熱。
			15		—	—	23.4	内底に草花文。内底から高台外面まで施釉。全体的に被熱。
			16		—	—	—	外面に界線と花唐草文、内面胴部はダミ地に白抜きの花唐草文(牡丹？)、内底は波濤文の地に文様を描くが詳細は不明。
明代青花	第34図	28	17	碗／Ⅰ類	17.0	—	—	外面に界線と雲文、内面は二重界線内に梵字文を描くが不明瞭。若干被熱あり。
			18		14.6	—	—	外面は二重界線と牡丹唐草文、内面は二重界線内に四方襷文。全体的に被熱。
			19		13.2	—	—	外面は二重界線内に花唐草文(牡丹？)、内面は二重界線内に雷文帯。全体的に被熱。
			20		15.6	—	—	外面に界線と雲文、内面は二重界線内に梵字文を描くが不明瞭。若干被熱あり。
			21		13.7	—	—	外面に牡丹唐草文を描くが不明瞭。全体的に被熱。
			22		12.2	—	—	外面は二重界線内に折枝梅文、内面は二重界線内に雷文帯。
			23		14.6	—	—	外面は二重界線内に梵字文、花唐草文(牡丹？)、内面は二重界線内に四方襷文。
			24		—	—	—	外面にラマ式蓮弁形窓絵(内側に「福」？)、内面は二重界線内に梵字文。
			25		—	—	4.8	内底に牡丹文。内底から高台外面まで施釉し、畳付付近の釉薬を掻き取る。全体的に被熱し、高台外面に陶片が溶着。
			26		—	—	4.6	外面は牡丹唐草文と二重界線、内底は二重圏線内に不明文様(折枝梅？)。全面に施釉後、畳付の釉薬を掻き取る。全体的に被熱。
			27		—	—	5.6	外面は二重界線、内面は二重界線内に不明文様。全面に施釉後、畳付の釉薬を掻き取る。若干被熱あり。
			28		—	—	7.1	外面にラマ式蓮弁文、高台外面に二重界線、内底は二重圏線内に草花文(蓮池文？)。全面に施釉後、畳付の釉薬を掻き取る。
			29		—	—	6.1	外面は二重界線、内面は二重界線内に折枝梅文。全面に施釉後、畳付の釉薬を掻き取る。若干被熱あり。
		29	30		—	—	5.1	外面は二重界線内に折枝梅文、内面は二重界線内に梅月文。全面に施釉後、畳付の釉薬を掻き取る。
		28	31		—	—	8.0	外面は花唐草文(牡丹？)と二重界線、内底は二重圏線内に不明文様(吉祥字？)。全面に施釉後、畳付の釉薬を掻き取る。
			32		—	—	5.9	内底は二重圏線内に草花文(折枝梅？)。全面に施釉後、畳付の釉薬を掻き取る。外面に石灰が付着。
		29	33		—	—	6.4	外面に界線、内底は二重圏線内に折枝梅文。全面に施釉後、畳付の釉薬を掻き取る。全体的に被熱。
		28	34	碗／Ⅱ類	—	—	7.0	外面は花唐草文(牡丹？)と二重界線、内底は二重圏線内に草花文。全面に施釉後、畳付の釉薬を掻き取る。

第8表　青花観察一覧

単位：cm

	図・図版番号			器種・分類	口径	器高	底径	観察所見
明代青花	第34図	図版29	35	碗／Ⅱ類	11.0	5.9	4.6	外面口縁部は二重界線内に雷文帯、胴部に花唐草文（牡丹？）、内面口縁部に界線、内底は二重圏線内に不明文様（折枝梅？）。全面に施釉後、畳付の釉薬を掻き取る。呉須の発色は不良。
			36		13.1	(6.5)	(4.8)	外面口縁部に二重界線で挟んだ雷文帯、胴部に浮草文、内面口縁部に二重界線で挟んだ梵字文、内底は二重圏線内に折枝梅文。
			37		—	—	5.4	外面胴部に花唐草文（牡丹？）と二重界線、内底は二重圏線内に草花文（梅花文？）。全面に施釉後、畳付の釉薬を掻き取る。呉須の発色はやや不良。全体的に被熱。
		28	38		—	—	5.1	外面に二重界線、内底は二重圏線内に浮草文（蓮池文？）。全面に施釉後、畳付の釉薬を掻き取る。全体的に被熱。
	第35図	29	39	鉢	19.2	—	—	外面は二重界線内に雷文帯、花唐草文（牡丹？）、内面は二重界線内に四方襷文。
		28	40	皿	13.4	—	—	外面は二重界線と牡丹唐草文、内面は二重界線内に雷文帯。全体的に被熱。
		29	41	杯	—	—	2.8	外面に界線、内底に折枝梅文。全面に施釉後、畳付の釉薬を掻き取る。
			42	鉢	—	—	—	輪花鉢。外面口縁部は二重界線内に波濤文帯、胴部に松文、内面口縁部は二重界線内に四方襷文、胴部に芭蕉文。
			43		—	—	—	輪花鉢。両面ともいわゆる「雲堂手」の風景図。
			44	皿	(20.0)	(4.2)	11.8	外面胴部に牡丹唐草文と二重界線、内面口縁部に二重界線、内底は二重圏線内に折枝梅文。全面に施釉後、畳付の釉薬を掻き取る。全体的に被熱。
			45	鉢	—	—	9.0	輪花鉢。高台外面に三重界線、内面胴部に花唐草文、内底は二重圏線内に折枝梅文。全面に施釉後、畳付の釉薬を掻き取る。全体的に被熱。
			46		—	—	8.8	輪花鉢。高台外面に二重界線、内面胴部に花唐草文、内底は二重圏線内に折枝梅文。全面に施釉後、畳付の釉薬を掻き取る。全体的に被熱。
			47		—	—	8.4	高台外面に二重界線、内底は草花文。全面に施釉後、畳付の釉薬を掻き取る。全体的に被熱。
			48		—	—	12.4	外面は不明文様と界線、高台外面に二重界線、内底は二重圏線内に羯磨文。全面に施釉後、畳付の釉薬を掻き取る。全体的に被熱。
		30	49	盤	—	—	18.3	外面にラマ式蓮弁文、内面胴部に花唐草文、内底は二重圏線内に草花文。内底から高台外面まで施釉。全体的に被熱し、内面に陶片が溶着。
		29	50		—	—	17.8	内面胴部に不明文様、内底は圏線内に草花文。内底から高台外面まで施釉。全体的に被熱。
	第36図	30	51	瓶	22.4	—	—	外面に二重界線と不明文様（花唐草文？）。全体的に被熱。
		29	52		—	—	—	外面に花唐草文（海石榴華？）、二重界線、牡丹唐草文。
		30	53	蓋	（庇径）9.0	—	—	外面に花弁文、二重界線、花唐草文（牡丹？）。内面は露胎。全体的に被熱。
			54	瓶	—	—	6.6	高台外面に瑞雲文と二重界線。全面に施釉後、畳付の釉薬を掻き取る。全体的に被熱。
			55	蓋	—	—	—	外面に花弁文（蓮弁文？）。内面は露胎。全体的に被熱。
			56	袋物	—	—	7.8	外面に蕉葉文と二重界線。内底から外面腰部まで施釉し、外底は露胎。全体的に被熱。
		29	57	瓶	—	—	—	外面に牡丹唐草文、二重界線、蕉葉文。
			58		—	—	10.6	外面に下向きの花弁文。外面に施釉後、畳付の釉薬を掻き取る。
		30	59	壺	12.0	—	—	外面口縁部は二重界線内に雷文帯、胴部以下の文様は不明。内面口縁部以下は露胎。全体的に被熱。
			60		—	—	7.2	外面胴部に雲龍文？と二重界線内に花弁文（ラマ式蓮弁文を簡略化したもの？）。全面に施釉後、畳付の釉薬を掻き取る。全体的に被熱。
			61		—	—	18.4	外面に界線。外底は露胎。
			62	瓶	5.6	—	—	外面口縁部に二重界線、頸部に蕉葉文。全体的に被熱。
			63		—	—	—	外面頸部に界線で挟んだ花七宝文。全体的に被熱。
			64		—	—	—	外面胴部に人物文と霊芝文、腰部に二重界線と蔓唐草文。全体的に被熱。
			65		—	—	8.2	外面胴部に松文と馬文（騎馬人物文？）、腰部にラマ式蓮弁文、高台外面に界線で挟んだ蔓唐草文。外面全体に施釉後、畳付の釉薬を掻き取る。呉須の発色は不良。若干被熱あり。
			66		—	—	—	角瓶。外面に二重界線と不明文様。
			67		—	—	—	角瓶。外面に二重界線と草花文（牡丹）。全体的に被熱。
		29	68		—	—	—	外面に二重界線と牡丹唐草文。
		30	69		—	—	—	外面に牡丹唐草文とラマ式蓮弁文。若干被熱あり。



第37図　色絵・釉裏紅・瑠璃釉・他磁器

D．色絵・釉裏紅・瑠璃釉・他磁器（第37図）

これまで記述した以外の磁器で、色絵・釉裏紅・瑠璃釉などを扱う。これらも多くは火を受けている。

紅釉は破片７点出土している。１～４は釉裏紅で、短頸壺の同一の破片と思われる。１は口縁である。口径15.0cm。２は龍の鱗、３は雲気文かと思われる文様を線刻で表現する。４はやや上げ底状の底部である。底径15.8cm。外面には２条の圏線が廻る。10は内面に浮き彫りの文様の白磁碗と思われる破片だが、外面が浮き彫りの文様と紅釉が塗布される。ただ、破片であるので、全面に塗られるかは不明である。

瑠璃釉は破片数で30点出土している。５は壺の口縁であろうか。口径17.0cm。６は瓶もしくは水注の胴部で、把手がつくのであろうか。内面は白濁色の釉である。７は水注の注口と思われ、京の内跡のものを参考にした（沖縄県教委1998第70図）。８は壺か瓶などの底部と思われる。底径9.6cm。

褐釉磁器は碗が破片で６（底部２）点出土している。９は碗で、高台畳付のみ釉剥ぎされる。底径5.8cm。

色絵は白磁に赤・黄・緑の顔料で絵付けしたいわゆる五彩である。碗98点（内底部７点）、皿１点の合計99点が出土している。11は外反碗で、赤で圏線と花弁と茎、黄緑で葉の表現をしている。口径12.8cm 。12は外反皿で、器形は本報告の景徳鎮産白磁Ⅰ類に近い。外面は花唐草文、内面口縁は蔓唐草文であるが、顔料は黒色であるが被熱のためと思われる。口径13.9cm。13は碗胴部であるが11よりも大きい。顔料は黄緑と黒色だが、後者は被熱のためか。14は碗底部で、高台は抉られている。見込みは圏線内に菊花文で、赤が花弁・茎で、黄緑が葉で表現される。外底露胎。底径4.6cm。15も碗底部だが、14に比べると高台はしっかりと抉られている。文様も14と同様だが、顔料は被熱のためか黒色となっている。外底露胎。底径4.4cm。

E．褐釉陶器（第38・39図）

今回、褐釉陶器に扱った資料は、中国南部産とみられ、釉鉄分による褐色･暗褐色系の色調に特徴づけられる陶器で、耳壺(四耳壺ほか)や壺(無耳壺)・盤・鉢・捏鉢・擂鉢・水注などいわゆる雑器類で主に構成される。県内の既報告における当該資料は、内容的には四耳壺が大半であり、壺以外の器種では鉢や擂鉢・水注などが若干量ある程度である。本地区出土の中国産褐釉陶器は、60×40×10cmコンテナ約９箱分、口縁部および底部では計138点得られており、既報告資料と同様、器種構成は大形壺(四耳壺)が量的に主勢にある状況だが、小形製品も一定量得られている点で留意される。器形復元が可能な資料･器形的な特徴が窺えるものを中心に31点を図化した。

以下、素地･混入物による分類（１.２.…）を主体とし、器形分類（Ⅰ.Ⅱ.…）との対応関係を検討する。

（素地・混入物による分類）

博多遺跡群や大宰府条坊跡における陶器分類（森本1984、山本2000）を参考に、素地の質感･色調や混入物について、基本的に下記の１～３類にグルーピングした。以下、各類の内容を簡記する。

１類. 素地は黄灰･橙色系の明るい色調で、感覚的には粉味を帯び軟らかい印象を受ける。施釉は丁寧で光沢や透明感は感じられない。黄色～茶色味を帯びた明るいもの（３）や黒釉（17）があり、生産地的な差異も留意される。混入物では、石英に似た半透明色鉱物粒や白色粒が目立ち、黒色鉱物微粒も僅量ながら認められる。内容的に博多分類のＡ群、大宰府分類Ｃ群に近く、広東系の一部、磁灶窯系製品も概ね本類で捉え得ると思われる。

２類. 概ね暗灰･褐灰～灰色の暗い色調で、焼成堅緻な感を受ける。浙江省系製品や洪塘窯製品も本類に含まれる。混入物･釉の観察から産地の異なる複数のタイプがあると思量される。今回は、下記の(ⅰ)～(ⅱ)に類別した。

２(ⅰ)類 …概ねセメントに似た質感で粗く、素地の色調は灰色が強いもの（２・９ほか）や微かに暗紫色がかった印象を受けるもの（11・12ほか）がみられる。透明色粒･白色粒（砂礫や鉱物質粗粒）の混入量が顕著な点も本類の大きな特徴である。博多分類における「その他群を構成するに至らない大形容器」（森本1984）に類しており、大宰府分類の鉢Ⅰ-３類や水注Ｘ類にも素地･混入物の状況がよく似る。本類は、洪塘窯産製品の大形器種（捏鉢･四耳壺）に素地質感･混入物等の特徴が酷似しており、あるいは洪塘窯産製品の蓋然性も高く思量される。

２(ⅱ)類 …基本的には(ⅰ)類以外の製品を本類で扱った。(ⅰ)類に比べて素地粒度はより細かく白色粒(砂礫)の混入もみられるが明らかに少ないもの（５・16）、かなりきめ細かな素地に黒色鉱物微粒が全体に若干量入るもの（27）などがある。後者の場合、博多分類Ｂ群＝浙江省系の特徴にも似るが、緑色味の強い釉調は認められずやや異なる。

３類. 上記分類のいずれにも該当しないその他のもの（肉眼観察で曖昧なものも含む）。

器形分類は、出土量が多い大形壺を対象に行った。以下、器形分類に準拠し、各器形と素地･混入物分類との対応関係についても簡単に述べる。

大形壺（第38図１～14） 四耳壺が中心。口縁部断面観や頸部の形状等からⅠ～Ⅱ類に大きく類別した。

Ⅰ類（３～９）

膨らむ肩部から口頸部が内傾気味に(「フ」字状)に立ち上がる。口縁部断面観は略「コ」字状･方形状を呈し、略「コ」字状(Ⅰａ類)⇒断面方形状(Ⅰｂ類)とみられる。断面方形状口縁ではさらにバリエーションもあるが、時期差もしくは地域的な差異によるものか単に個体差なのか、類例を含めた検討も望まれる。素地等分類は1類および2(ⅱ)類が多い。

３は、Ⅰａ-１類（略「コ」字状口縁）で広東系の可能性も考えられる。４～９は断面方形状を呈するⅠｂ類で、県内の既報告資料でも比較的多く認めるタイプである。首里城京の内分類Ⅰ類壺と同タイプだが、京の内跡ＳＫ01では推定個体数86点と多数あるが、本地区のⅠｂ類（断面方形状口縁）は19点とその個体数に明確な差を認める。

Ⅱ類（１･２･10～12）

頸部が直状に立ち上がるタイプ。頸部が短く小さな断面三角状口縁＋明瞭な突出を伴うもの（Ⅱａ類）、口頸部が発達し玉縁状口縁を呈するもの（Ⅱｂ類）がある。Ⅱａ類⇒⇒Ⅱｂ類と考えられる。殆どが素地分類２(i)類

第9表　褐釉陶器出土状況

器種･分類					小計	合計
大形壺	1類		口縁部	Ⅰa類	1	15
				Ⅰb類	2	
			底部		12	
	2類	(ⅰ)	口縁部	Ⅰb類(?)	1	6
				Ⅱa類	2	
				Ⅱb類	3	
			底部		0	
		(ⅱ)	口縁部	Ⅰb類	11	20
			底部		9	
	3類		口縁部	Ⅰb類	5	35
				分類不詳	15	
			底部		15	
鉢	2(ⅱ)類		口縁部		2	2
小形製品	1類		口縁部		1	5
			底部		4	
	2類	(ⅰ)	口縁部		4	11
			底部		7	
		(ⅱ)	口縁部		13	21
			底部		8	
	3類		底部		5	5
	白釉陶器		口縁部		14	18
			胴部(耳あり)		4	
合計					138	
最低個体数(底部数)					60	

に対応する。

１・２は、博多分類ｋ「その他群を構成するに至らない大形容器」の短頸壺と同タイプの大形壺である(Ⅱａ類)。

10～12はⅡｂ類である。Ⅱ類壺に著しく被熱した例が多い、該資料における時期差を考える上で留意される。閩江下流域産(洪塘窯か)の蓋然性が類推される２(ｉ)類は、博多遺跡群や大宰府条坊跡に類例も複数あるが、首里城跡京の内ＳＫ01資料には殆ど観取されない。Ｉｂ類（断面方形状口縁）における個体数差もあわせて、京の内跡ＳＫ01資料との時期差が介在する公算は高いかと思量される。

中･小形壷（第38図15～第39図17）　15・16は器形プロポーション的にはＩ類に近く、首里城下之御庭跡（沖縄埋文2001：第35図４・９ほか）をはじめ既報告資料にも類例は複数ある。17は薄手成形で素地･混入物や釉の状況から磁灶窯系の可能性も類推される。同様な壷が京の内跡ＳＫ01資料などにもみられる（沖縄県教委1998：第74図16)。

鉢　諸事情で、図化し得なかったが、鉢の口縁部が２点確認された。口縁部の内側が断面玉縁状に突出しており、その下位にも微弱な隆帯を認める。博多遺跡群･大宰府条坊跡でも比較的よくある鉢･捏鉢と同タイプと思われ、県内でも類例はあまり見られない。素地･混入物分類は大形壺Ⅱ類と同様２(ｉ)類であり、明らかな被熱を認める。

小形製品（第39図18～31）　器形分類は行わず、個々の観察に止めた（第10表)。

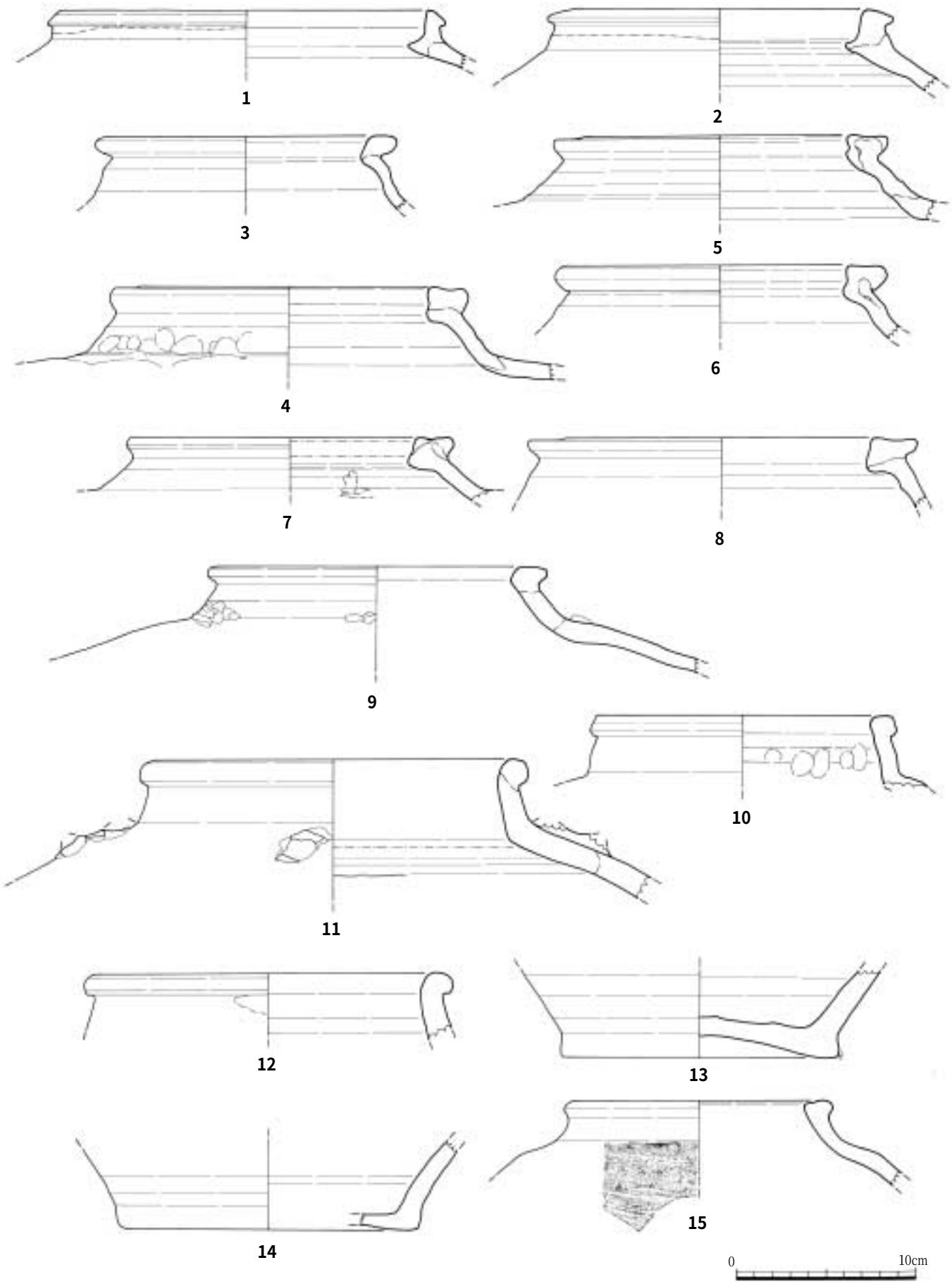
18～21は頸胴部から口縁端にかけて曲線状に外反し、口縁部断面観も玉縁状で概ね共通する。20を除き明らかな被熱を認める。留意されるのが18・20および23において白濁色の釉がなされている点である。同様な器形の白釉陶器壺は天界寺跡（那覇市教委2000：第45図６・７）ほかにみられる。23もいわゆる白釉陶器で素地･混入物の特徴は21に酷似する。22は壺以外の器形の公算が高い。24は盤口壺とみられるが小破片で器形は不詳。25は薄胎施釉陶器（田中2001）に含め得るか。26・27はともに無頸で、前者は球状に膨らむ体部に縦耳がつき、後者はスマートに胴へ移行する。28は胴部片で被熱もあり判然としないが、素地等分類２(ⅱ)類のなかで一際釉調は緑色味を帯び、回転成形痕も明瞭に残る点など、博多分類Ｂ群に類した特徴が窺える。29～31は小形壺の底部でそれぞれ外底に特徴が観取される。

第10表　褐釉陶器観察一覧（1）

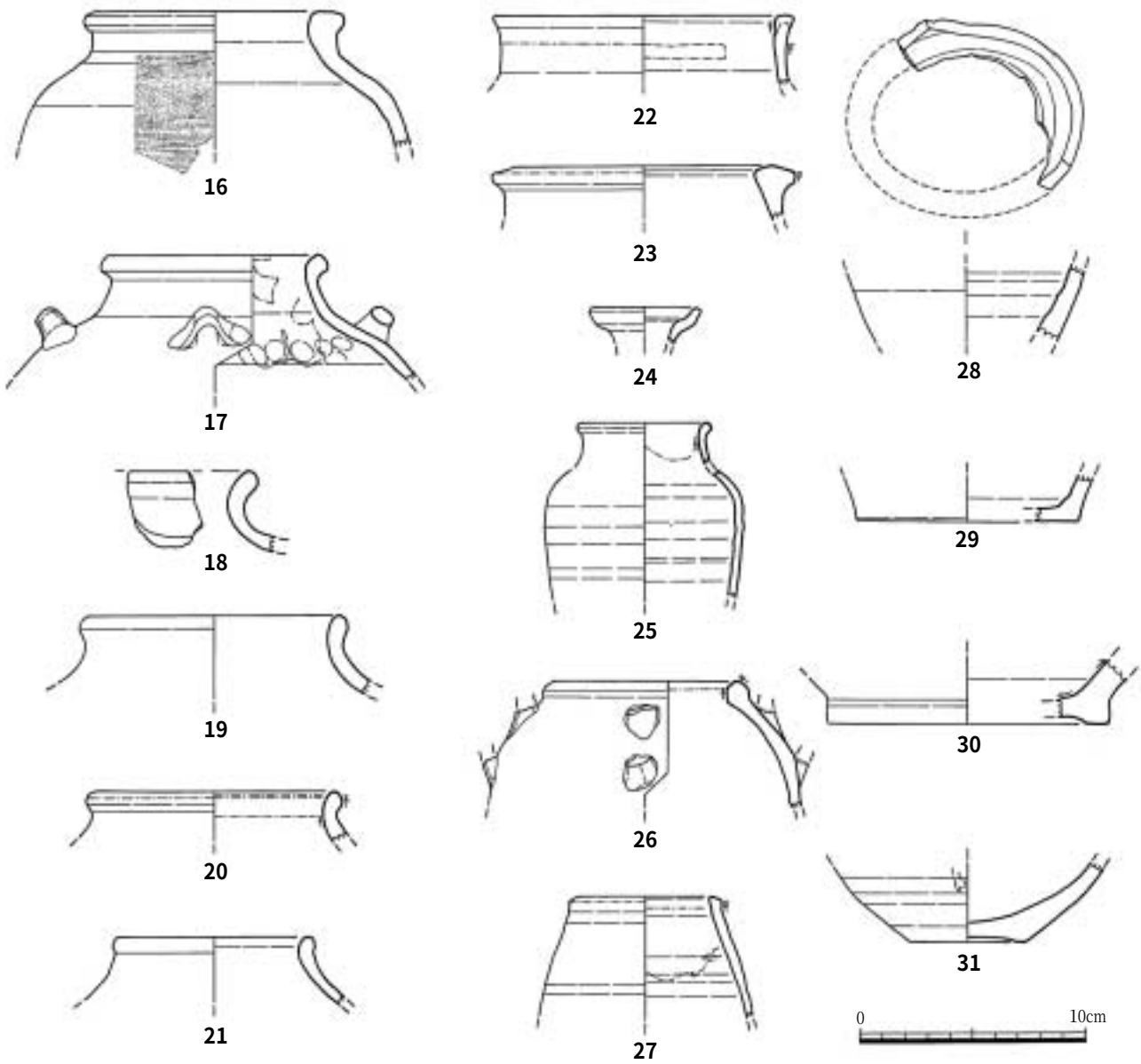
単位:cm

図・図版番号			器種	分類 胎土等	分類 器形	法量 口径	法量 器高	法量 底径	素地･混入物	釉状況	その他の特徴	備考等
第38図	図版32	1	大形壺	2(ｉ)	Ⅱａ	20.6	—	—	素地は褐灰色で、やや粗粒(No2に比べ精良な観).半透明鉱物粒･白色粒(全体にあるがNo2より少量).	黒褐色(微かにオリーブ味帯びる)釉を外面の口縁肥厚直下まで施釉.	No2より小振りな造り..破損面で粘土空隙(ピンホール)若干認める.	洪塘窯産か.
		2		2(ｉ)	Ⅱａ	16.4	—	—	素地は灰色、セメントに似た質感で粗部.半透明鉱物粒.白色粒(全体に顕著).	被熱で保持悪く不詳.施釉範囲は外面口縁部下まで.露胎部に擦痕.	明らかな被熱.No1と同タイプだが全体に厚手.粘土空隙が若干みられる.	洪塘窯産か.
		3		1	Ⅰａ	15.8	—	—	素地は灰黄色(淡黄白色)で、粉味帯びきめ細か.半透明粒･白色粒.黒色微粒(ともに少量).	黒褐色釉(やや茶を帯びる)を比較的丁寧に全面施釉.	略「コ」字状を呈した口縁部断面観.	広東系とみられる.
		4		2(ⅱ)	Ⅰｂ	19.6 (16.4)	—	—	素地は灰褐～にぶい赤褐色で、やや粗粒.半透明粒･白色粒(全体に少量).黒色微粒.	黒褐～暗オリーブ褐色釉を内外に施釉.口縁上面は粗雑に掻き取り.	肩部付近に工具痕(？)らしき凹凸.素地や釉調はNo8に近似.	素地がやや小豆色に近い点で気になる.
		5		3	Ⅰｂ	18.5 (14.8)	—	—	素地は褐灰色･芯部は灰黄褐で、比較的粗粒.半透明鉱物粒･白色粒(全体に多量).黒色微粒.	黒褐色(チョコレート色)釉を内外施釉.口縁部上面～内面掻き取り.	全体に轆轤成形による凹凸明瞭.口縁内突起と口縁上面の間隔狭く、凹線状を呈する.	
		6		1or3	Ⅰｂ	17.8 (14.4)	—	—	素地はにぶい褐(橙帯びる)･芯部灰色で、粉味帯びやや粗粒.半透明鉱物粒･白色粒.黒色微粒(ともに全体にあるが少量).	暗オリーブ褐色釉を内外に施釉.	破損面で粘土空隙みられる.器形プロポーションはNo3に似る印象.口縁部内面に微弱な突起.	
		7		2(ⅱ)	Ⅰｂ	17.8 (14.2)	—	—	素地は概ね灰色、やや粗粒.白色粒･褐色粒(全体にあるが少量)	黒褐色釉.口唇端･口縁内突起部は掻き取り.	口縁部上面に凹線めぐる.粘土空隙も若干認める.	
		8		2(ⅱ)	Ⅰｂ	21.8 (17.0)	—	—	素地は概ね灰褐色で、やや粗粒.半透明粒･白色粒.黒色微粒.褐色粒(ともに全体に混入･少量)	黒褐～暗オリーブ褐色釉を内外に施釉.口縁上面は雑に掻き取り.	口縁上面に微かな凹面あり,砂が熔着.	内容的に4によく似る.
		9		2(ｉ)	Ⅰｂ	19.0 (16.2)	—	—	素地は灰色で、粗粒.半透明鉱物粒･白色粒(全体に顕著).	被熱で保持悪く不詳.黒褐色か.口縁内まで施釉.	明らかな被熱みられ,肩部には砂熔着.	洪塘窯産か.
	33	10		2(ｉ)	Ⅱｂ	16.6 (14.8)	—	—	素地は褐灰色で、粗粒.半透明粒･白色粒(全体に顕著).	黒色釉を全面施釉.	口縁部断面観は方形状肥厚.内面頸部付近に指頭痕微かに残る.	洪塘窯産か.
	32	11		2(ｉ)	Ⅱｂ	19.8	—	—	素地は灰色で、粗粒.半透明鉱物粒･白色粒(全体に顕著).黒色微粒.	被熱のため一見無釉を呈すが、黒褐(チョコ色)釉が頸部内まで.	被熱あり.玉縁状口縁で直立した頸部内面に明瞭な角.器壁厚手、空隙も若干あり.縦耳4個と推量.	洪塘窯産か.
		12		2(ｉ)	Ⅱｂ	18.8	—	—	素地は概ね灰色で、半透明粒･白色粒=砂礫(全体に多量).	被熱で保持悪いが、黒褐釉か.口縁内まで施釉.	軽度の被熱認める.玉縁状口縁.No11と同様やや厚手な観.	洪塘窯産か.
	33	13		3	—	—	—	15.5	素地は概ねにぶい赤褐色で、やや粗粒.半透明色粒･白色粒.褐色粒.黒色微粒(少量).	黒褐色釉を全面に施釉.	上げ底.外底縁には砂熔着.内底に圏線.轆轤痕による凹凸明瞭.	
		14		2(ⅱ)	—	—	—	14.6	素地は褐灰色で、比較的粗流.半透明･白色粒.褐色粒.黒色微粒.	外面に灰色釉、黒褐(チョコ色)釉を施釉.	上げ底.外底に砂熔着.内底際と器壁に接合痕(空隙).轆轤痕明瞭.	白釉陶器. 洪塘窯系？
		15	中･小形壺	1	—	13.8	—	—	素地はにぶい黄橙で粗粒.黒色微粒.白色細粒･透明色粒(ともに全体に比較的顕著).	内外面に黒褐色釉を施釉.施釉状況は丁寧.	内傾気味の短頸.逆「L」字状口縁で上面に凹線.頸胴部境に沈線.胴部内外に工具当て痕･叩き痕残る.	
第39図	33	16		2(ⅱ)	—	11.0 (9.0)	—	—	素地はにぶい橙～黄橙で、やや粗粒.半透明粒･白色粒.黒色微粒.	オリーブ褐～黄褐色釉を全面施釉.	短頸、逆「L」字状口縁.胴部は薄手、内外に工具当て痕･叩き痕残る.	
		17		1	—	9.4	—	—	素地は灰白(淡黄白)～灰色で、細かく緻密.黒色微粒(全体に混入).半透明色粒(僅量).	黒釉を口縁内まで施釉(内面に釉垂れ).露胎部には回転擦痕.	被熱認める.頸胴部境に圏線.偏平な横耳(4個配置か).口縁部は断面玉縁状.内面に成形時指頭痕.	磁灶窯系製品か.
		18	小形製品	2(ｉ)	—	—	—	—	素地は灰色で、比較的粗粒か.半透明色粒･白色粒(砂礫).	釉保持悪いが、外面に灰白釉.口縁掻き取り.	明らかな被熱.微弱な玉縁状口縁.No19～21に比べ屈曲度合は強い.	いわゆる白釉陶器.
		19		2(ｉ)	—	11.2	—	—	素地は灰色で、比較的粗粒か.半透明色粒･白色粒(砂礫).	被熱で釉保持悪く、釉内容不詳.	明らかな被熱.頸部の屈曲緩やか.玉縁状で素地等もNo18とほぼ同様.	

口径値の括弧内数値は肥厚口縁の外縁で算出. 混入物は基本的には多く見られた順に記載. 色調はマンセル表色系に準拠.



第38図　褐釉陶器（1）



第39図　褐釉陶器（2）

第10表　褐釉陶器観察一覧（2）

単位:cm

図・図版番号			器種	分類 胎土等	分類 器形	法量 口径	法量 器高	法量 底径	素地・混入物	釉状況	その他の特徴	備考等
第39図	図版33	20	小形製品（小形壺）	2(ⅱ)	—	10.8	—	—	素地は灰色・芯部はにぶい褐色で、粉味帯びやや粗粒な観.半透明色粒・白色粒(砂礫).	灰白色釉を内外面施釉、口縁上面～口縁内にかけ釉掻き取り.	断面玉縁状で、器形的にNo19・21と共通.露胎部には轆轤痕による擦痕残る.	いわゆる白釉陶器.
		21		2(ⅰ)	—	8.6	—	—	素地は灰色で、比較的粗粒か.半透明色粒・白色粒(砂礫).	被熱で釉保持悪く、釉内容は不詳.	明らかな被熱認める.器形・素地等もNo18・19とほぼ同様な内容.	いわゆる白釉陶器.
		22		2(ⅰ)	—	13.2	—	—	素地は灰色で、細かく緻密.半透明色粒(全体に混入).黒色微粒.	黒褐色釉を薄く施釉後、口縁部は掻き取り.	微弱な肥厚口縁で、丁寧な成形.頸部以下は膨らむ器形(水注か).	洪塘窯の可能性.
		23		2(ⅱ)	—	11.6 (10.0)	—	—	素地は褐灰色で、やや粗粒.黒色微粒.半透明色粒・白色粒.	外面に灰白色釉.口縁部上面は丁寧に掻き取り.	断面三角状の口縁部断面観で,内傾器形.長胴壺とみられる..	いわゆる白釉陶器.
		24		2(ⅱ)	—	4.6	—	—	素地は褐灰色で、細かく緻密な観.黒色微粒(全体に入る).	被熱で釉保持悪いが、黒色～黒褐色釉か.	袋状口縁.明らかな被熱を認める.	
		25		2(ⅱ)	—	5.6	—	—	素地は褐灰～灰色、粉味帯びやや粗粒か.黒色微粒(やや少量).	黒褐～オリーブ黒釉を口縁内まで施釉.	微弱な玉縁状肥厚口縁.頸部以下は直状に移行.	薄胎施釉陶器(田中2001).
		26		2(ⅱ)	—	8.2	—	—	素地は灰色で、細かく緻密.黒色微粒(全体に顕著),半透明色粒・褐色粒(ごく僅量).	黒色釉を全面施釉,口縁端は釉掻き取り.	偏平な縦耳(2個か4個).無頸・球胴状で口縁断面観は方形状肥厚.口縁端付近に目跡あり.	
		27		2(ⅱ)	—	6.0	—	—	素地は灰色で、細かく緻密.黒色微粒(多量),半透明鉱物粒(僅量).	黒色釉,口縁内端は掻き取り.内面露胎に轆轤痕.	微弱な断面玉縁状を呈する.	
		28		2(ⅱ)	—	—	—	—	素地は灰～灰白色で概ね緻密.黒色微粒(全体に多量).	釉保持悪く不詳だが、灰オリーブ色に近い.	上面観は倒卵形(被熱による変形か).内面に回転篦成形痕明瞭.	浙江省系製品の可能性.

口径値の括弧内数値は肥厚口縁の外縁で算出.混入物は基本的には多く見られた順に記載.色調はマンセル表色系に準拠.

第10表　褐釉陶器観察一覧（3）

単位:cm

図・図版番号			器種	分類		法量			素地・混入物	釉状況	その他の特徴	備考等
				胎土等	器形	口径	器高	底径				
第39図	図版33	29	小形製品	2(ⅰ)	—	—	—	10.0	素地は灰黄褐～灰色で、粉味帯び比較的粗粒.半透明粒・白色粒(全体に混入).黒色微粒.	釉保持悪く不詳だが、灰色(微かにオリーブ味帯びる)釉を内面施釉.	軽度の被熱(？)か.外底はいわゆるベタ底.	洪塘窯産か.
		30		3	—	—	—	12.6	素地はにぶい黄橙色、やや粉味帯び細か.黒色微粒.白色粒(僅量).	黒褐(チョコ色)釉を内底まで施釉.露胎部に擦痕.	外底の高台内に圏線.	
		31		2(ⅱ)	—	—	—	5.2	素地は灰白色で、細かく緻密.黒色微粒(多量).白色粒・半透明鉱物粒(ごく僅量).	黒色釉,外面は施釉範囲胴部下位まで.露胎に轆轤痕明瞭.	球状を呈した体部に、外底はやや上げ底.	

口径値の括弧内数値は肥厚口縁の外縁で算出.混入物は基本的には多く見られた順に記載.色調はマンセル表色系に準拠.

F. 黒釉陶器（天目茶碗・茶入）

本項で言う黒釉陶器は、黒色または暗褐色の釉薬がかかった陶器の中でもいわゆる天目茶碗、茶入と呼称されるものを指す。

尚、今回出土した天目茶碗、茶入は14世紀代に収まるものと考えられる。

天目茶碗（第40図　1～20）

今回出土した天目茶碗は底部数で532点と大量に得られた。遺物の産地にあたっては福建省の南平市茶洋窯を含む福州市内の諸窯で制作されたものであると考えられ、森本朝子の分類（1994）のⅧ類、また新垣力の分類（2004）ではⅠ類に相当する時期のものであると考えられる。器形としては底部がすぼまり、高台際を水平に削り胴部は真っ直ぐに立ち上がり、口縁部付近で軽く角度を変えて立ち上がるといったものである。この形態のものは沖縄県内出土のものとしては最も多くみられるタイプである。素地は主に灰白色や灰色を呈し、緻密でかたく焼き締められたものが多く黒色微粒、白色粒等の混入物を含むものである。特徴的なものとして、素地が黒褐色を呈し、より緻密な仕上がりを呈するもの（９）と器部は薄手で深く刳りぬいた高台を成形するもの（20）が得られている。

尚、今回出土した遺物の分類を試みるにあたって複数のタイプの全形を窺える資料が得られなかったため、おおまかではあるが口縁部と底部ごとに分類作業を行うこととした。

口縁部分類

Ⅰ類…真っ直ぐに立ち上がり、口縁付近で軽く角度を変えて立つもの。（1～3・6・11～14）

Ⅱ類…内湾しながらのび、口縁付近はそのままのびるもの。（４・５）

底部分類

大きな時期差はないものと考えられるが、形態に違いが認められるため底部のみを参考に分類した。

Ⅰ類…高台削りが浅いもので沖縄県内では多くみられるもの。（６～15）

Ⅱ類…高台削りが中心部に向かい斜めに成形しているもの。（16、17）

Ⅲ類…高台を抉らず水平に成形するもの。２つのタイプがみられた。（18、19）

a…篦調整により丁寧に成形しているもの。（18）

b…糸切り痕の残るもの。（19）

Ⅳ類…深く刳り貫いた高台を成形するもの。（20）

茶入（第41図　21～24）

ここで扱う茶入とは薄胎施釉陶器とも呼称されるものであるが、ここでは慣例により「茶入」と呼称することとする。

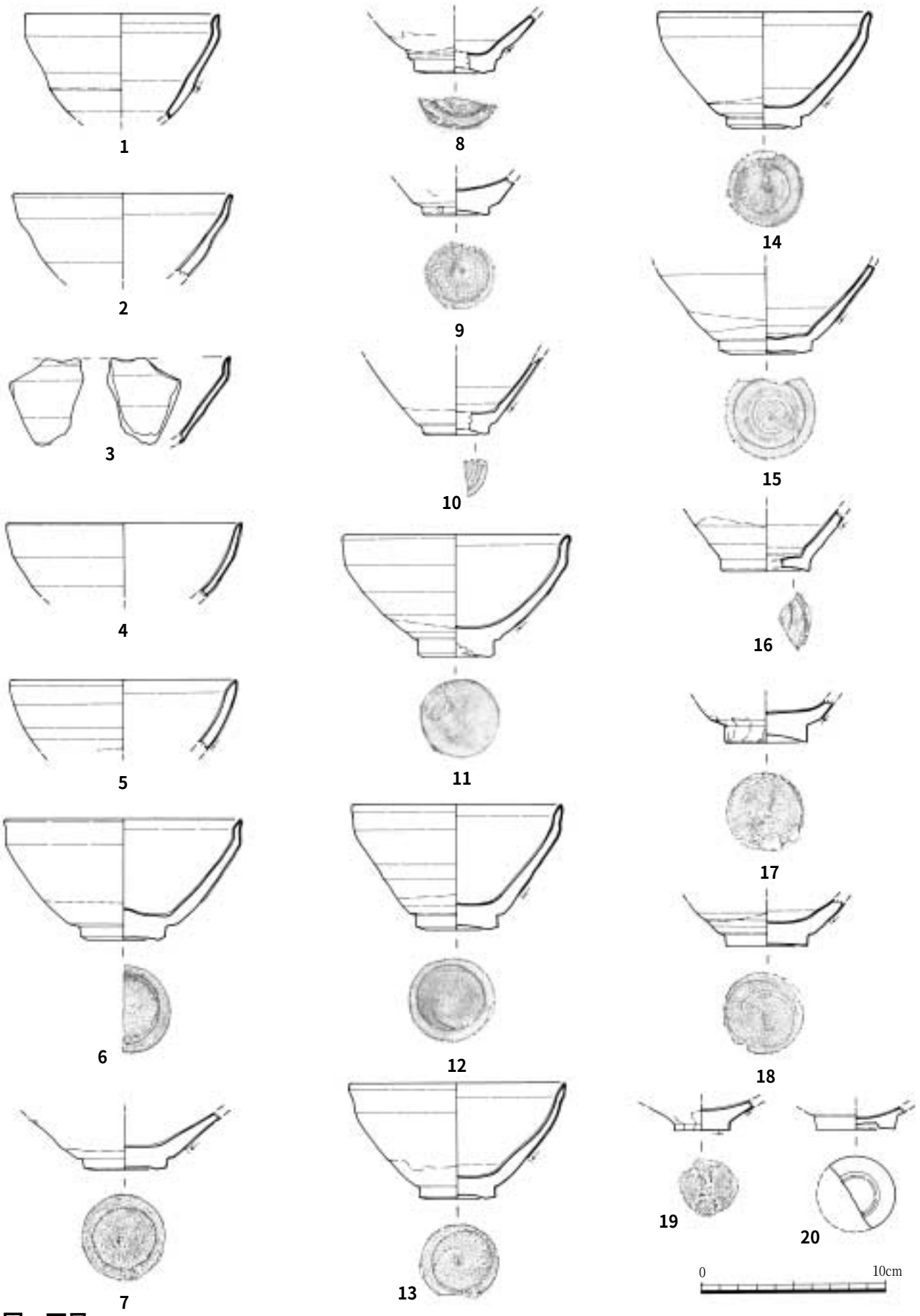
今回出土した茶入は破片数で５点得られた。産地にあたっては器形や素地等から福建省福州市にある洪塘窯産のものと考えられる（田中2001、2004）。出土した遺物は素地が暗茶褐色の非常によく精製されたもので混入物を含まない粘質のある土という特徴をもつもの（21、22）と粗胎で黒色微粒子、白色粒等を含むもの（23、24）の２つのタイプに分けられた。器形から以下のように分類した。

Ⅰ類…残存部位は底部のみではあるが、広口を呈するものでいわゆる大海茶入に近いものと考えられるもの。（21）

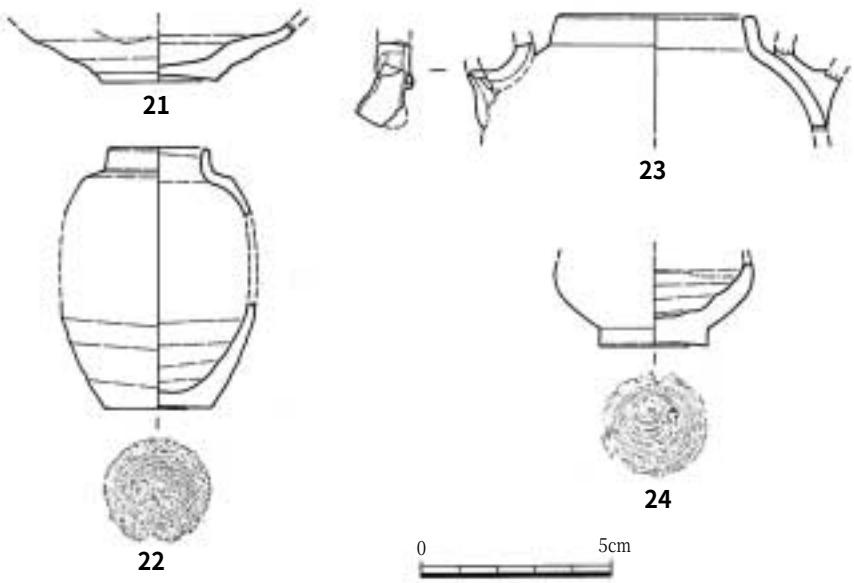
Ⅱ類…肩が張り外反しながら立ち上がる口縁をもつやや膨らみ気味の長胴の壺形を呈するものでいわゆる肩衝茶入と呼称されるもの。（22）

Ⅲ類…口縁はやや内湾気味に立ち上がる形態を呈し口縁下部に耳を有するもの。胴部は丸みをもつ。（23）

Ⅳ類…高台を有し、内湾しながら袋物状に成形しているもの。（24）



第40図　天目



第41図　茶入

第11表　天目出土状況

器形・残存状況			小計	合計
天目	口縁部	2cm以上	573	573
	底部	完形	230	532
		1/2以上	134	
		1/4以上	168	
	総計		1105	
茶入		口縁	2	5
		底部	2	
		全形	1	

第12表　天目・茶入観察一覧

単位：cm

図・図版番号			器形	分類		口径	器高	底径	素地	釉	特徴
第40図	図版35	1	天目茶碗	口縁部	Ⅰ	10.6	—	—	灰黄色で軟質。	光沢のない暗褐色の釉を薄く施釉。	釉薬のかかった面に火を受けたためか微細な気泡がみられる。
		2				12.0	—	—	灰白色。	黒色の釉を施釉。	腰部、口縁部のうねりが1に比べ強く、開いた形態を呈する。火の影響を受けている。
		3				—	—	—	灰白色。	黒色の釉に茶褐色の釉が網状に掛かる。	口縁部は不定形を呈する。1、2に比べ薄手。
		4			Ⅱ	12.8	—	—	灰白色。	黒色の釉に褐色の斑点が入る。	腰部にはややうねりがみられるが、口縁部はそのままのび、先端は尖る。
		5				12.2	—	—	灰白色。	黒色の釉に茶褐色の油滴状の斑点が入る。	4より滑らかでそのまま内湾しながらのび、先端は尖る。
		6		底部	Ⅰ	13.0	6.6	4.6	灰白色。	光沢のある黒色の釉を厚めに施釉。	高台は高く、内底面の中心部が大きく盛り上がる。口縁部の返りは強め。口縁部はⅠ類。
		7			Ⅰ	—	—	4.5	暗灰色。	黒色の厚い釉に白色の禾目状の釉が掛かる。	外に広がる器形を呈する。底部に砂質のものが付着している。火を受けたため微細な気泡が釉面にみられる。
		8				—	—	4.3	灰白色。	暗灰色の釉に褐色を帯びた黒色の釉を二重掛。	高台際の成形が雑。
		9				—	—	3.6	黒褐色で緻密。	赤紫色を多く帯びた釉を厚めに施釉。	高台は小ぶりではあるが高くしっかりしている。
		10				—	—	3.6	暗灰色で緻密。	茶褐色の斑点の入る黒色の釉を施釉。	すぼまったつくりで、角度を持ち真っ直ぐ立ち上がる形態を呈する。内底面際では段を持つ。高台は小ぶり。
	34	11			Ⅰ	12.4	6.7	4.2	灰白色。	光沢のある黒色の釉に茶褐色の釉を二重掛か。	高台は高めのつくり。畳付横の斜め調整が小さい。口縁部はⅠ類。
		12				11.4	6.8	4.5	灰白色。	黒色で内面は茶褐色を帯びる。	やや角度を持ち直線的にのびる。火の影響を受けている。口縁部はⅠ類。
		13				11.8	6.3	4.2	灰白色。	黒色の釉を施釉。	火の影響を受けている。口縁部はⅠ類。
		14				11.6	6.3	4.1	灰色。	黒色で口唇部は茶褐色を帯びる。	内底面際で段を持つ。全面が激しく火の影響を受けており施釉面に気泡がみられる。口縁部はⅠ類。
	35	15			Ⅰ	—	—	5.0	灰白色。	暗黒色の釉に茶褐色の釉を二重掛。内面は禾目状に掛かる。	高台は低く、内底面は段をもってくぼむ。
		16			Ⅱ	—	—	4.8	灰白色。	暗褐色の釉に茶褐色を帯びた黒色の釉を二重掛。	高台が低く内底面際で段を持つ。高台際の水平調整がほとんどない。
		17				—	—	4.4	灰白色。	黒色の釉を施釉。	高台際の水平面が広く全体的に丁寧なつくりである。施釉面からの釉垂れがみられる。火の影響を受けている。
		18			Ⅲa	—	—	4.4	淡灰色。	黒みを帯びた茶褐色の釉を施釉。	内底際にやや段を持つ。
	38	19			Ⅲb	—	—	3.0	灰色で粗い。	黒色の釉を施釉。	施釉面から底部まで釉垂れしている。火の影響を受けている。
	35	20			Ⅳ	—	—	4.2	灰色で緻密。	黒色の釉を施釉。	高台は小ぶりで器面は薄手。火の影響を受けている。
第41図	38	21	茶入		Ⅰ	—	—	3.0	暗茶褐色で精良。	黒色の釉を施釉。	全体的に雑な成形が施されている。火の影響を受けている。
		22			Ⅱ	2.7	7.0	2.8	暗茶褐色で精良。	暗褐色と思われる釉を施釉。	器面の調整は丁寧。火の影響を受けて釉薬がほとんどみられない。底部に糸切り痕がみられる。
		23			Ⅲ	5.3	—	—	灰白色。	光沢のある黒色の釉を施釉。	耳の貼付は雑。双耳もしくは四耳。
		24			Ⅳ	—	—	2.8	灰黄色で粗い。	暗褐色の釉を施釉。	内面を渦巻き状に成形。底部に糸切り痕がみられる。

G. その他陶器（第42図）

ここであげる陶器は、褐釉陶器、黒釉陶器以外の陶器を挙げる。図示したものが全てである。これらの陶器で、１～12・14は素地が灰白色～灰黄色で緻密だがやや軟質であること、黒色微粒を含むことで共通している。また、内面のロクロ目による稜が比較的明瞭であることも一つの特徴であろうか。後述するが、６～９は磁州窯系の梅瓶と考えられるため、これらの素地をもつものはその可能性があるものと言える。

１～５は、黒色の薄い釉が表面に掛けられた壺の破片で同一個体と思われる。外面には釉を掻き落とした文様が描かれる。１は肩部に当たり、耳がつき、その部分には２条の圏線が掻き落としで廻る。２～４は胴部で掻き落としの文様が描かれるが、図柄は不明である。５は底部で、底径13.2cm。これらは先述したように素地が磁州窯系に近いが、こういった資料はあまり知られていないので、具体的な産地は検討が必要である。

６～９は梅瓶である。外面は赤色であるが、これは火を受けたためであり、本来は黄釉や緑釉、11のような翡翠釉により、何らかの文様が掻き落としにより絵付けされていたものであろう。また、これらは器形的には同じ梅瓶と思われるが、ひずんでいるためか復元が困難で同一個体とは言い切れない。内面は、やや淡い黒色の薄い釉が全体的に掛けられているが、部分的に掛からずに素地が見える。磁州窯系の特徴として、内外面の両方もしくはどちらかに黒色の釉が掛けられるようである。６は口縁で口径5.0cm、短く外反する。７は胴部上半である。頸部径で4.5cm。８は胴部だが、釉の剥がれた部分には黒色の部分があり、掻き落としによる何らかの文様があったと思われる。９は上げ底の底部で、底径10.0cm。外面下端には、黒色の顔料による線が見られる。

10は短頸壺の口縁である。釉は火を受けたためか剥がれているが、本来は緑釉や黄釉などが掛かっていたものと思われる。口径15.2cm。

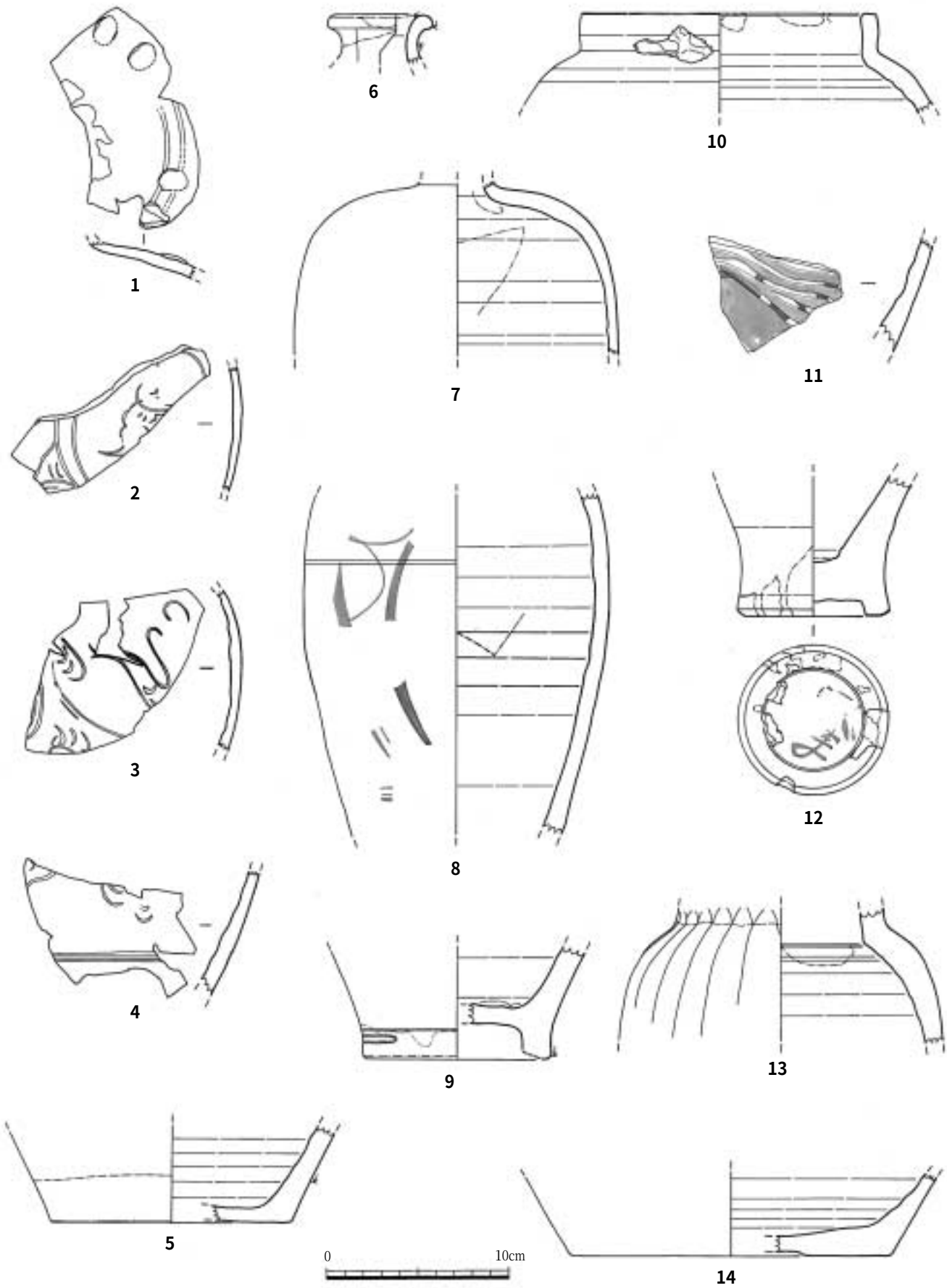
11は翡翠釉の胴部である。被熱のためか、素地が淡橙色となっている。内面にはロクロによる稜がよく残る。

12は白濁色の厚めの釉が掛けられた上げ底の底部である。底部外面右半には墨書が見られるが、赤外線写真では２字あることは分かったが、崩し字のためなかなか断定できない（図版56）。それでも、上の文字は筆運びと縦線が突き出ることから「夫」の可能性が高い。しかし、下の字は「ま」、「天」の崩し字などにも見えるが、いずれも断定できない。

13は緑釉が掛けられた壺であろうか。表面は鎬文となっている。内面の頸部付け根に単位の狭いロクロ目が顕著である。これは、素地が他のものと違いやや磁器質で硬く締まっているもので、磁州窯系ではないであろう。

14は内面に天目などに似る濃い黒色の釉が掛けられた大形の壺などの底部と思われる。外面は残存部位では無釉である。外底中央が一段凹む。底径17.6cm。

図版56　第42図12赤外線写真



第42図　その他の陶器

２．ベトナム産陶磁器

鉄絵・青花・青磁・白磁の種類があり、破片数545点、最低個体数105点あり、残りが良いものを86点実測した。14～15世紀のものでは、これまでの沖縄県内及び日本本土での出土量を遥かに凌駕する。特に、青花の量が多く、器形が分かる資料が多い。また、県内初のこの時期の鉄絵が２点見られた。器形ごとに特徴を記することにして、個々の詳細は観察表にまとめた。各器形の復元及び類例、時期などは、図録等（有島1991、金武1991、森本1995、福岡市博物館1992、町田市立博物館2001、矢島1991、横田1991、Thi・Long2001）を参考にした。

A．鉄絵（第45図　26・27）

鉄絵は全て黒色の顔料のみで文様・圏線を筆で描いたものを指し、器形は鉢で２点である。被熱のためか表面は透明感がなく、鉄絵の顔料がそのままむき出しているように見える。素地は淡黄色で、青花に比べるとやや軟質である。

27は、器形が類似する青花鉢（28）を参考に復元した。外面上半はおそらく簡略化した草花文、口縁内面には蔦唐草文が筆により描かれる。見込みは１条の太めの圏線内に草花文であろうか。高台は青花鉢（28）に比べると太めで、やや内向きになる。底部外面は鉄銹が塗布されるいわゆるチョコレートボトムである。他遺跡の類例としては、博多遺跡群64次資料は口径24cmの口縁や、大宰府観世音寺東辺部第119次資料は口径18cmと小振りだが深めの器形・簡略化した草花文が類似している。26は口縁のみだが、ほぼ同様であろう。

B．青花（第43～48図　１～25・28～81）

青花は破片数538点、最低個体数98点とベトナム産の中では圧倒的に多い。器形も、碗・皿・盤・瓶・壺等と豊富である。首里城跡他地区・勝連城跡などの断片的な資料と類似しており、その具体像がより分かるものであろう。

素地は精良で比較的緻密で灰色が多く、透明な薄い釉が掛けられる。呉須は青色が基本であるが、圏線のみが灰色に近いものもある。二宮修治による蛍光Ｘ線分析では、青色が強いものがコバルト主体で、弱いものはコバルトの他にマンガン・鉄分がやや多めであるという結果が出されている（二宮2001）。

碗（１～13・17～25）

口縁は外反であるが、底部・文様により大きく２つに分けられる。

Ⅰ類（１～13）

底部外面には釉が掛かけられず、鉄銹が塗布される。いわゆるチョコレートボトムである。内外面の文様は、全て筆による線のみで表現されており、呉須にはにじみがない。外面は、体部上半のみに２条の圏線間に簡略化されて原型を窺えない草花文を施文する。内面口縁も２条の圏線間に原型を留めない唐草文、見込みは１条の圏線内にやはり簡略された花弁文が描かれる。この圏線は、先述したように、青色ではなく灰色で描かれるものも多い。特に見込みの圏線では顕著である。また、見込みには目跡があり、おそらく４・５個と思われる。

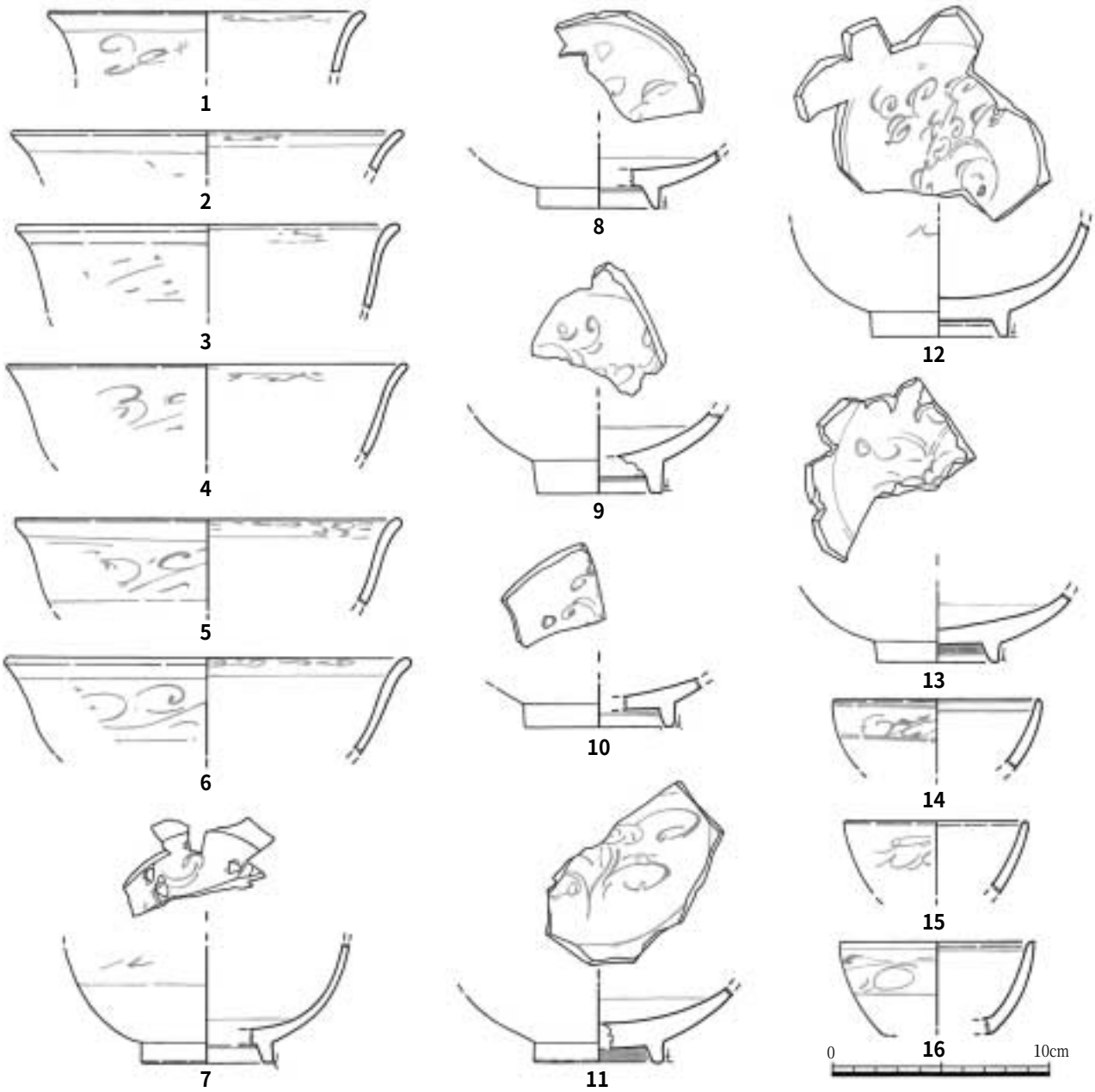
高台は全体的に細く高めであるが、端部は面をもっており、逆三角形までは行かない。尾崎直人が指摘するが、ベトナム陶磁器では底部外面の削り痕が顕著なため、砂粒の方向を観察するとロクロ方向が推定できる。本資料に限らず、この時期のものの多くは砂粒が左方向に動いているので、ロクロは右回りと言える（尾崎1992）。

Ⅱ類（17～25）

底部外面までに釉が掛かっており、鉄銹は塗布されない。畳付のみ釉剥ぎされる。内外面の文様は、線だけではなく、草花の表現などはベタ塗りされている。呉須はⅠ類より濃い青色だがにじみが強く、全体的に文様がぼやけた感じになっているものも多い。Ⅰ類のような呉須の色の使い分けは無い。外面は、体部上半に２条の圏線間に花唐草文、下半には個々の境界が接しているラマ式蓮弁文が描かれる。内面口縁は、２条の圏線間に蔓唐草文、見込みは１条の圏線内に花弁文が描かれる。

第13表　ベトナム産陶磁器出土状況

器種・分類				小計	合計	最低個体数
青花	小碗	直口	口縁部	4	5	5
			全形	1		
	碗	Ⅰ	口縁部	60	184	37
			胴部	103		
			底部	21		
		Ⅱ	全形	1	69	
			口縁部	21		
			胴部	32		
			底部	15		
	鉢	Ⅰ	全形	1	22	3
			口縁部	19		
			底部	2		
	皿	全形		6	97	43
		口縁部		25		
		胴部		29		
		底部		37		
	盤	全形		1	1	1
	合子	蓋		1	1	1
	壺	口縁部		6	128	2
		胴部		120		
		底部		2		
	瓶	口縁部		2	10	2
		胴部		18		
		底部		2		
	水注	鳥形		15	21	6
		クンディ形		4		
青花合計				538		100
鉄絵	鉢	全形		1	2	1
		口縁部		1		
青磁	碗	口縁部		1	4	3
		底部		3		
白磁	鉢	口縁部		1	1	1
合計				545		105



第43図　ベトナム産陶磁器（1）青花碗

見込みには明瞭な目跡がつかない。高台はⅠ類と比べると端部が面をもたず、逆三角形に近くなっている。底部外面の観察では、ロクロは右回りである。

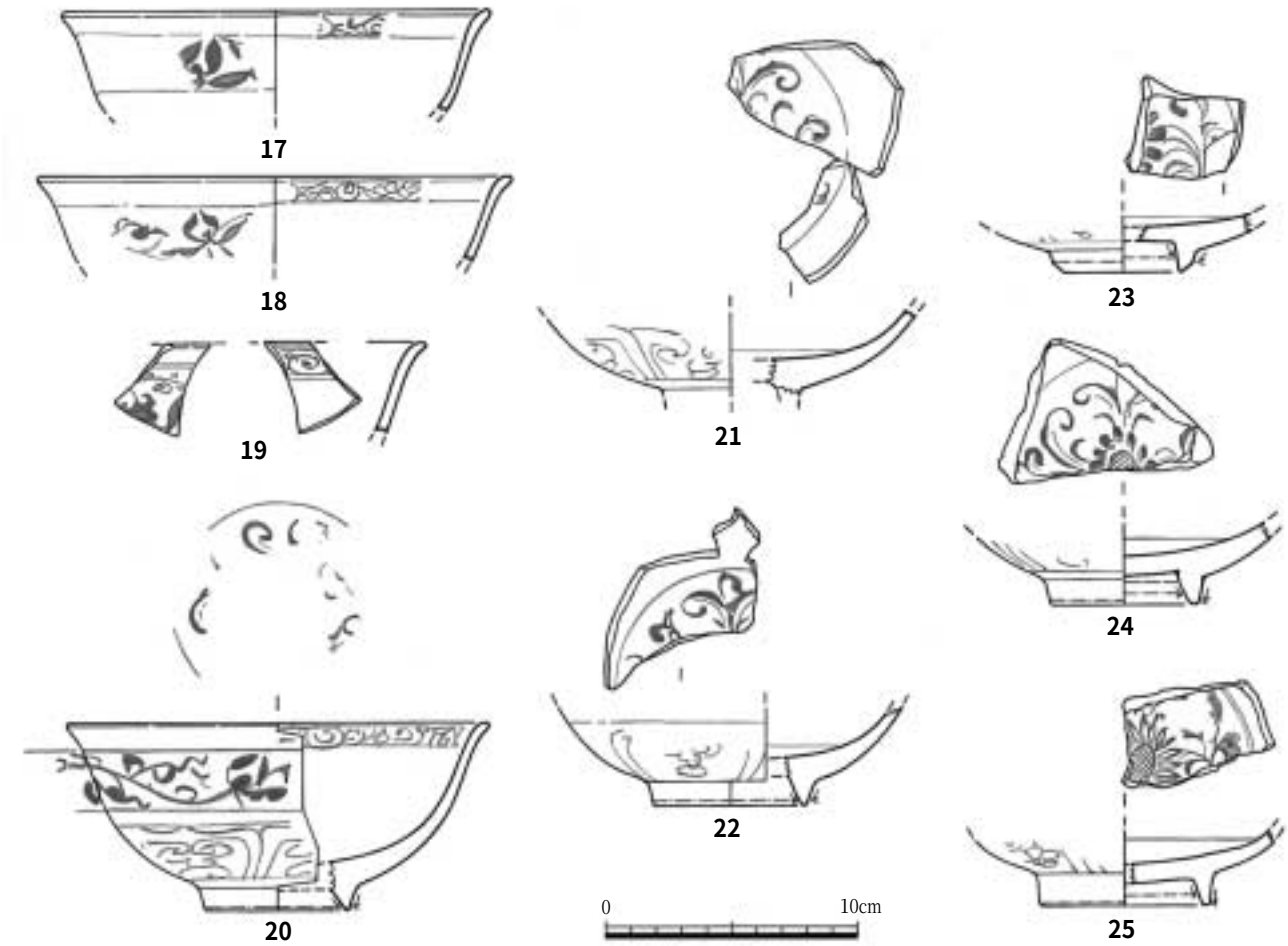
小碗（14～16）

直口する口縁のものは口径が小さいため小碗とした。16は底部がわずかに残存しており、平底で、チョコレートボトムである。圏線は、文様の顔料と異なり、灰色の顔料で描かれる。

鉢（28～33）

碗Ⅰ類とプロポーション・文様はほぼ同一だが、碗よりも一回り以上大きなものを鉢とした。底部はチョコレートボトムで、文様もやや丁寧ではあるが碗Ⅰ類と同様に簡略化した草花文であった。圏線はやはり、灰色の顔料で描かれている。先述したように、鉄絵鉢とほぼ同形であり、文様構成も類似しているが表現はやや繊細である。

28は接合しない破片同士の復元だが、全形を窺える。外面上半が簡略化した草花文、下半は無文である。内面口縁は蔓唐草文、見込みは２条の圏線内に花弁を斜線で埋めた菊花文が描かれる。高台は細くややハ字状に開く。



第44図　ベトナム産陶磁器（2）青花碗

底部のロクロ方向は右である。29～31は口縁で、32・33は底部で、同様の文様であろう。33の底部は内湾する。

皿（34～47）

皿は、口縁を輪花状に刻ませたいわゆる菊花皿である。底部はチョコレートボトムである。見込みには基本的に２条の圏線で、その内側に花弁文、特に菊花文が描かれる。見込みの圏線は、他の文様と顔料を変え、灰色のものを使用するのは碗Ⅰ類と同様である。口径は12～13cm、底径は５～６cm、高さは３cmと大きく差はない。底部のロクロ方向はやはり右方向である。

法量・見込みの文様にもほとんど差はないが、高台・器形に微妙な差があり２つに分けた。ａ（34～39）は高台畳付が狭いが接地面をもつ角形で、胴部は腰折れが弱くやや内湾するタイプである。ｂ（40～47）は高台畳付が１点のみ地に接する形で、内側に斜傾するもので、胴部は腰折れが強く口縁端部が外反するタイプである。ｂタイプの高台が博多遺跡群40次の鉄絵皿、博多遺跡群35次の青磁皿などで見られる（有島1991）。ただ、現状では時期的な差かはどうか不明である。36のみ圏線は１条である。

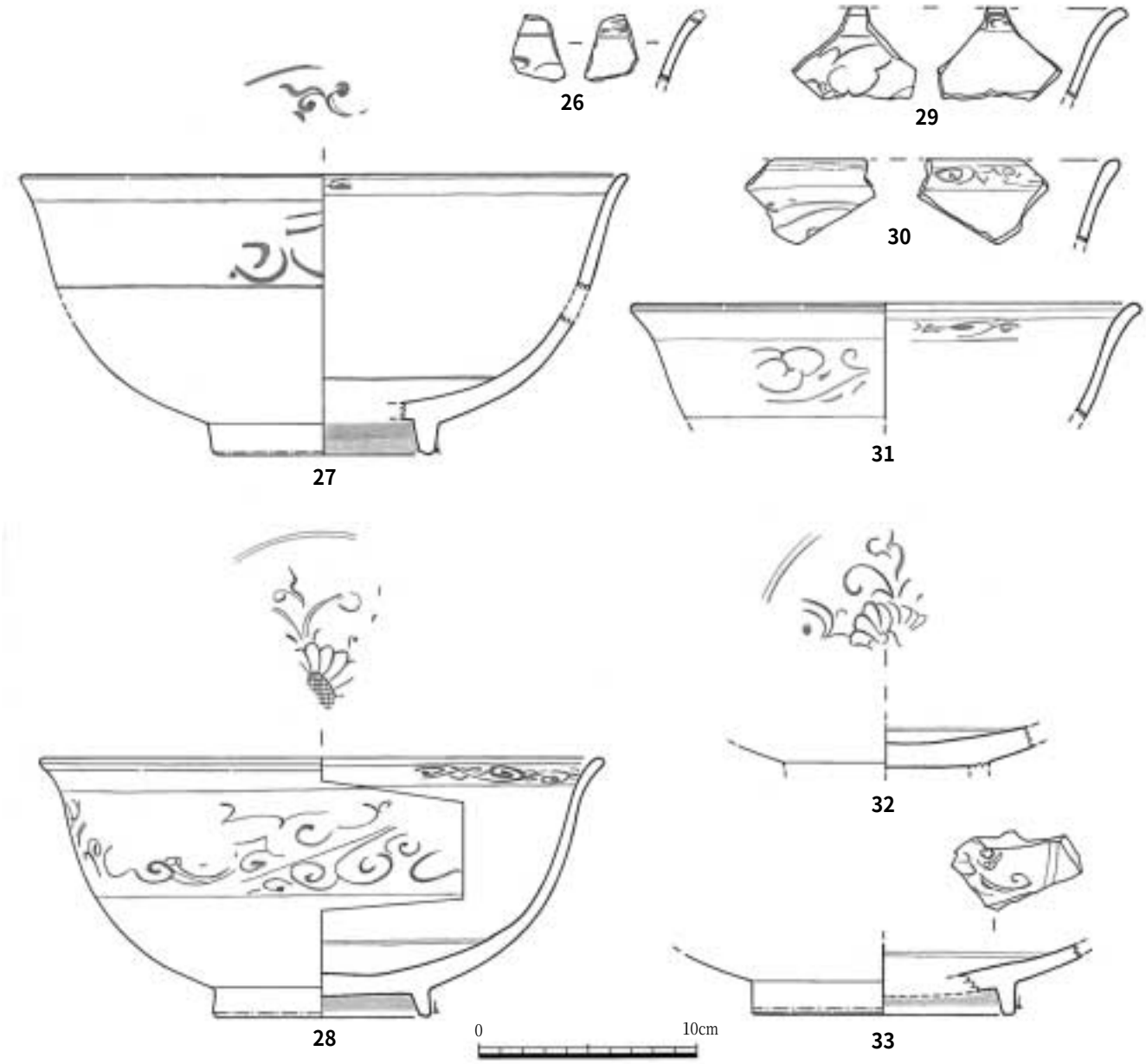
盤（64）

口縁が鍔縁で稜花形のものである。高台は碁笥底状となっており、外底は露胎である。高台の砂粒の線条痕は顕著で、ロクロ方向は右回りである。１個体のみの出土である。口縁は一定の間隔で内側に折り曲げ、稜花形とし、文様は蔓唐草文である。胴部外面は、境界を接する簡略化したラマ式蓮弁である。胴部内面はおそらく蓮唐草文で、見込みは藻文である。類例としては、稜花形であること、口縁・胴部内面の文様は大宰府条坊遺跡第83次（横田1991）や首里城京の内跡、町田市立博物館所蔵（町田市2001）のものがある。一方、見込みの藻文は松岡美術館蔵（町田市2001）のものと類似しているため、本来は中央部に魚も描かれていた可能性もある。

合子蓋（63）　外面胴部中央に圏線があり、その上半には何らかの文様が描かれる。内面は無釉である。

瓶（48～59）

八角瓶など面取りをもつと思われるものには、48の口縁、49の頸部、50・54～57の胴部、52・53の底部がある。この内、54～57は斜格子による文様が類似しており同一個体の可能性がある。54は窓部に細い葉の草文、55は斜



第45図　ベトナム産陶磁器（3）鉄絵鉢・青花鉢

格子によるラマ式蓮弁文、56は「崖葦○」、57は「結○」という字が細長い窓部に描かれる。50は扇形文で弧形の窓部があり、接合痕がある。面取りがないものとしては、58・59の胴部がある。58・59は透明感のない濃い青色の呉須から同一個体と考えられ、扇形文や唐草文などが描かれる。51はやや頸が短いタイプである。

水注（60～62・65～70）

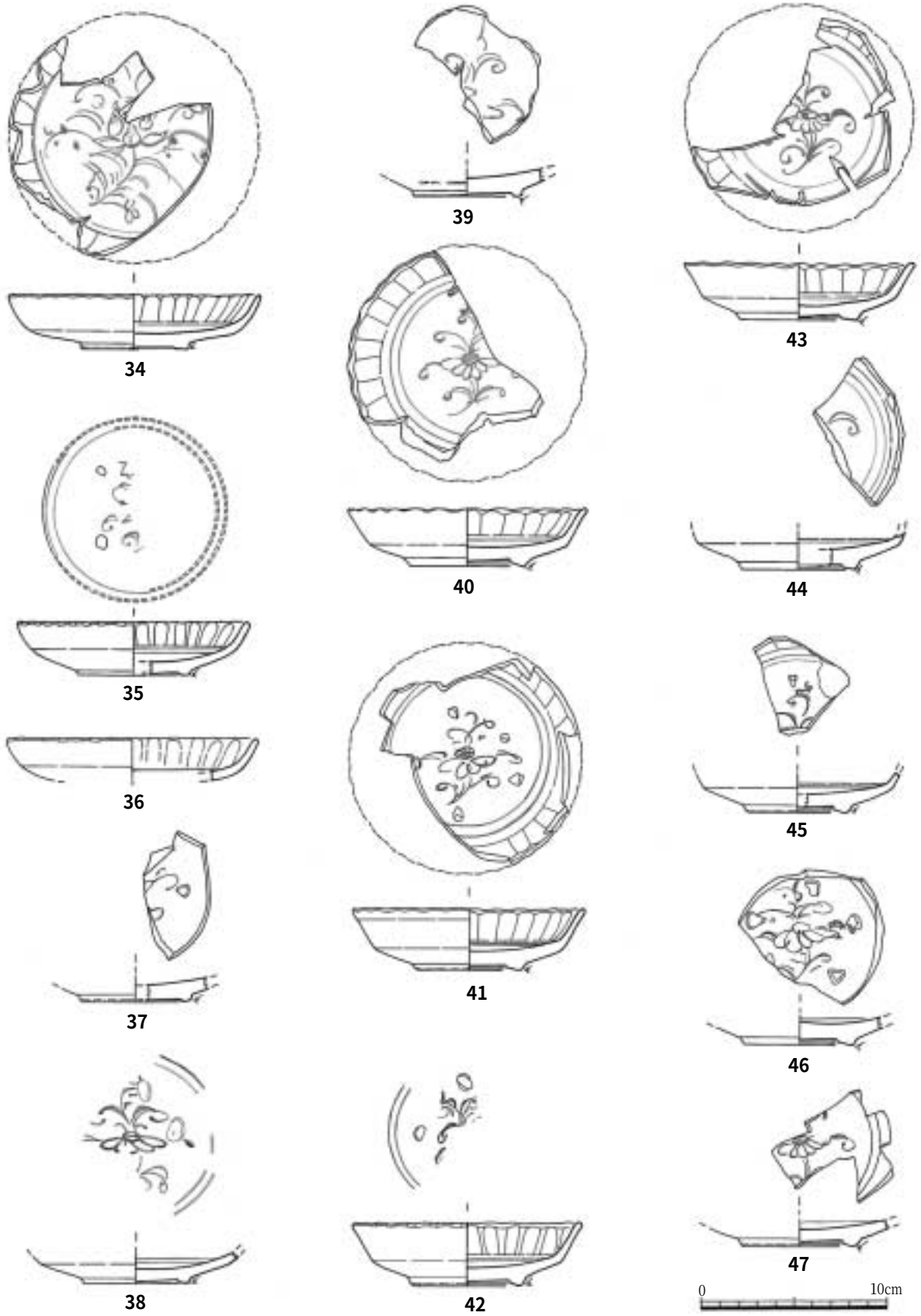
いわゆるクンディと言われる急須形と、鳳凰などの鳥形の２種がある。

急須形は60～62である。これらの素地は灰色で、極めて緻密で、内面は露胎している。60や62は胴部上半で、61は注口部の付け根に近い部分と思われる。

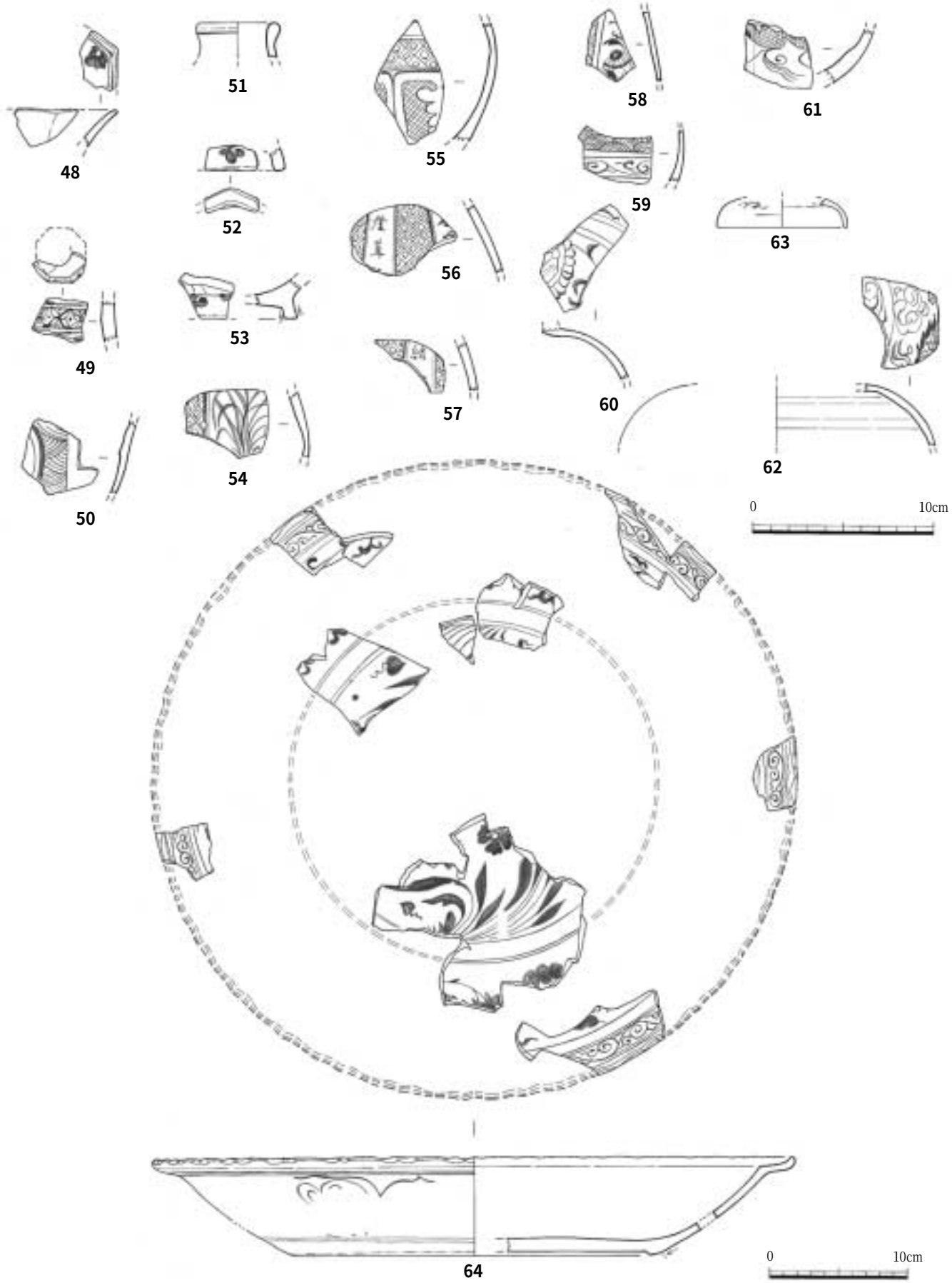
鳥形のものは65～70である。65～67は、濃い青色の呉須で描かれ、内面は露胎である点で共通しているが、同一個体かは分からない。65は鳥形の腹部に当たる表現と思われ、66・67は尻尾の表現であろう。68～70はやや薄い青色の呉須でダミ塗りされる点と、内面にも釉が掛けられる点が共通しているので、同一個体と思われる。68は尻尾か鶏冠、69や70は頸部に近い部分と思われる。鳳凰かと思われるが、アヒルなどもあるようだ。

壺（71～81）

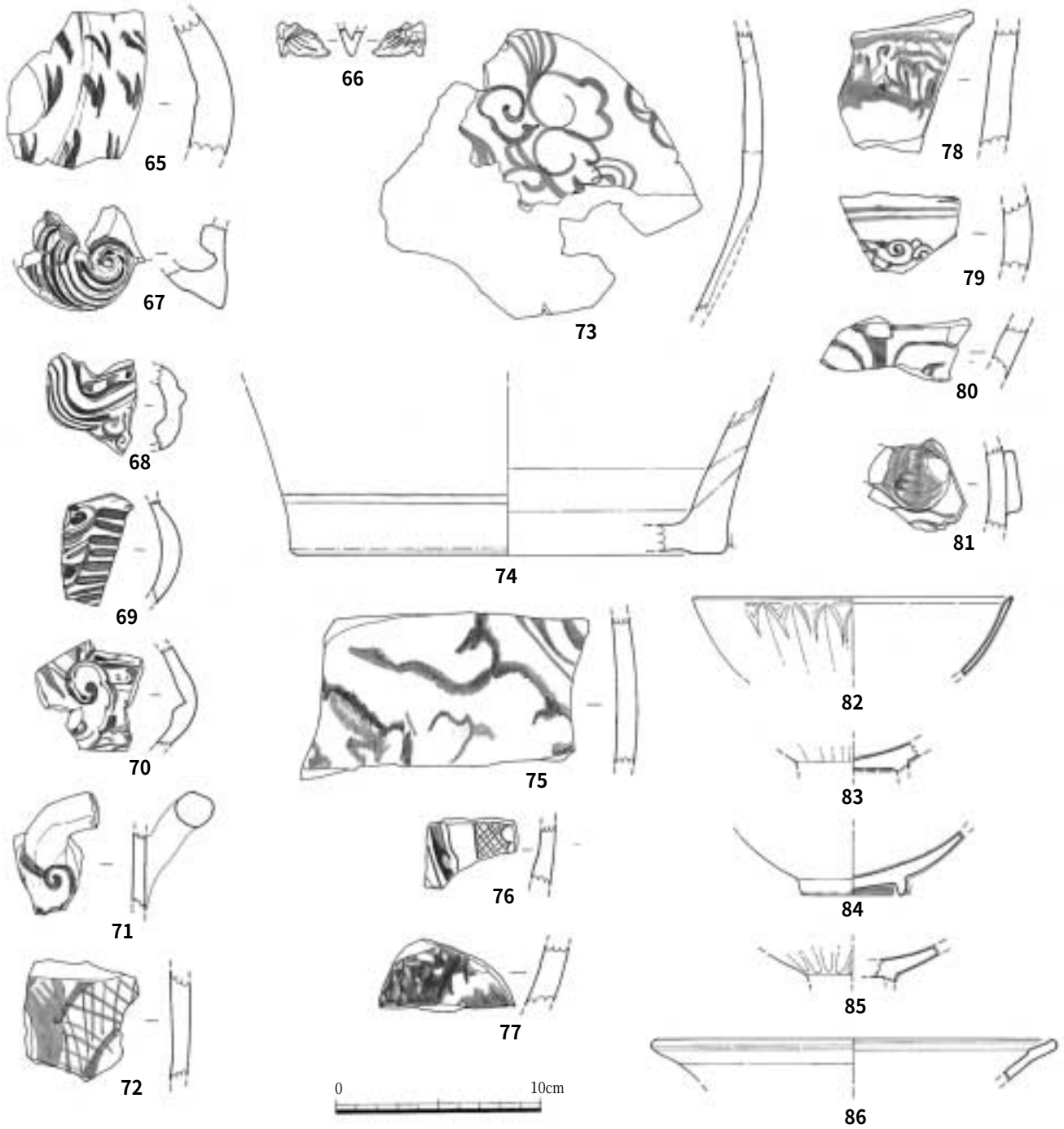
全形を窺えるものはないが、大形壺の破片と思われるものが出土している。これらは、後述するように呉須の表現は異なるが、白化粧した後に透明な釉を内外面ともに掛ける点では共通している。また、内面には横方向の



第46図　ベトナム産陶磁器（4）青花皿



第47図　ベトナム産陶磁器（5）青花盤・瓶・水注



第48図　ベトナム産陶磁器（6）青花壺・水注・青磁碗・白磁鉢

ロクロの痕跡、粘土のつなぎ痕などが残る点でも共通している。

71は胴部に環状の把手と思われるものが貼り付けられるものである。文様は線で表現されているが、この把手を象の鼻に見立てれば、その付け根の表現にも見えるが、良く分からない。呉須は黒味が強い。72～74は、呉須の色調が薄く灰青色に近いもので、同一個体の可能性がある。72は龍、73は雲気文、または草花文であろうか。74は底部で、下部に圏線が２条ある。

75～79は、他に比べると呉須の青みが強い点で共通しているが、同一個体かは不明である。75はかなり力強いタッチで描かれているが、文様は不明である。77は龍の鱗であろうか。81は半環状の把手であろう。76は外側がダミ塗りされた線で、内側が斜格子文で描かれるラマ式蓮弁文である。79は線で表現された唐草文。80は線で表現されるラマ式蓮弁文である。78は呉須が滲んでいるが、やはりラマ式蓮弁文であろうか。

C．青磁（第48図　82～85）

青磁は破片数で鎬蓮弁文碗が３点、無文碗が１点ある。

鎬蓮弁文碗は、口縁１点、底部が２点である。口縁は幅が狭い蓮弁文で、底部は鉄銹が塗られた、チョコレートボトムである。釉は薄く黄緑色のものである。これまで県内でも出土しており、首里城跡、天界寺跡、越来城跡、今帰仁城跡などで出土している（金武1991・2004）。

無文碗は、先の鎬蓮弁文碗に比べると、釉がやや厚く透明で濃緑色である。底部はやはりチョコレートボトムで、内底は中国産青磁本報告Ⅰ類（大宰府Ⅲ類）のように尖り、高台は細く仕上げられている。

D．白磁（第48図　86）

鉢の口縁が１点のみある。この口縁形態は、博多遺跡群３・４次の鉄絵鉢に類似している（有島1991）。しかし、これらは口縁内面に鉄絵による文様があり、異なっている。

第14表　ベトナム産陶磁器観察一覧

単位：cm

図・図版番号			器形・分類	口径	器高	底径	特徴
第43図	図版40	1	青花碗Ⅰ	14.6	－	－	圏線のみ灰色の呉須で、内面は非常に薄い。素地は緻密。
		2		18.0	－	－	圏線は濃いオリーブ色で、特に内面上段が黒色に近い。素地はやや軟質。
		3		17.6	－	－	圏線のみオリーブ色。素地はやや軟質で気泡あり。
		4		18.4	－	－	外面の圏線はなく、内面も上段のみで薄いオリーブ色。口縁端部がやや尖る。
		5		17.8	－	－	圏線は他の文様と比べると淡いが青色に近く、はっきりと見える。素地はやや軟質。
		6		18.8	－	－	圏線は灰色ではなく、他の文様と比べると淡いが青色に近く、はっきりと見える。ただ、やや黒ずんだ部分もある。
		7		－	－	5.8	圏線は濃灰色で、見込みは黒色に近い。鉄銹底。高台はややハ字状に開く。目跡現状で2個。
		8		－	－	5.6	圏線は黒に近い灰色。鉄銹底。目跡現状で2個。
		9		－	－	5.8	圏線は淡青色で、文様とあまり変わらない。高台は太く、畳付水平で広い。底部欠けだが鉄銹底。目跡現状で2個。
		10		－	－	6.6	素地は軟質でやや気泡あり。鉄銹底。高台畳付水平。目跡現状で1個。
	41	11		－	－	6.0	圏線は灰色。素地は緻密。鉄銹底。外底中央やや突出。高台は太く畳付水平。目跡現状で2個。
		12		－	－	6.3	圏線は灰色。高台は太く畳付は水平で広い。素地はやや軟質で、気泡あり。目跡現状で4個だがおそらく本来5個。
	40	13		－	－	5.6	圏線は灰色。高台畳付水平。内底のみ中央部やや凹む。素地はやや気泡あり。
		14	青花小碗Ⅰ	9.5	－	－	圏線は鉄絵に近い黒色。文様は青色。貫入目立つ。
		15		7.0	－	－	圏線は灰色。わずかに底部が残存し、平底で鉄銹塗布。見込み端にはごくわずか青色の呉須らしきものが見える。
		16		8.4	(4.3)	(5.1)	内外面が被熱のため荒れているため、断定できないが、圏線は見られない。
第44図		17	青花碗Ⅱ	17.0	－	－	外面の文様はダミ塗りされ濃い。外面上端の圏線が少し間隔を空ける。
		18		18.8	－	－	外面の文様はダミ塗りされ濃い。外面上端の圏線が少し間隔を空ける。
		19		－	－	－	他と比べると器面が滑らかで、呉須もにじみがすくない。内面上端の圏線が2条。素地は淡黄色でやや軟質。
	44	20		16.8	7.5	5.4	他と比べると呉須のにじみが強い。外面上半花唐草文、下半境界が接するラマ式蓮弁文。釉は透明感が強い。
	40	21		－	－	(5.5)	呉須のにじみは弱い。
		22		－	－	6.0	呉須の青みが強い。
		23		－	－	4.6	高台外面下半が斜めに切られる。
	41	24		－	－	5.9	呉須の青みが強い。釉の透明感が強い。
	40	25		－	－	6.6	呉須の青みは弱い。圏線は青が薄い。釉の透明感が強いが、薄くもある。見込みは圏線2条、花芯が斜格子文。目跡かどうか不明だが見込みに剥げがあり。他のⅡ類と比べると、畳付にわずかだが平坦面がある。底部の削りからロクロ右回り。
第45図	41	26	鉄絵鉢Ⅰ	－	－	－	口縁部。外面は圏線と草花文？、内面上半には2条の圏線間に簡略化した唐草文か。素地は淡黄色でやや軟質。
		27		(28.0)	(13.0)	(10.2)	28の青花鉢から復元。被熱が激しい。鉄銹底。外面胴部上半に2条の圏線間に草花文、内面口縁部に2条の圏線間に文様あり。素地は灰黄色でやや軟質。高台は貼付か。
		28	青花鉢Ⅰ	26.0	(12.1)	9.8	口径と底径から破片同士を復元。外面・内面の圏線が文様の濃い青色ではなく、灰色のもの。外面草花文、内面口縁蔓唐草文、見込み2条の圏線の内側に菊花文で花弁は斜格子文。鉄銹底。ロクロは右方向。目跡は現状2個。
	40	29		－	－	－	呉須は青色が濃く、圏線との違いはあまりない。内面上端圏線は2条。
		30		－	－	－	全体的に呉須が薄くにじんでいる。圏線はさらに薄いが、灰色に近い。
		31		23.4	－	－	全体的に呉須が滲んでいる。圏線は灰色。内面上端圏線は3条。
	41	32		－	－	9.6	見込みは花弁文様は濃い青色、圏線は灰色。鉄銹底だが中央だけ塗布されない。ケズリも顕著で、ロクロ右回り。

第14表　ベトナム産陶磁器観察一覧

単位:cm

図・図版番号			器形・分類	口径	器高	底径	特徴
第45図	図版41	33	青花鉢Ⅰ	－	－	12.0	高台が高く、径も大きい。畳付は水平。見込み文様は濃青色、圏線は灰色。内底は内湾。目跡は現状1個。
第46図	42	34	青花皿a	13.6	3.0	5.8	呉須は淡青色。圏線は薄く灰色。花弁が他のものとやや異なる。畳付は水平だが広い。目跡は現状4個。
		35		12.6	2.9	6.0	圏線は薄いが灰色。高台は幅が場所によって異なっている。畳付は水平。目跡は現状2個。
		36		13.6	－	－	圏線は薄い灰色、1条で5mmと幅が太い。
		37		－	－	5.6	呉須はやや淡青色。高台畳付は水平で、端部も丁寧。目跡は現状2個。
		38		－	－	5.6	圏線は薄いが灰オリーブ色。文様のにじみがやや強い。畳付は水平。目跡は現状5個。底部外面中央はわずかに突出。
		39		－	－	5.7	呉須はやや淡青色。釉は透明感がない。素地は軟質。畳付は水平。目跡は現状1個。
		40	青花皿b	12.9	3.2	6.1	圏線は灰色。見込み菊花文の花芯は斜格子文。底部のケズリによりロクロ右方向。外底はわずかに突出。目跡がないようである。
		41		12.6	3.4	5.8	圏線は灰色。文様の呉須は濃青色。見込み菊花文の花芯は斜格子文。目跡は現状5個。
		42		12.4	3.5	6.1	圏線は灰色。高台幅は6mmとやや細め。目跡は現状2個で、中央のものは不明。
		43		12.4	3.1	6.4	圏線は薄い灰色。文様の呉須は濃青色で、太めの線。目跡は現状3個。高台幅は9mm。
		44		－	－	6.0	圏線は灰色。目跡は現状ではない。
		45		－	－	5.2	圏線は灰色。素地は灰白色で軟質。目跡は現状1個。
		46		－	－	5.9	圏線は薄いが灰色。文様の呉須は濃い青色。底部は9mmとやや厚い。目跡は現状5個。外底中央やや突出。
		47		－	－	6.2	圏線は灰色。文様の呉須は濃い青色。目跡は現状1個。
第47図	43	48	青花瓶	－	－	－	八角瓶の口縁。内面に濃い青色の呉須で2条の圏線と滴のような文様が描かれる。内面釉あり。
		49		－	－	－	八角瓶の頸部。内面は無釉。外面は花菱文が上下の圏線間に描かれる。呉須は黒味のある青色。
		50		－	－	－	瓶の胴部で平坦なので八角瓶か。青色の呉須で扇形の組合せ文が描かれる。内側には窓部。内面は薄い釉で接合痕あり。
		51		4.7	－	－	短頸の口縁。端部外面に黒味のある青の呉須で圏線。素地は硬質。内面釉あり。
		52		－	－	－	八角瓶の底部。高台畳付のみ釉剥ぎ。黒味のある青い呉須で外面に文様。
		53		－	－	－	直線的なので八角瓶の底部。高台畳付のみ釉剥ぎ。呉須は青く、外面に文様が描かれる。胴部は線描きのラマ式蓮弁か。
		54		－	－	－	八角瓶の胴部。格子文の窓部には葉の細い草文。呉須は薄い青。内面薄釉、ロクロ目は顕著でない。
		55		－	－	－	八角瓶の胴部。横方向の格子文の下には、同文でラマ式蓮弁。内面は薄釉で間隔の狭いロクロ目顕著。呉須は青色。
		56		－	－	－	八角瓶の胴部。縦方向の広い窓に草花？文、狭い方に楷書で「崖葦○…」。呉須はやや濃い青。内面は薄釉で平滑。
		57		－	－	－	八角瓶の胴部おそらく56と同一個体。格子文の窓部には同様に「結○」と描かれる。内面薄釉。
		58		－	－	－	平坦な破片で内面無釉。外面は非常に濃い青色で縦方向に組合せの扇形文と花弁文？が描かれる。
		59		－	－	－	58と同一個体。内面無釉。外面は濃い青色で横方向に波頭文風の同心半円と蔓唐草文が描かれる。クンディー形かは不明。
		60	青花クンディ形水注	－	－	－	頸部の接合痕があるため、クンディー形と推定できる。文様は青色の呉須、圏線は灰色で描かれる。内面無釉。
		61		－	－	－	ロクロ方向とは直交する稜線があるため、クンディの注口部の付け根。内面は無釉、ロクロ目あり。外面の文様は龍文か。
		62		－	－	－	肩部に近い。内面は無釉でロクロ目あり。外面は圏線間に雲気文・龍文が青色の呉須で描かれる。龍の鱗は斜格子文で表現。
		63	青花合子蓋	7.2	(1.7)	－	蓋の口縁。外面は灰色で圏線、青色で唐草文？が描かれる。
	44	64	青花盤	(47.2)	(7.2)	(25.8)	圏線は淡青色で、文様は濃青色。高台は畳付付近から無釉。底部外面は基本的に無釉だが、一部白化粧せず掛かる部分あり。外底はケズリによる線条痕が顕著で、ロクロは右方向。
第48図	43	65	青花鳥形水注	－	－	－	内面には横方向のナデ、粘土の継ぎ痕あり。外面はV字形の文様が描かれ、鳥形の腹部か。素地には気泡が見られるが、硬質。釉は透明感のない白濁色。内面無釉。呉須は濃青色。
		66		－	－	－	鳥形の尻尾、背の部分か。外面は線表現。釉は透明感のない白濁色。内面無釉。呉須は濃青色。
		67		－	－	－	鳥形の尻尾か。外面は線刻による渦巻状の表現をしたのち、凹みに濃青色の呉須で描く。内面は指ナデ。内面無釉。
		68		－	－	－	鳥形の尻尾か、とさかか。外面はやや黒ずんだ青の呉須。内面は素地の上に直接釉がかかる。68～70は同一個体か。
		69		－	－	－	鳥形の頸部に近い部分。呉須・釉・内面は68に共通。
		70		－	－	－	鳥形の頸部の付け根。呉須・釉・内面は68に共通。内面は粘土の継ぎ目が明瞭。
		71	青花壺	－	－	－	半環状の大き目の把手か。外面には黒色の呉須で曲線的な文様が描かれる。象の鼻？内外面に透明な釉がかかる。72～74に釉・素地は似るが、呉須の色がやや異なるか。
		72		－	－	－	外面は灰色の呉須で斜格子状の文様が描かれる、龍の表現か。内外面釉が掛かり、内面には横方向のナデが見られる。素地は軟質。72～74は同一個体。粘土の継ぎ目あり。
		73		－	－	－	外面は花？雲？が描かれる。内外面釉が掛かり、内面には横方向のナデが見られる。72と素地・呉須・釉が共通。
		74		－	－	20.8	底部で、外面は無釉。外面には2条の圏線あり。内外面釉が掛かり、内面には横方向のナデ。72と素地・呉須・釉が共通。
		75		－	－	－	濃青色の呉須で、文様不明。釉はやや透明な白濁色で貫入多し。内面釉あり、ロクロ目顕著。素地は硬質。
		76		－	－	－	濃青色の呉須で斜格子のラマ式蓮弁か。釉は白濁色で貫入多し。内面釉あり、ロクロ目顕著。素地は硬質。
		77		－	－	－	濃青色の呉須で龍の鱗が描かれる。釉は白濁色で貫入多し。内面釉あり、ロクロ目顕著。素地は硬質。
		78		－	－	－	濃青色の呉須でにじみ強い、ラマ式蓮弁か。釉はやや透明な白濁色で貫入多し。内面釉あり、ロクロ目顕著。素地は硬質。
		79		－	－	－	濃青色の呉須で蔦唐草文が描かれる。釉は白濁色で貫入多し。内面釉あり、ロクロ目顕著。素地は硬質。
		80		－	－	－	濃青色の呉須でラマ式蓮弁が描かれる。釉はやや透明な白濁色で貫入多し。素地は硬質。
		81		－	－	－	半環状の扁平な把手をもつ。濃青色の呉須。釉は白濁色で貫入多し。内面釉あり、ロクロ目顕著。素地は硬質。
	44	82	青磁碗	15.6	－	－	素地は灰色で緻密。釉は透明感のない淡緑色で薄い。外面は鎬蓮弁で、弁先が縁取りされる。
		83		－	－	5.4	素地は灰白色でやや軟質。釉は透明感のある淡緑色。鉄銹底。おそらく鎬蓮弁文。
		84		－	－	5.0	素地は灰色で緻密。釉は鈍いガラス質の濃緑色。鉄銹底。無文。高台は細くハ字状に開く。内底は尖る。ロクロは右回転。
		85		－	－	4.2	素地は灰白色でやや緻密。釉はガラス質の淡緑色。鉄銹底。鎬蓮弁文。
	43	86	白磁鉢	19.8	－	－	素地は白色で緻密。白化粧後薄い透明釉、貫入が多い。口縁はやや鍔縁になり、端部は上方に摘み上げる。

３．タイ産陶磁器・土器

タイ産の陶磁器・土器類では、褐釉（黒褐釉）陶器四耳壺を量的な主勢に、青磁や土器も得られている。

A．褐釉陶器（第49図･図版45　1～20）

60×40×15ｃｍコンテナ約１箱分（総数162点）が得られている。小形壺も数点程度あるが大･中形の四耳壺に概ね限られ、耳壺以外の器形(器種)はみられない。金城亀信は首里城跡京の内地区ＳＫ０１報文でそれまで沖縄県内における当該資料の基礎的集成を行っているが、ほぼ壺に収束される（沖縄県教委1998：第44表)。復元可能な資料･特徴的な資料を第49図に示す。今回は口縁部断面観を主にした形態分類（Ⅰ～Ⅱ類）と混入物観察による分類（１～２類）を試みた。

まず、前者の器形的分類について述べる。

Ⅰ類 …頸部下～中位から口縁端にかけてラッパ状に著しく外反･開口する器形的特徴で共通するタイプ。本地区出土のタイ産褐釉陶器で量的に主勢を占めるグループである。金武正紀分類の大型四耳壺Ⅱ類の一部（金武1991)、京の内跡分類Ⅳ類に比定し得るとみられ、尾崎直人や向井 亙によりシーサッチャナライSi Satchanalai産（尾崎1998、向井2003）と同定されるものである。屈曲度合や頸部における最小径の位置には差異もみられ、口縁端部の断面観においても玉縁状のものや鍔縁状･略「Ｔ」字状のもの、方形状のものなどがあり、形態的なバリエーションが観取される。

Ⅱ類 …口頸部はさほど開かず筒状に立ち上がり、口縁端に近い位置で外反しており肥厚口縁を形作る特徴で概ね共通するものである。外反の角度がきつく断面観が舌状口縁を呈するもの、外反はやや緩く太く丸い肥厚口縁部を形作るものなど、本類でも口縁端部の断面形状にバリエーションがみられる。金武正紀分類の大型四耳壺Ⅰや京の内分類Ⅷ類に比定し得るものを含み、向井分類においてメナムノイMae Nam Noi産と同定されるグループに近いと思われる。

また、上記の器形分類とは別に、器形的な特徴が窺える図化資料について胎土･混入物による分類も試みた（第16表)。素地は、大半が粉味を帯びた粗い素地である（感触はざらざら)。混入物では、石英に似た白色粒(半透明色鉱物粒)や赤色粒･褐色粒が認められるが、混入量に若干差異が窺えることから下記の類別記号を設けた。

１類…全体に白色粒がよくみられ、赤色粒･赤褐色粒が僅量なもの。

２類…白色粒はやや少なめで、赤色粒･赤褐色粒が目につくもの。

以下、器形分類に準拠して簡単に述べる。上記の器形分類から、第49図1～12がⅠ類、同図13・14がⅡ類となる。

前者の口縁部Ⅰ類のなかで6・10を除くものは長頸の壺であり、向井分類でいう「シーサッチャナライ長頸四耳壺」（向井2003）に類するものである。2・5・8・9などは、口縁端部の断面観が略「Ｔ」字状や玉縁状などバリエーションもみられるが、外反させた口縁部内端（口縁端上面）に粘土突帯を付け足している状況が破損面から窺え、その類似性･共通性が留意される。10は本類でも外反度合が微弱なもので、口縁端上面に突帯を付さないタイプとみられる。

13は筒状に立ち上がる頸部から口縁端部を巻くように成形し、太く丸い肥厚口縁を形作っている。14はやや短めな頸部と推量され、逆「L」字状に屈曲外反させた口縁端の上面に断面三角状の突帯を付け足している。

15・16は頸部基部付近の胴部片で、ともに頸胴部の境付近に突帯を廻らすが、最小径の位置がやや異なる。15は頸部下位(基部)から開き、16は最小径位置がやや上がる。17～20は底部資料だが、17は小形壺でその他は大形壺である。

B．青磁（第50図･図版46　21）

タイ青磁とみられる小形の双耳瓶が１点得られている。球状に近い胴から頸部が短く立ち、断面玉縁状の口縁部にかけてやや扁平な縦耳が２個付される。褐灰色の素地は陶質に近く、黒色微粒を主に混入しオリーブ灰釉を透かして斑点状に見える。施釉は口縁内までで内面露胎部には轆轤痕が残る。推算口径3.8ｃｍ。シーサッチャナライ産とみられる。

県内の既報告資料でも類例は殆どみられず、首里城跡管理用道路地区で褐釉陶器小壺（沖縄県埋文2001：第31図43)、鹿児島県悪石島保有資料（亀井1993：fig.6･7）に類似資料が散見される程度であり、貴重な資料と思われる。なお、博多遺跡群においてもシーサッチャナライ産の青磁双耳瓶が得られているようである（森本2004)。

C．土器（第50図・図版46　22～34）

いわゆる半練土器は蓋が10点得られたが、すべて小破片で全形が窺え得るものはない。特徴的な資料５点を図化した（同図22～26）。いずれも器面色調は橙色系で黒色鉱物粒や赤色粒・褐色粒がよく入るなど、当該土器の特徴が窺える。22は蓋中央の撮茎部のみで形状は饅頭形か宝珠形か判然としない。23～62は蓋端部破片である。端部の断面形状にバリエーションが認められるが、金武正紀の形態分類（金武1991）のⓐ～ⓑ類に比定可能な内容とみられる。23は折り曲げた端部が殆ど摘み上げられず流線型を呈する。全体に被熱しており歪みも認められる。24～25は折り曲げられた端部が突起化し、蓋端部との間に明確な凹部がみられるものである。24は全体が丸く肥厚した端部に微弱な突帯が付すかたちである。25・26は突起部が断面三角形状を呈するタイプだが、前者は突帯が端部と同じ高さまである。

第15表　タイ産褐釉陶器出土状況

器種・分類			合計	最低個体数
壺	口縁部	Ⅰ類	13	97
		Ⅱ類	2	
		分類不詳※	29	
	耳		17	
	底部		97	
小型壺	口縁部		3	1
	底部		1	
合 計			162	98

※小破片・未図化資料で、明確な類別が困難なもの

他方で、胎土や器形等からタイ産土器に類似した特徴を持つ、精胎薄手の土器が10点出土している（同図27～34）。27～29はタイ北部のランプーンLam Phun周辺が産地とみられ、「ランプーン土器」（富山美術館1997）、「ハリプンチャイ陶」と呼ばれる土器である。いずれも壺の肩部～胴部上半の破片資料である。外面には金雲母粉や丹塗による装飾、間隔を空けた数段構成の沈線にお日様マーク似の輪花状文など、当該土器の特徴がよく窺える。なお、化粧土等による象嵌は認められなかった。27では２種類の文様が交互に配された構成とみられ、28・29は肩部にみられる微弱な突帯や文様・施文具形態で共通しており同一個体の蓋然性も高い。

県内でも類例は稀少で、今帰仁城跡志慶真門郭地区（今帰仁村教委1983：第37図５）に類例がある程度である。九州では、博多遺跡群第60次調査で今回の資料と同様なランプーン土器が確認されている（森本2004）。

同図30～34は、一見して近世沖縄産の陶質土器に似た印象も受けるが、器形復元および胎土等観察から上記に述べた27の素地やタイ産とされる既報告の類例資料との共通性・類似性が窺え、タイ産と思量される土器である。

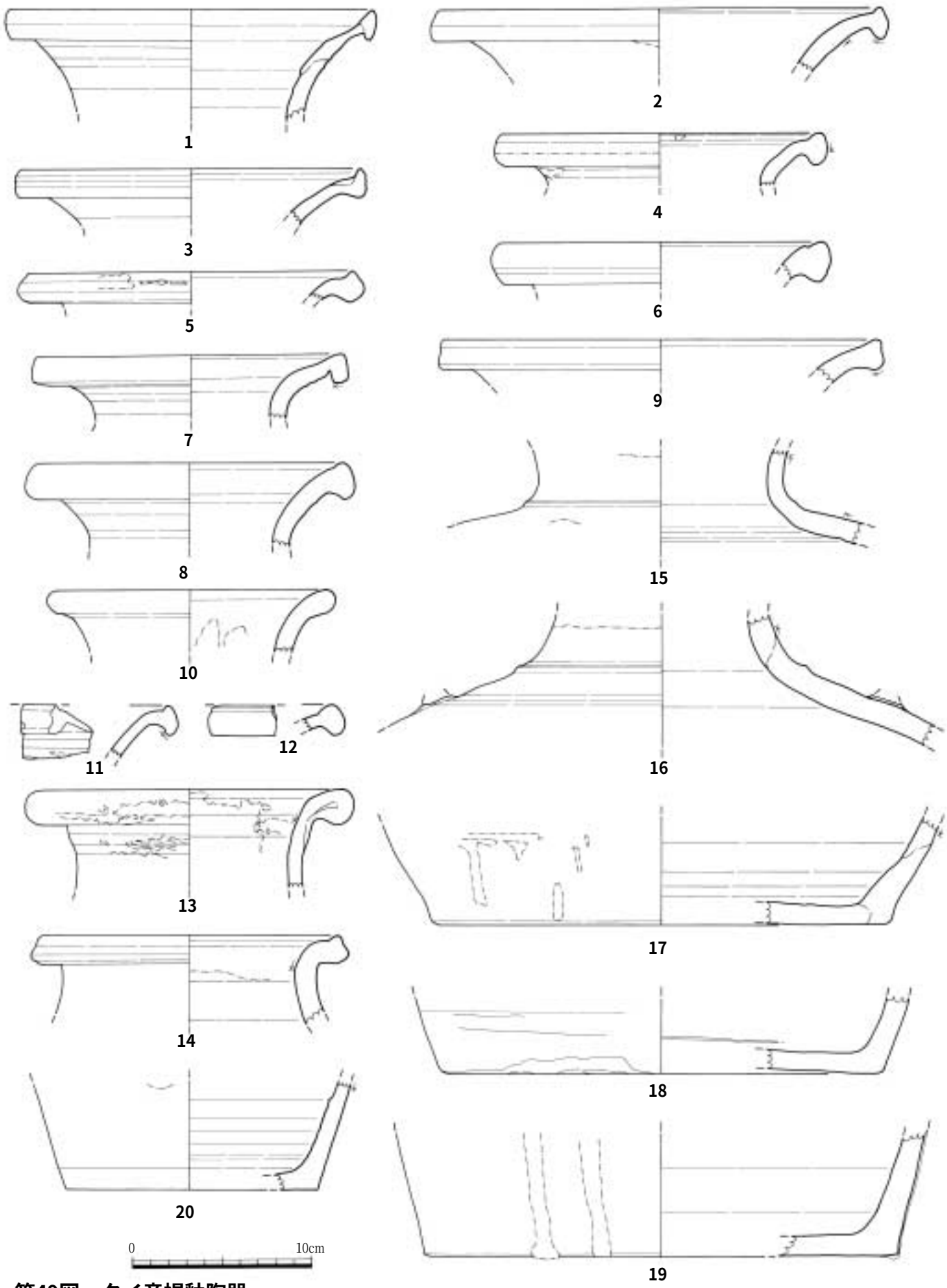
30は扁球状の胴部に広口の口頸部が筒状に立ち上がる器形で、頸胴部境には沈線が２条廻り、頸部には篆書体で「萬象□□」と読めるスタンプ文がみられる。内外面の色調は橙色だが破損面では灰黄色に近く、素地はかなり細かい。器形的な類例としては今帰仁城跡主郭地区出土の無釉陶器香炉（今帰仁村教委1991：第74図８）がある。31も30と同様な器形・サイズの香炉である。32にも30と同様なスタンプ文がみられるが、器形的には後述の33や34に近い。33・34はともに法量の小さな短頸壺だが、口頸部の形状に差異が認められる。33は頸部が締まり、口縁端部が玉縁状に肥厚した短頸壺である。34はやや胴が張る体部に頸部が短くつき、肩部には耳が付される。これらランプーン土器・推定タイ産土器は被熱していない。

第16表　タイ産褐釉陶器観察一覧

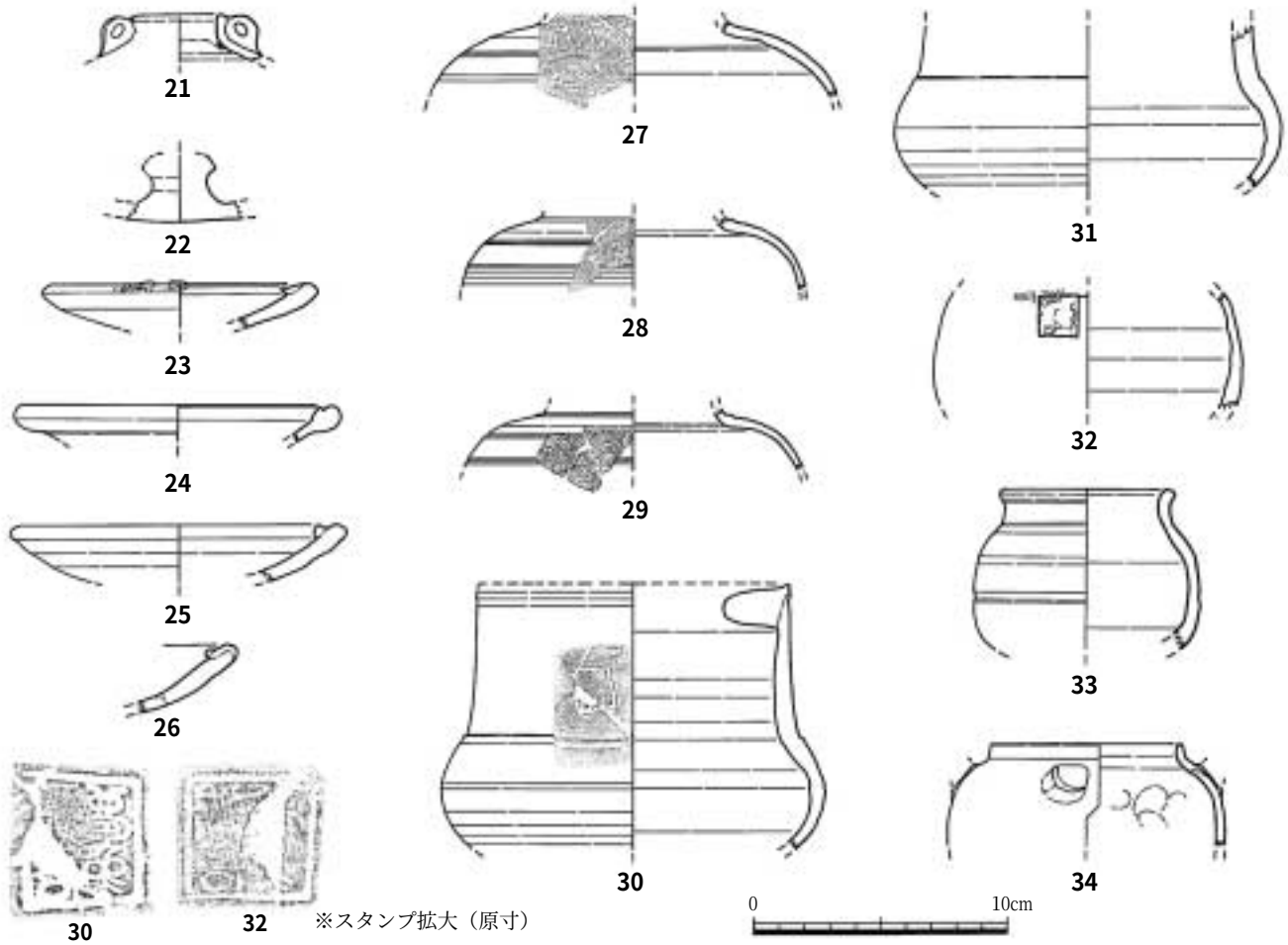
単位：cm

図・図版番号			器形	分類	法量 口径	法量 器	法量 底径	素地・混入物	釉状況	その他の特徴
第49図	図版45	1	四耳壺	Ⅰ類	20.2	—	—	素地は赤褐色で、粗粒. 2類/赤色粒(全体に比較的多量).黒色微粒.石英質粒(少量).	オリーブ黒色釉を施釉.	断面に轆轤成形の凹凸よく残る.口縁に向かって薄手となり、口縁端部に粘土充填した模様.
		2			25.5	—	—	素地は褐灰色で、粗粒. 1類/白色粒.赤色粒.黒色微粒(全体に少量).	黒～黒褐色釉を内外に施釉.口縁端直下は掻き取り.	垂下口縁の上端に粘土突起を付し、断面観は略「T」字状.
		3			19.0	—	—	素地は褐灰色で、やや粗粒か. 2類/褐色粒.石英質粒.黒色微粒.	器面保持あまり良くなく、釉内容は不詳.口縁直下は掻き取り.	全体に比較的薄手.口縁端上面に突帯充填.端部側面に回転による微弱な凹線.
		4			18.6	—	—	素地は灰黄褐色で、やや粗粒. 2類/褐色粒.石英質粒.	黒褐釉を施釉.口縁下露胎部に釉垂れ.	口縁部上面に目跡.口縁端内縁に凹線.露胎部に轆轤痕.
		5			13.2	—	—	素地は褐灰色で、やや粗粒. 1類/石英質粒.赤色・褐色粒.黒色微粒.	オリーブ黒色釉を施釉.口縁部直下を釉掻き取り.	緩やかに外反する口縁部上面に粘土突起を付した成形.
		6			19.0	—	—	素地はにぶい黄橙色でやや粗粒. 2類/赤色粒. 褐色粒.石英質粒.黒色粒.	全体に釉保持悪く,不詳.口縁部直下は釉掻き取り.	口縁部内縁には明確な凹線.全体に重厚な成形.
		7			17.0	—	—	素地は灰～灰黄色で、比較的精良. 2類/褐色粒.黒色微粒.	オリーブ褐～オリーブ黒色釉を施釉.口縁部直下は掻取り.	口縁端部が断面方形状.被熱受けているようにも見受けられる.
		8			18.0	—	—	素地は灰黄褐色で、精良. 1類/褐色粒.黒色微粒(ともに全体に少量).	オリーブ黒色釉を施釉.頸部外面は釉掻き取り.	全体に厚手で、口縁肥厚部も重厚な玉縁状を呈す(成形は5や9と同様).
		9			24.6	—	—	素地は暗灰色で、比較的粗粒. 1類/石英質粒.黒色微粒.	釉の保持悪く不詳.口縁部下は掻き取り.	緩やかに外反した口縁部上面に突起貼付.全体に被熱した観.
		10			17.2	—	—	素地は褐灰色で、やや粗粒か. 1類/石英質粒.褐色粒.黒色微粒.	黒色～黒褐色の釉を内外に施釉.	比較的厚手.外反度合は弱く、口縁端に突帯を付さないタイプ.
		11			—	—	—	素地は褐灰色で、やや精良. 2類/褐色粒.黒色微粒.石英質微粒(かなり僅量).	釉保持あまり良くなく、釉の内容は不詳.口縁部直下は掻き取り.	全体に薄手成形.垂下口縁の上面に突起を付した成形とみられる.
		12			—	—	—	素地は褐灰色で、やや精良. 2類/褐色粒.黒色微粒.	釉保持やや悪く不詳だが,黒～黒褐色釉か.	口縁端部全体が丸く肥厚.
		13		Ⅱ類	18.3	—	—	素地は褐灰色で、やや粗粒か. 2類/赤色粒. 褐色粒.石英質粒.	灰～暗オリーブ釉.口縁直下・内面は掻き取り.	口縁部内縁付近に目跡確認.口縁部を丸く折りたたみ成形.
		14			17.6	—	—	素地は灰色(黄灰色)で、やや粗粒. 1類か/石英質粒.褐色粒・赤色粒.	暗オリーブ色釉を施釉.	口縁上面に目跡確認.屈曲外反した口縁部上面に突起貼付.
		15		Ⅰ類	頸径15.2	—	—	素地は褐灰～灰黄褐で、精良. 2類/褐色・赤色粒(全体に少量).	暗オリーブ色釉を頸部まで(露胎みえる).	頸胴部境に突帯.内面には轆轤痕および接合痕.
		16		—	頸径16.2	—	—	素地は灰黄褐色で比較的精良. 2類/褐色粒.赤色粒.	オリーブ黒色の釉を厚く施釉.	頸胴部境に突帯.頸部内面に接合痕.
	46	17		—	—	—	25.8	素地はにぶい赤褐色の粗粒. 1類/石英質粒,褐色粒.黒色微粒.	露胎だが、部分的に灰オリーブ色の釉垂れ.	やや膨らむ器形.内面には明瞭な轆轤痕.外面に釉掻き取り.
	図版45	18		—	—	—	24.6	素地はにぶい橙の粗粒. 2類/褐色粒・赤色粒.石英質粒.	露胎しており、釉の内容は不詳.	内底際近くに接合痕.外底面は僅かに上がる.
		19		—	—	—	26.6	素地は褐灰色でやや精良. 2類/黒色・褐色粒.石英質粒(少量).	露胎だが、部分的に黒色の釉垂れ.	内面には明瞭な轆轤整形痕.
		20		—	—	—	14.0	素地は褐灰～灰黄褐色で、比較的細かい. 2類/赤色粒・褐色粒.黒色微粒.	露胎で釉内容は不詳だが、黒色の釉垂れ僅かにみえる.	内面には轆轤整形痕が段状に残る.

頸部径は頸胴部境の突帯部で推算. 混入物は基本的には多く見られた順に記載.



第49図　タイ産褐釉陶器



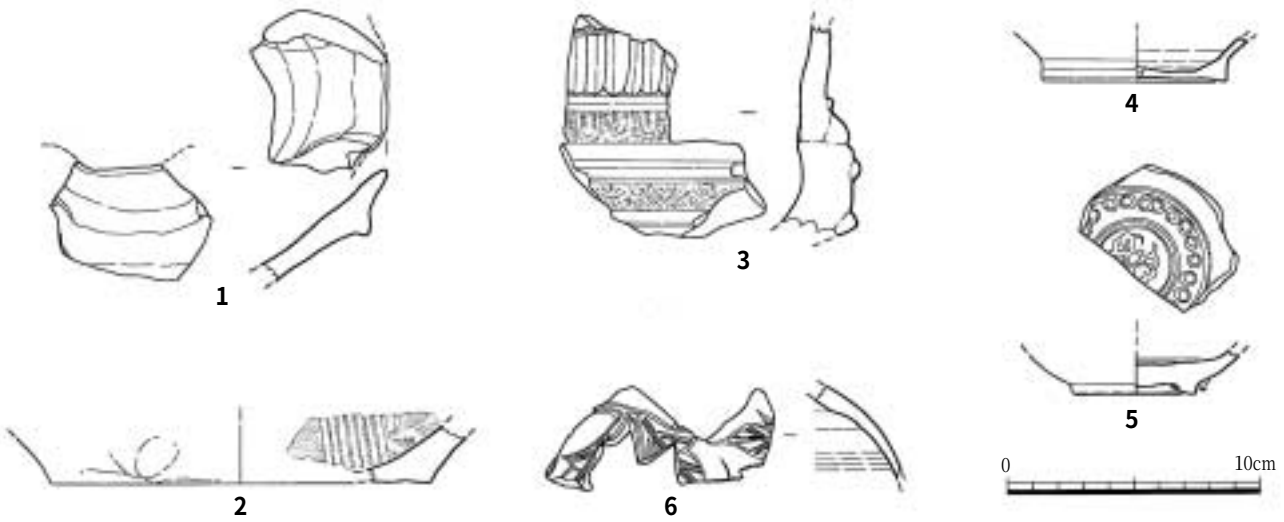
第50図　タイ産青磁・土器

第17表　タイ産土器観察一覧

単位:cm

図・図版番号			種類	器形	法量 口径	法量 器	法量 底	素地・混入物	色調	その他の特徴	備考等
第50図	図版46	22	半練土器	蓋	—	—	—	赤色粒.石英質粒.黒色鉱物微粒(全体に多量).	橙(断面芯部は灰黄褐)	調整時の擦痕が明瞭に残る.	撮みの基部.
		23			11.0	—	—	観察困難だが、石英質粒.黒色鉱物微粒確認.	—	中央付近(撮み部)は薄手.	被熱による変形若干あり.
		24			13.0	—	—	石英質粒.褐色粒.黒色鉱物微粒(比較的少量).	橙(断面芯部は灰色)	端部全体が丸みを帯び、内側に微弱な突起.	
		25			13.4	—	—	褐色粒・赤色粒.石英質粒.黒色鉱物微粒(多量).	橙(断面芯部は褐灰)	断面やや舌状、内側に断面三角状突起. 全体に器厚同じ.	下面の中央付近に黒斑.
		26			—	—	—	石英質粒.褐色粒.黒色鉱物微粒(全体に多量).	橙(断面芯部は灰黄褐)	断面やや舌状、内側に断面三角状突起. 中央付近でかなり薄手.	
		27	ランプーン土器	小形壺	頸径7.8	—	—	黒色鉱物微粒.赤色粒.外面に金雲母が若干残存.	浅黄橙(器表面は橙).	肩部以上に丹を塗布.象嵌文様は2種類.	長頸壺か.
		28			頸径7.4	—	—	黒色鉱物微粒.褐色粒.外面に金雲母を塗布.	橙(内面は2.5YR)	肩部以上に丹塗布.頸胴部境に段形成(微弱な突帯を削り出し).	長頸壺か.
		29			頸径7.2	—	—	黒色鉱物微粒.褐色粒.外面に金雲母を塗布.	橙(内面は2.5YR)	肩部以上に丹塗布.頸胴部境に段形成(微弱な突帯を削り出し).	長頸壺か.No.28と同一個体か.
		30	不詳土器	香炉形	15.2	—	—	黒色鉱物微粒.褐色微粒(全体にあるが少量).	内外ともに橙～にぶい橙	口縁下、頸胴部境に段.外面の胴下半に板状工具ナデ.内面に整形時の指頭痕微かに残る.	頸部に「萬象□□」のスタンプ.底部の破損は人為的(転用)か.
		31			15.4	—	—	黒色鉱物微粒.褐色微粒(全体にあるが少量).	内外ともに橙	頸胴部境に段形成.外面の胴部下半には30と同様な整形痕.	底部付近の破損は人為的(転用)か不詳.
		32			—	—	—	黒色鉱物微粒.赤色微粒(全体にあるが少量).	にぶい橙	内面には回転整形痕が規則的にみられる.	No30と同様のスタンプ.
		33		小形壺	7.0	—	—	黒色鉱物微粒.褐色粒(全体にあるが少量).	内外ともに橙	頸胴部境および胴部に凹線.口縁部は断面玉縁状に肥厚.	
		34			7.6	—	—	黒色鉱物微粒.褐色微粒(ともに全体に少量).	内外ともに橙～にぶい橙	内面に指頭押圧痕(？)微かにみられる.	無頸に近い程短い口頸部.

混入物は基本的には多くみられた順に記載.



第51図　本土産・韓半島産他陶磁器

４．韓半島産・本土産・産地不明陶磁器等（第51図）

これまで扱った産地以外の陶磁器について述べる。産地としては、韓半島、備前などの本土産、その他産地が特定できないもの、グスク土器がある。グスク土器については、小片５点（内口縁2点）のみであるので図化は省略したが、鍋形の胴部と思われる。他は図示したものが全てである。

１・２は備前擂鉢である。１は口縁で注口部にあたる。２は底部で擂目が８本／2.4cmの単位で施される。底径15.1cm。間壁ⅣＢ期、乗岡中世４期に相当し、15世紀前半～中葉と思われる（間壁1991・乗岡1999）。これらについては明瞭な被熱はない。

３は本土産瓦質土器の風炉形の胴部下半である。外面文様は縦格子文、半長円文、花菱文で構成される。青森県尻八館などで出土しているものと文様構成が類似している（大橋1981・近江1997）。ただ、胎土は砂礫が多く混じっているので、いわゆる大和（奈良県盆地部）産のものではない。なお、この瓦質土器は明らかに被熱しているため、他の陶磁器の主体年代である14世紀後半～15世紀前半・中葉と抑えられる重要な資料である。

４は産地不明の土器の底部である。胎土は砂礫が全く混じらない精良なもので、色調は橙色である。碗などの小形のものと思われる。底径7.4cm。

５は、韓半島産象嵌青磁である。器形は福岡県隅遺跡の類例から腰折碗と思われる（森田1985）。素地は青灰色で、釉は灰色のものが掛けられ、畳付・底部中央が無釉である。見込みには白象嵌による中央に花弁文、圏線２条を挟んで径５mmの円形文を並べ、さらに外側も２条の圏線で構成される。底径5.0cm。

６は産地不明の土器胴部片である。素地は砂礫が混じるが、比較的硬質である。色調は内外面とも黒色だが、外面は丁寧に研磨されており、器面は滑らかである。さらに外面は研磨後、線刻による草葉の表現がされる。内面はロクロ目が顕著である。

第３節　ＳＢ４下層出土陶磁器

ＳＢ４下層出土陶磁器は146点（19.0kg）、最低個体数77点を数える。青磁が135点（16.0kg）と多数を占め、その他天目10点（2.7kg）、白磁１点（0.3kg）が確認された。遺物の大半は被熱しており、遺物同士が溶着した状態で出土した。古手の青磁が若干含まれるが、大半は14世紀後半～15世紀前半の遺物でまとめられる。被熱した遺物とそうでない遺物は観察表において区別する。また、被熱した遺物の内、器形の変化、釉の溶解や変色がみられるものは観察表での釉色等の記録は割愛する。分類基準については「第４章第２節」を参照されたい。

A．白磁（第52図１）

白磁は１点確認された。福建産Ⅲ類に該当する。高台は方形に成形し、畳付は斜めに削るというよりは外側に段を持たせる。体部を内傾させ直口口縁を呈する。口縁部に向かうにつれて器壁を細くシャープに仕上げる。釉は高台脇から外底面まで露胎させ、内面は総釉である。口径が10cmを越すことから、同器形のグループの中でも古手に属するものと思われる。

B．青磁（第52図第53図２～30）

青磁の器形には碗・皿・壺・壺蓋が確認された。皿が大半を占め碗がそれに続く。壺・壺蓋はそれぞれ１点ずつ確認できた。出土数等の詳細は第18表を参照されたい。

碗（２～11・13・14）

碗は分類ではⅡ類（２・３）、Ⅲ類（11）、Ⅳ類（４～10）、束口碗（14）があり、大半をⅣ類が占める。

Ⅱ類は直口口縁を呈するもので、２が無鎬蓮弁文、３が無文碗となる。

Ⅲ類は腰が張り口縁部が玉縁状を呈するものである（11）。

Ⅳ類は無鎬蓮弁文が施されるもの（４・13）とラマ式蓮弁文（５）が施されるものが僅かに確認されるが、大半は無文（６～10）である。高台資料は外底を蛇目状に釉剥し見込は総釉である。見込に印花文を施すもの（９）も見られる。13は無鎬蓮弁文碗の底部資料である。彫が深く、肉厚の蓮弁文を施す。

14は束口碗で、丸みを帯びて内傾する胴部から口縁部が屈曲して「くの字」状を呈する。外面に２条の陰圏線と無鎬蓮弁文、内面に草花文（？）が施されており、丁寧に仕上げられた優品である。外底は無釉である。高台の成形から、ＳＢ４下層出土陶磁器の中ではやや古手の様相を持ち、14世紀前半・中葉に遡る可能性もある。

皿（12・15～28）

皿はⅡａ類（12・15・16）、Ⅲ類（22～28）、Ⅳ類（17～21）、Ⅴ類があり、大半がⅣ類で、次にⅢ類が多い。

Ⅱａ類は口折部が緩やかな口折皿である。高台を方形に成形し、畳付から外底面は露胎させ、見込は総釉。

Ⅲ類は腰から胴部を経て口縁部まで内傾させて立ち上げる器形で、口縁部は直行させるもの（22・23・28）や、やや外反させるもの（25・26）、玉縁状に肥厚させるもの（24・27）などがある。高台はすべて方形に成形する。釉の仕上げは、外底面を露胎させ見込は総釉で印花文を施すもの（28）と、外底面を露胎させ見込を蛇目状に釉剥するもの（26）が１例ずつある他は、すべて外底面を露胎させ見込を釉剥（22～25、27）するものである。

Ⅳ類は、腰部を折り、体部を外反させるいわゆる腰折皿（17

第18表　SB4下層陶磁器出土状況

分類		外面文様	外底	内底	部位	点数	合計
青磁碗	Ⅱ	無鎬蓮弁文	不明		口縁	1	7
			蛇の目	総釉	全形	1	
		無文	不明		口縁	4	
			蛇の目	総釉	全形	1	
	Ⅲ	無文	不明		口縁	6	7
			無釉	総釉	全形	1	
	Ⅳ	ラマ式蓮弁文	不明		口縁	1	21
		無文	不明		口縁	15	
			蛇の目	総釉	全形	2	
		不明	蛇の目	総釉	底部	3	
	束口碗		無釉	総釉	全形	1	1
	不明	無文	蛇の目	総釉	底部	7	7
			無釉	総釉		3	
青磁碗計							43
青磁碗最低個体数							19
青磁皿	Ⅱａ	無鎬蓮弁文	無釉	総釉	全形	4	6
					底部	1	
			蛇の目	総釉		1	
	Ⅲ	無文	不明		口縁	14	24
			無釉	釉剥ぎ	全形	7	
				蛇の目		1	
				総釉		2	
	Ⅳ	無文	不明		口縁	29	53
			無釉	釉剥ぎ	全形	7	
				総釉		10	
				不明		1	
			蛇の目	総釉		5	
		稜花	無釉	総釉		1	
	Ⅴ	無文	不明		口縁	2	2
	不明	無文	蛇の目	総釉	底部	1	5
			無釉	釉剥ぎ		2	
				総釉		1	
				蛇の目		1	
青磁皿計							90
青磁皿最低個体数							45
青磁壺					底部	1	
青磁蓋					口縁	1	
天目茶碗					全形	10	
白磁皿（福建Ⅲ）					全形	1	
SB4総計							146
SB4最低個体数							77

～20）と、胴部をやや内傾させ口縁部を強く折ることで腰折皿と外面観は近似する器形を呈するもの（21）がある。細部の成形方法にはバラエティーがある。17は畳付から外底面を露胎させ、見込を釉剥する。18は外底面を露胎させ、見込は総釉とする。19は畳付から外底面を露胎させ見込は釉剥し、印花文を施す。21は外底面を蛇目状に釉剥し、見込は総釉で、口縁部は稜花とする。21は外底面を蛇目状に釉剥し、見込には１条の陽圏線を施しその部分のみ釉剥する。

Ｖ類は図化していないが、内傾する体部から直立口縁を呈するものである。

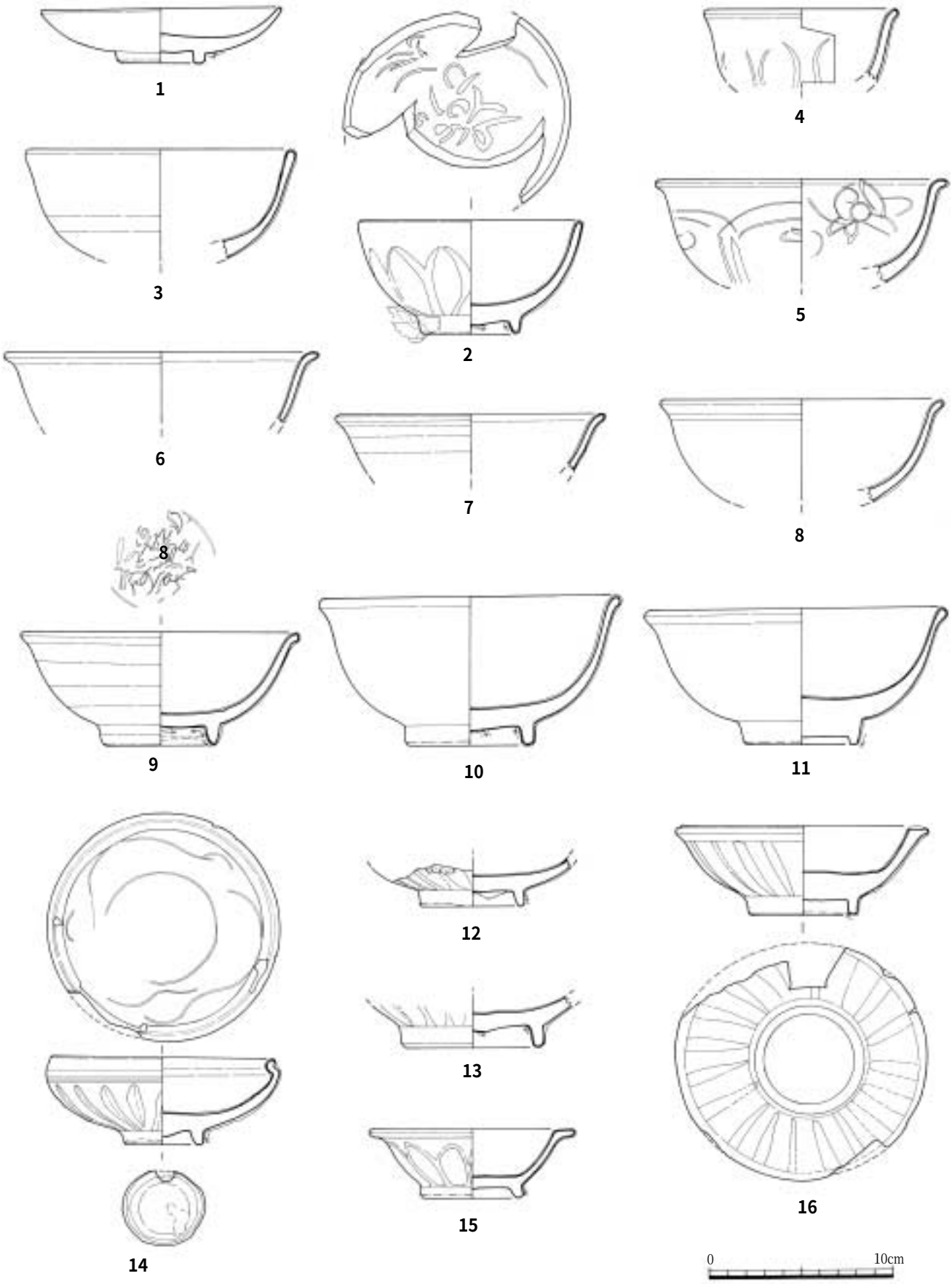
壺・壺蓋（29・30）　いわゆる酒会壺と呼ばれる短頸壺（30）と蓋（29）が１例ずつ確認された。もともと一対のものであるのかどうかは判断できない。

C．天目茶碗（第53図31）

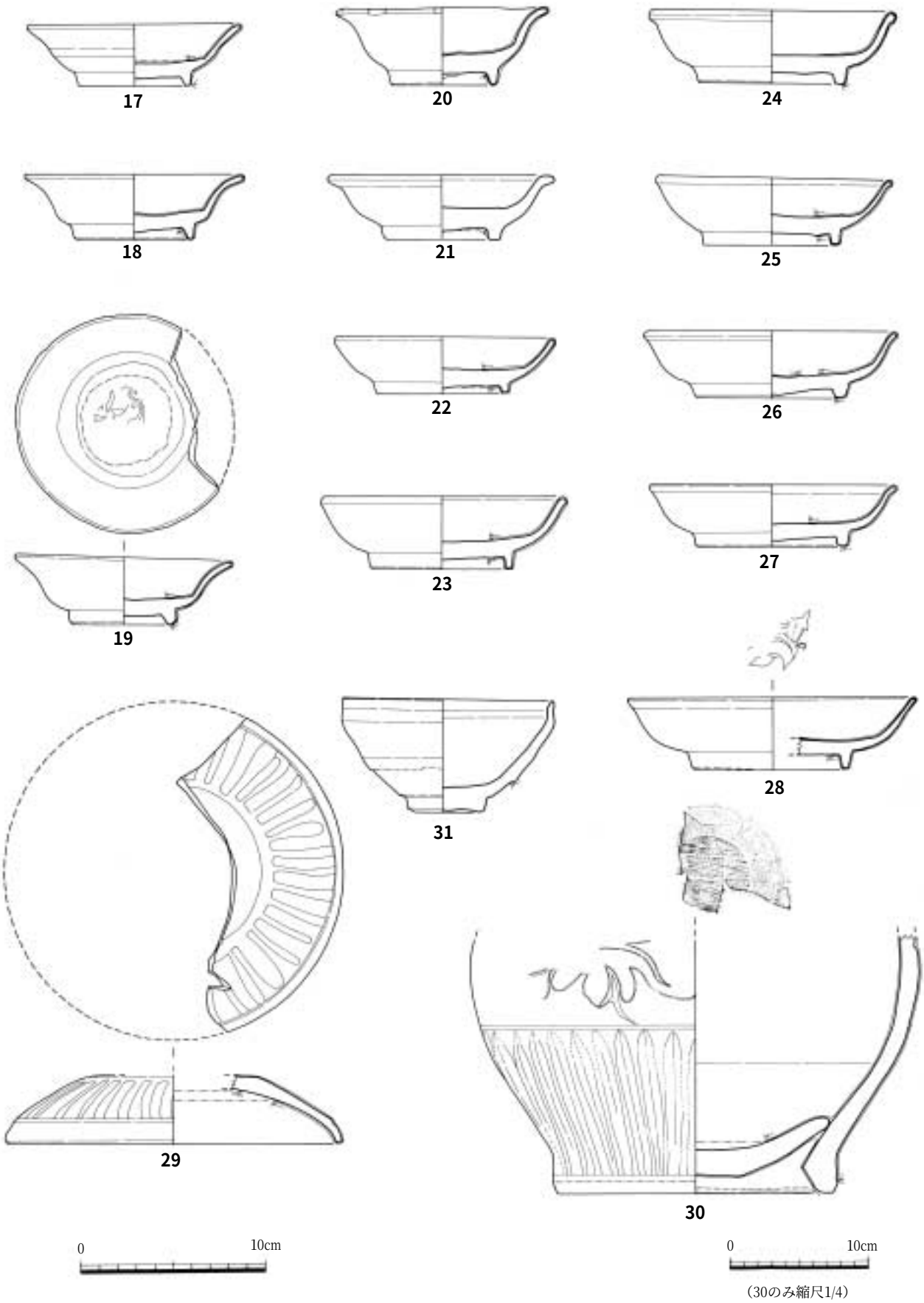
天目茶碗は完形の碗が10点確認された。被熱して遺物同士の溶着がひどく、１点のみ図化した。図化していないものも含めて全て、口縁は直立するⅠ類、高台は削りが浅いⅠ類の形態のものである。

第19表　SB4下層出土陶磁器観察一覧

図・図版番号			種類	器形	分類	部位	口径	器高	底径	被熱	特徴
第52図	図版48	1	白磁	碗	福建Ⅲ	口～底	13.0	3.0	4.3	○	見込中央部付近が盛り上がる。畳付に段を持つ。釉は腰まで。
		2	青磁	碗	Ⅱ	口～底	11.8	6.3	5.1	―	片切り彫りによる蓮弁文。口唇部は内側にやや丸みを持つ。青緑色の釉。素地は微粒子で灰白色。
	49	3				口～腰	14.3	―	―	○	器壁は体部より口縁部が厚くなる。素地は微粒子で灰白色。
		4			Ⅳ	口～体	10.2	―	―	―	彫りが深く肉が厚い蓮弁文。青緑色の釉で貫入が目立つ。素地は微粒子で灰白色。
		5				口～腰	15.4	―	―	―	ラマ式蓮弁文碗、内面に草花文。口縁部を強く折る。濃緑色の釉で僅かに貫入が見られる。素地は微粒子で灰白色。
		6				口	16.9	―	―	―	濃緑灰色の釉で、貫入が僅かに見られる。素地は微粒子で灰色。
		7				口	14.4	―	―	○	素地は微粒子で灰色。
		8				口～腰	15.0	―	―	―	濃緑灰色の釉で、貫入が僅かに見られる。素地は微粒子で灰色。
	48	9				口～底	14.8	6.2	5.9	○	畳付外側側面を斜めに削る。緑灰色の釉で外底面を蛇目状に釉剥。見込は印花文。素地は微粒子で灰色。
		10					15.9	8.2	6.5	○	高台は方形。緑灰色の釉で外底面を蛇目状に釉剥。粗い貫入が見られる。素地は微粒子で灰色。
		11			Ⅲ		16.0	6.5	6.0	○	高台の内削りが浅く、畳付は方形、側面観は逆ハの字状を呈する。外底面は露胎。素地は粗く橙色で、細かい白色鉱物が混入する。
	49	12		皿	Ⅱa	底	―	―	5.4	○	腰がやや張る口折皿と考えられる。高台の側面観はハの字状を呈する。見込に印花文が観察できる。外底面は露胎。素地は微粒子で灰色。
		13		碗	Ⅳ	底	―	―	7.3	○	高台の内削りが深く、畳付は方形。高台脇を強く削る。外底面を蛇目状に釉剥。見込に印花文。素地は白灰色で微粒子。
	50	14		束口碗		口～底	12.0	4.9	4.1	○	外面に無鎬蓮弁文、内面に草花文。濃緑色の釉で、粗い貫入が目立つ。素地は微粒子で灰白色。
	48	15		皿	Ⅱa	口～底	10.9	3.8	5.2	○	片切り彫りによる蓮弁文。外底面は露胎。素地は微粒子で白色。
	50	16					13.5	4.9	5.8	○	口の折部が短い。高台が厚く、内面の中央部が盛り上がる。畳付は方形。濃緑色の釉で外底面は露胎。素地は微粒子で白色。
第53図	50	17			Ⅳ		11.5	3.4	6.1	○	高台は方形。畳付から外底面は露胎で、見込は釉剥。素地は微粒子で灰色。
		18					11.9	3.6	6.2	○	高台は方形。外底面は露胎で、見込は総釉。素地は微粒子で灰白色。
	51	19					12.1	3.7	5.4	○	畳付外側側面を斜めに削る。畳付から外底面は露胎。見込は釉剥で、印花文。素地は細粒子で橙色、白色鉱物が混入する。
		20					11.4	4.3	5.5	○	無文稜花皿。見込みは総釉で、外底面は蛇目状に釉剥。
	50	21					11.7	3.4	6.0	○	腰折ではなく、腰から胴部が内傾し、口縁部を強く外反させる。外底面は蛇目状に釉剥し、見込は総釉。
		22			Ⅲ	口～底	11.6	3.1	7.1	○	直口口縁。高台は方形。外底面は露胎させ、見込は釉剥。素地は微粒子で灰色。
		23					13.2	4.0	7.6	○	口縁部が玉縁状を呈する。高台は方形。外底面は露胎で、見込は釉剥。素地は微粒子。
		24					13.2	4.0	7.8	○	口縁部が玉縁状を呈する。高台は方形。外底面は露胎で、見込は釉剥。素地は微粒子。
	51	25					13.2	3.7	7.4	○	口縁部が玉縁状を呈する。高台は方形。外底面は露胎で、見込は釉剥。素地は微粒子。
		26					13.5	3.7	8.0	○	口縁部は外反し、玉縁状を呈する。畳付の厚さは太い部分と細い部分があり、極端に違う。外底面は露胎で、見込は蛇目状に釉剥。素地は微粒子。
		27					13.4	3.4	8.2	○	口縁部はやや外反し、玉縁状を呈する。畳付の内側を削り、段を持たせる。外底面は露胎で、見込は釉剥。素地は微粒子。
		28					15.7	4.0	8.3	○	口縁部は玉縁状を呈する。畳付外側はやや斜めに削る。外底面は露胎させ、見込は総釉で印花文を施す。素地は微粒子で灰色。
	49	29		壺蓋		口～胴	18.2	―	―	―	体部は箆状工具を使って、等間隔に深く彫る蓮弁文を施す。内面は蛇目状に釉剥する。緑色の釉で、粗い貫入が見られる。素地は白灰色で微粒子。
		30		壺		胴～底	―	―	20.0	―	体部下半に無鎬蓮弁文、中位には草花文を浮き彫りする。畳付は外側・内側を斜めに削る。緑色の釉で粗い貫入が見られる。畳付、内面を釉剥。素地は白色微粒子。
		31	天目	碗		口～底	11.5	6.2	3.5	○	高台は上底状を呈し、畳付は斜めに削る。厚い釉を内面から外面の体部中位まで施す。



第52図　SB4下層出土陶磁器（1）



第53図　SB4下層出土陶磁器（2）

第４節　銭貨（図版53）

本地区では、落ち込み（ＳＲ11・12・24・32・33周辺）を中心に、銭貨・銅釘・武具・飾り金具などの様々な銅製品が多く出土した。しかしながら、小片であることもあって、今回は銭貨についてのみ概略を報告する。

落ち込み出土の銭貨は火を受けて変形しているものが多くあり、それらは○○元寶などの北宋銭、永楽通寶などの明銭であった。得られた銭貨は大部分が細破片であり、銭文・銭種の確定が困難なものが多い。

その中で特徴的な資料１点についてX線透過撮影を行った。表面観察では銭貨に付着しているものがあることがわかる。銭貨の法量から大銭であり、付着しているものが湯道に残ったものとすると、枝銭の可能性もあったが、X線透過撮影の結果、銭貨と付着物は本来、離れているものであり、枝銭ではないことが判明した。銭貨の法量は全長3.7cm、銭径2.5cm、重量6.48g。X線透過撮影の条件は、130KｖP、2.2mA、3.5min、使用フィルム、fujiIX FR。

図版53　銭貨

第５節　玉製品・骨製品（第54図）

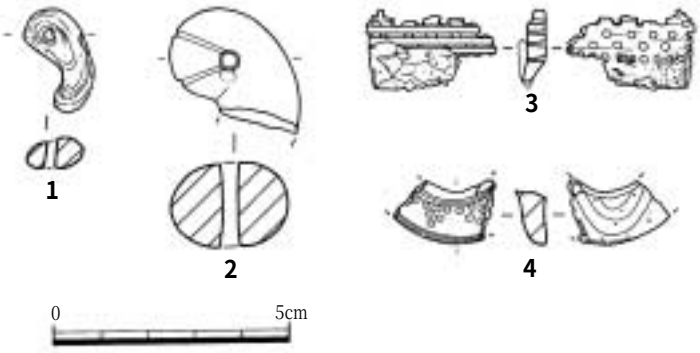
玉製品が大量に出土しているが、その多くはやはり落ち込み（ＳＲ11・12・24・32・33周辺）から出土している。種類としては小玉・丸玉・勾玉・棗玉などがある。

小玉・丸玉はその量が膨大であるため今回は実測・集計を省略するが、特徴としては径２㎜～４㎜の小玉と、径６㎜～８㎜の丸玉が主で、色調は青色が圧倒的に多い。また、多くの丸玉・小玉が火を受けたためか溶着しており（巻頭図版７）、首里城京の内においても類例資料が確認されている（沖縄県教委 1998）。溶着したものも含め、丸玉・小玉の全重量は960.49ｇである。

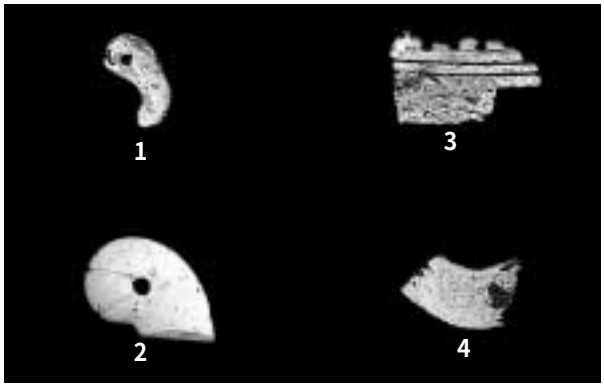
勾玉は４点出土している内、２点を実測した。１は完形品。小型で表面はアバタ状を呈し、形はややいびつである。材質はガラス製だと思われる。長さ2.1cm、重量0.97ｇ。落ち込みより出土。２は頭部のみの欠損品である。頭部に２本の溝を持つ、丁字頭勾玉（藤田1993）と呼ばれるものである。大形で、色調は白色を呈す。材質は石製。重量13.46ｇ。盛土より出土。

径２cm～５cm前後の磨かれた石英が、落ち込みから1103.3ｇ出土している（巻頭図版７）。この中には水晶と思われるものもあるが、確定はできない。首里城跡の他地区でも出土しておらず、注目すべき資料である。

骨製品はともに欠損品で、用途不明、落ち込みより出土。３は方形で上部に数個の突起を持ち、表面には２条の溝が、裏面には溝にそって孔が穿たれている。縦1.4cm、横2.5cm、重量2.24ｇ。４は、半円状の残存部位から本来は円形であった可能性もある。外縁に２条もしくは３条、内縁に２条の圏線がめぐらされ、その内側に丸文が施されている。縦1.0cm、横1.8cm、重量1.25ｇ。



第54図　玉類・骨製品



図版52　玉類・骨製品

第５章　結語

第１節　遺構

首里城跡二階殿地区では、戦時・戦後の破壊・造成により削平を受けていたが、遺構の残りは比較的良好であった。そのため、古図に見る二階殿の建物や階段、周囲の石敷、内郭城壁などはある程度想定は可能であった。

二階殿の遺構としては、入口である東階段（東ＳＴＷ１）、正殿へ繋がる西階段（西ＳＴＷ１・２）、そして建物跡である平坦面が主なものと考える。これらの内、建物跡と思われる平坦面には、幾つかの礎石が見られたが、古図のプランと合致させるのは困難であった。一方、美福門自体は明確にできなかったが、美福門の西側城壁と思われる石積ＳＲ１が確認できた。また、美福門の西側へ上がる階段（東ＳＴＷ２）はその基礎が確認できた。その他、内郭城壁である石積ＳＲ３・６はテラスをもった二段構造であることが判明した。

重要な成果としては、二階殿創建以前と推定される遺構が幾つか確認できたことである。二階殿西階段の下層には、柱状の石列遺構であるＳＴＷ３や階段であるＳＴＷ４、瓦囲い遺構などを検出した。この瓦が明朝系赤瓦であるため、17～18世紀代であろうか。その他、ＳＲ11・12・24・32・33とした石列遺構の下層である落ち込みも古図には表れていない遺構である。後述するが、この遺構から14～15世紀の陶磁器が大量に出土している。

さらに、石敷であるＳＢ４の下層造成土から、14世紀後半～15世紀前半もしくは中葉の陶磁器が一括廃棄された状態で出土しているため、この遺構の造成年代が推定できるのも重要な成果である。

第２節　落ち込み（ＳＲ11・12・24・32・33周辺）出土の陶磁器

１．陶磁器の組成・主体時期

落ち込み出土陶磁器の種類は、中国産の青磁・白磁・青花・色絵・褐釉・黒釉の他に、タイ産、ベトナム産、韓半島産、日本本土産などがある。これらの年代幅は13世紀末～15世紀中葉の間で捉えられる。そこで、この各種類がどのような組成を持っているか、また主体的な年代はいつなのかなどを検討していきたい。

出土陶磁器の全体的な組成は、主に底部による最低個体数で把握した（第19表）。青磁が57.59％と圧倒的に多いことは、首里城跡の他地区でも同様の傾向である。ベトナム産陶磁器は最低個体105点と既往の調査と比べると破格だが、それでも3.97％にしか過ぎない。また、中国産褐釉陶器はそれほど多くなく、例えば422コンテナが出土した右掖門地区とは違った性格が考えられよう（沖縄県教委2003）。天目茶碗の出土量は532点、全体の比率20.12％と、特筆すべきものである。これまでの首里城跡で出土した量を凌駕しているのではないか。

次に、出土陶磁器全体を概略することで、その主体的な年代について検討していきたい。

13世紀末～14世紀前・中葉と古手のものは、青磁の大宰府分類Ⅲ（Ⅲ’）類である碗Ⅰ類34点、皿Ⅰ類78点、盤Ⅰ類３点、鎬蓮弁文鉢１点（第23図140）、鎬文壺１点（第24図152）、これらよりやや新しい盤Ⅱ類36点を合わせて153点がある。これらは、青磁の碗・皿・盤・鉢・壺の合計4,390点内の3.4％と量的には多くない。一方、青磁以外の古手の資料では、14世紀中・後葉と思われる白磁森田Ｂ・Ｂ’群である景徳鎮産碗Ⅰ類９点、高足杯１点（第31図27）、元青花18点で、計28点と多くない。ただ、首里城跡で、13世紀末～14世紀代の資料が一定量出土したことは注目すべきである。

つまり大多数は、14世紀後半～15世紀中葉に収まるものである。このことは、首里城跡京の内跡ＳＫ01資料（以下京の内資料）と広い意味で類似するものであろう。それでは、この京の内と全く同じ陶磁器の組成を示しているのであろうか。このことを、京の内資料との数量的な比較を行うことで検討したい。

青磁碗では、14世紀後半～15世紀中葉と考えられるⅡ～Ⅳ類919点の内、Ⅳ類外面無文277点（30.0％）、Ⅱ類無鎬蓮弁文139点（15.1％）、Ⅱ類線刻雷文帯129点（14.0％）、Ⅲ類62点（6.7％）が多いものである。一方、京の内資料を本報告の分類に適用させると、計205点の内、Ⅱ類線刻雷文帯59点（28.8％）、Ⅱ類型押し雷文帯21点（10.2％）、Ⅱ類無鎬蓮弁文16点（7.8％）、Ⅳ類外面無文10点（4.9％）が多いものである。

青磁皿は、碗と同様の時期幅であるⅡ～Ⅴ類1757点の内、Ⅱａ類316点（18.0％）、Ⅱｂ類86点（4.9％）、Ⅲ類228点（13.0％）、Ⅳ類1023点（58.2％）、Ⅴ類104点（5.9％）となる。京の内資料を本報告分類で見ると、228点の内、Ⅱａ類55点（24.1％）、Ⅲ類20点（8.8％）、Ⅳ類83点（36.4％）、Ⅴ類65点（28.5％）となる。

明青花が全体で占める割合は、本資料2.42％、京の内資料9.8％である。

白磁は、14世紀末～15世紀前半とやや古相のものが、底部で景徳鎮産碗Ⅱ類17点、同皿Ⅰ類26点、同皿Ⅱ類50点、同皿Ⅳ類５点の計98点数えた。この総数は、白磁の最低個体数208点の内46.6%を占める。京の内資料を本分類で見ると碗Ⅱ類２点（沖縄県教委1998　第66図９・10)、皿Ⅱ類１点（左同　第66図14）のみである。

このような本資料と京の内資料における各陶磁器の比率の違いについて他遺跡の事例などから検討してみる。第一に、青磁雷文帯碗と明青花の比率が、本資料が京の内資料よりも低いことに注目したい。この傾向は、首里城跡では北殿跡トレンチ１～３の造成層出土のものでも窺える（沖縄県教委1995)。ここでは明青花およびⅡ類雷文帯が少なく、青磁碗では本分類Ⅲ類・Ⅳ類外面無文のものが多い。また、屋良グスク（嘉手納町教委1994）や越来城（沖縄市教委1988）などでも、同様の傾向である。Ⅳ類外面無文碗の細分などの詳細な検討は必要であるので、これが時期差であるとの即断は避けたい。

しかしながら、雷文帯碗は人形手碗のように16世紀代まで残る系譜であるので、これが少ないことはやや古相の様相を示すものとは考えられないか。また、水澤幸一も東北において土師器皿などとの共伴関係から、雷文帯碗は15世紀中葉に増大する指摘をしている（水澤2004)。これらから、主体年代は京の内資料と同じく14世紀後半～15世紀中葉ではあるが、その中でもやや古手のものが多いのではなかろうか。

２．ベトナム産陶磁器の特徴・時期

本資料のベトナム産陶磁器は、破片数で青花538点、青磁４点、鉄絵２点、白磁１点の総数545点という量、そして青花が碗・鉢・皿・盤・瓶・合子・水注・大形壺といった器形がまとまって出土したことなど非常に重要である。この圧倒的に出土した青花を中心に、本資料のベトナム産陶磁器の特徴・時期について若干の検討を行う。

まず、青花碗に２タイプあることが最も重要な点である。この２タイプは時期的な違いなのであろうか。

碗Ⅰ類は鉄銹底で簡略化した草花文を施すもので、枢府手白磁や元青花碗に近い深めの外反碗であること、文様が青色で、圏線が灰色に近いもので描くという顔料の使い分けがされるという特徴がある。このことは、先述の文様と合わせて、森本朝子が初期青花、矢島律子が第一群と位置付けたものに相当する（森本1995・矢島1999)。この時期であるが、太宰府遺跡や博多遺跡群では、青花自体の出土は少ないが、碗Ⅰ類とほぼ同様の草花文の鉄絵碗が多く出土しているので、共伴遺物等の年代から14世紀中葉～後半代が中心年代と考えられている（横田1991・有島1991・森本1993)。ただ、矢島や森本は、青花は鉄絵よりも高台が細く、草花文も鉄絵に比べ多様な表現が見られることから後出するものと考え、下限は15世紀前半・中葉頃と捉えている（森本1995・矢島1999)。

ただ、この碗Ⅰ類は、これまで博多・大宰府周辺で出土しているよりも高台はさらに長く、筆運びも細く流れが速い感じであるように見える。いずれにせよ、大宰府・博多では鉄絵碗が多く、逆に沖縄ではこれまで勝連城跡（沖縄県立博物館1983）・首里城跡京の内跡他各地区（沖縄県教委1998・沖縄埋文2001ｂ・2003・2004）などで、出土していたものは全て青花碗であるので、やはり時期的には新しい傾向と思われる。

碗Ⅱ類は全体施釉したのちに畳付のみ釉剥ぎする高台をもつものである。文様から見ると外面上半の花唐草文、

第20表　落ち込み出土陶磁器最低個体数

産地	器種・器形		小計	合計（点）	割合（%）	重量（kg）
中国産	青磁	碗	469	1522	57.59	517.2
		皿	719			
		盤・鉢	147			
		壺	61			
		香炉	11			
		瓶・水注	37			
		器台	11			
		小杯	31			
		高足杯	10			
		その他	26			
	白磁	碗	32	208	7.87	21.3
		皿・杯	170			
		その他	6			
	元青花		10	10	0.38	10.0
	明青花	碗	31	64	2.42	
		小碗・小杯	8			
		皿	3			
		盤	5			
		鉢	6			
		壺	3			
		瓶	8			
	色絵	碗	7	8	0.30	2.3
		皿	1			
	釉裏紅		1	1	0.04	
	瑠璃釉		4	4	0.15	
	褐釉磁器		2	2	0.08	
	褐釉陶器		61	60	2.26	91.1
	天目茶碗		532	532	20.12	84.4
	茶入		5	5	0.19	
	他陶器		14	8	0.30	2.7
中国産合計				2424	91.70	729.0
ベトナム産	青花	碗	42	100	3.78	10.0
		鉢	3			
		皿	43			
		盤	1			
		瓶	2			
		水注	6			
		壺	2			
		合子	1			
	青磁		4	3	0.11	
	白磁		1	1	0.04	
	鉄絵		1	1	0.04	
ベトナム産合計				105	3.97	
タイ産	青磁		1	1	0.04	91.7
	褐釉		98	98	3.71	
	土器		8	8	0.30	
タイ産合計				107	4.05	
韓半島産青磁			1	1	0.04	0.4
本土産		瓦質土器	1	2	0.08	
		備前	1			
産地不明			2	2	0.08	
グスク土器			2	2	0.08	
合計				2643	100	831.1

その下半にラマ式蓮弁、内面口縁に蔓唐草文、見込みに菊花文など、忠実な模倣ではないが、元青花碗の文様構成をモチーフにしたものと思える。このような特徴は、矢島が元風の青花と位置付ける第二群に含まれるものと思われる（矢島1999）。ただ、器形が碗Ⅰ類と比べて浅めであること、文様・圏線は全て濃い青色で描かれることなどは、新しい傾向と考える。また、この資料は県内では首里城跡（沖縄県教委1998・沖縄埋文2004）で破片が出土していたが、本土地域では現在のところ出土していないこともこのことを裏付けるであろうか。

しかしながら、碗Ⅱ類の見込みの花芯が斜線で充填された菊花文が、碗Ⅰ類と同様の器形である鉢（第45図28・32）に見られることから、この２タイプの時期差はそれほど遠くないものとも思える。むしろ、碗Ⅱ類はⅠ類よりも丁寧な文様で青色が強く総釉であることなど、上等品とも言えよう。また、この鉢と本資料の唯一の鉄絵鉢（第45図27）は器形が類似しており、青花と鉄絵の違いもかけ離れた時期差ではないと考える。皿も同様で碗Ⅰ類のように圏線の顔料の使い分けがあり、見込みの文様には碗Ⅱ類の花芯と共通したものが多い。

その他、稜花藻（魚？）文盤（第47図64）は、14世紀後半とされる大宰府条坊遺跡第83次出土口縁に類似し、松岡美術館所蔵資料とは見込みの藻文が酷似している。口縁部の蔓唐草文とともに元青花に近い文様であるので矢島第二群に相当しよう。しかし、元青花盤（第32図１）と比較しても高台外側の作り出しが不明瞭である。

水注や大形壺などの文様は、例えば斜線で龍の鱗（第47図61・62、第48図72・77）、ラマ式蓮弁（第47図55、第48図76）など、共通する表現が見られる。このような表現は、先の元青花風のものより、やや新しい傾向のものと思われるが、釉の透明度、呉須の色調などは、他の器形ともども雰囲気が似ているようだ。

本資料をこのように見ていくと、時期的な傾向を仮に並べると、①鉄絵鉢、②青花碗Ⅰ類・鉢、③盤、④皿・碗Ⅱ類、⑤壺・瓶・水注のような流れがスムーズに追える資料として捉えることができるのではないか。この間の時期幅であるが、先述した本資料全体の主体年代である14世紀後半～15世紀中葉にあるのは無論である。その中でも、鉄絵鉢・青磁碗があること、傾向的にはやや古手の碗Ⅰ類がⅡ類よりも多いことなどから、14世紀後半～15世紀前半代が主体ではなかろうか。このことは、先述、主に中国産青磁・白磁で検討した主体年代と同様の傾向と言えよう。

これまで、14～15世紀のベトナム産陶磁器は、大宰府跡、博多遺跡群で多く出土していたが、最近、壱岐・対馬でも出土しはじめた（川口2003・森本2002b）。鹿児島県では隼人町菩提遺跡や坊津町泊海岸採集のものがある（重久2004）。森本が指摘したように、本土地域と比較すると、沖縄では圧倒的に青花が多いという特徴は本資料でさらに顕著となった。その一方では、沖縄で最初の鉄絵鉢が２点のみであるが出土したことは注目される。

３．元様式青花・青磁・白磁から見た本資料の意義

先述した本資料の組成において、13世紀末～14世紀前半・中葉とやや古手の傾向をもつ陶磁器群には、青磁碗・皿Ⅰ類および盤Ⅰ・Ⅱ類、白磁景徳鎮産Ⅰ類の他に、元様式青花も見られる。青磁は大宰府Ⅲ（Ⅲ’類）、もしくは貼付龍文盤、白磁はいわゆる「枢府手」森田Ｂ（Ｂ’群）に相当もしくは近いもので、当該期の代表的考古資料である新安沈船資料などに比肩すると考えられる（横田・森本・山本1989）。

さて、元様式青花であるが、これまでの首里城跡で知られていた資料に比して、器形・内容的にもバラエティーがあるものと言える。全形がある程度窺える蓮池牡丹唐草文稜花盤（第32図１）などの盤はこれまでにも破片では出土していたが、高台をわずかに抉り出す碗（第33図９・10）、龍文玉壺春瓶（第33図５）、推定復元の小形器台（第33図２）など、県内の遺跡では初例と考えられる資料も確認されている。特に碗については、先述した「枢府手」白磁碗との関係も重要であろう。

しかしこの古手の一群は、当該期の沖縄における他の遺跡の出土例からみると異質であるため、これがいわゆる日元貿易の所産であるのか、それとも朝貢関係に伴う特異な文物（例えば伝世品など）であるのかは、今後慎重に判断する必要がある。ちなみに琉球王国の外交文書である『歴代宝案』には、朝鮮への交易品の中に「白磁青花盤」なる品物が記載されている（金武2004）。二階殿地区およびこれまでの首里城跡出土の元様式青花にみる盤の優位性を考慮すると、この「白磁青花盤」に元様式青花の盤が含まれていた可能性もあるのではないか。やや飛躍した説だが、元様式青花の用途の一つとして想定する価値はあろう。

また本資料は、元様式青花そのものの認識に関しても再考を促すものと考えられる。かつて元様式青花とは西アジア向けに生産・輸出された製品で、中国国内及び東アジア地域へはあまり流通していないとの説が一般的であった。沖縄は早くから勝連城跡出土資料など（沖縄県立博物館1983）で注目されたが特例として扱われ、フィリピンで出土する粗製の小品が東アジア地域の典型例として紹介されていた。しかし、近年は中国国内の窖蔵か

ら元様式青花が多数出土するなど（中沢・長谷川1995)、以前の通説に見直しを迫るような資料が増加している。今回の二階殿地区における出土例も、まさにその好例といえよう。

４．その他の注目すべき陶磁器・遺物

これまで、触れてきた遺物以外にも注目すべきものは多い。ここで、その幾つかについて概略をまとめる。

中国産褐釉陶器では、首里城跡もしくは県内の他遺跡でもあまり出土していない幾つかのタイプが見られた。素地１類の小型壺等（第39図17・26）は、福建省磁灶窯系と考えられるものである。博多遺跡群・大宰府跡では、12～13世紀の磁灶窯と考えられるものは多く出土しているが、これらはあまりみない器形のようである（森本1984・山本2000)。

一方、素地２(ｉ)類・器形Ⅱ類（第38図１・２・10・11）の大型壺は、博多分類における「その他群を構成するに至らない大形容器」（森本1984）に相当するものと思われ、福建省閩江下流域産(洪塘窯か)と考えられるものである（田中2001)。ただ、博多遺跡群でもそれほど多いものではないようである。また、首里城跡京の内跡（沖縄県教委1998）天界寺跡（那覇市教委2000）などで白釉陶器といわれる一群（第39図18～21）も、素地がこのタイプに近いので、今後の検討の必要はあるがこれも同様の産地の可能性もある。

これらの褐釉陶器は、その多くがかなり被熱していることも特徴と言えよう。首里城跡、県内で多い本資料の器形Ｉ類（第38図３～９）は、あまり被熱していないため、時期的にやや差がある可能性も考えられよう。そのように考えた場合、先述のように沖縄ではあまり出土せずに、なおかつ博多遺跡群・大宰府跡でも主体でない一群ならば、大雑把に言って14世紀代でも後半の可能性も考えられようか。詳細は今後の検討が必要だが、重要な資料であろう。

次にタイ産のいわゆるランプーン土器（第50図27～29）と、それに胎土・焼成が似る土器（第50図30～34）も重要である。後者の第50図30・32には「萬象○○」と印字される。この「萬象」という言葉は、例えば「森羅万象」などの吉祥句か、現在ラオスの首都ビエンチャンの漢字表記、15世紀頃の「百万象の国」と言われるランサン王国のことなどと空想はされる。だが、この土器の報告自体はタイ周辺でも見られず、慎重に考えたい。さらに、ランプーン土器及び類似土器は全く火を受けていないため、他の資料よりもやや新しい可能性もある。

本土地域の当該期の遺跡と比較した時に、注目すべきこととして本土産瓦質土器風炉（第51図３）の出土がある。器形はいわゆる奈良火鉢の範疇ではあるが、胎土からは大和（奈良盆地）産ではないように思える。この資料は火を受けているので、その他の陶磁器と同じく、14世紀後半～15世紀中葉の幅で考えられる。これと類似する瓦質土器が見られる遺跡は、確かに九州や瀬戸内側でも見られる。しかしながら、福井県一乗谷遺跡、石川県晋正寺遺跡、新潟県江上館跡、青森県十三湊・尻八館跡など、この時期になって中国産陶磁器が増える北陸・東北の日本海側でも見られることは重要であろう（近江1997、水澤2004)。それも城館などと考えられる拠点的な遺跡でこの種の瓦質土器が出土するのである（水澤1999)。

陶磁器以外では、大量の青色を中心とした小玉・丸玉、研磨された石英の出土などが注目すべき資料である。

第３節　ＳＢ４下層出土陶磁器

ＳＢ４下層出土陶磁器はやや古手の様相を持つ青磁束口碗もあるが、かなりまとまった内容をもつものである。これらは火を受け溶着しているものが多いのだが、中には６個が重なったまま溶けた石灰岩で膠着した天目茶碗もある。これが火を受けているかは判断不能だが、このことはこれらの遺物が異なる地点から集められてここに一括廃棄された可能性を示すと考える。

特徴としては青磁が主体で、その内外面有文資料が圧倒的に少なく、無文外反碗（碗Ⅳ類外面無文）や玉縁口縁皿（皿Ⅲ類）・腰折皿（皿Ⅳ類）が大半を占める。また、見込みを釉剥ぎするグループが比較的多く出土している。わずかに確認された有文資料もすべて彫りが深く、蓮弁の輪郭も広い無鎬蓮弁文とラマ式蓮弁文である。

ＳＢ４下層資料の主体である陶磁器は、京の内や先述の落ち込み資料でも見られる。つまり、当資料が落ち込みや京の内資料と同時期に火を受けた可能性が考えられる。しかしながら、京の内資料では主体、落ち込み資料では一定量見られる雷文帯碗や細線の無鎬蓮弁文碗がこの資料からは確認されていない。このことは、ＳＢ４下層出土陶磁器がより共時性の高いものとしてまとまっていることを示唆しているのではなかろうか。

そのように考えると、京の内や落ち込み資料よりも以前に火を受けたものと考えざるを得なくなる。ただ、これを裏付ける文献等については明らかではない。そこで、現段階では、陶磁器としては15世紀中葉まで下るもの

は見られないというのみに留めたい。

参考・引用文献

新垣　力　2004「遺跡出土の「茶道具」からみた茶道の展開」『グスク文化を考える』新人物往来社

有島美江　1991「博多出土のタイ・ベトナム陶磁」『貿易陶磁研究』NO.11　日本貿易陶磁研究会

上田秀夫　1982「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』NO.2　日本貿易陶磁研究会

近江俊秀　1997「広域に流通した中世大和の土器－大和産・大和系瓦質土器の分布について－」『中近世土器の基礎研究』日本中世土器研究会

小野正敏　1982「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』NO.2　日本貿易陶磁研究会

1983「８．一乗谷及び豊原寺出土の元様式の染付」『貿易陶磁研究』NO.3　日本貿易陶磁研究会

沖縄市教育委員会　1988『越来城』沖縄市文化財調査報告書第十一集

沖縄県教育委員会　1995『首里城跡－南殿跡・北殿跡－』

1998『首里城跡－京の内跡地区発掘調査報告書－』

沖縄県立博物館　1983『沖縄出土の中国陶磁（下）－ジョージ・Ｈ・ケア氏調査収集資料－』

沖縄県立埋蔵文化財センター　2001ａ『首里城跡－管理用道路発掘調査報告書－』

2001ｂ『首里城跡－下之御庭跡・用物座跡・瑞泉門跡・漏刻門跡・廣福門跡・木曳門跡発掘調査報告書－』

2002『首里城跡－継世門周辺地区発掘調査報告書－』

2003『首里城跡－右掖門及び周辺地区発掘調査報告書－』

2004『首里城跡－城郭南側下地区発掘調査報告書－』

尾崎直人　1993「国内出土のベトナム陶磁」『ベトナムの陶磁』福岡市美術館

1998「東南アジアと沖縄」『陶磁器にみる大航海時代の沖縄とアジア』那覇市立壷屋焼物博物館

嘉手納町教育委員会　1994『屋良グスク』嘉手納町文化財調査報告書第１集

金沢　陽　2001「陶片資料紹介（８）インドネシア・トゥバン海域引き揚げの元代“ 樞府手 ” 白磁と青花片」『出光美術館紀要』第７号

川口洋平　2003「産地不明の貿易陶磁－対馬・壱岐・長崎」『貿易陶磁研究』NO.23　日本貿易陶磁研究会

亀井明徳　1980「日本出土の明代青磁碗の変遷」『鏡山猛先生古希記念古文化論攷』

1993「南西諸島における貿易陶磁器の流通経路」『上智アジア学』第11号　上智大学

亀井明徳編　2002『明代前半期陶瓷器の研究－首里城京の内ＳＫ01出土品－』専修大学アジア考古学研究報告書１

金武正紀　1989「沖縄における12・13世紀の中国陶磁器」『沖縄県立博物館』第15号

1990「沖縄の中国陶磁器」『考古学ジャーナル』No.320

1991「沖縄出土のタイ・ベトナム陶磁」『貿易陶磁研究』NO.11　日本貿易陶磁研究会

1997「第2節　11世紀末頃～16世紀の遺物」『銘苅原遺跡－那覇新都心土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告Ⅳ－』那覇市教育委員会

2004「沖縄から出土したタイ、ベトナム陶磁」『陶磁器が語る交流-九州・沖縄から出土した東南アジア産陶磁器-』東南アジア考古学会・九州国立博物館誘致推進本部・鹿児島大学埋蔵文化財調査室

金城亀信　2000「青磁ラマ式蓮弁文碗について」『貿易陶磁研究』NO.20　日本貿易陶磁研究会

古泉　弘　1984「葛西城址出土の青花器台」『貿易陶磁研究』NO.4　日本貿易陶磁研究会

塩谷勝利・池崎譲二　1983「博多上呉服町出土の釉裏紅と元青花」『貿易陶磁研究』№３　日本貿易陶磁研究会

重久淳一　2004「鹿児島県内から出土したタイ、ベトナム陶磁」『陶磁器が語る交流-九州・沖縄から出土した東南アジア産陶磁器-』東南アジア考古学会・九州国立博物館誘致推進本部・鹿児島大学埋蔵文化財調査室

上越市史専門委員会考古部会　2003『上越市史叢書　８　考古－中・近世資料－』　上越市

国立中央博物館　1977『新安海底文物』

田中克子　2001「博多遺跡群出土陶磁に見る福建古陶磁（その一）博多出土の薄胎施釉陶器（茶入）」『博多研究会誌』第９号

2002「博多遺跡群出土陶磁に見る福建古陶磁（その二）福建省閩江流域、及び以北における窯跡出土陶磁器」『博多研究会誌』第10号

2003「博多遺跡群出土陶磁に見る福建古陶磁（その三）宋・元代白磁をめぐる問題」『博多研究会誌』第11号

2004「博多出土の唐物茶入」『野村美術館研究紀要』第十三号　野村美術館

富山美術館　1997『特別展 東南アジア古陶磁展(Ⅳ)』

那覇市教育委員会　2000『天界寺跡』

中沢富士雄・長谷川祥子　1995『中国の陶磁　８　元・明の青花』平凡社

今帰仁村教育委員会　1983『今帰仁城跡発掘調査報告Ⅰ』今帰仁村文化財調査報告第9集

1991『今帰仁城跡発掘調査報告Ⅱ』今帰仁村文化財調査報告書第14集

二宮修治　2001「ベトナム青花の自然科学的研究－陶磁器胎土と釉の化学的分析」『ベトナム青花－大越の至上の華－』町田市立博物館
乗岡　実　1999「中近世の備前焼擂鉢の編年案」『第11回関西近世考古学研究会大会レジメ』
長谷部楽爾　1997『故宮博物院　第６巻　宋・元の陶磁』　ＮＨＫ出版
福岡市美術館　1993『ベトナムの陶磁』
藤田富士夫　1993『玉』考古学ライブラリー52　ニューサイエンス社
間壁忠彦　1991『備前焼』考古学ライブラリー50　ニューサイエンス社
町田市立博物館　2001『ベトナム青花－大越の至上の華－』
馬淵和雄　2001「鎌倉・今小路西（御成小学校内）・北谷３面焼土層下－青磁」『季刊考古学』第75号　雄山閣
三杉隆敏・榊原昭二　1998『《新装版》陶磁器染付文様事典』　柏書房
水澤幸一　1999「瓦器、その城館なるもの－北東日本の事例から－」『帝京大学山梨文化財研究所』第９集
2004「15世紀前葉から中葉の貿易陶磁器様相」『貿易陶磁研究』NO.24　日本貿易陶磁研究会
向井　亙　2003「タイ黒褐釉四耳壷の分類と年代」『貿易陶磁研究』NO.23　日本貿易陶磁研究会
森　達也　2000「宋・元代竜泉窯青磁の編年的研究」『東洋陶磁』第29号　東洋陶磁学会
森田　勉　1982「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』NO.2　日本貿易陶磁研究会
1985「北部九州出土の高麗陶磁器－編年試案－」『貿易陶磁研究』NO.5　日本貿易陶磁研究会
森村健一　1995「日本における遺跡出土のタイ陶磁器」『東洋陶磁』第23・24号　東洋陶磁学会
2001「１５世紀代のタイ・ノイ川窯系四耳壷について-琉球国・首里城「京の内」(1459年大火層一括)を中心として-」『南島考古』第２１号 沖縄考古学会
森本朝子　1984「博多出土貿易陶磁分類表」『福岡市高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告Ⅳ　博多』福岡市教育委員会
1993「ベトナムの貿易陶磁－日本出土のベトナム陶磁を中心に－」『上智アジア学』第11号
1994「博多遺跡群出土の天目」『唐物天目－福建省建窯出土天目と日本伝世の天目－』茶道資料館
1995「日本出土のベトナムの陶磁とその産地」『東洋陶磁』第23・24号　東洋陶磁学会
2000「日本出土の東南アジア産陶磁の様相」『貿易陶磁研究』NO.20　日本貿易陶磁研究会
2002ａ「ベトナム陶磁研究の現状　近年の古窯址発掘の成果を中心に」『平成14年度秋季特別展　わび茶が伝えた名器　東南アジアの茶道具』茶道資料館
2002ｂ「壱岐・対馬出土のベトナム陶磁について」『国立歴史民俗博物館』第94集
2004「博多出土の東南アジア陶磁器について」『陶磁器が語る交流-九州・沖縄から出土した東南アジア産陶磁器-』東南アジア考古学会・九州国立博物館誘致推進本部・鹿児島大学埋蔵文化財調査室
森本朝子・田中克子　2004「沖縄出土の貿易陶磁の問題点」『グスク文化を考える』新人物往来社
矢島律子　1999「ベトナム青花の変遷－文様を中心に－」『東洋陶磁』第28号　東洋陶磁学会
山本信夫　2000『大宰府条坊跡ＸＶ－陶磁器分類編－』大宰府市の文化財　第49集　大宰府市教育委員会
横田賢次郎　1991「大宰府出土のベトナム陶磁」『貿易陶磁研究』NO.11　日本貿易陶磁研究会
横田賢次郎・森田　勉　1978「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』４　九州歴史資料館
横田賢次郎・森本朝子・山本信夫　1989「新安沈船と大宰府・博多の貿易陶磁器－森田勉氏の研究成果によせて－」『貿易陶磁研究』No.９　日本貿易陶磁研究会
Bui Minh Thi & Kerry Nguyen Long　2001『Vietnamese Blue and White』 Hanoi
Jhon　Ayers 1986『CHINESE CERAMICS IN THE TOPKAPI SARAY MUSEUM ISTANBUL A COMPLETE CATALOGUE』 I　SOTHEBY ’S　PUBLICATION

図　　版

二階殿西側付近

二階殿建物跡付近

図版1　遺構検出状況1

二階殿東側付近

内郭城壁(SR3・6)　南から

図版2　遺構検出状況2

二階殿東側付近　北から

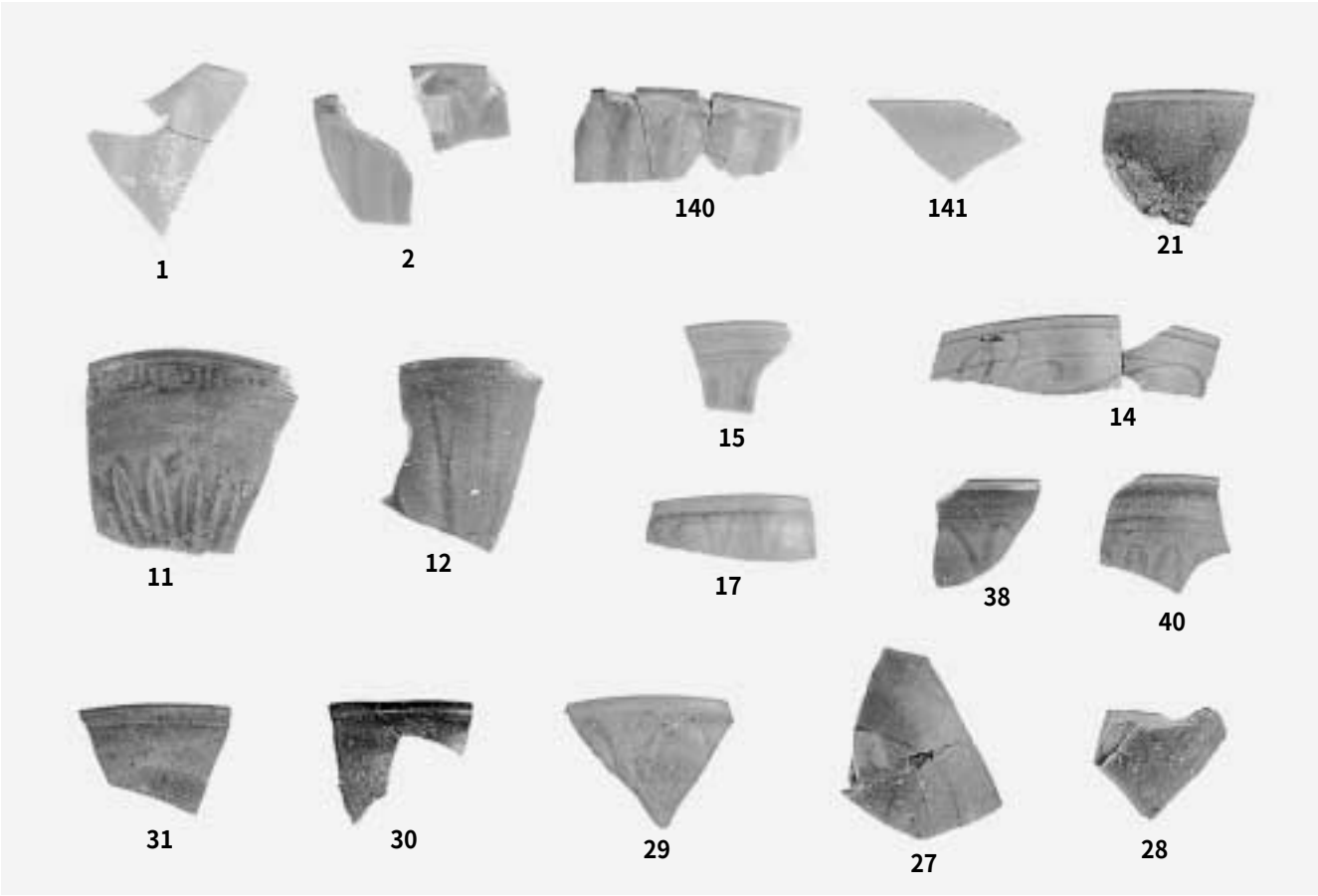
SB4下層陶磁器出土状況　西から

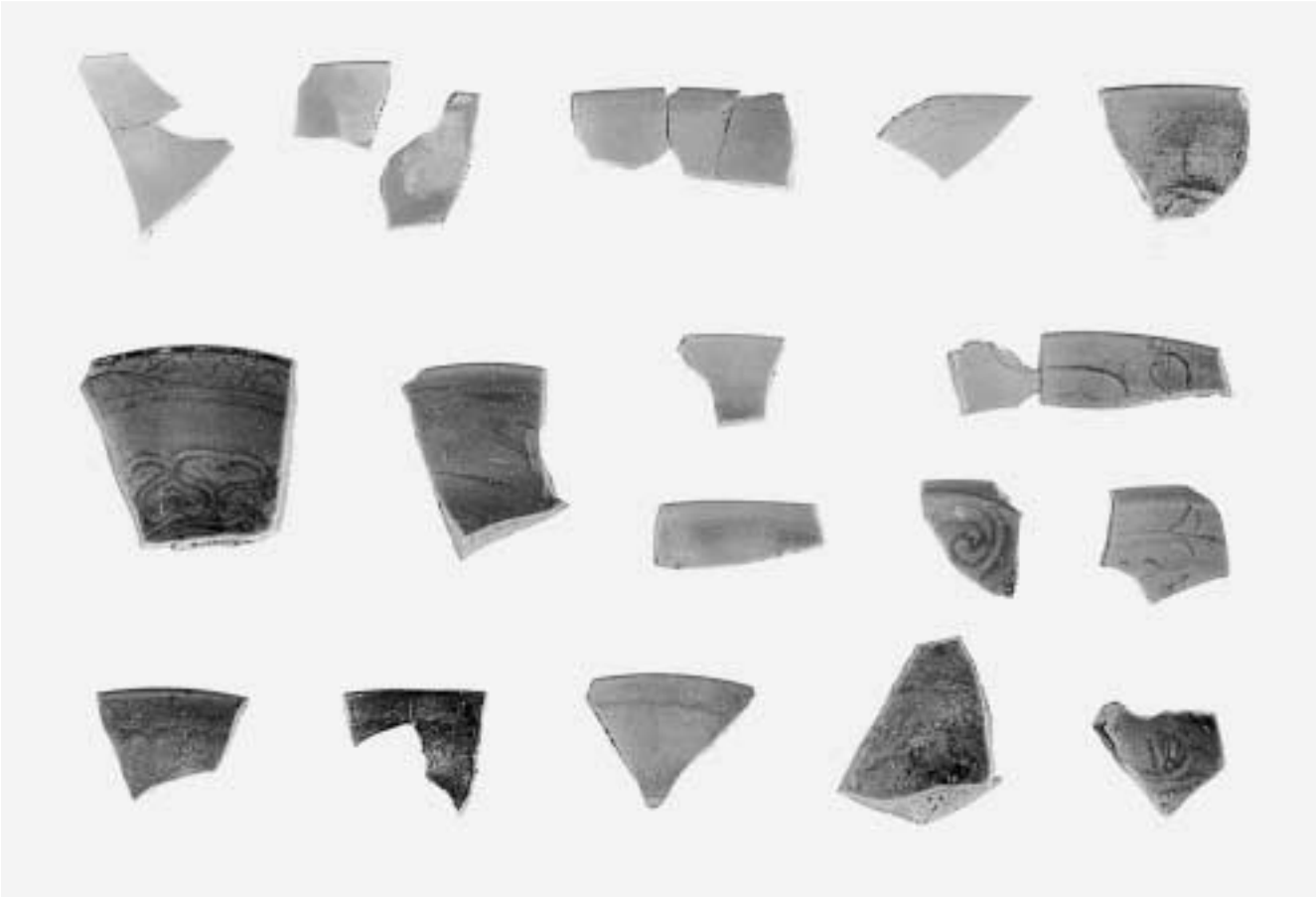
図版3　遺構検出状況3

二階殿下層遺構(STW3・4)　北から

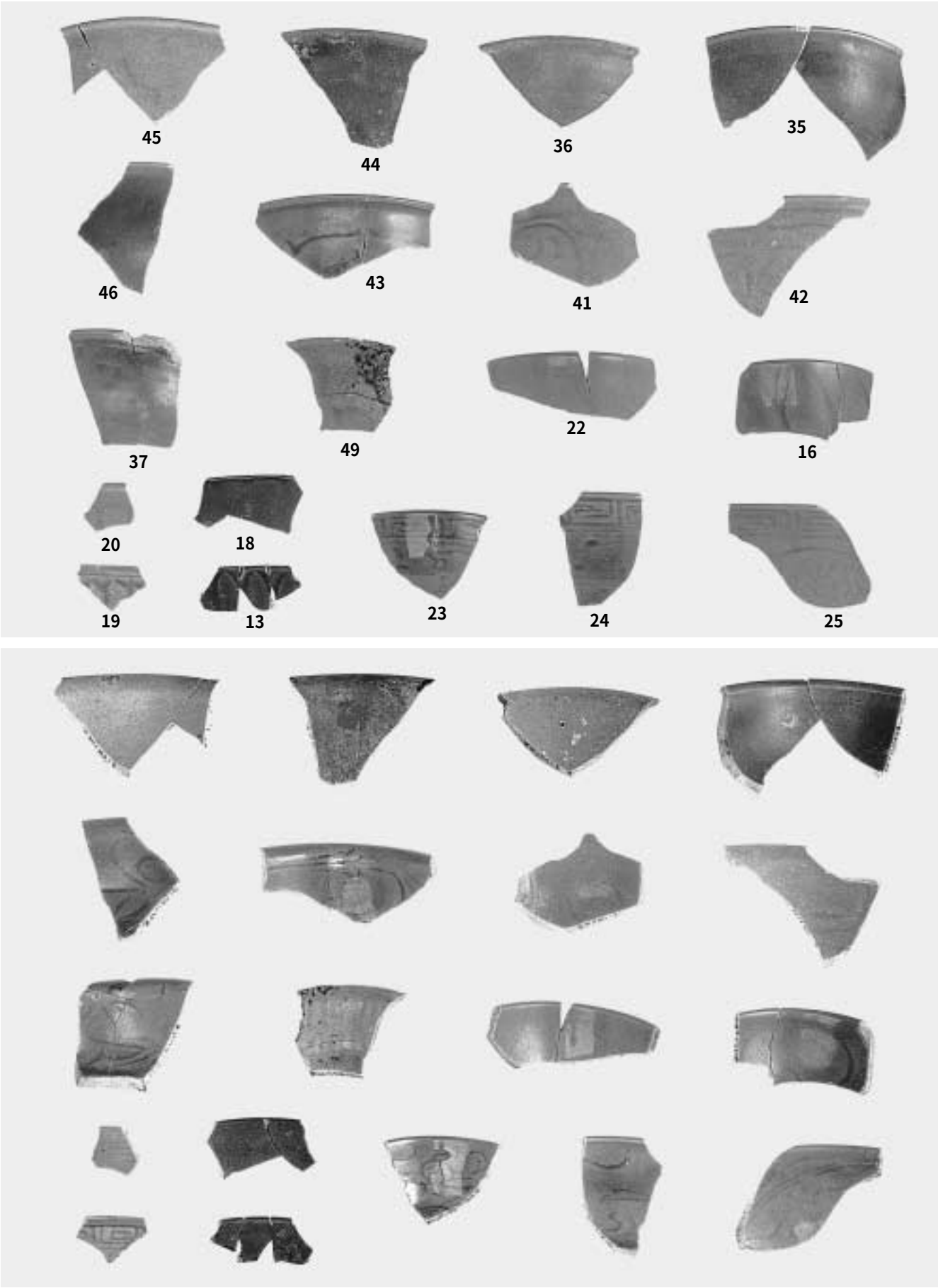
落ち込み(SR11・12・24・32・33周辺)　北から

図版4　遺構検出状況4

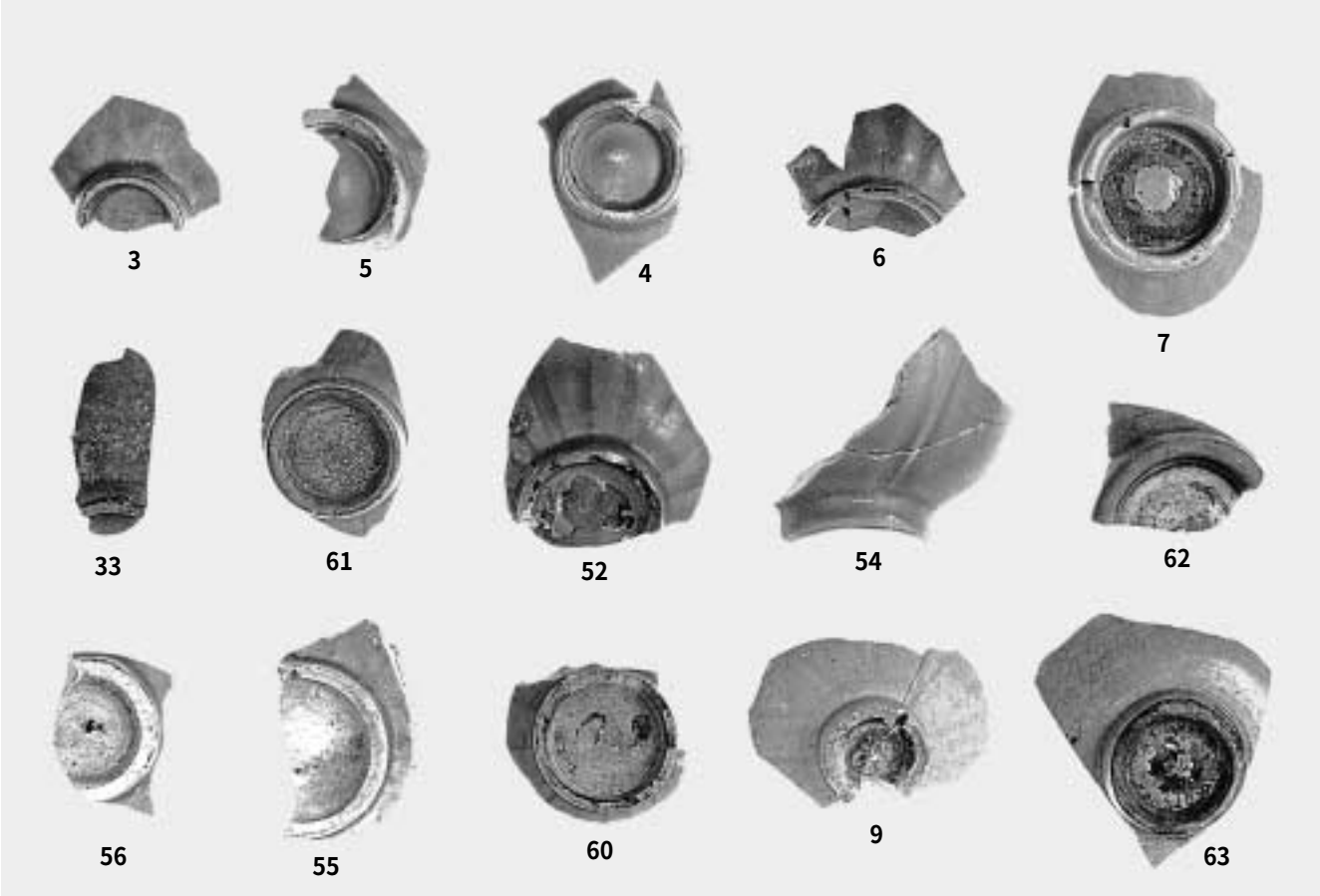


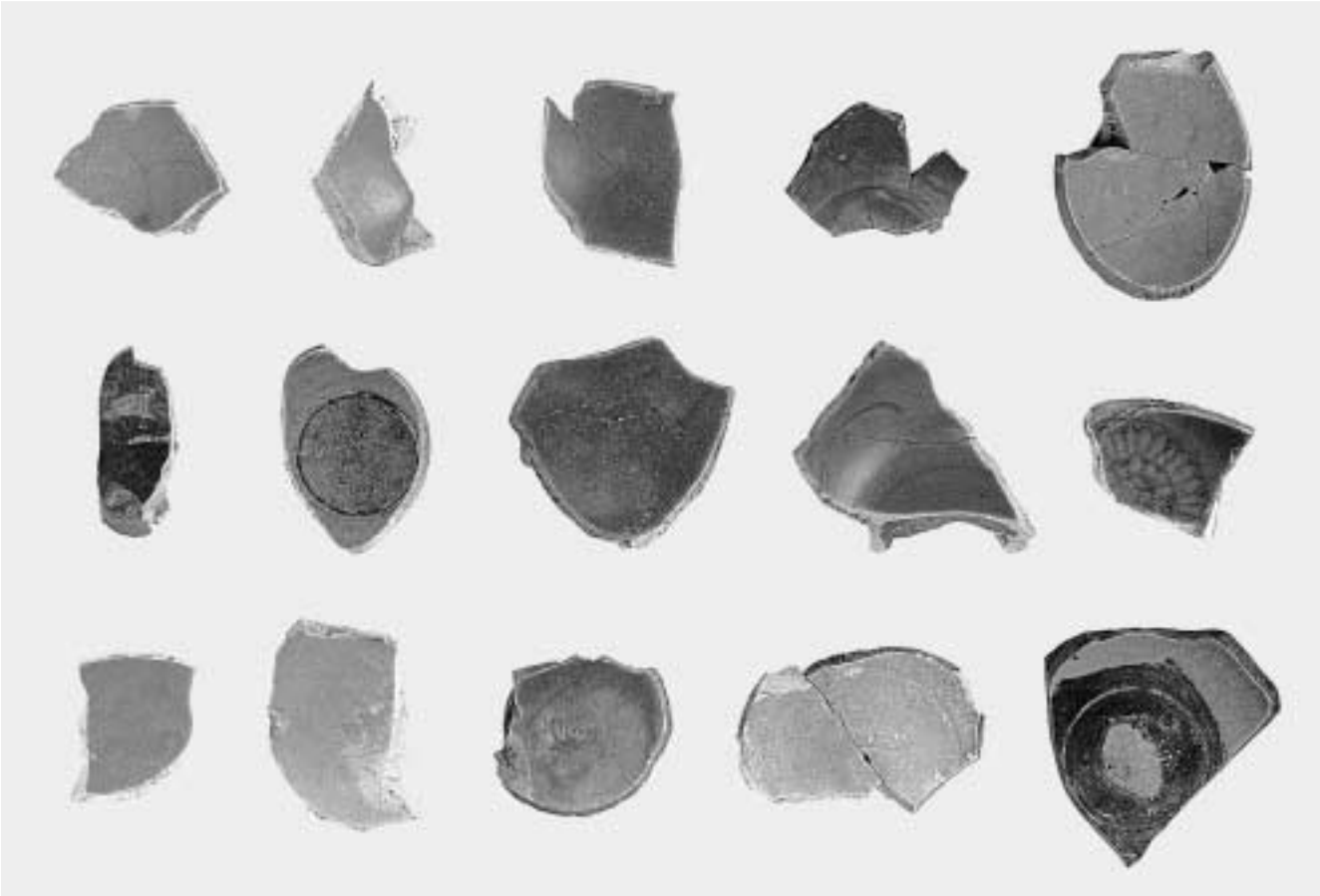


図版5　青磁（1）上：外面　下：内面

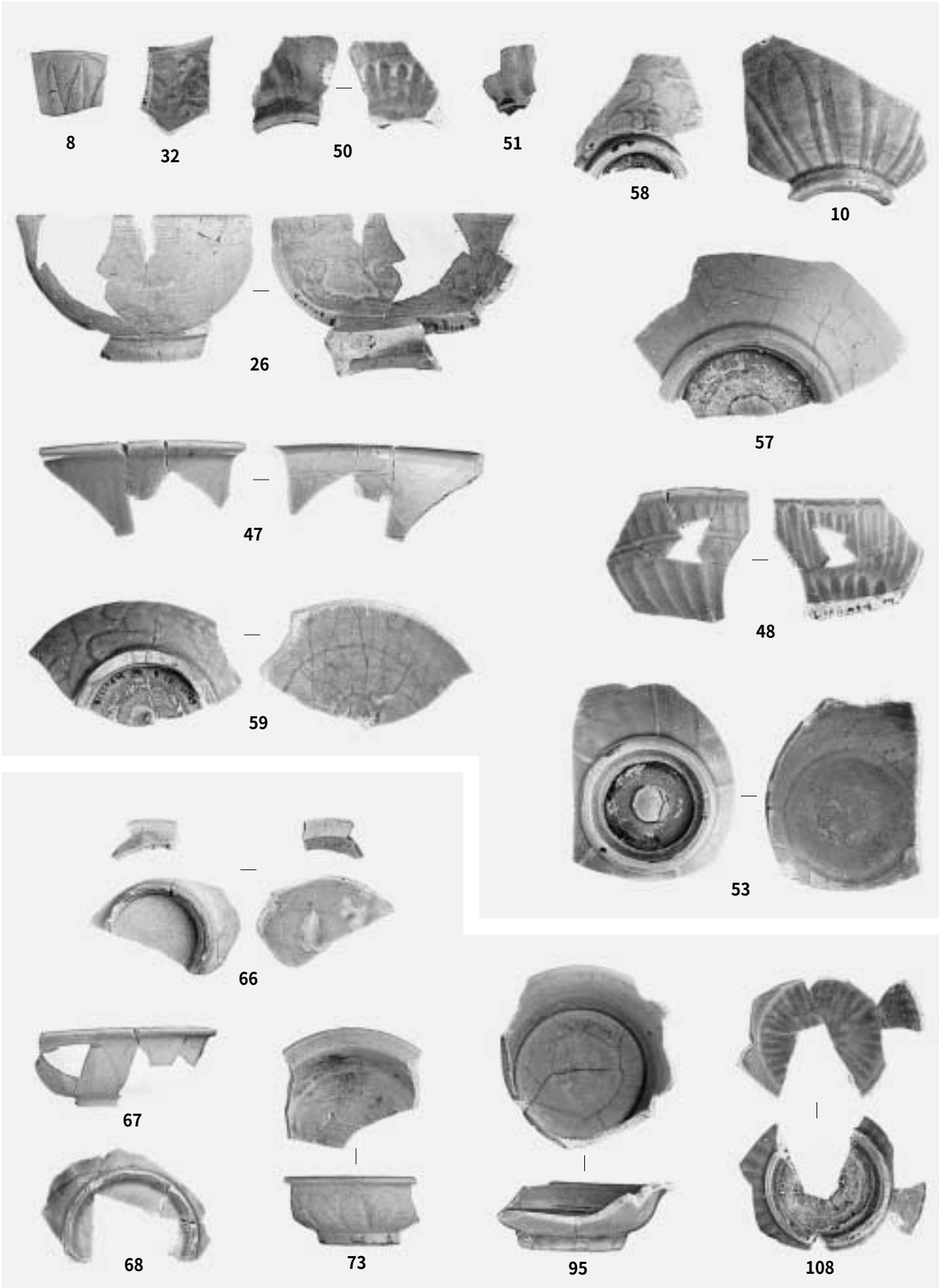


図版6　青磁（2）上：外面　下：内面

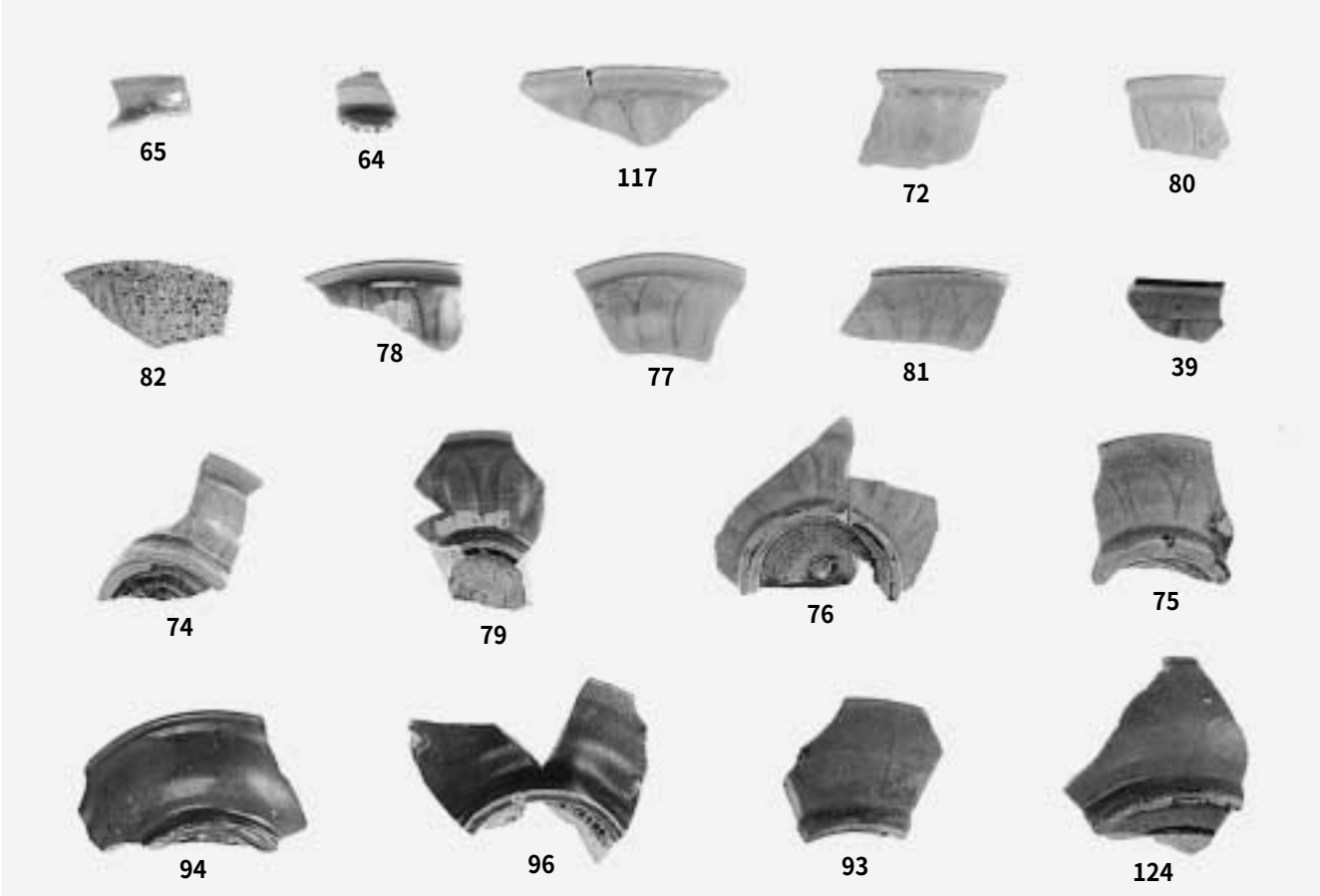


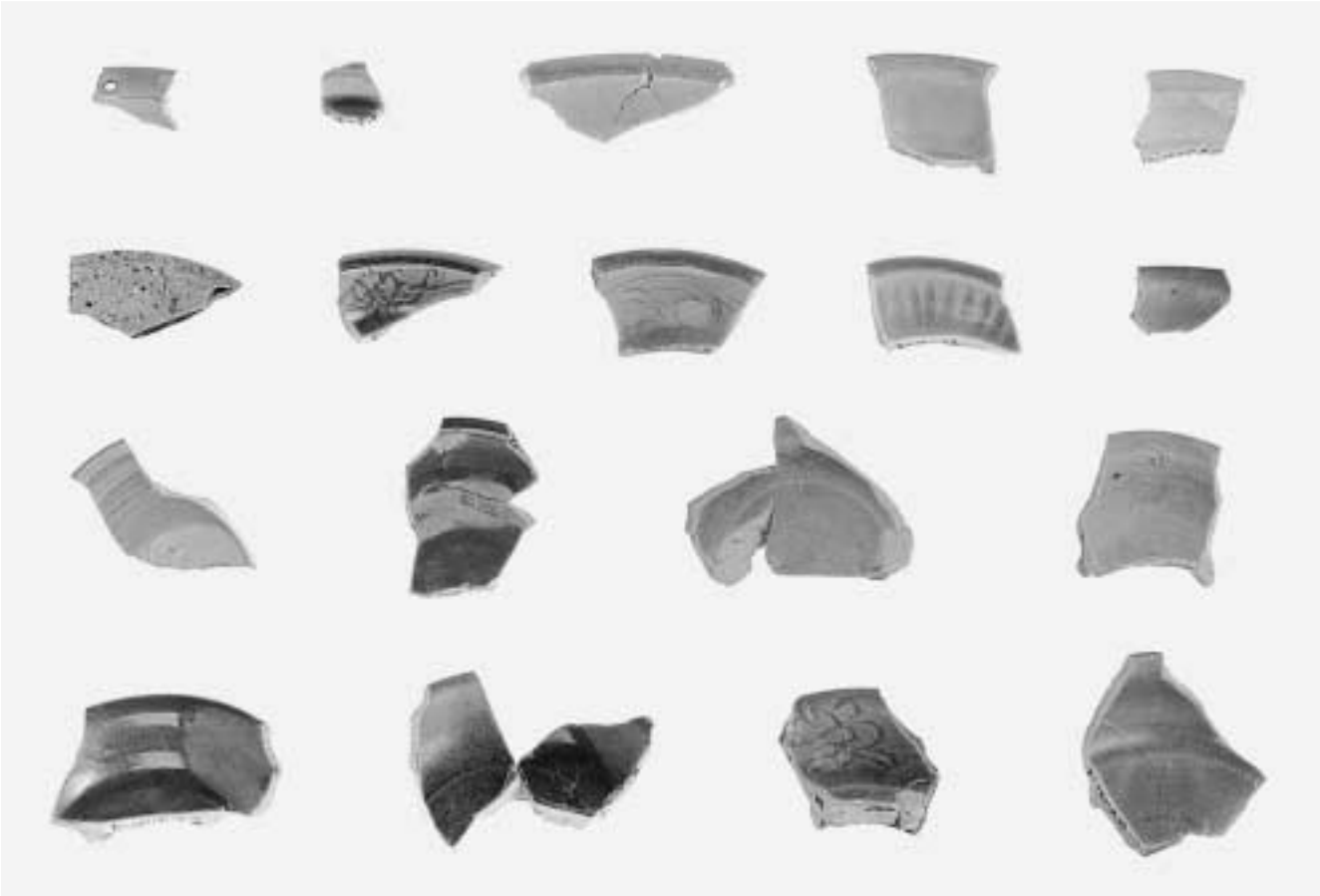


図版7　青磁（3）上：外面　下：内面

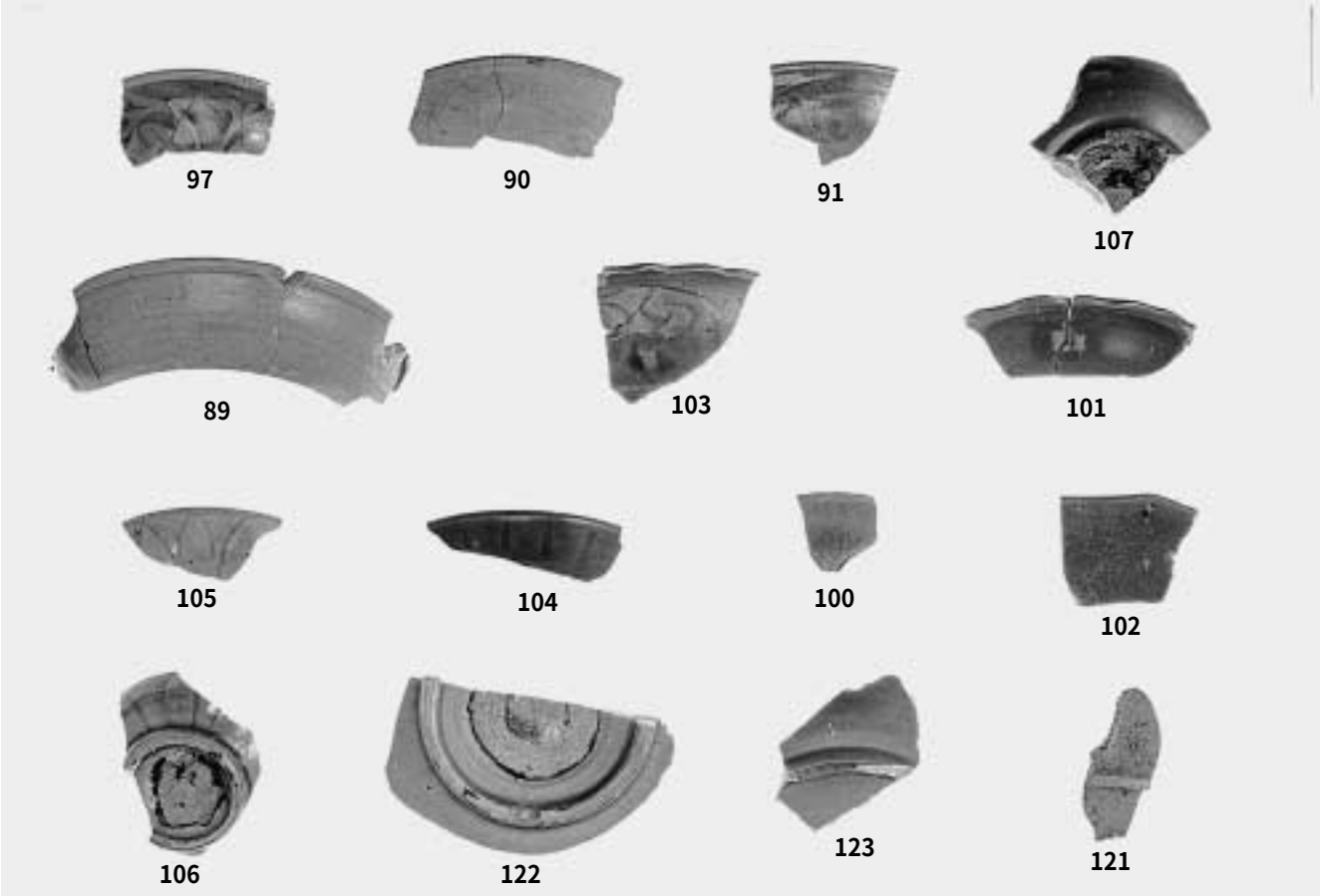


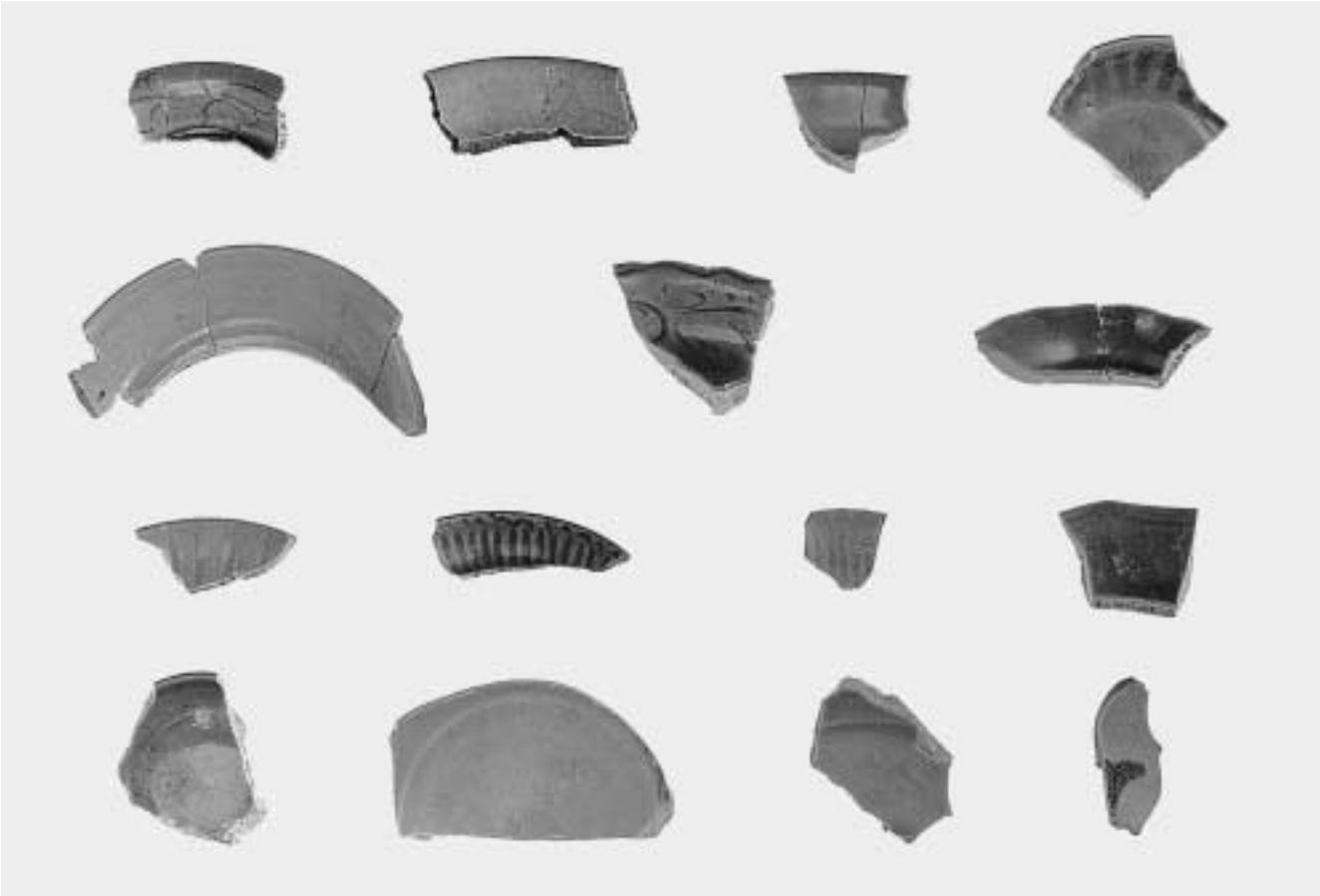
図版8　青磁（4）



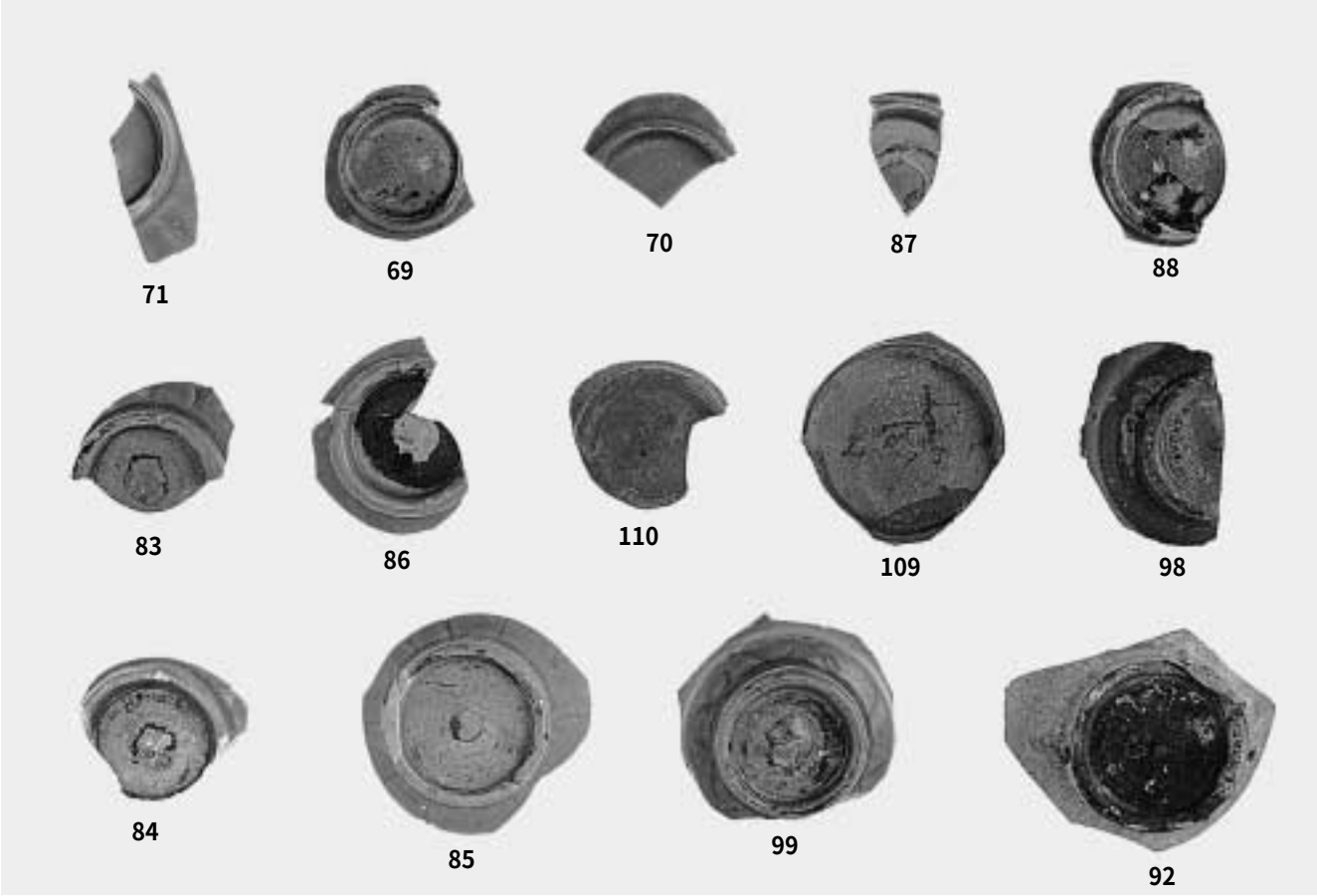


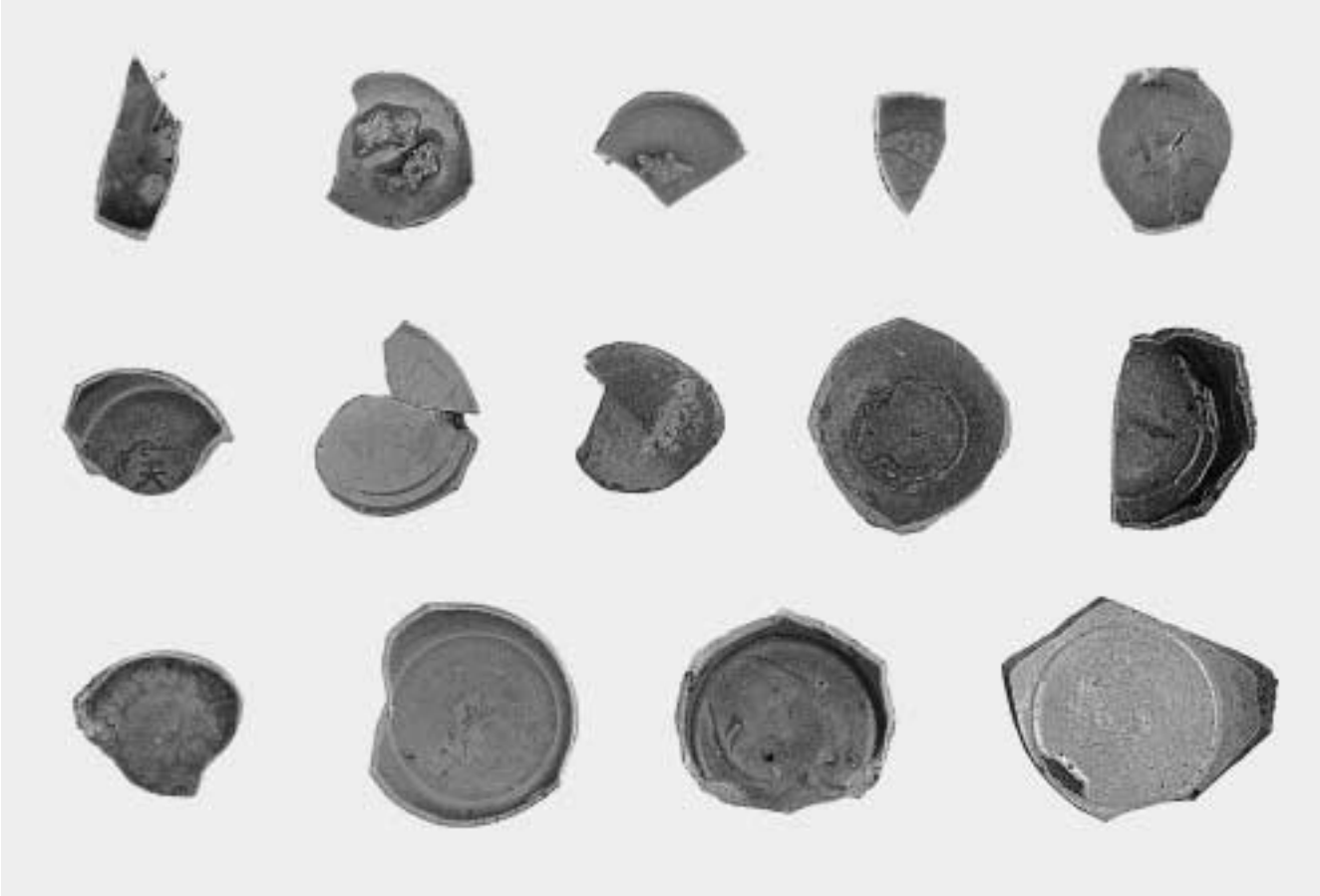
図版9　青磁（5）上：外面　下：内面



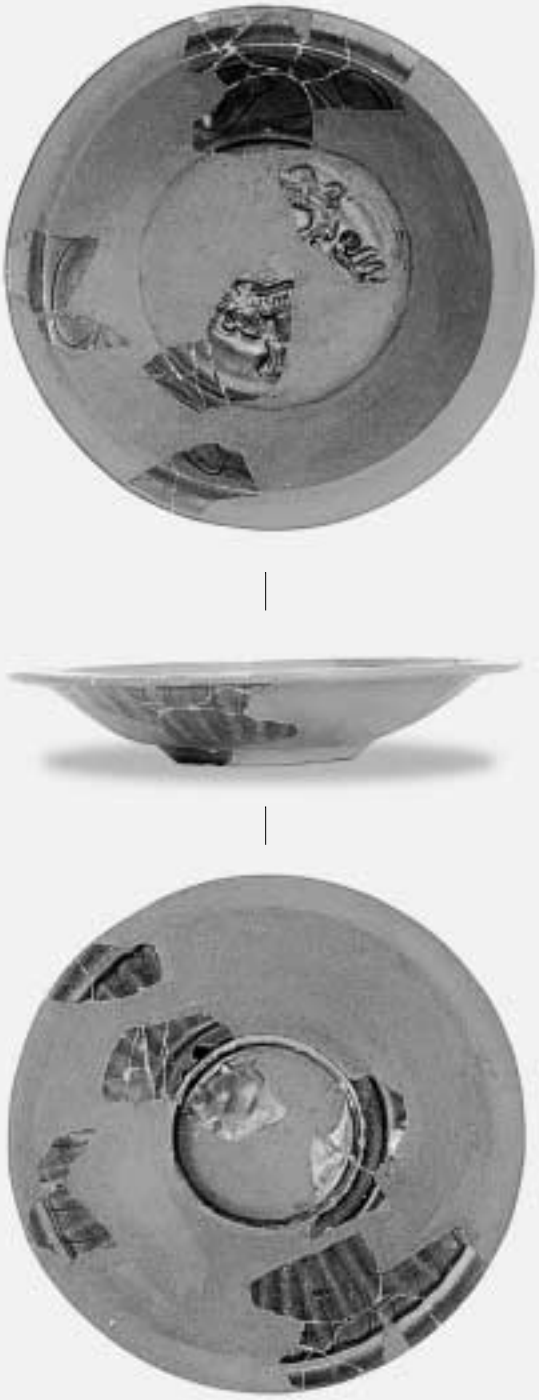


図版10　青磁（6）上：外面　下：内面

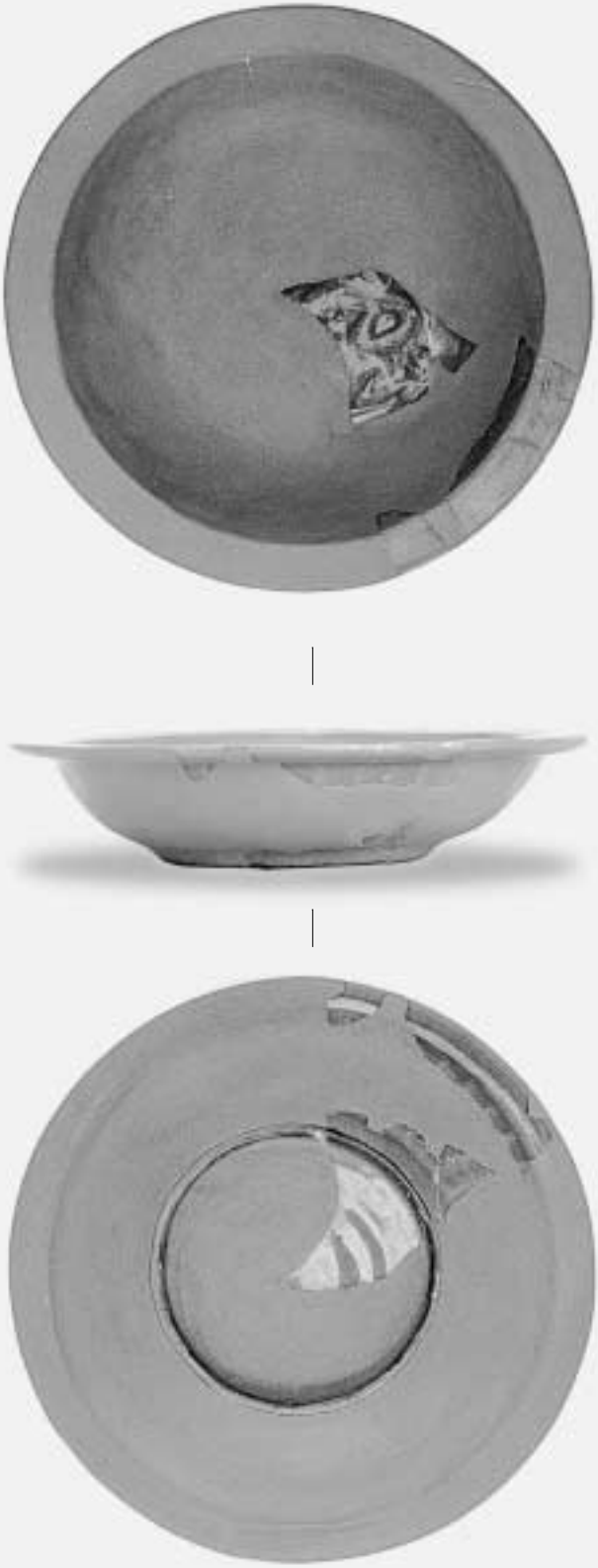




図版11　青磁（7）上：外面　下：内面

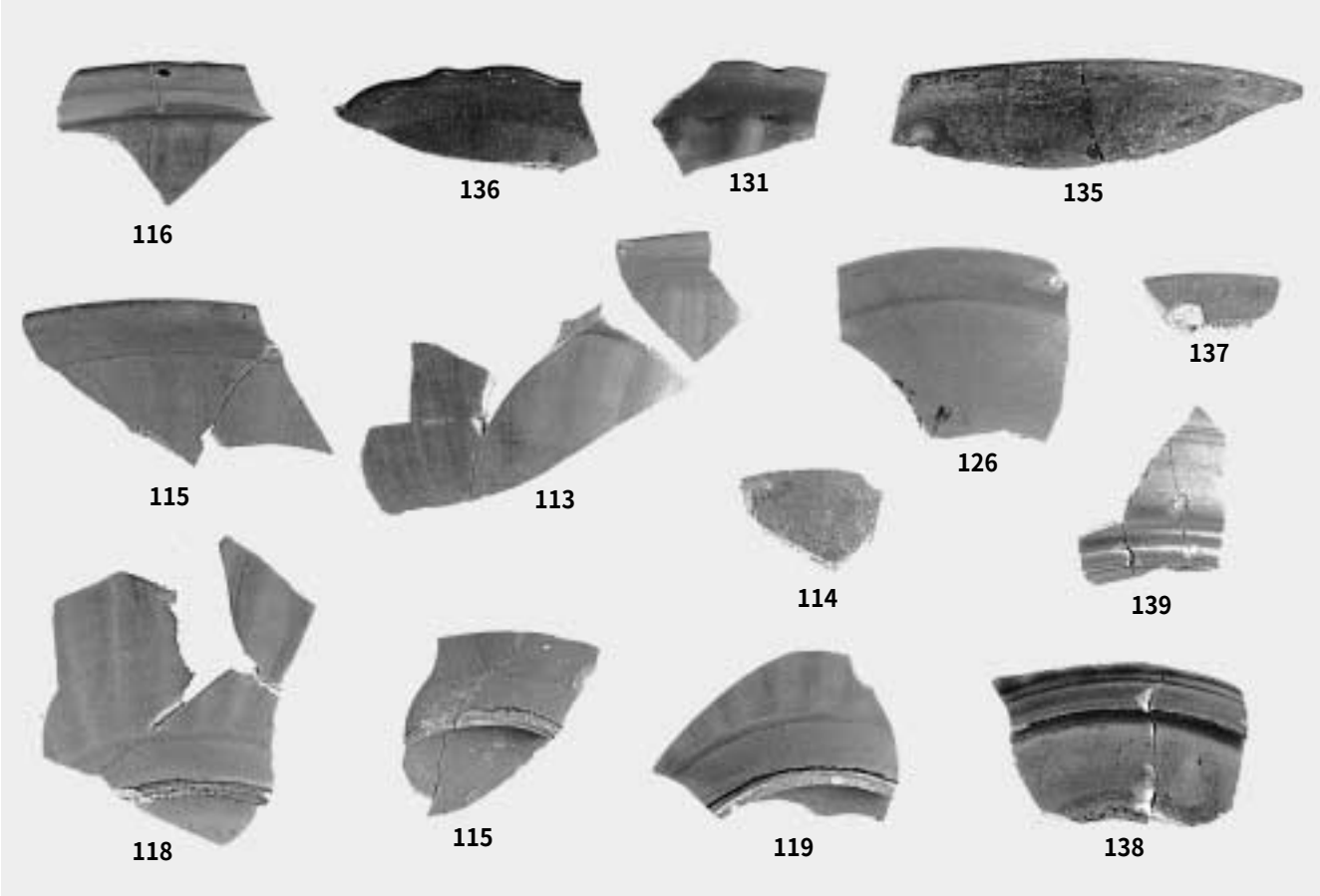


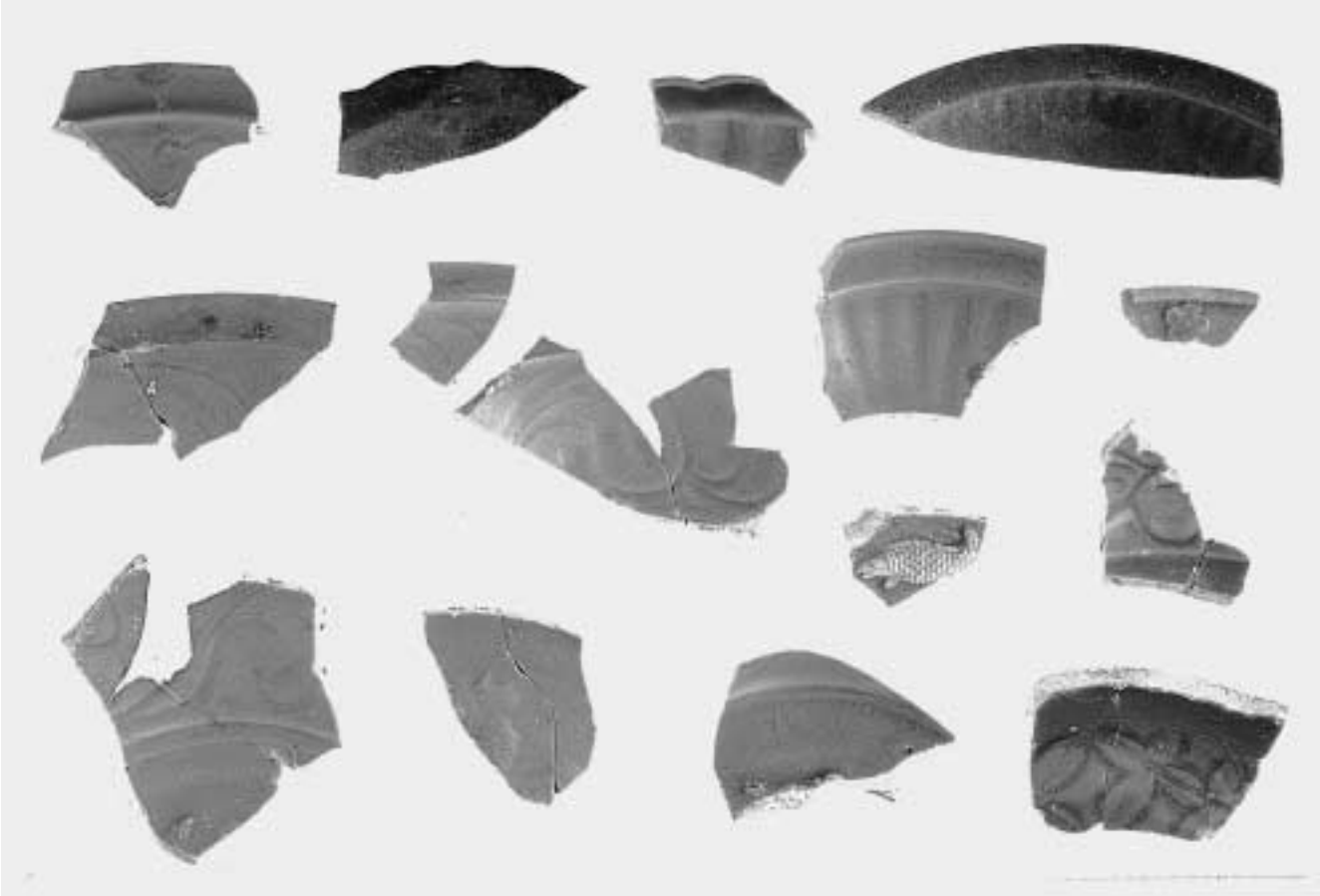
111



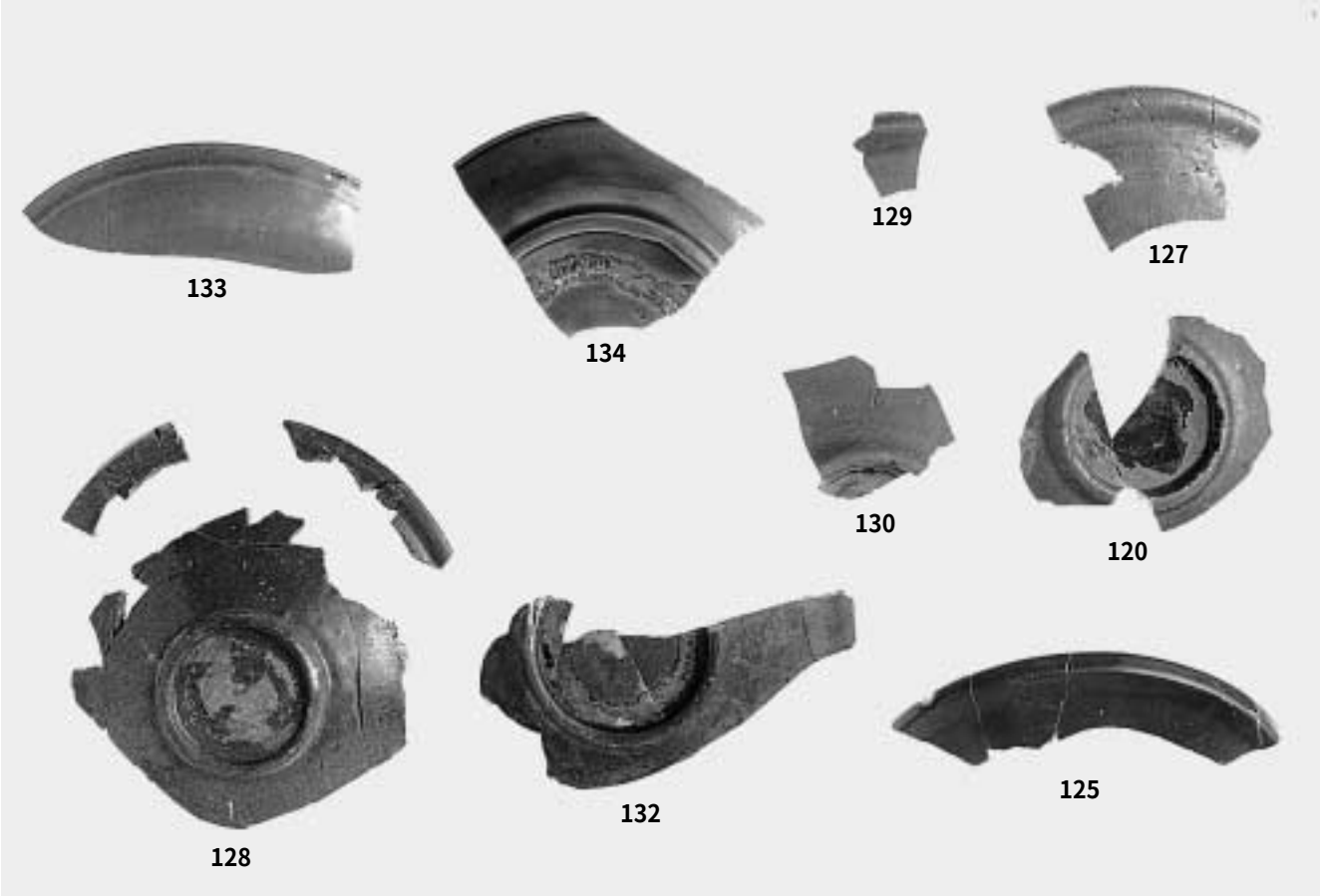
112

図版12　青磁（8）

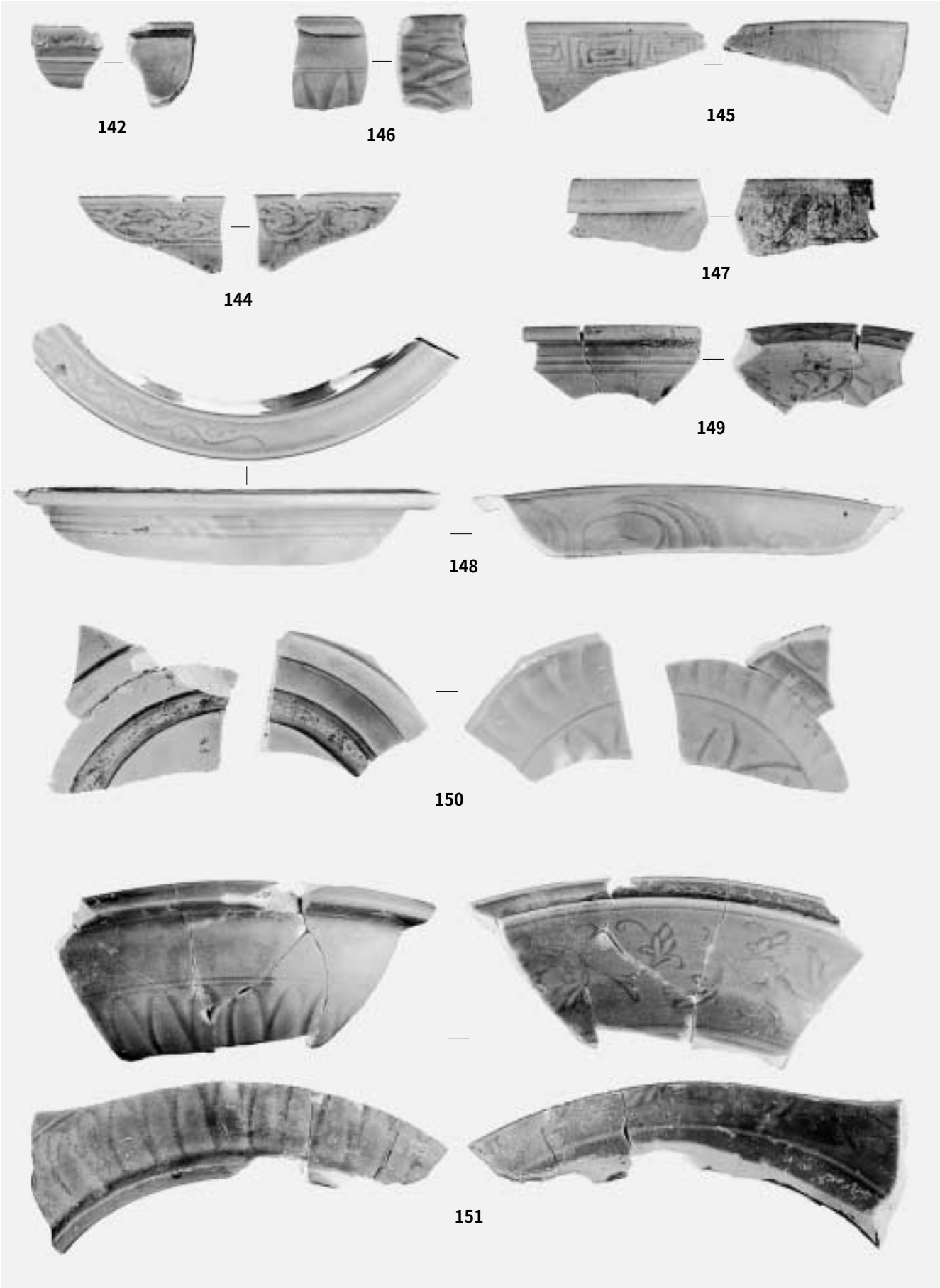




図版13　青磁（9）上：外面　下：内面



図版14　青磁（10）上：外面　下：内面



図版15　青磁（11）

166

168

図版16　青磁（12）

155

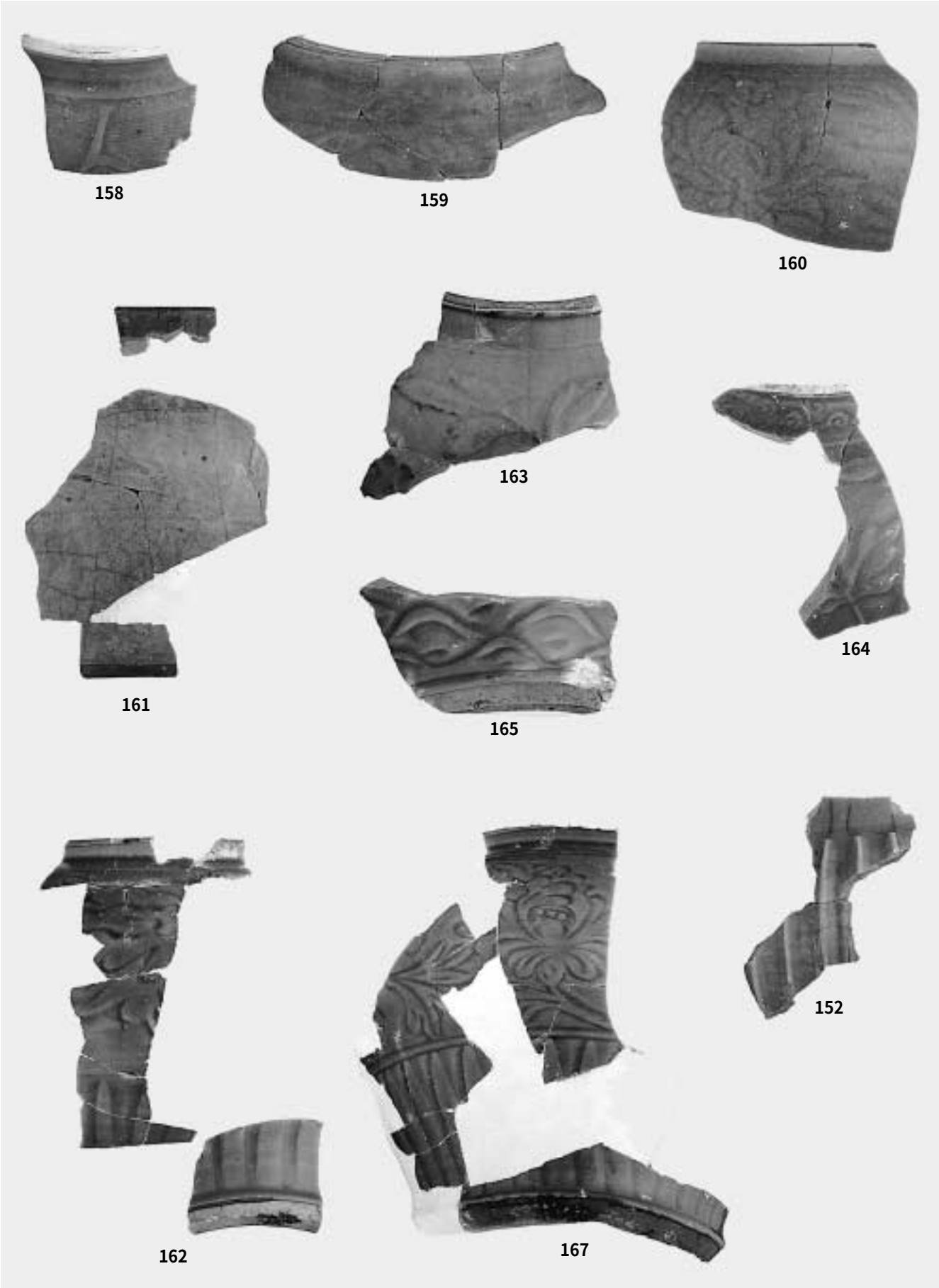
153

156

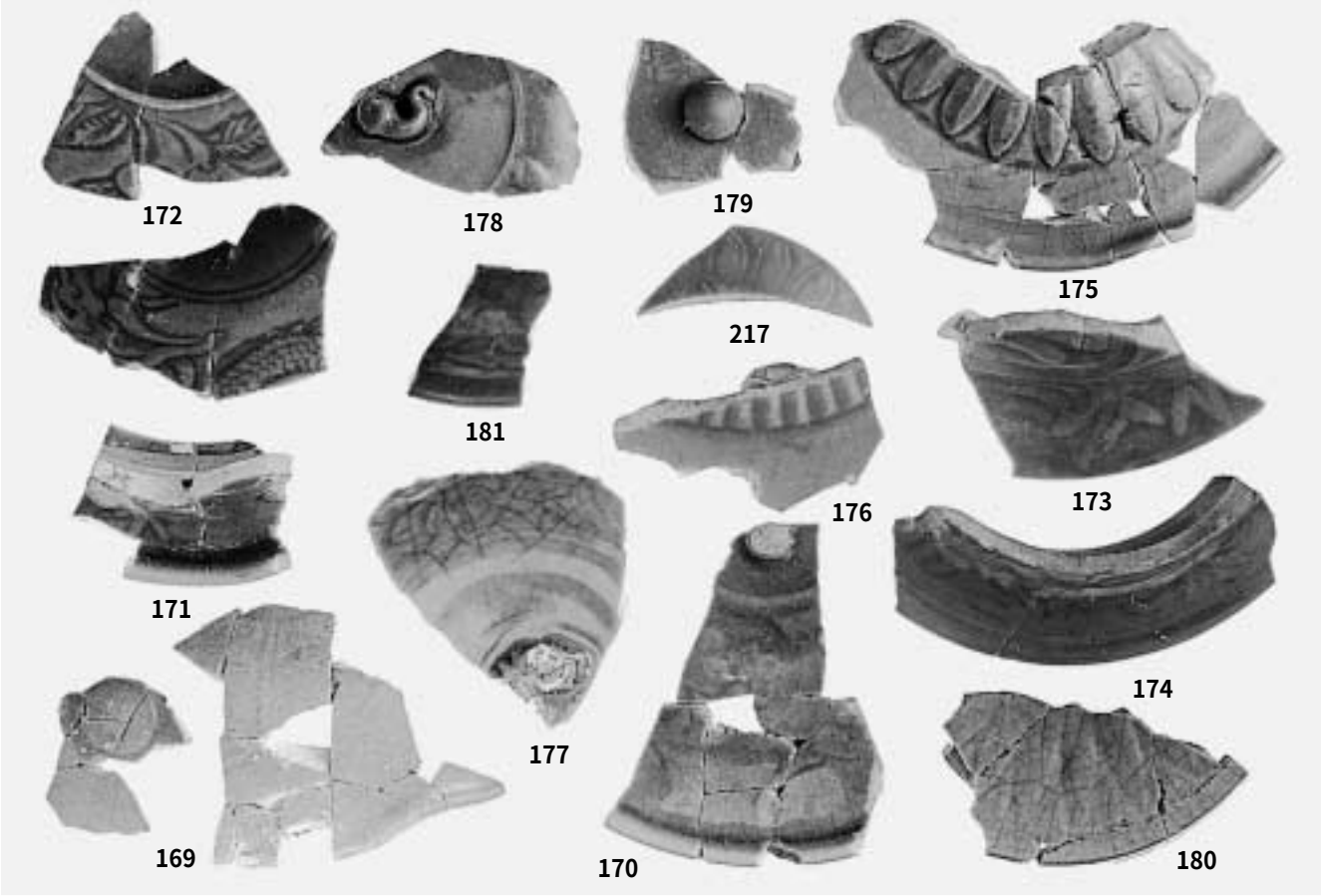
157

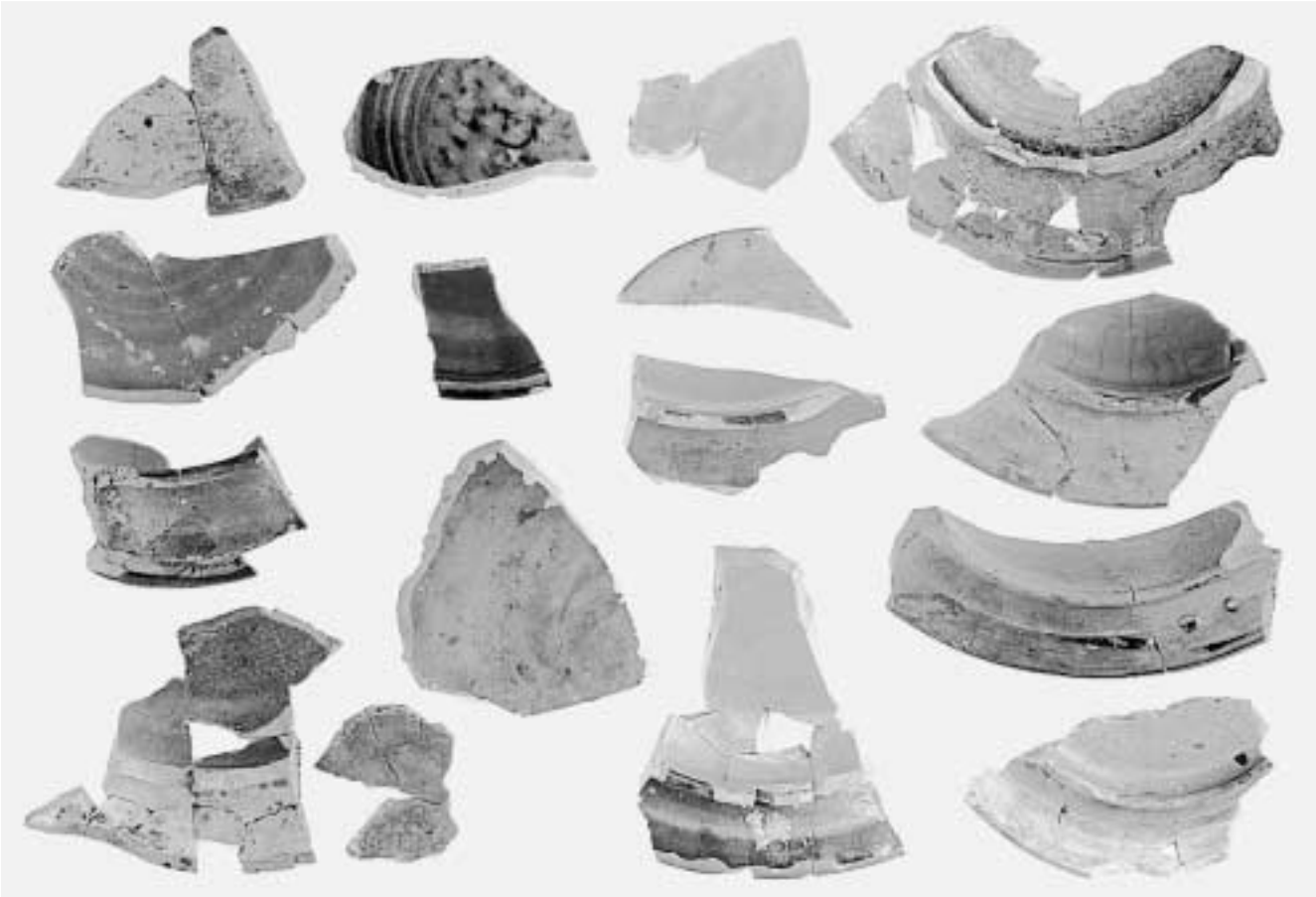
154

図版17　青磁（13）

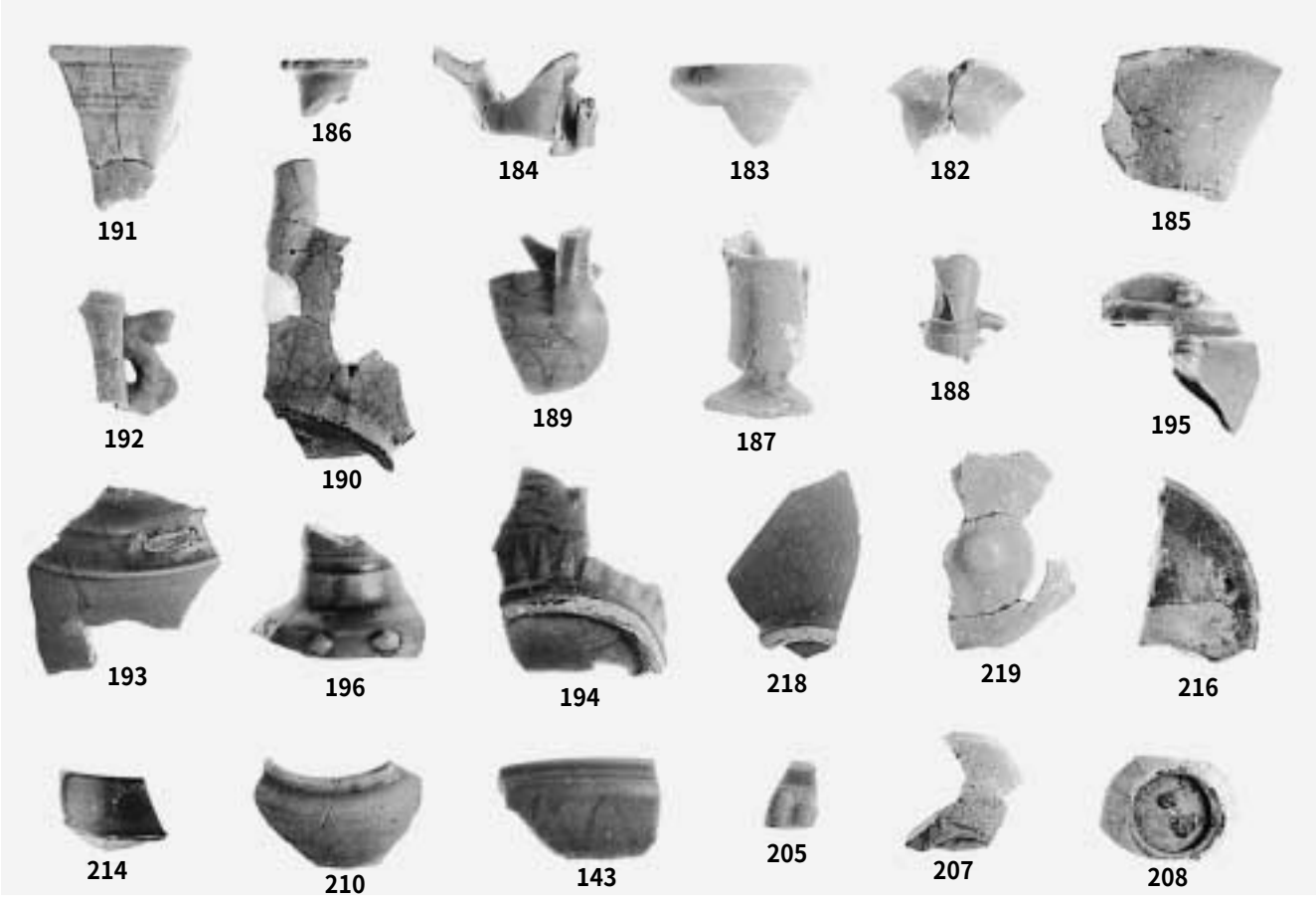


図版18　青磁（14）

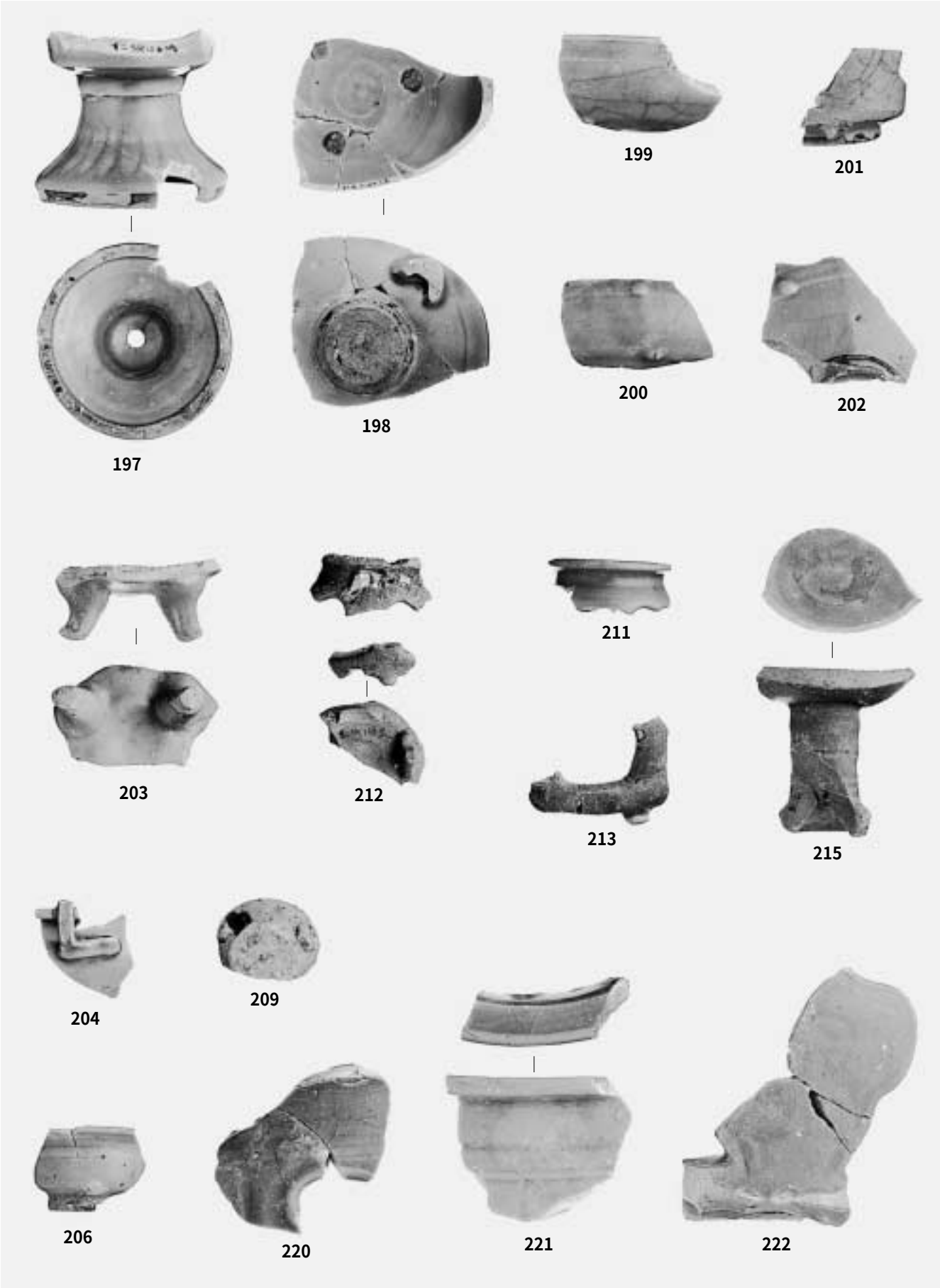




図版19　青磁（15）上：外面　下：内面

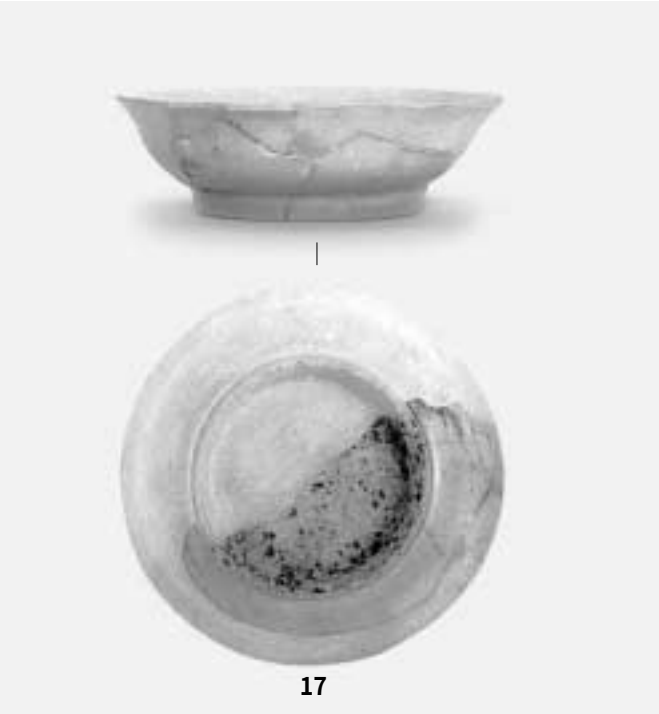


図版20　青磁（16）上：外面　下：内面


199
201
197
198
200
202
203
212
211
213
215
204
209
206
220
221
222

図版21　青磁（17）

34

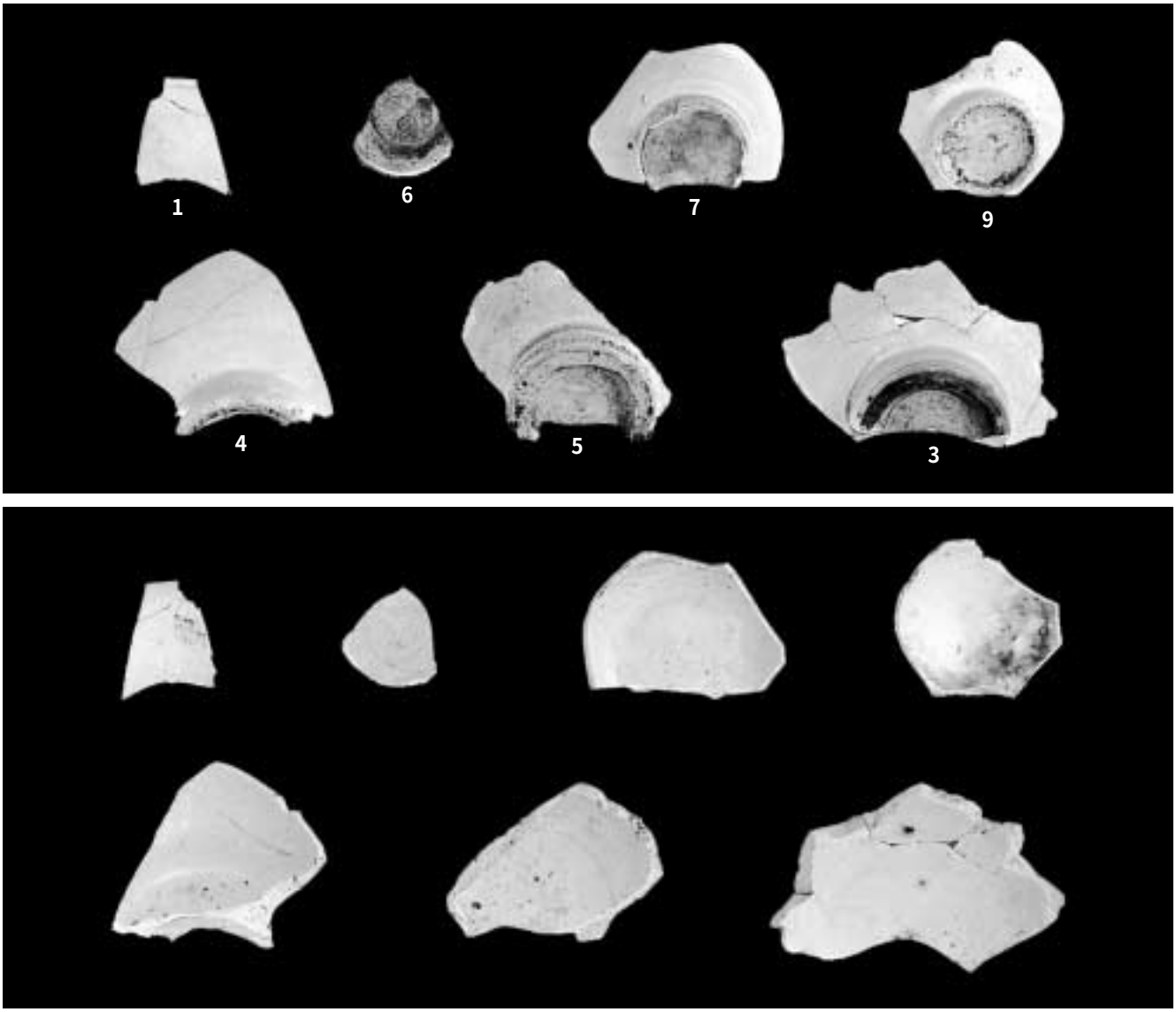


17

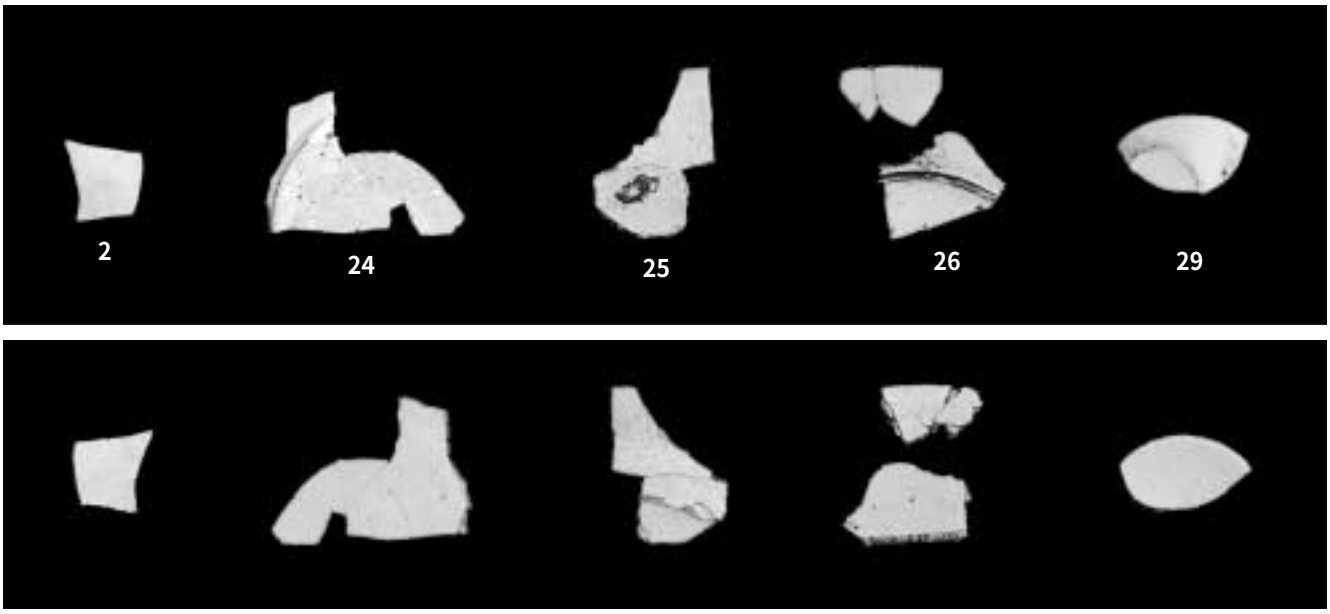
8

12

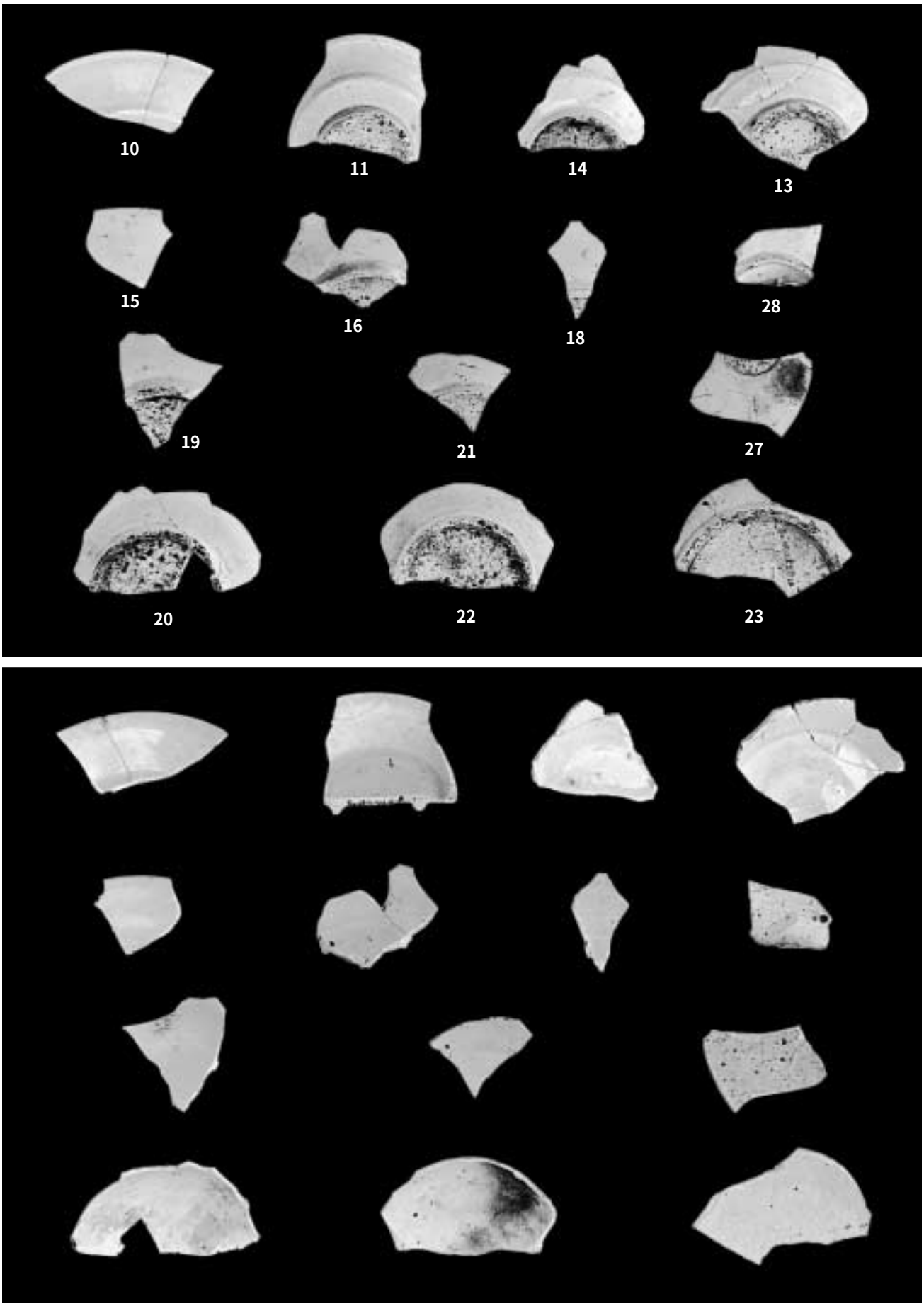
図版22　青磁（18）・白磁（1）



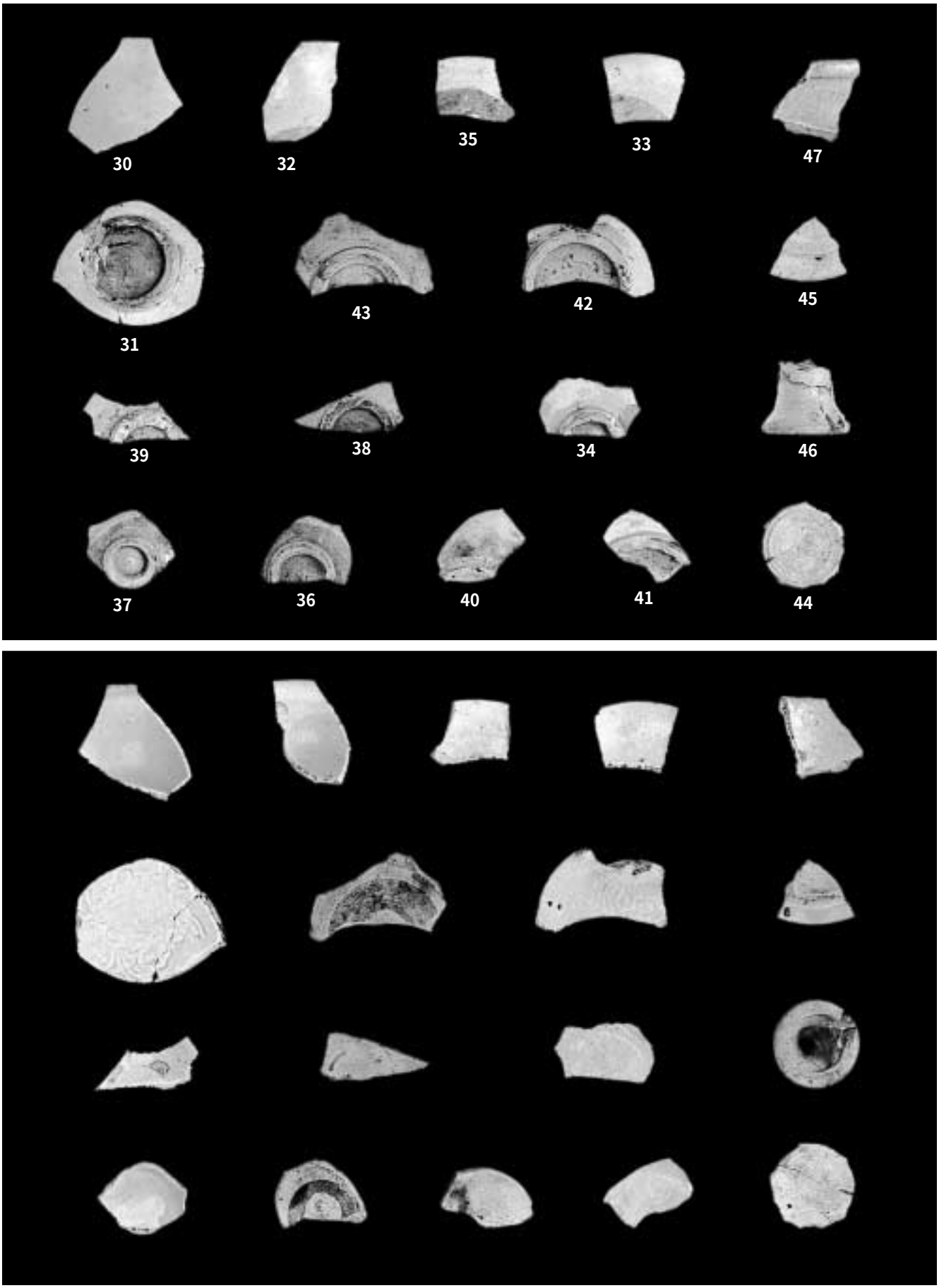
図版23　白磁（2）上：外面　下：内面



図版24　白磁（3）上：外面　下：内面

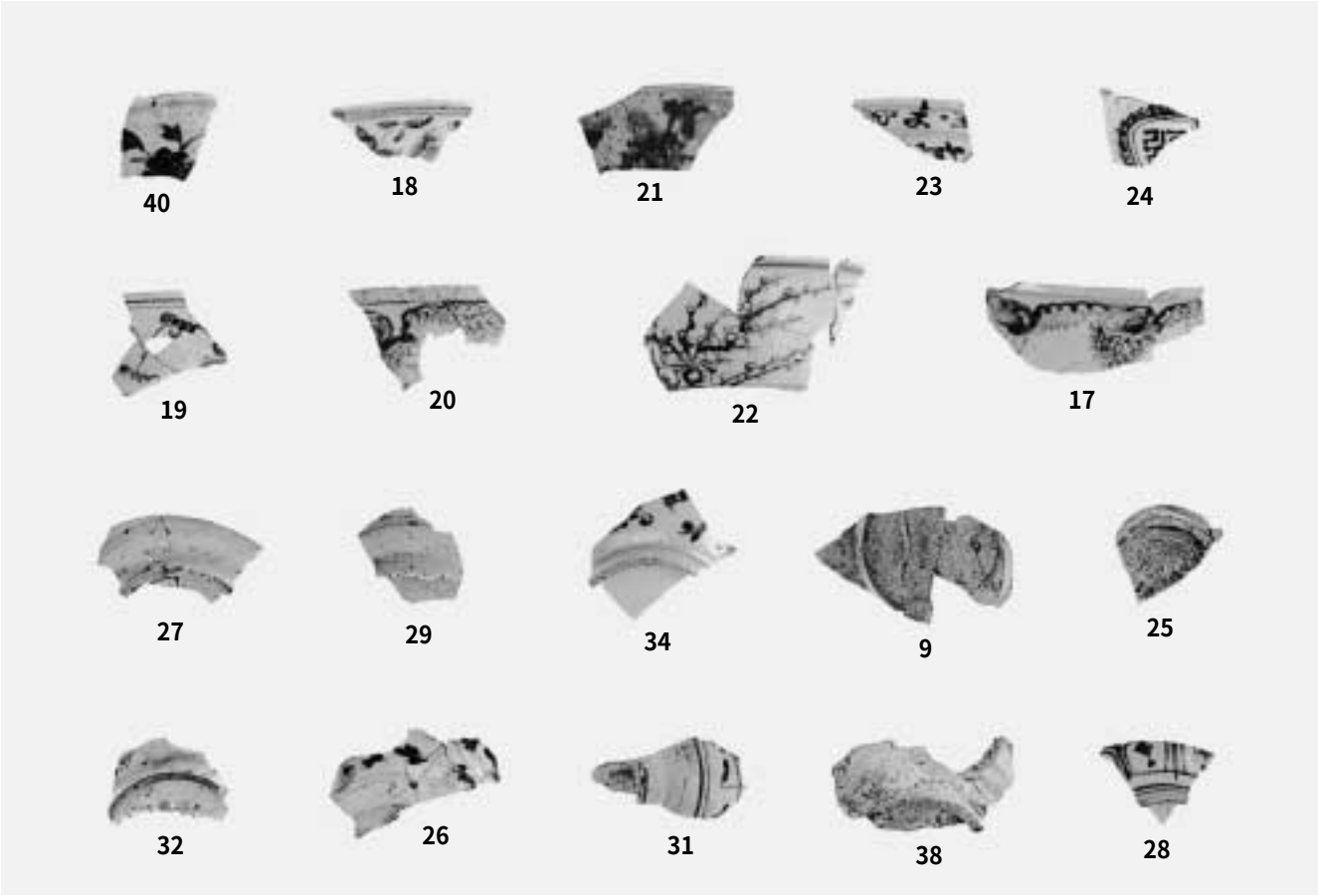


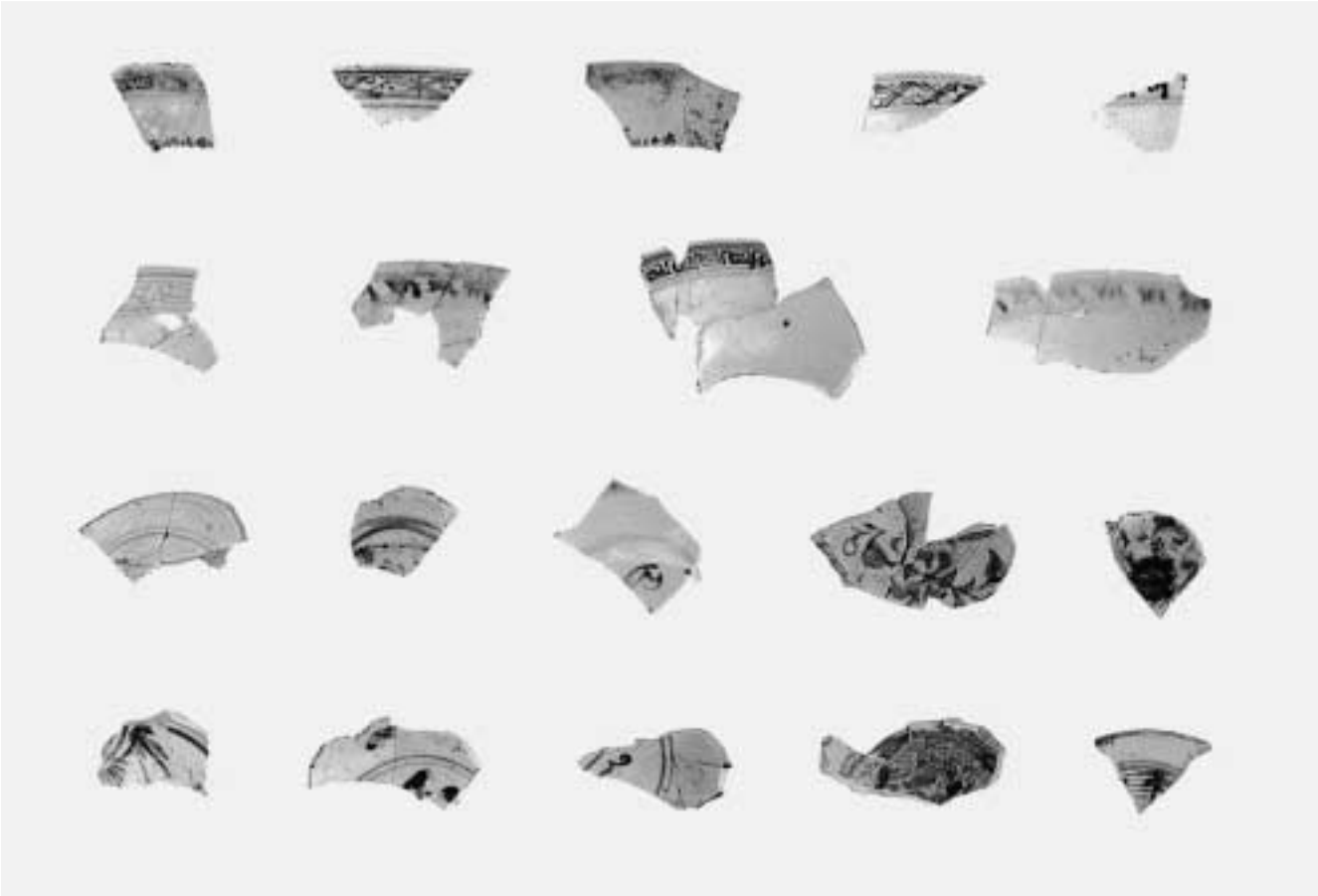
図版25　白磁（4）上：外面　下：内面



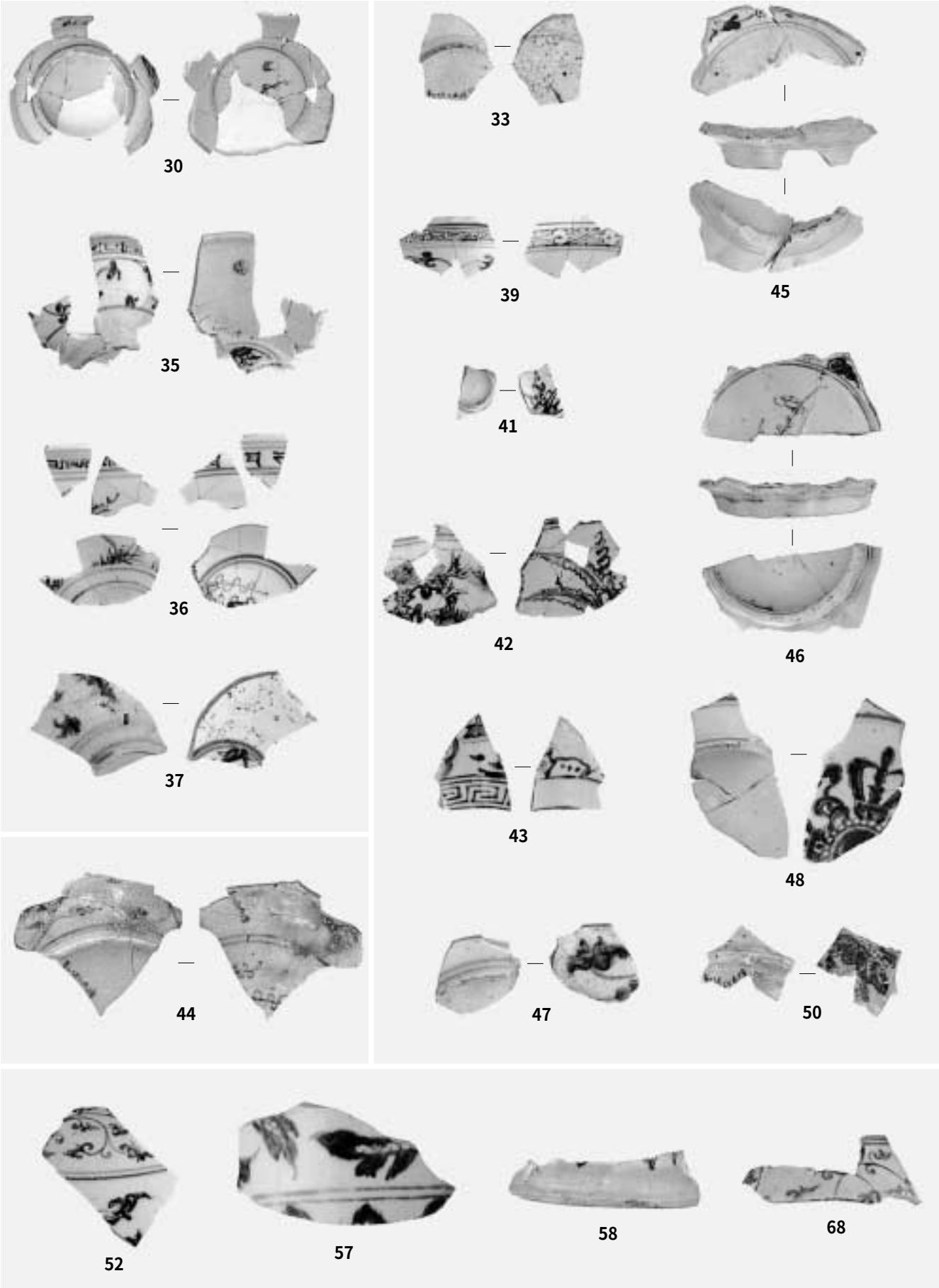
図版26　白磁（5）上：外面　下：内面

図版27　青花（1）

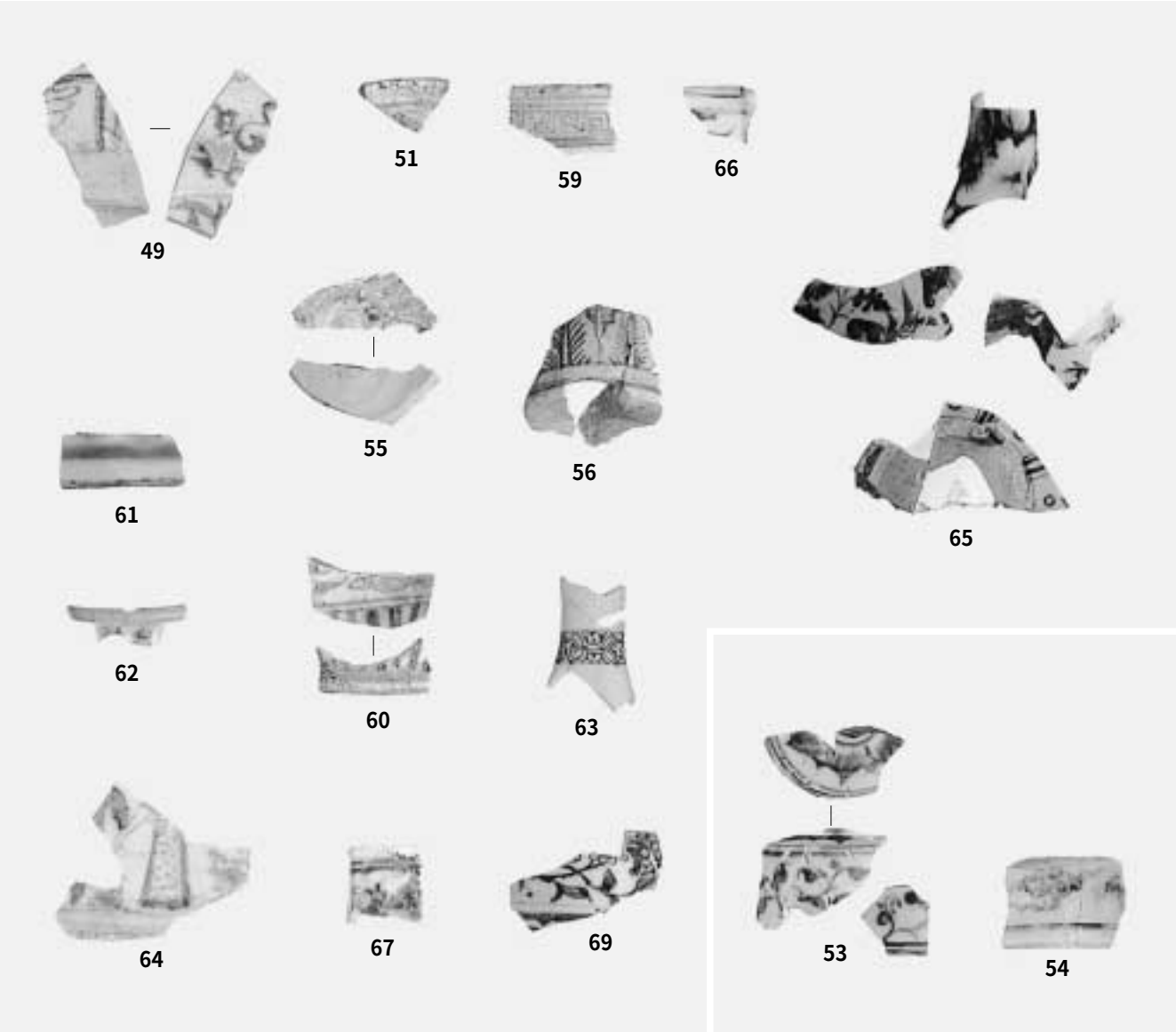




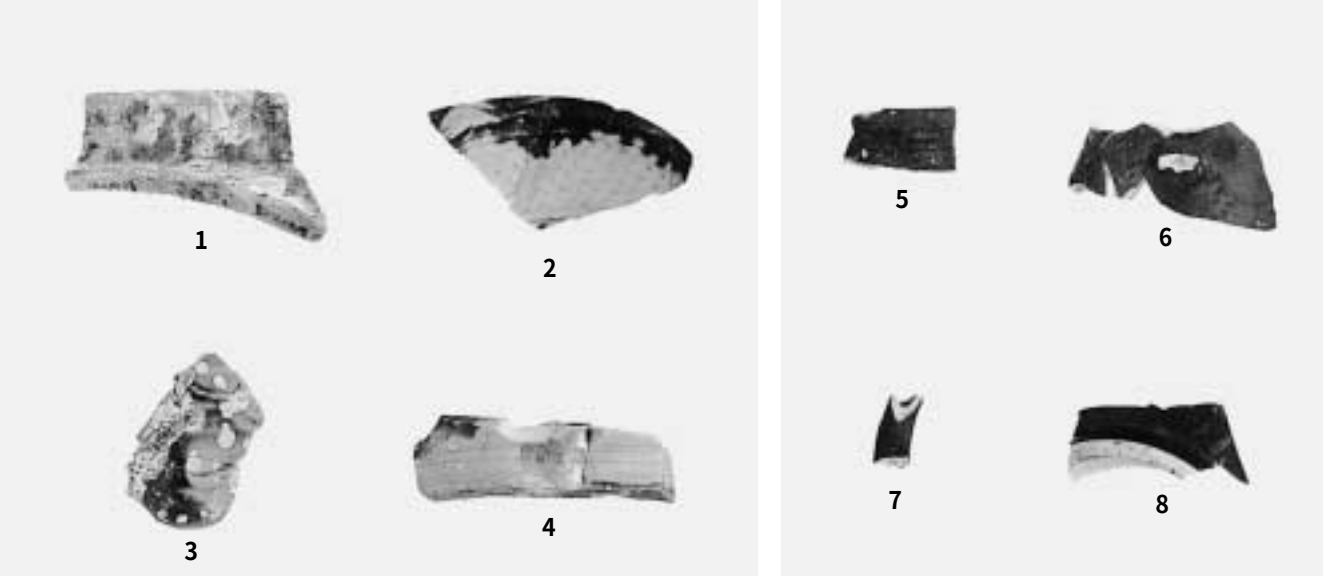
図版28　青花（2）上：外面　下：内面



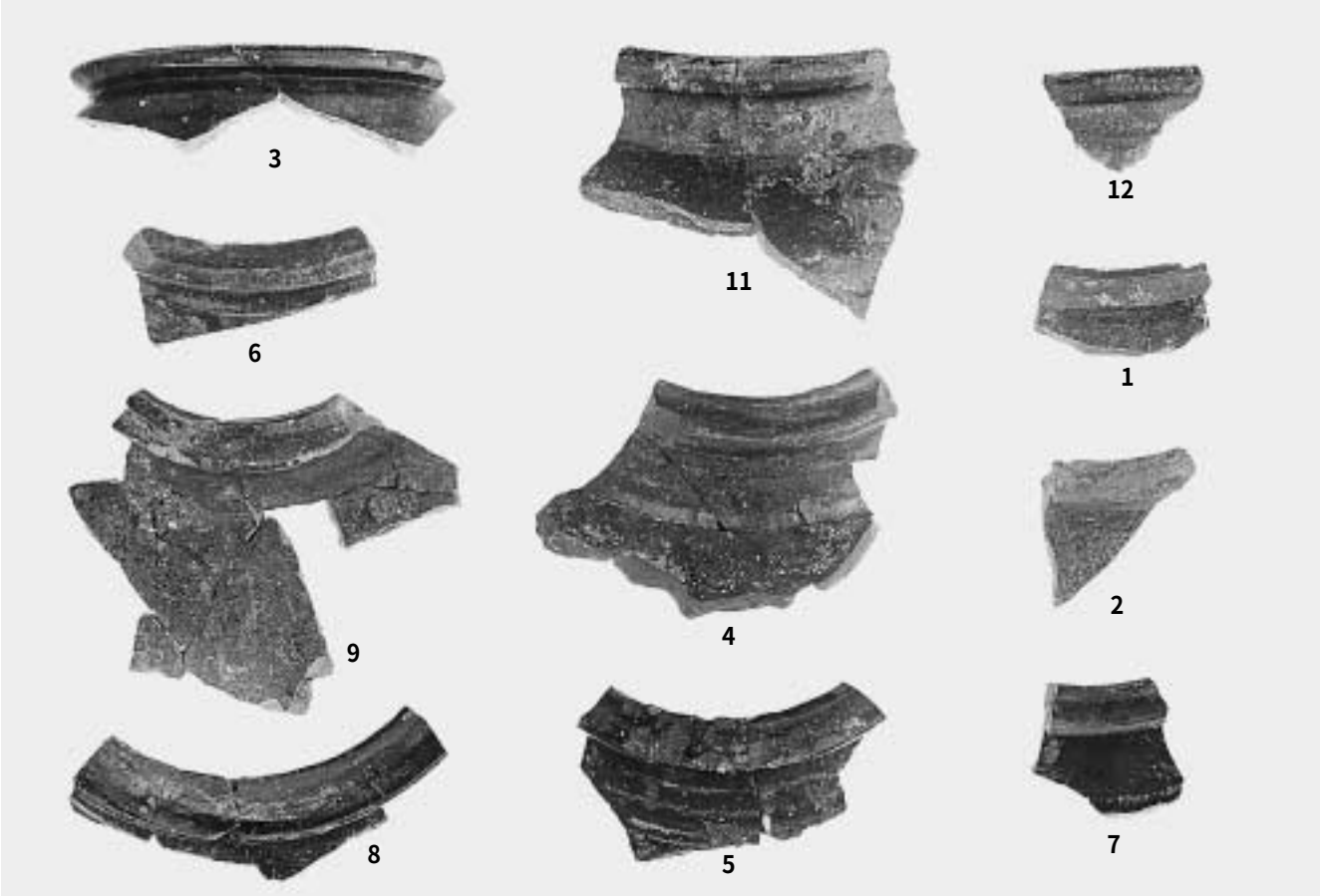
图版29　青花（3）



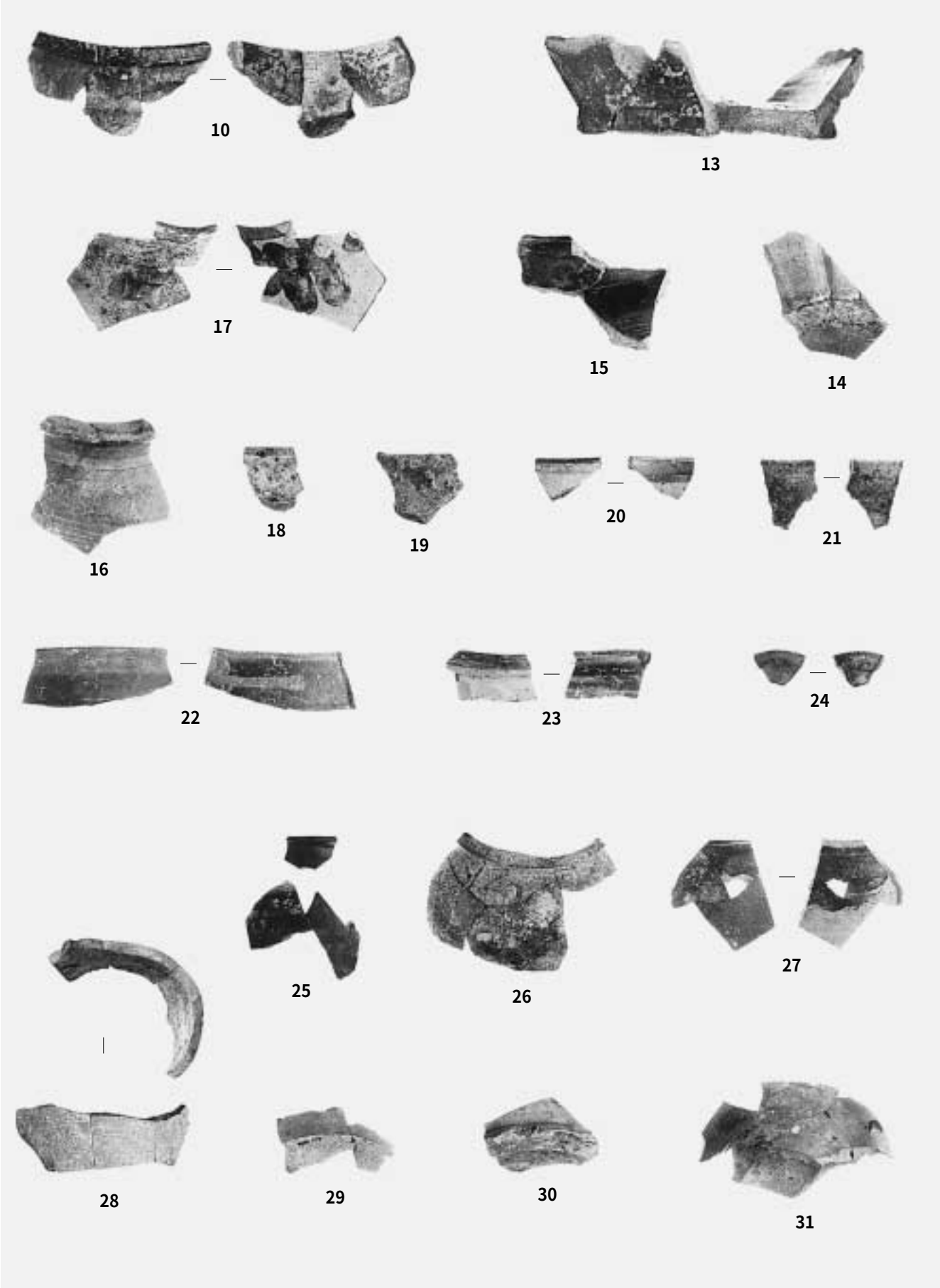
図版30　青花（4）



図版31　釉裏紅・瑠璃釉

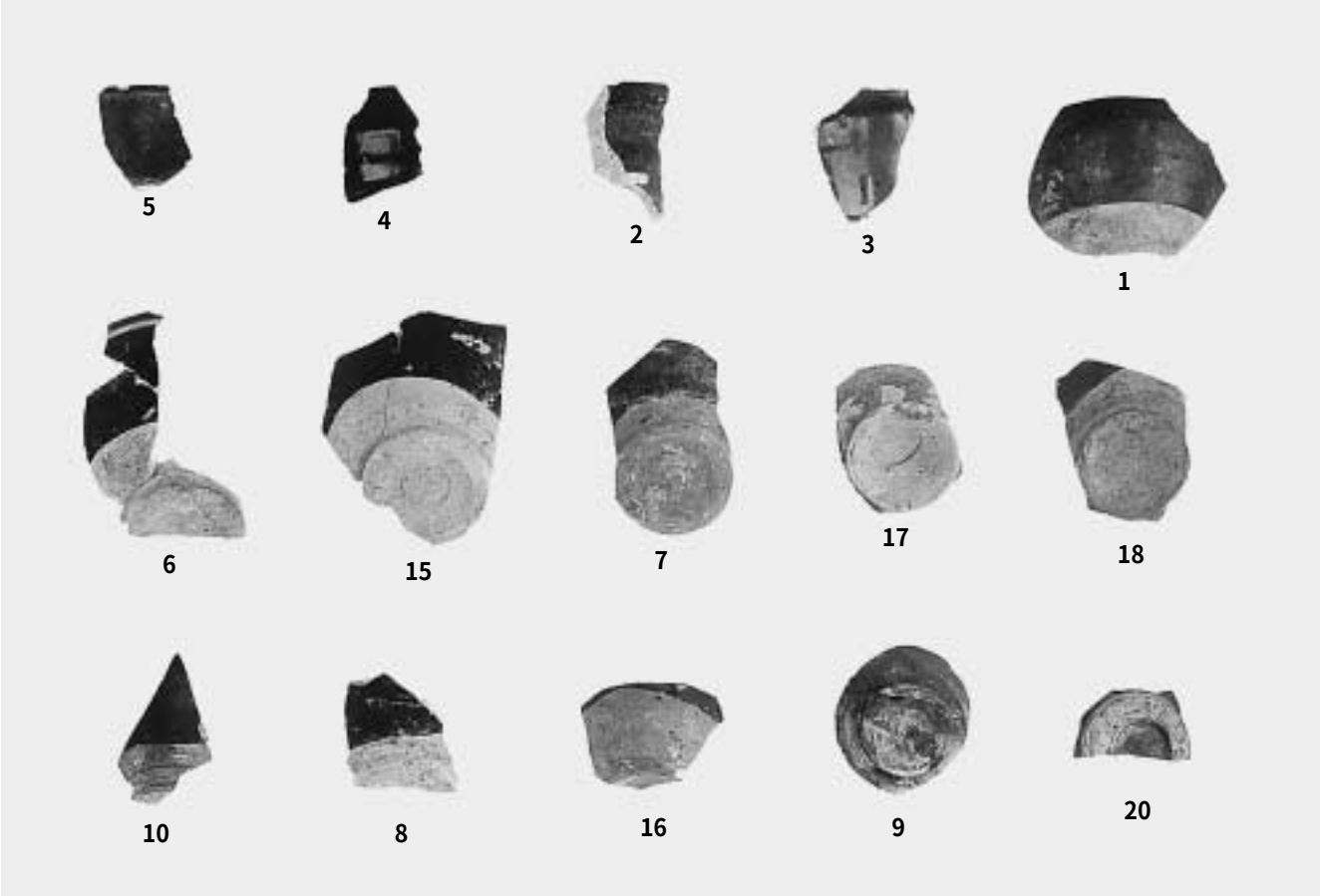


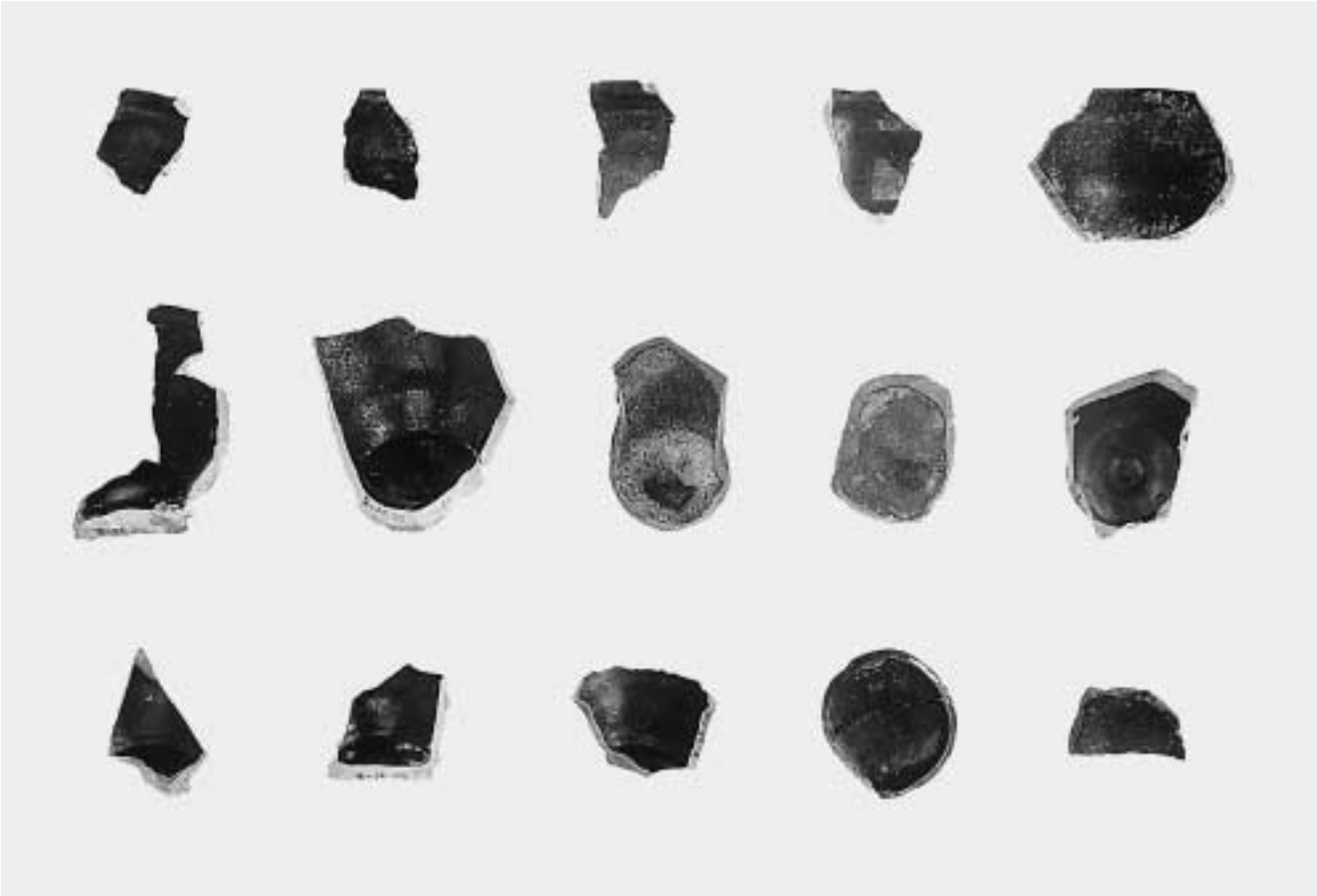
図版32　褐釉陶器（1）上：外面　下：内面



図版33　褐釉陶器（2）

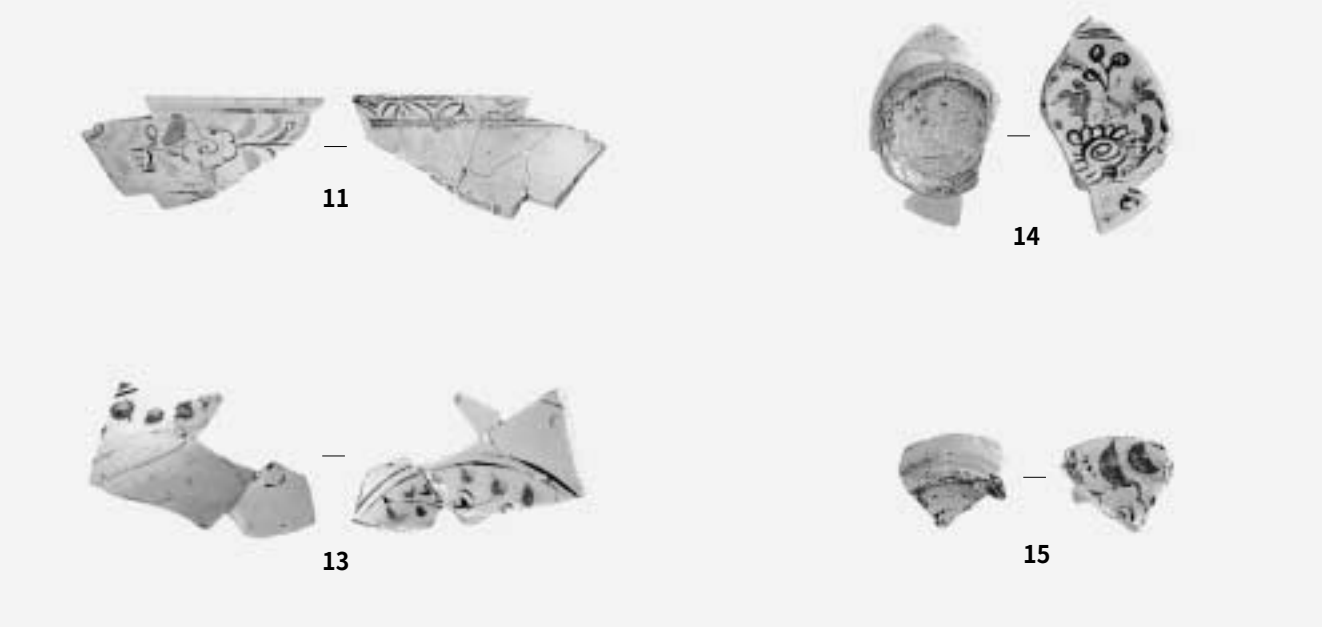
図版34　天目（1）





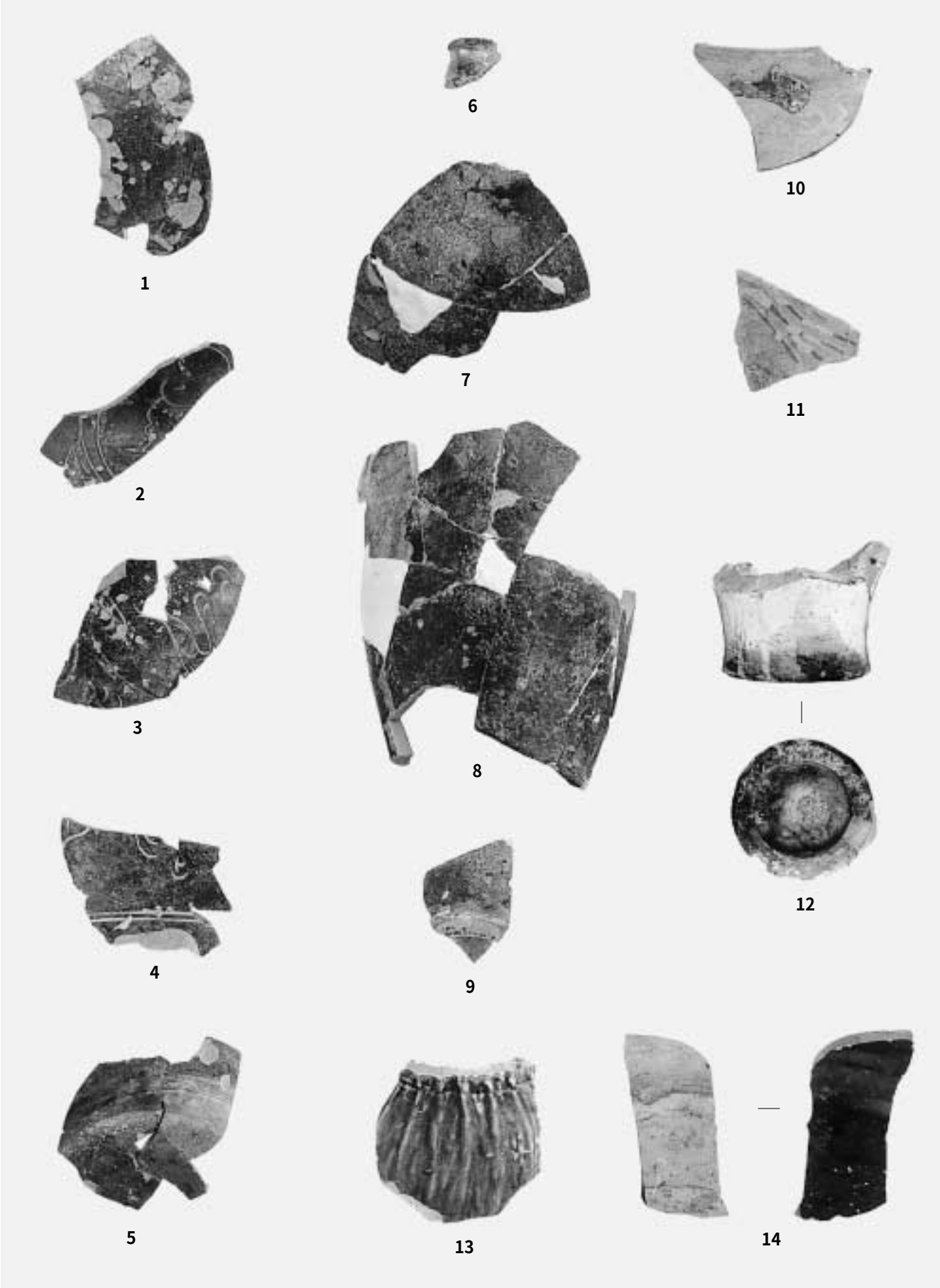
図版35　天目（2）上：外面　下：内面

図版36　その他の磁器

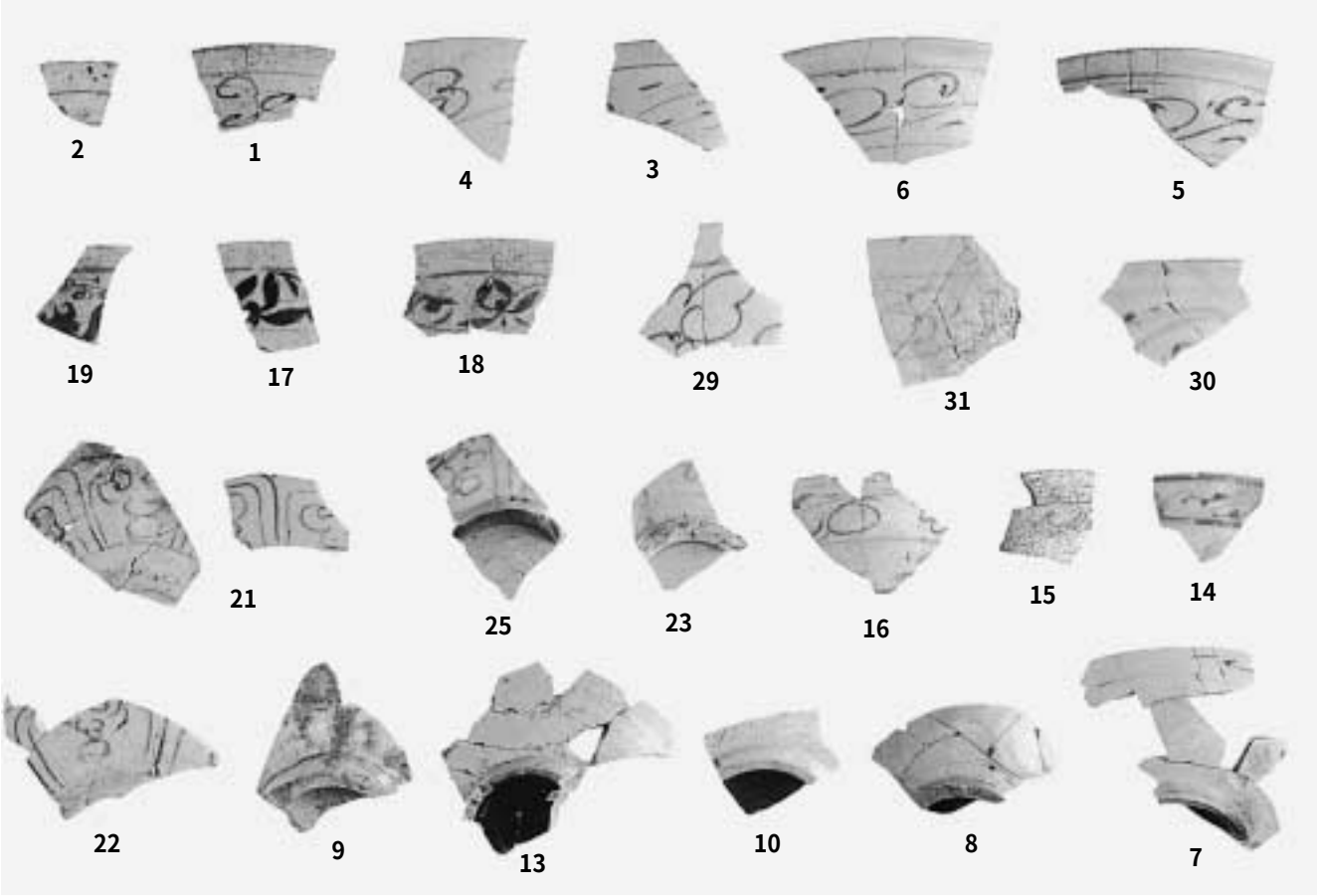


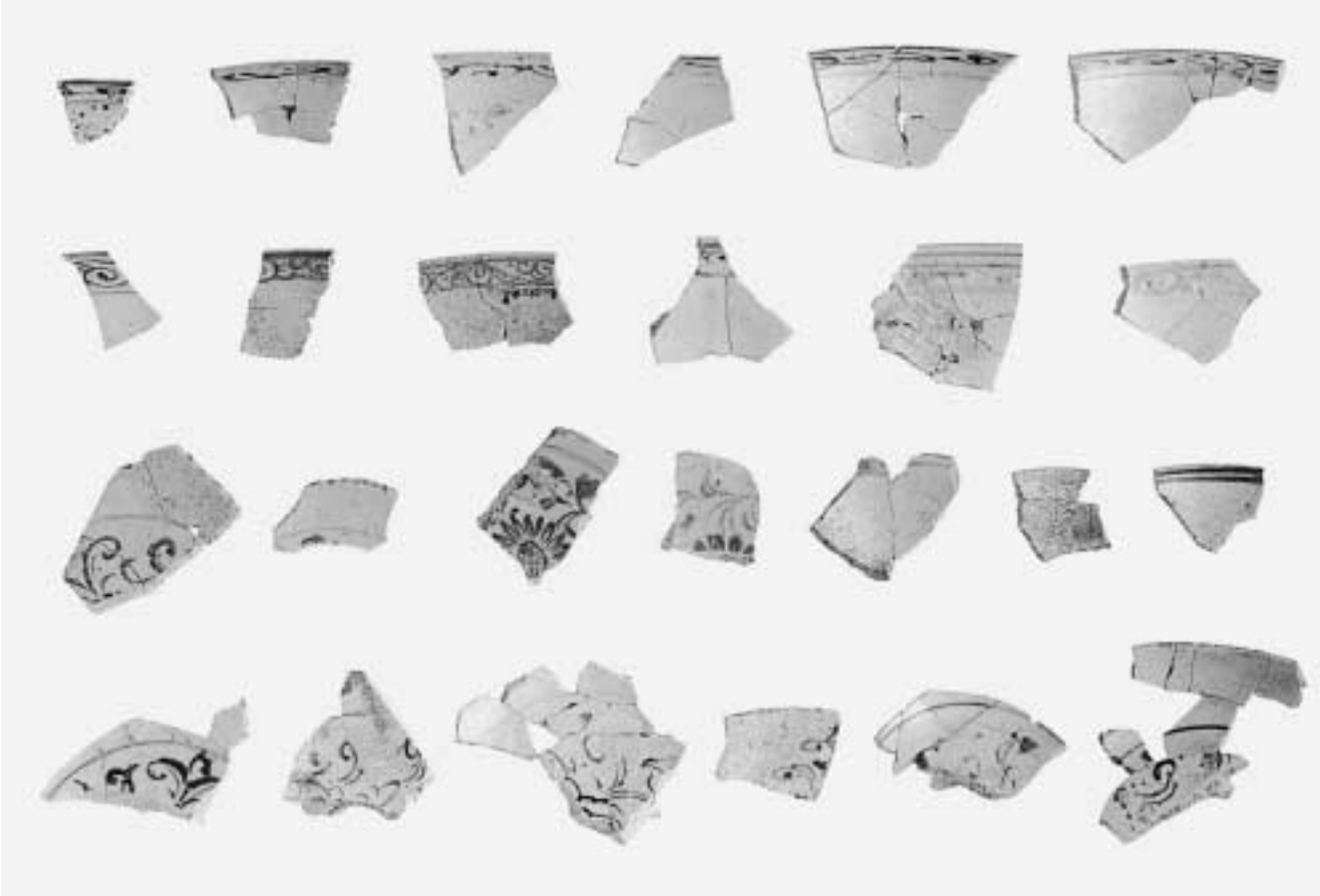
図版37　色絵

図版38　天目（3）茶入

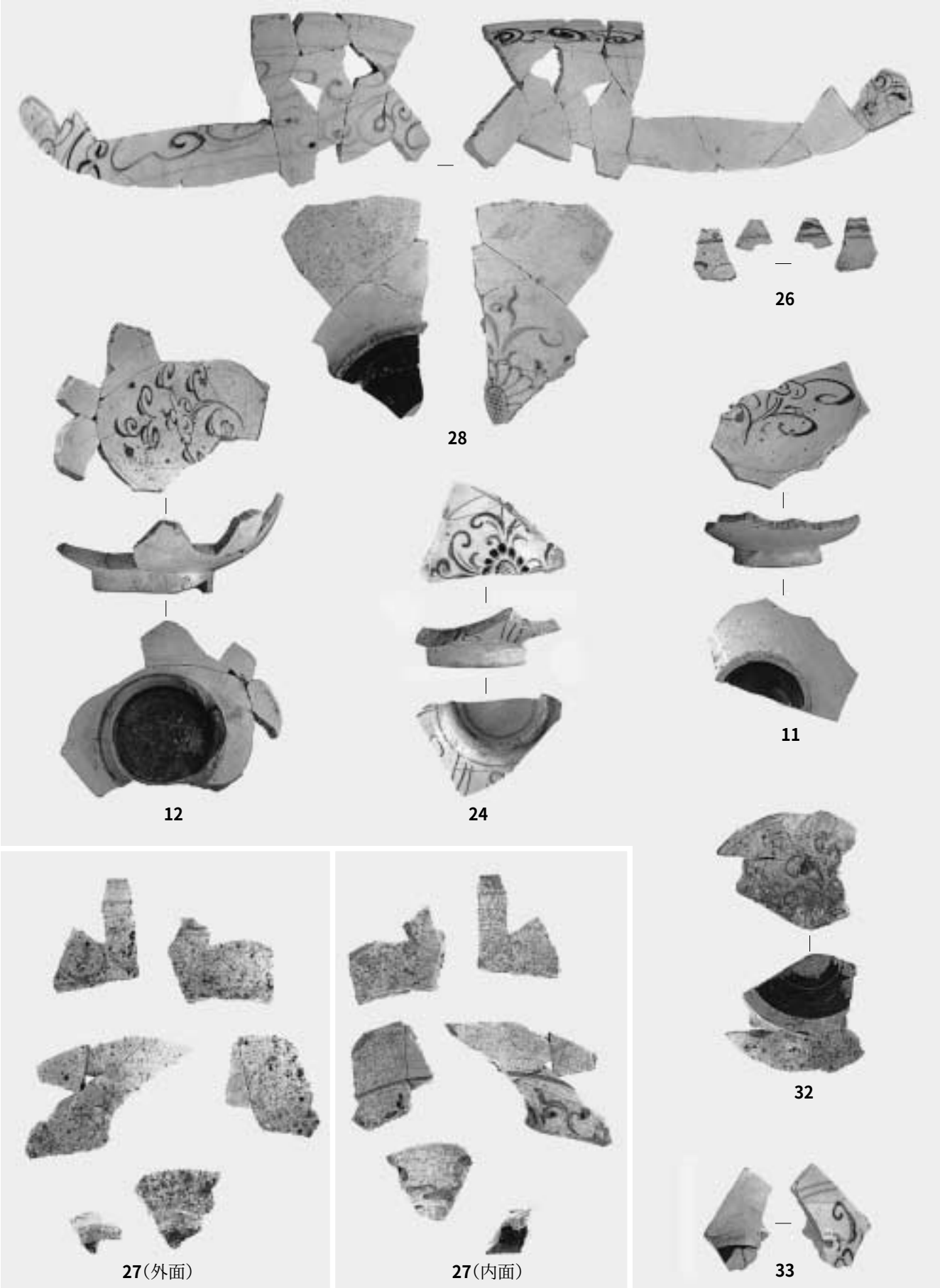


図版39　その他の陶器

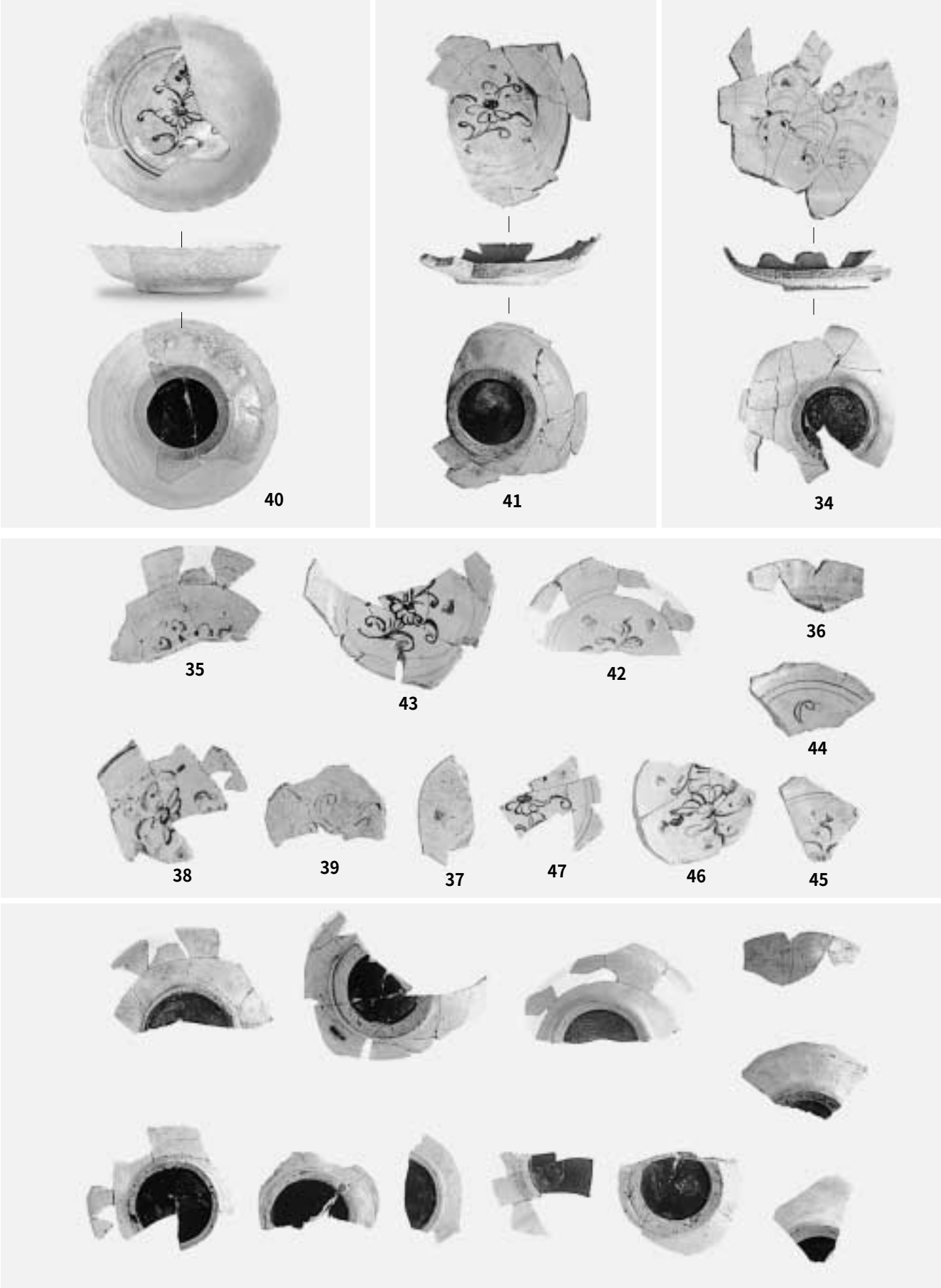




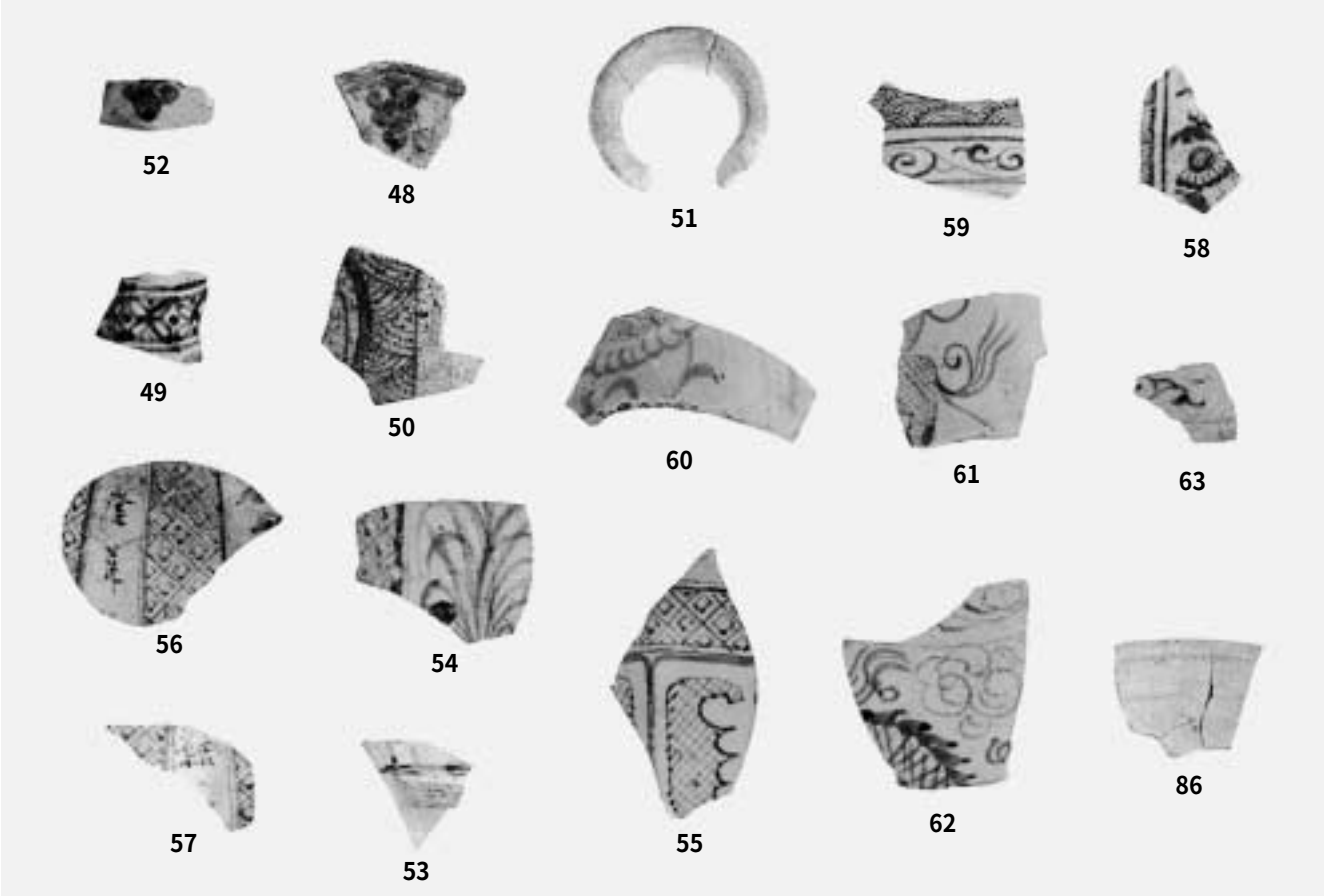
図版40　ベトナム産陶磁器（1）上：外面　下：内面

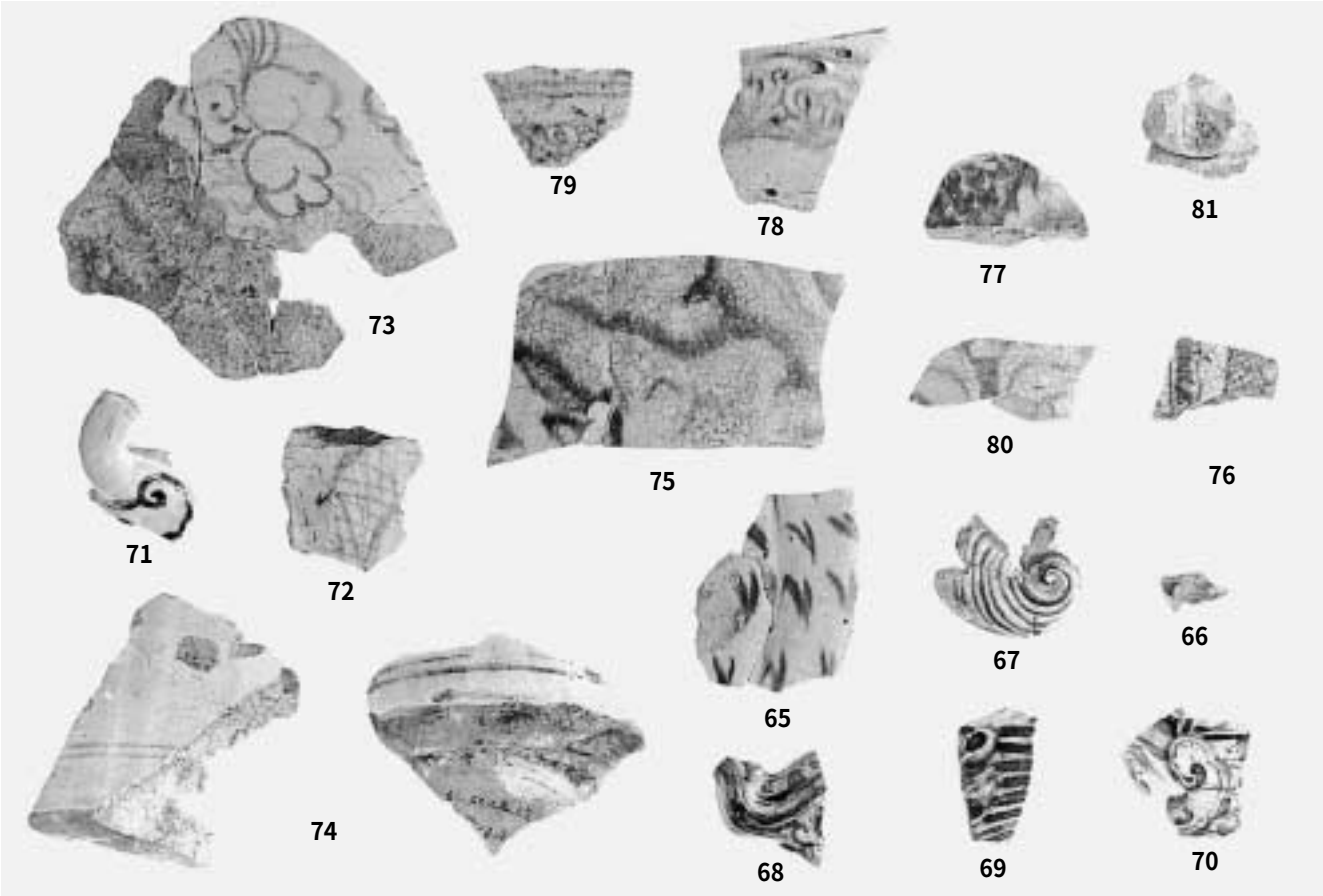


図版41　ベトナム産陶磁器（2）

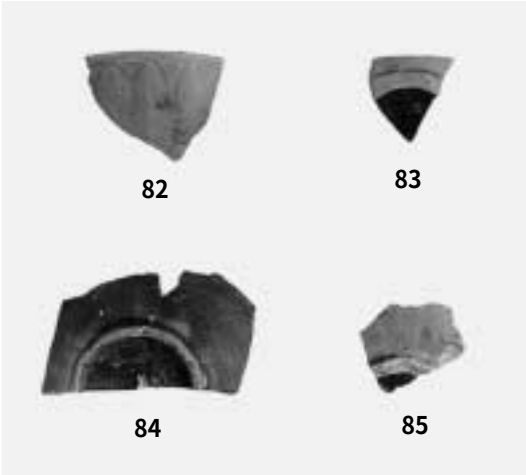


図版42　ベトナム産陶磁器（3）中：内面　下：外面

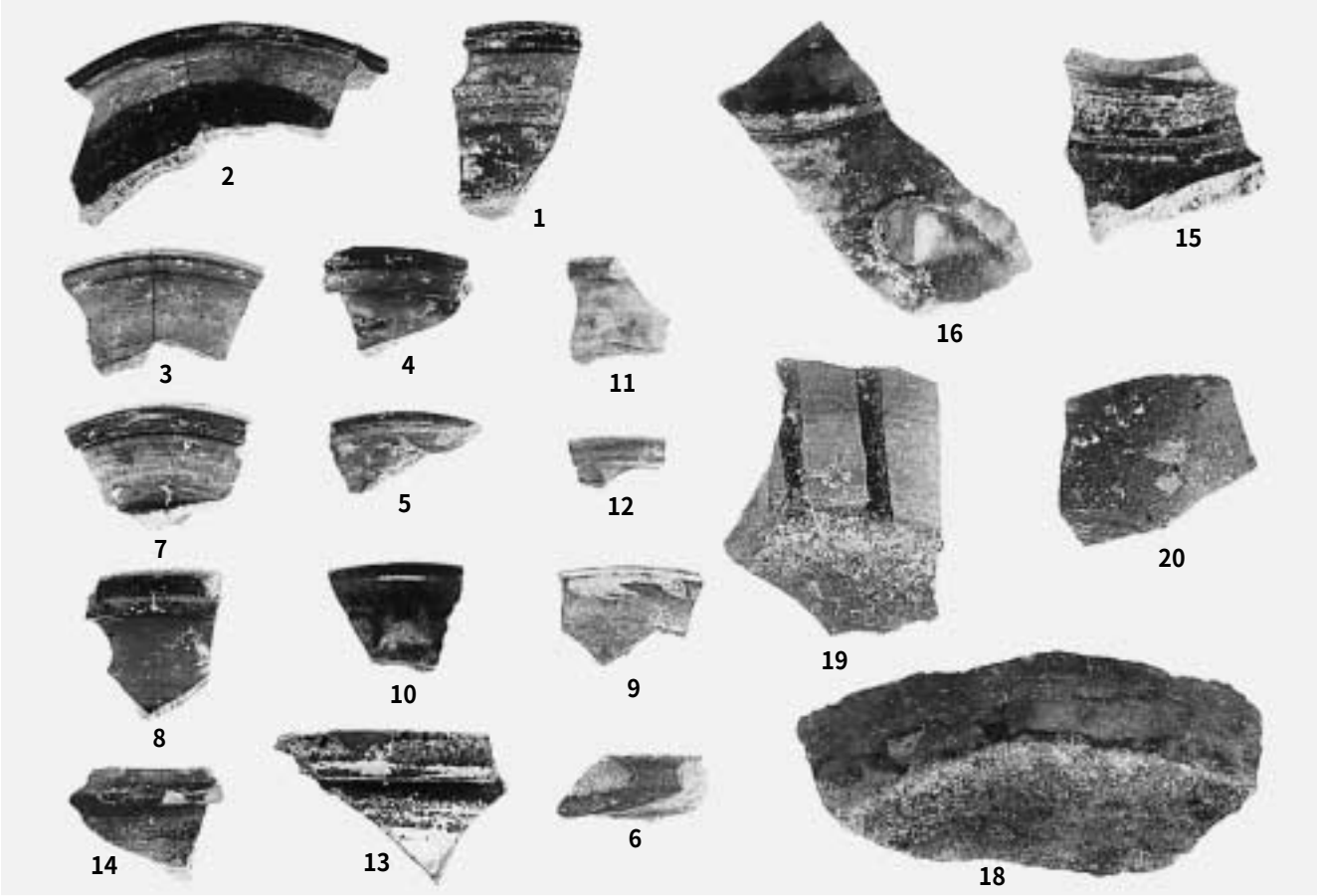




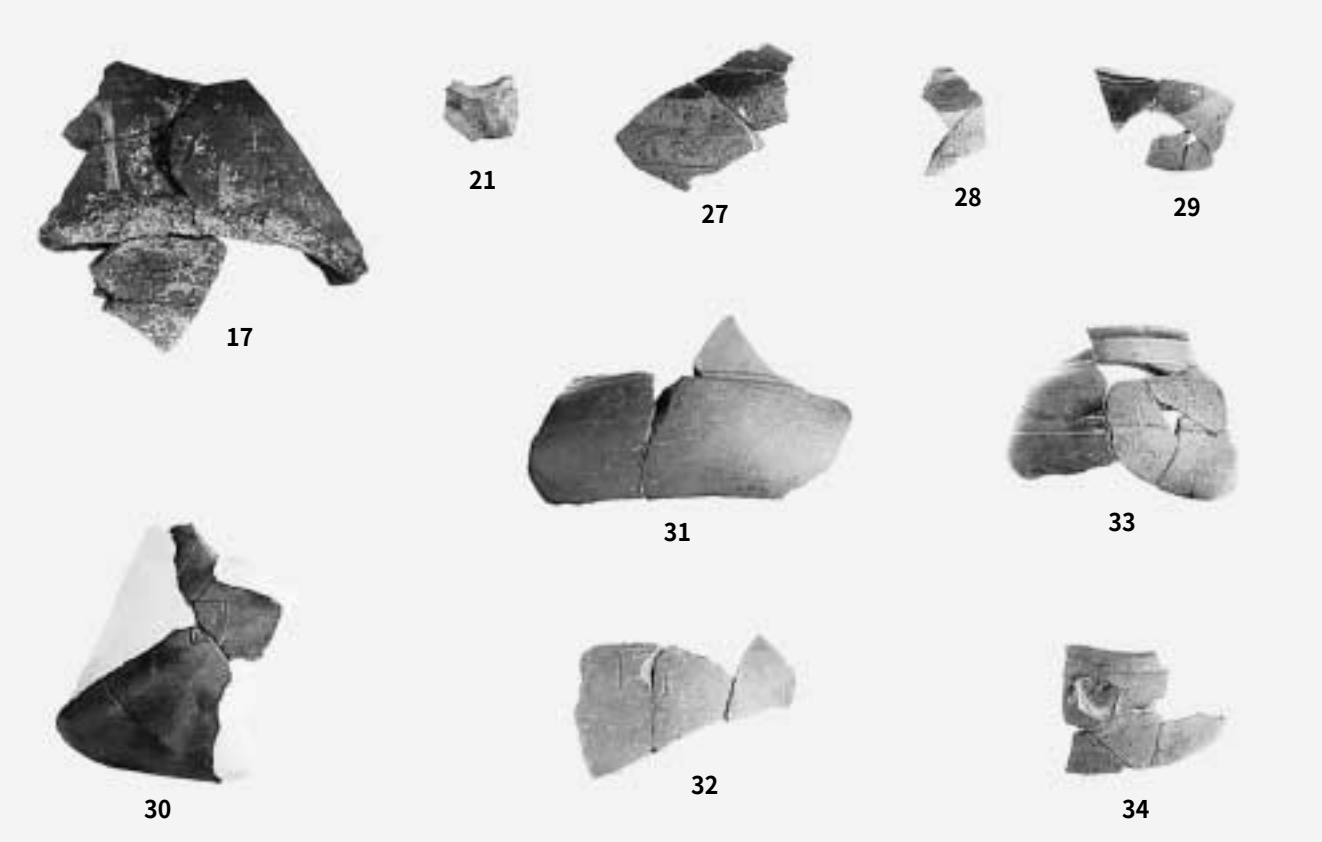
図版43　ベトナム産陶磁器（4）



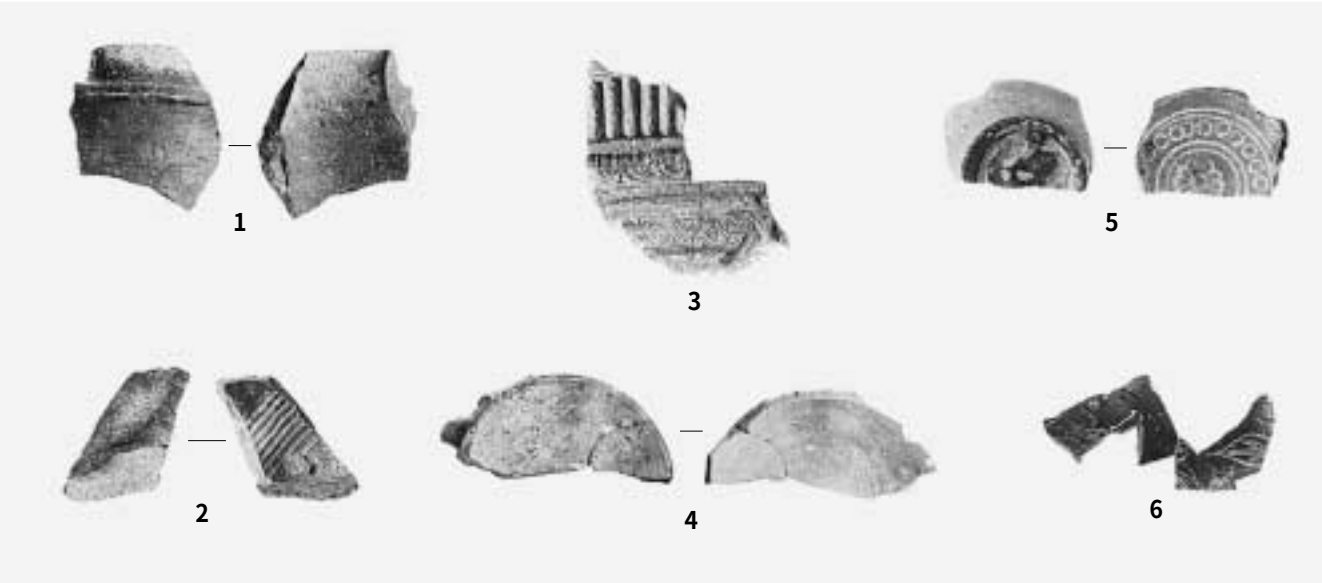
図版44　ベトナム産陶磁器（5）



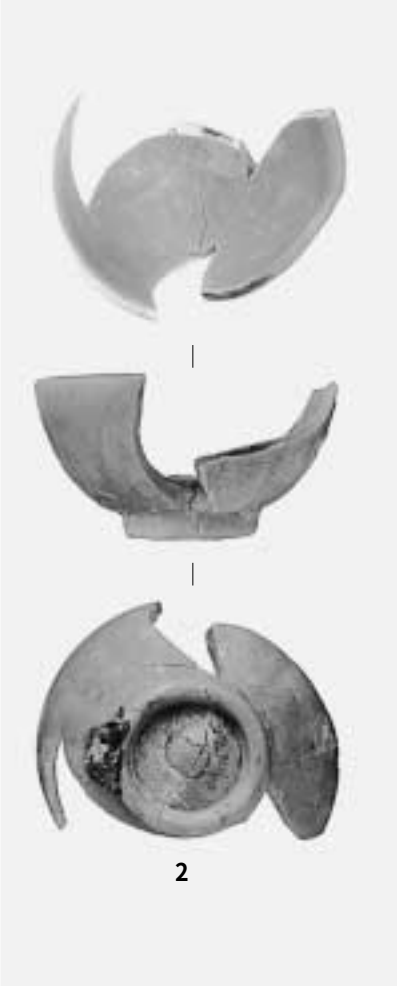
図版45　タイ産褐釉陶器

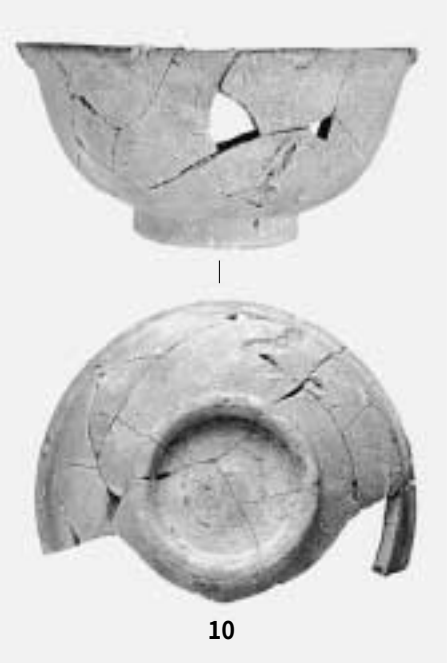


図版46　タイ産褐釉陶器・青磁・土器

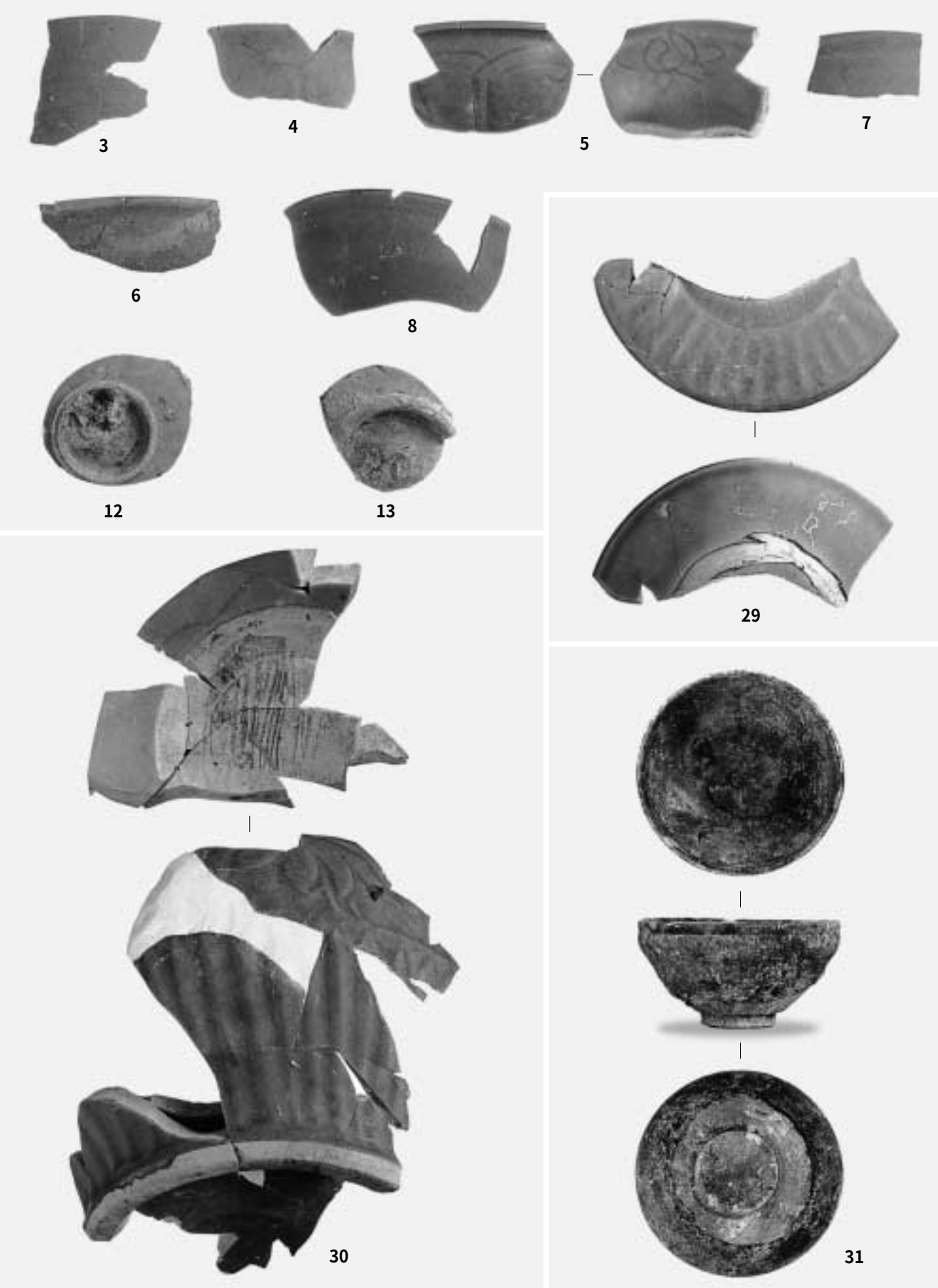


図版47　本土産・韓半島産他陶磁器

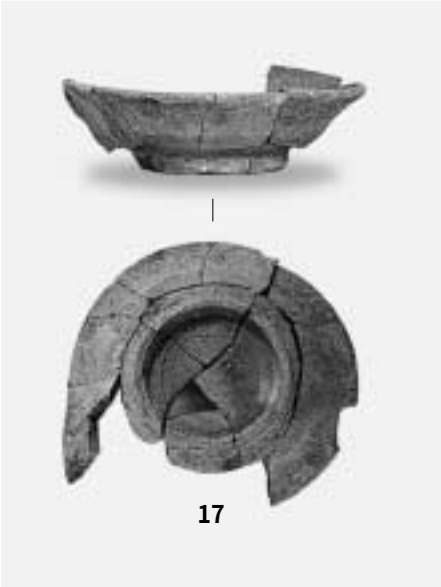


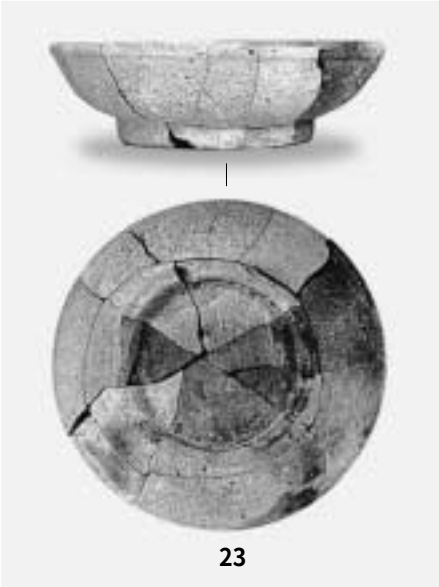


図版48　SB4下層出土陶磁器（1）

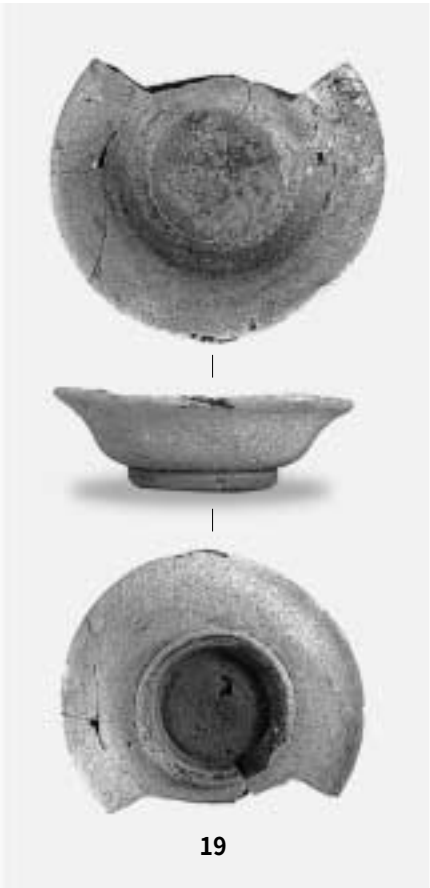


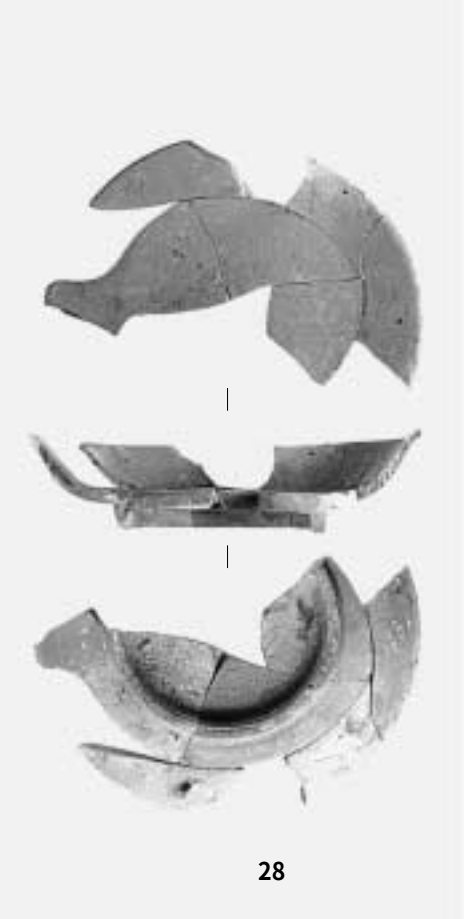
図版49　SB4下層出土陶磁器（2）





図版50　SB4下層出土陶磁器（3）





図版51　SB4下層出土陶磁器（4）

沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書　第29集

首　里　城　跡

－二階殿地区発掘調査報告書－

発 行 年　2005年（平成17）3月25日
発　　行　沖縄県立埋蔵文化財センター
編　　集　沖縄県立埋蔵文化財センター
〒903-0125　中頭郡西原町字上原193番地の7
TEL　098（835）8751・8752

印　　刷　株式会社　沖産業
〒901-2221　沖縄県宜野湾市伊佐2-1-1
TEL　098-898-2191

©沖縄県立埋蔵文化財センター　2005　Printed in japan
許可無く本書の無断複製、転載、複写を禁ずる。